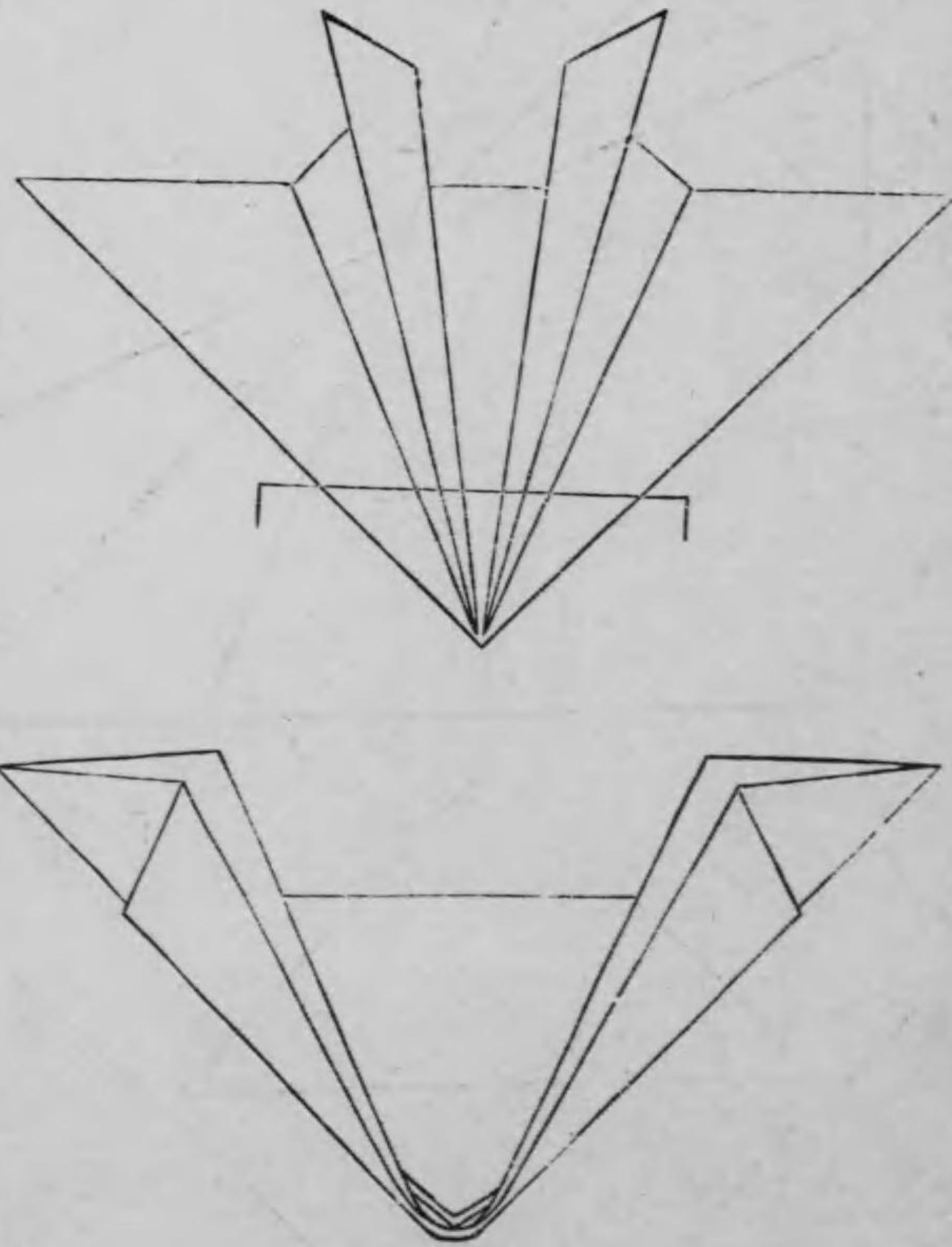


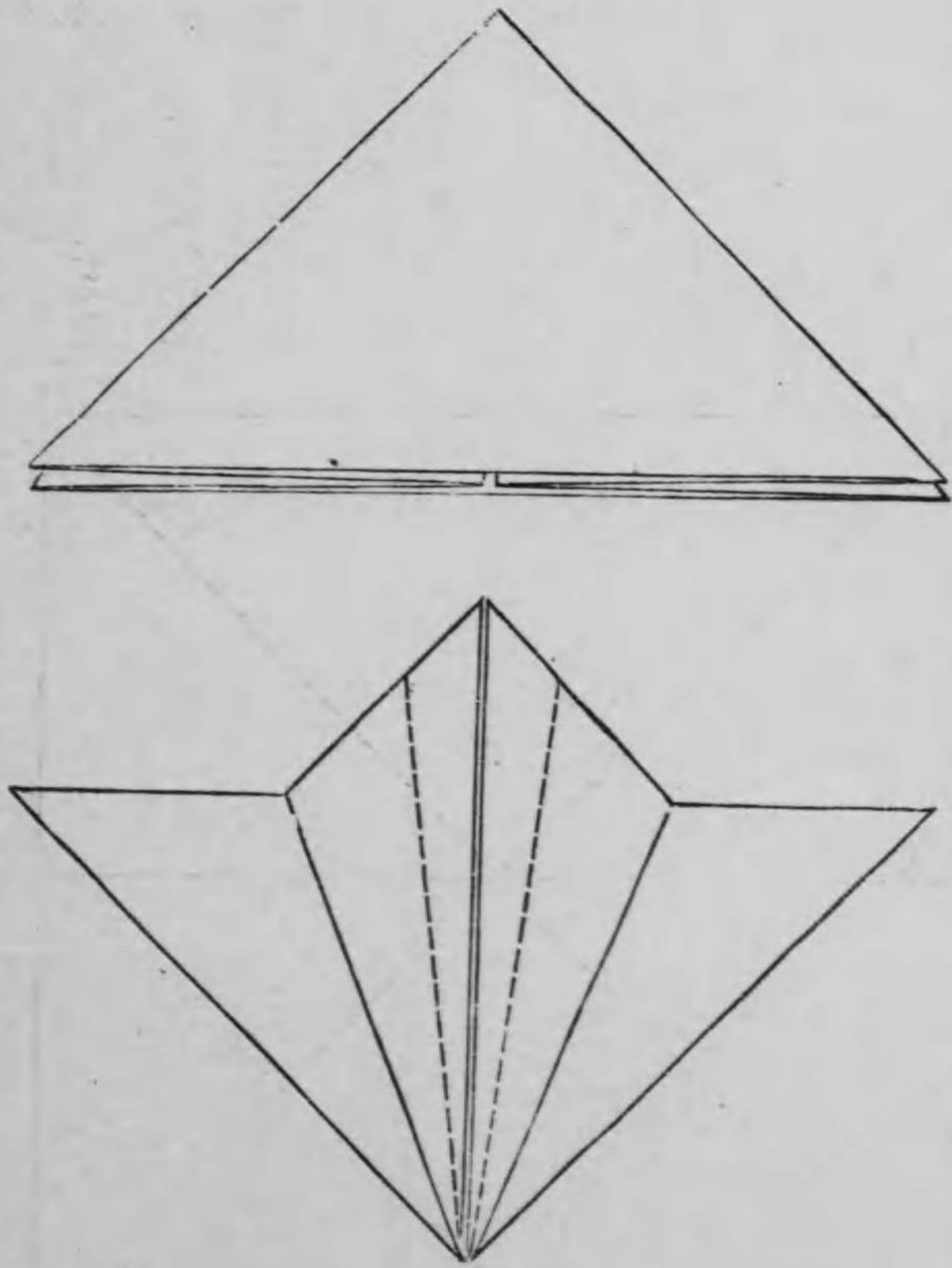
八、蕃椒粉包 これも右に同じ、いづれも今は書付ある方よろし。

第六卷 粉類折形圖解



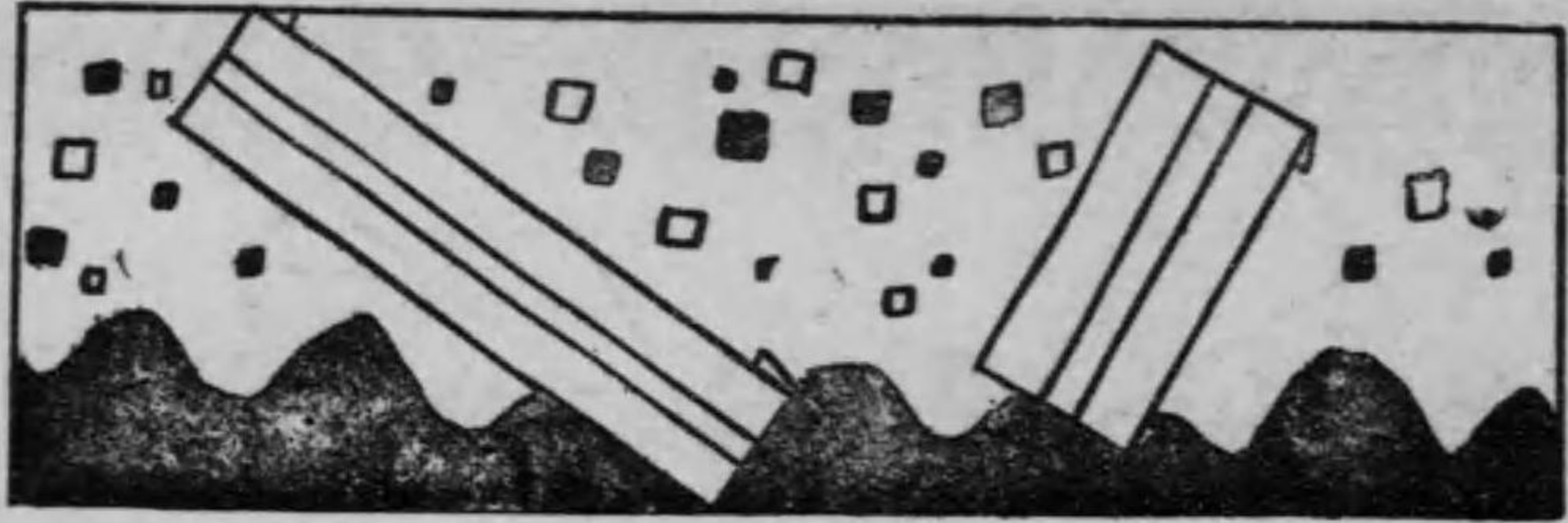
第百九十六圖 胡椒粉包 (五) △折あがり 第百九十七圖 蕃椒粉包 △折あがり

第百九十五圖 こせうの粉包 (四) △表の方へ折る。△次に點線の如くをるべし。



第百九十四圖 こせうの粉づゝみ (三) △折こみたる圖

小笠原流折形

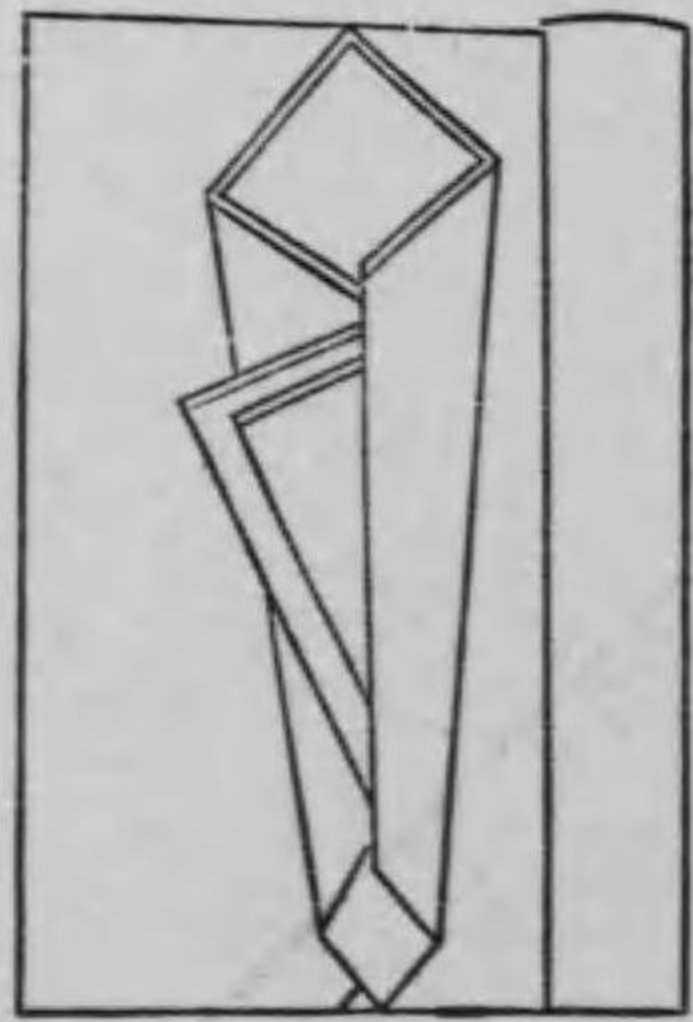


九、きなこ、ごましほ包 (甲) 世間にてつかふところの折形なり、正しき物にあらず、俗用にはこれにてもよろしからんと思へば、こゝにあげおくなり、あそびことの紙ざいくのうちに入るべきものなるべし。

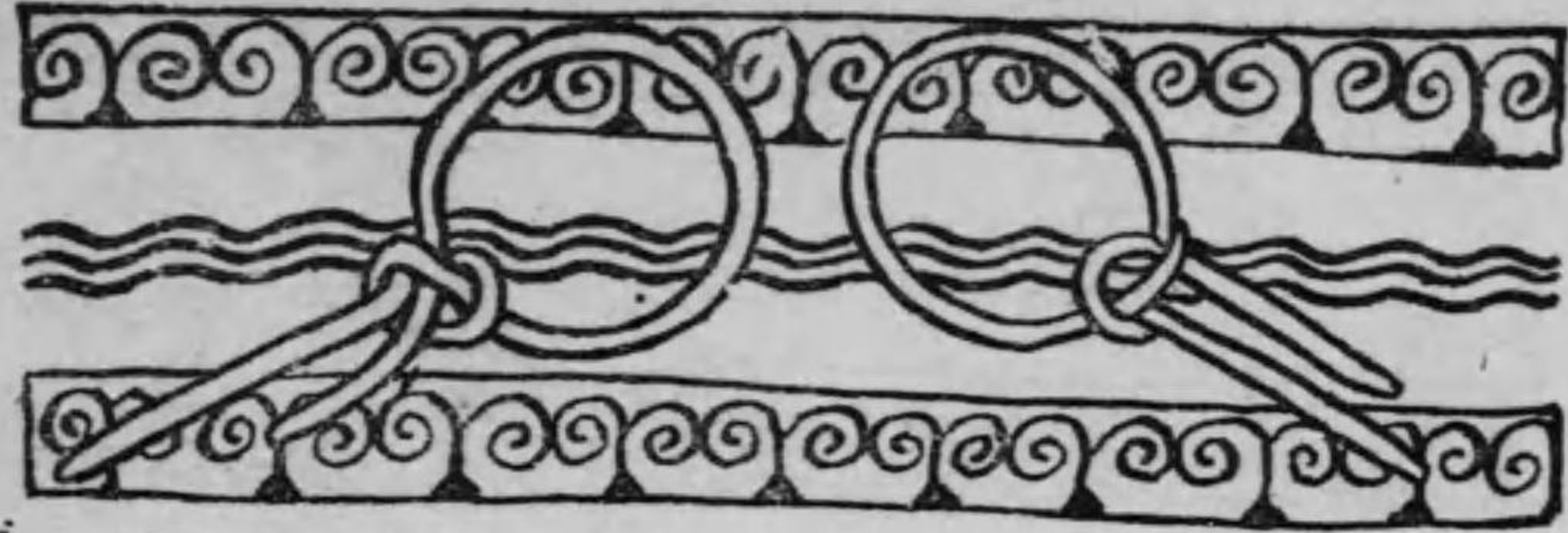
第二百圖 俗用きなこ。

ごま鹽包 (甲の形)

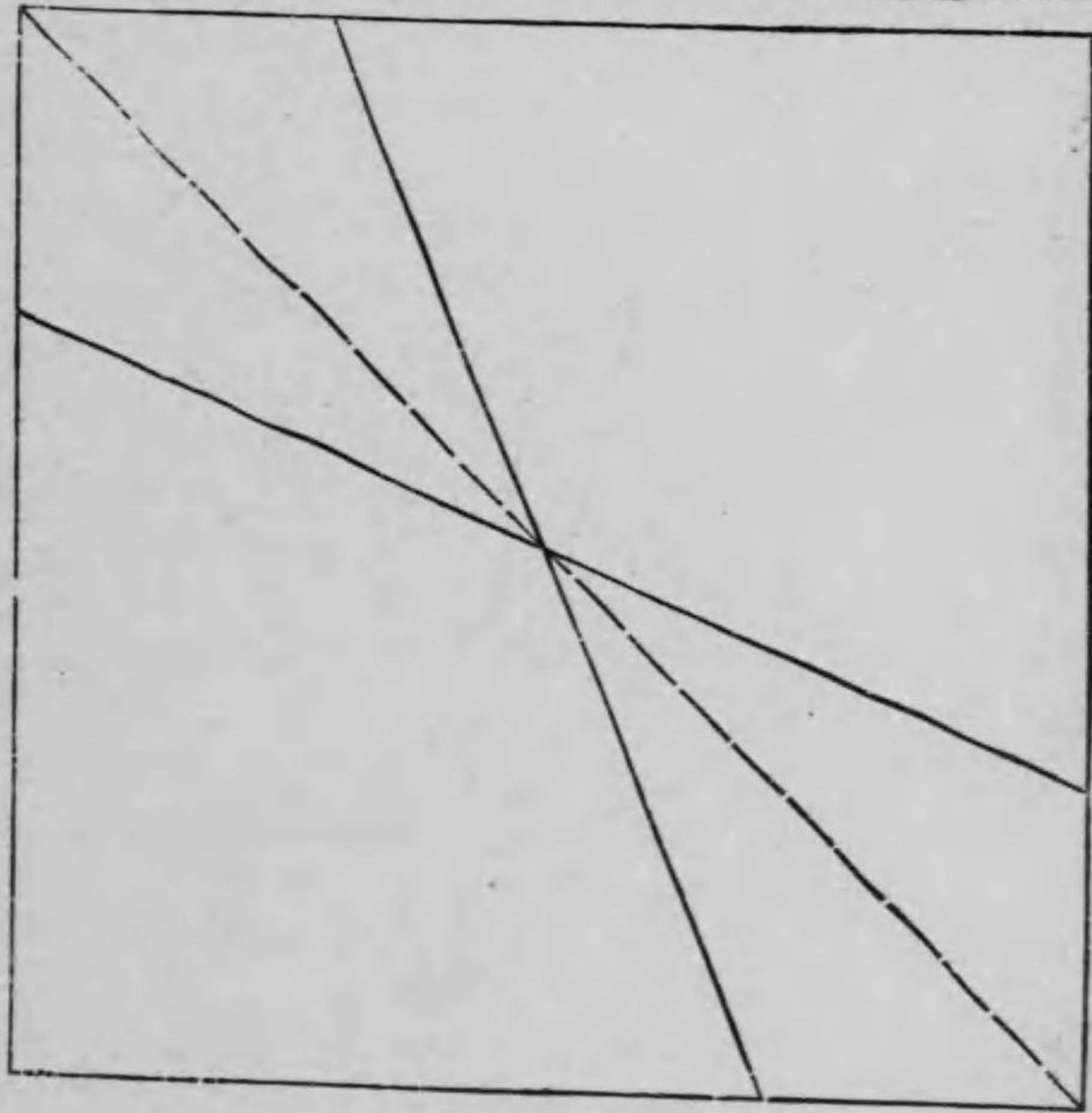
△をりあがり



△此たぐひの折形は天保年間の頃よりはじまれるにやと思はる
△其頃よりつき〜新
作いできたれるなるべし。



第百九十八圖 蕃椒粉包の折やう (二)

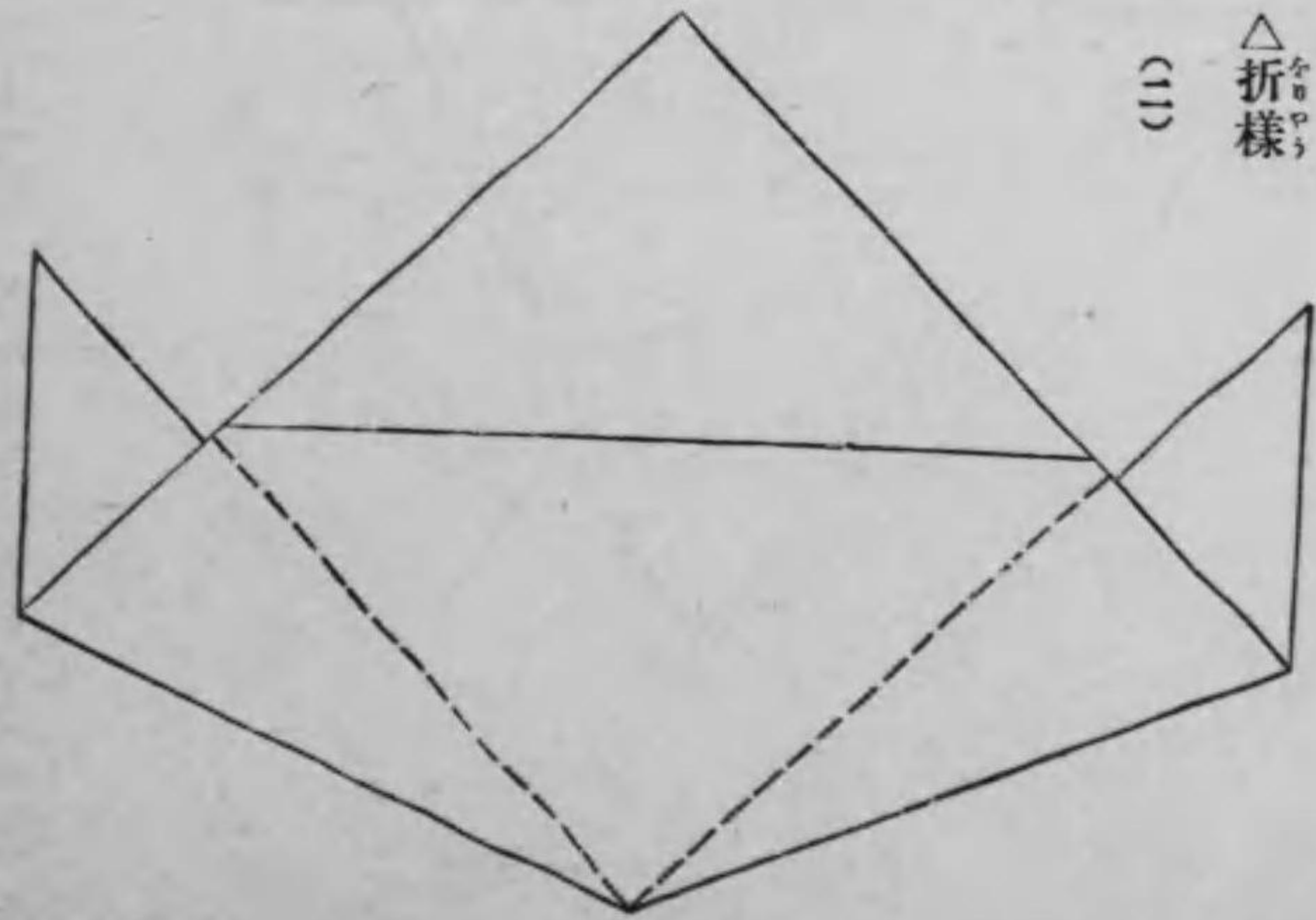


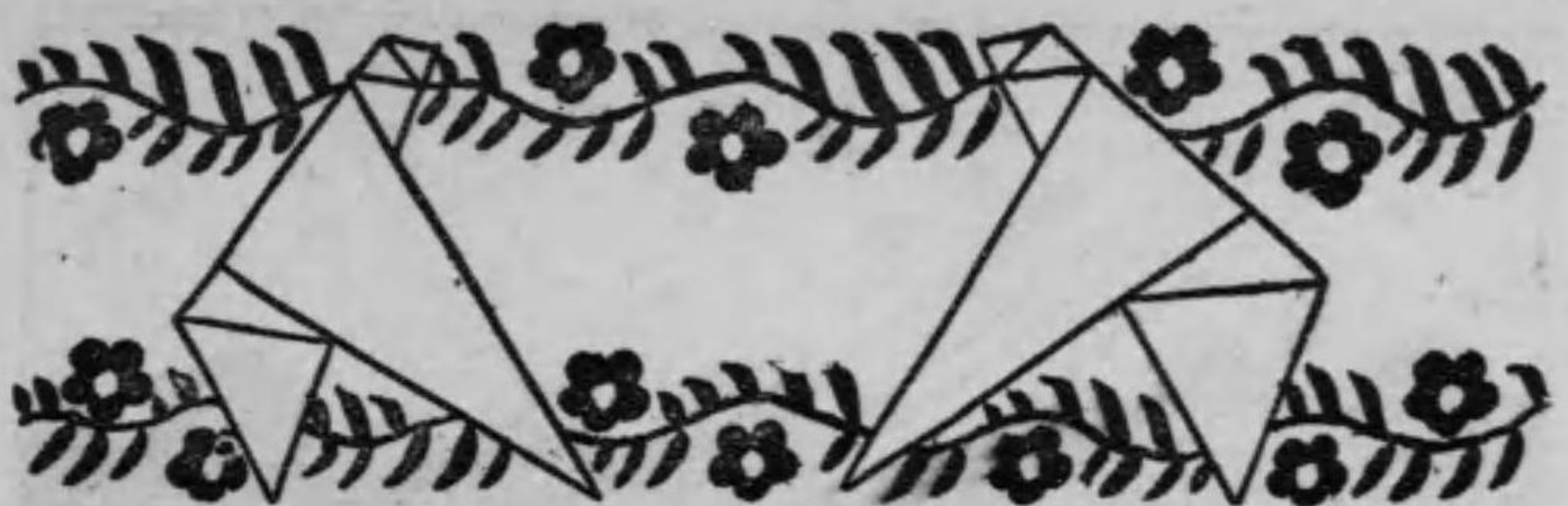
小笠原流折形

第百九十九圖 蕃椒粉包

△折様

(三)

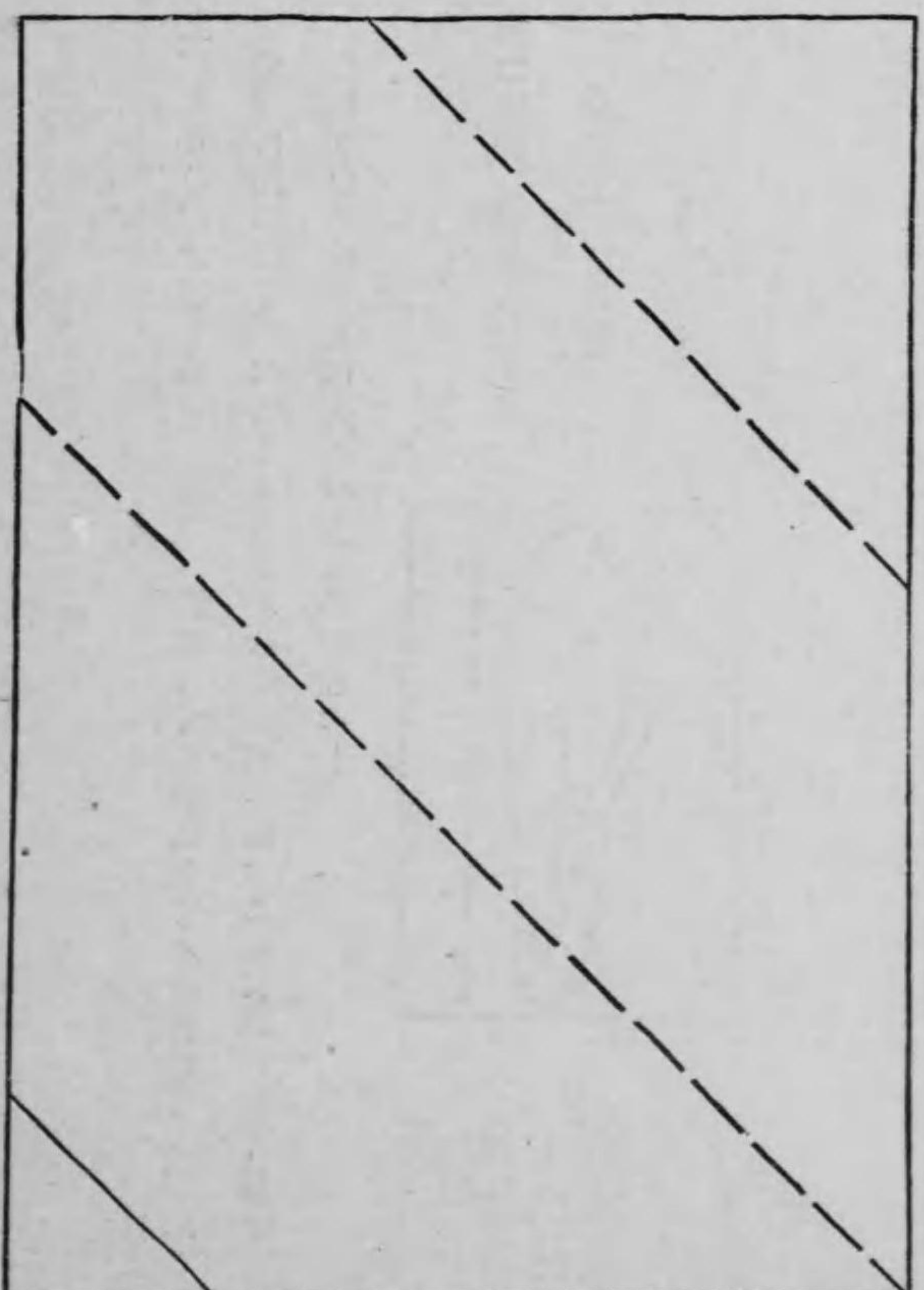




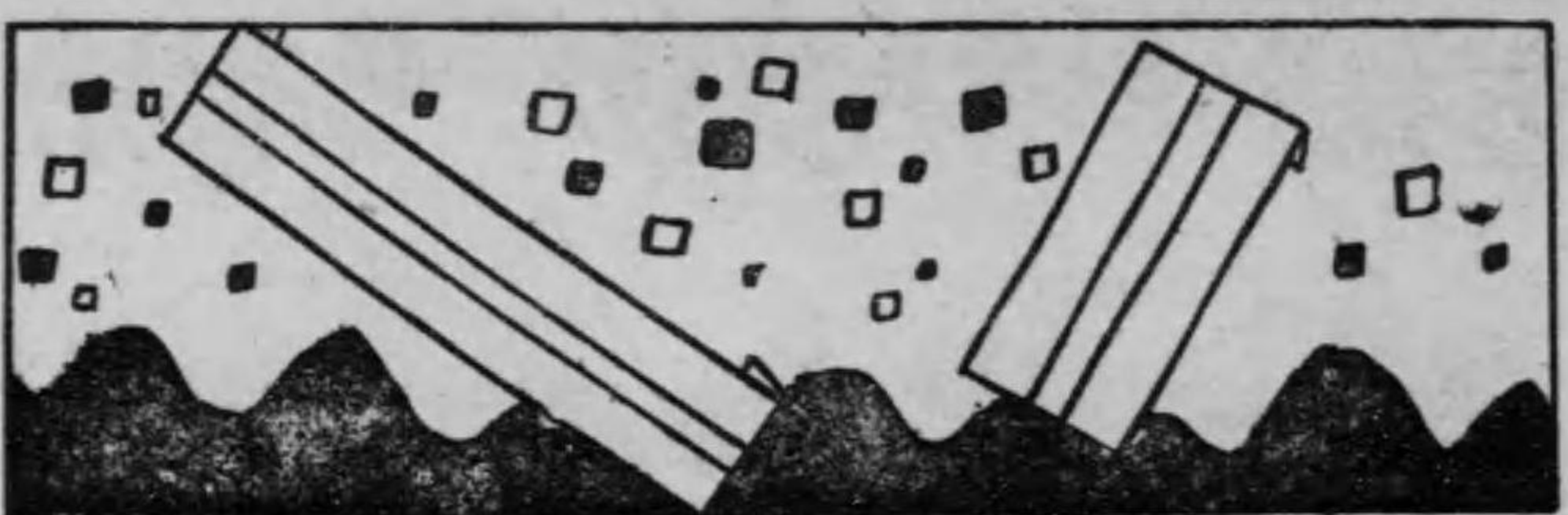
小笠原流折形

第二百一圖 俗用きなこ、こましほ包 (甲の形) △折様 (二)

一八〇



このすみを初に上の方へとをりかさね次に向よりなる。

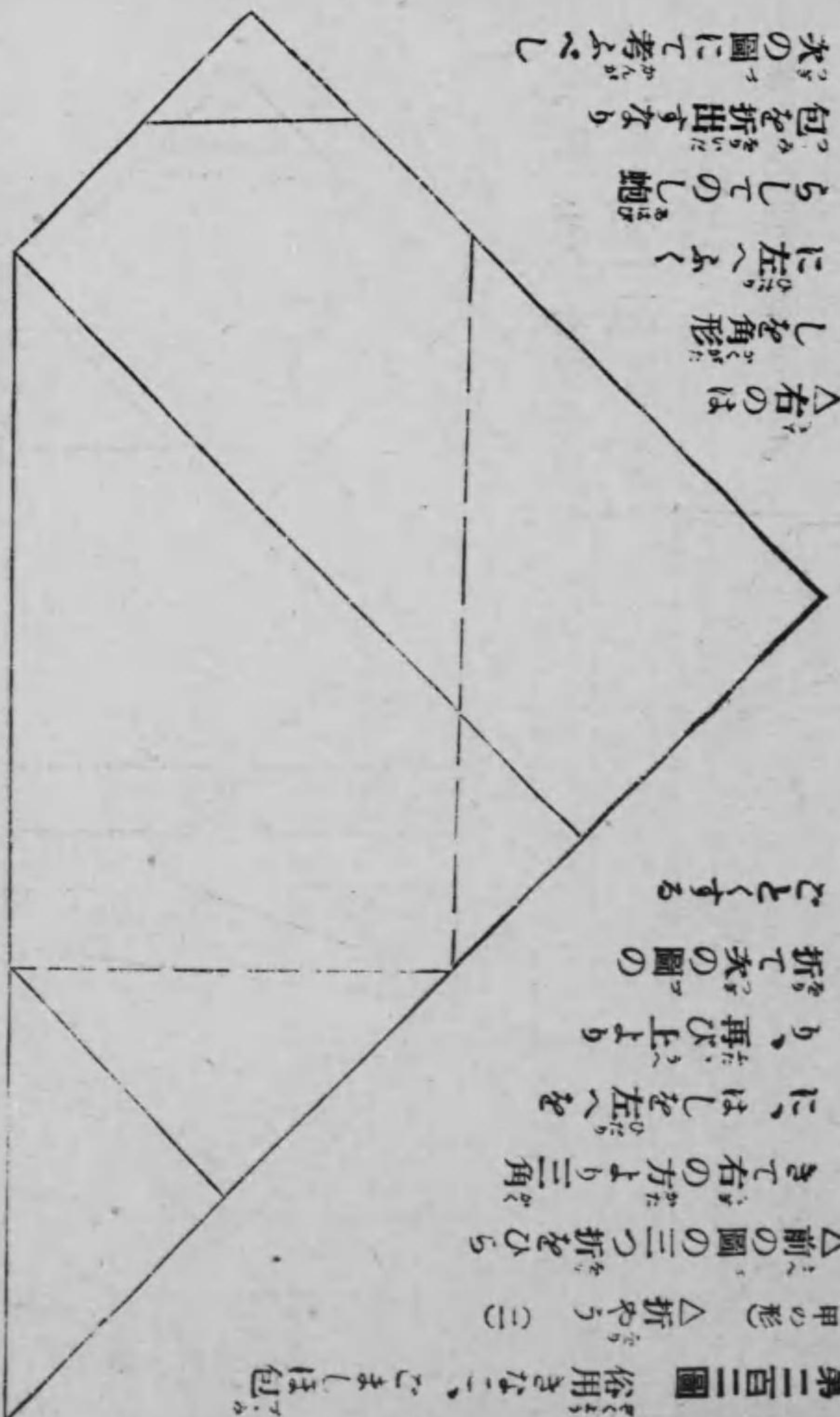


△右のは
しを角形
に左へふく
らしてのし廻
包を折出すなり
次の圖にて考ふべし

ごとくする

△前の圖の三つ折をひら
きて右の方より三角
に、はしを左へを
り、再び上より
折て次の圖の

第二百三圖 俗用きなこ、こましほ包 (甲の形) △折やう (三)

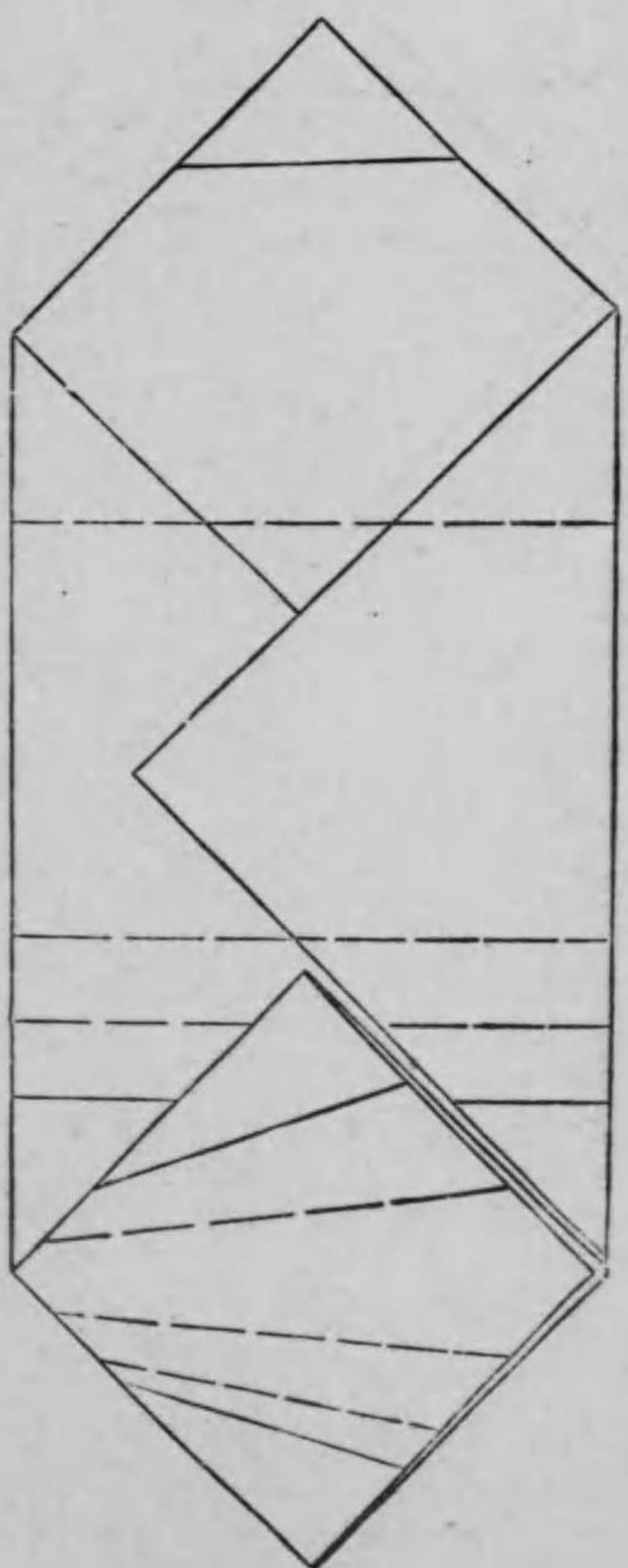


第六卷 粉箱紙形圖解

一八一



小笠原流折形



一八二

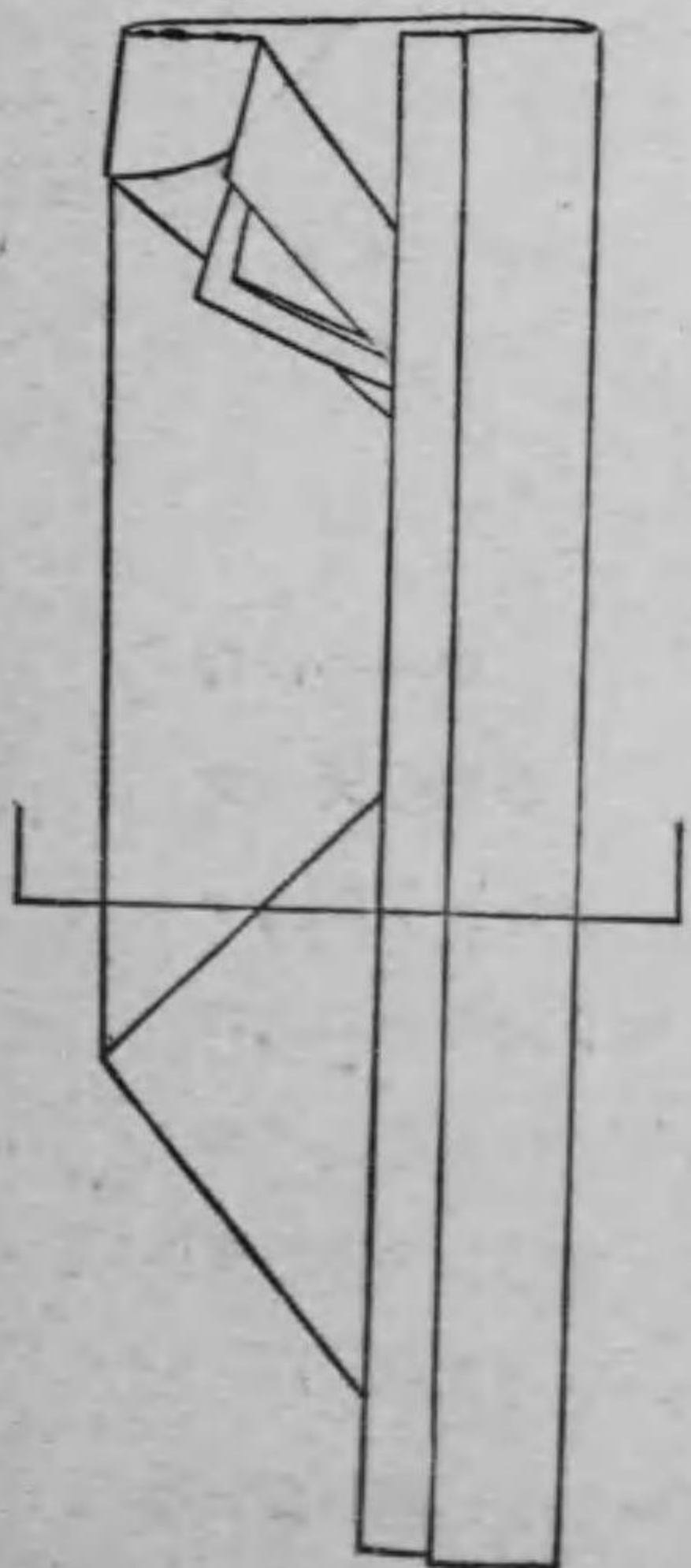
第二百三圖 俗用きなき、こましほ包 (甲の形) 折様 (四)

十、同 (乙) 右同し俗用なり、以上二種はむりならぬ折形也。

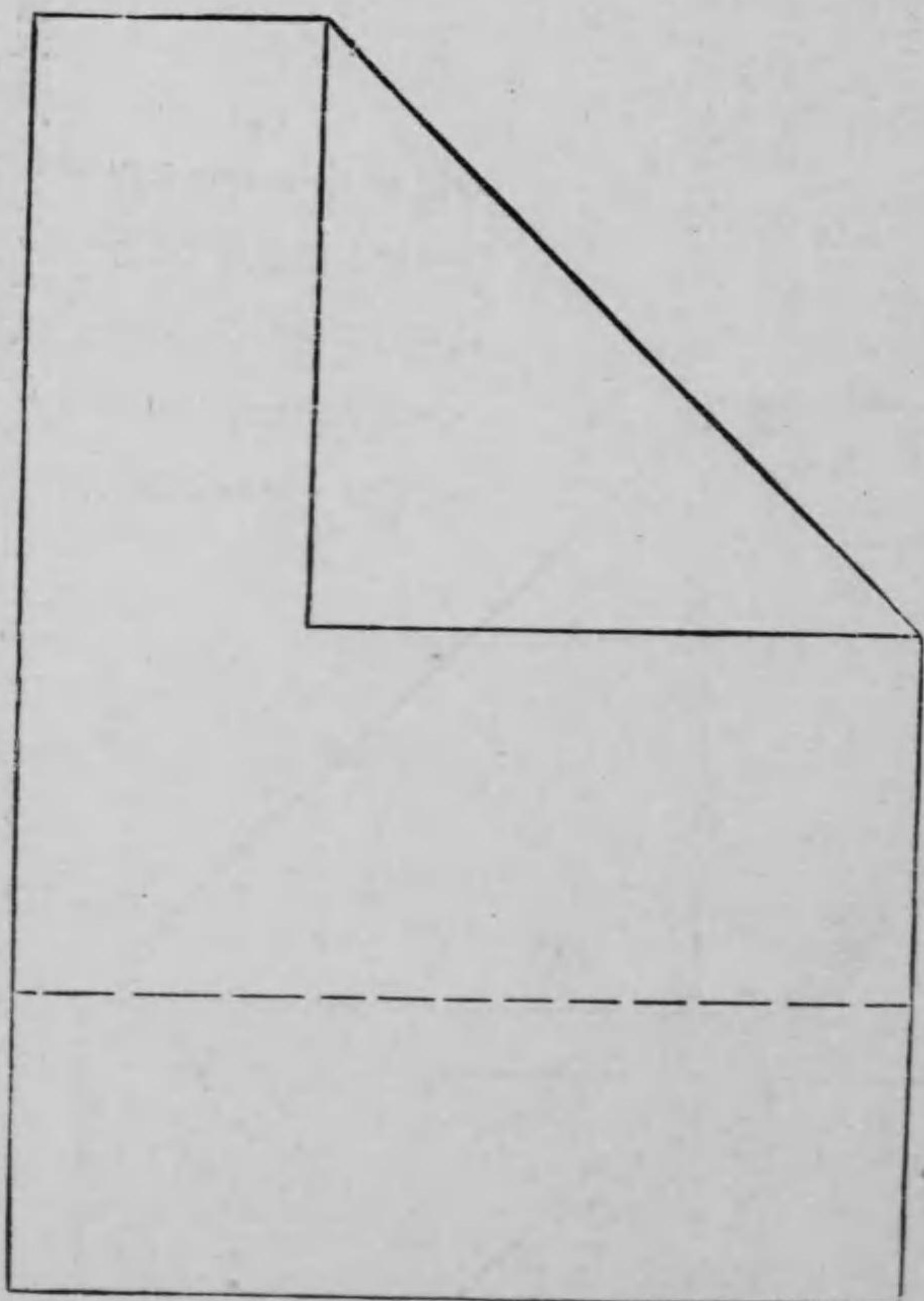
第二百四圖 俗用きなき、

胡麻しほ包 (乙の形)

△をりあがり



第二百五圖 俗用きなき、こましほ包 (乙の形) △をりやう (一)



第六卷 粉薬味類折形圖解

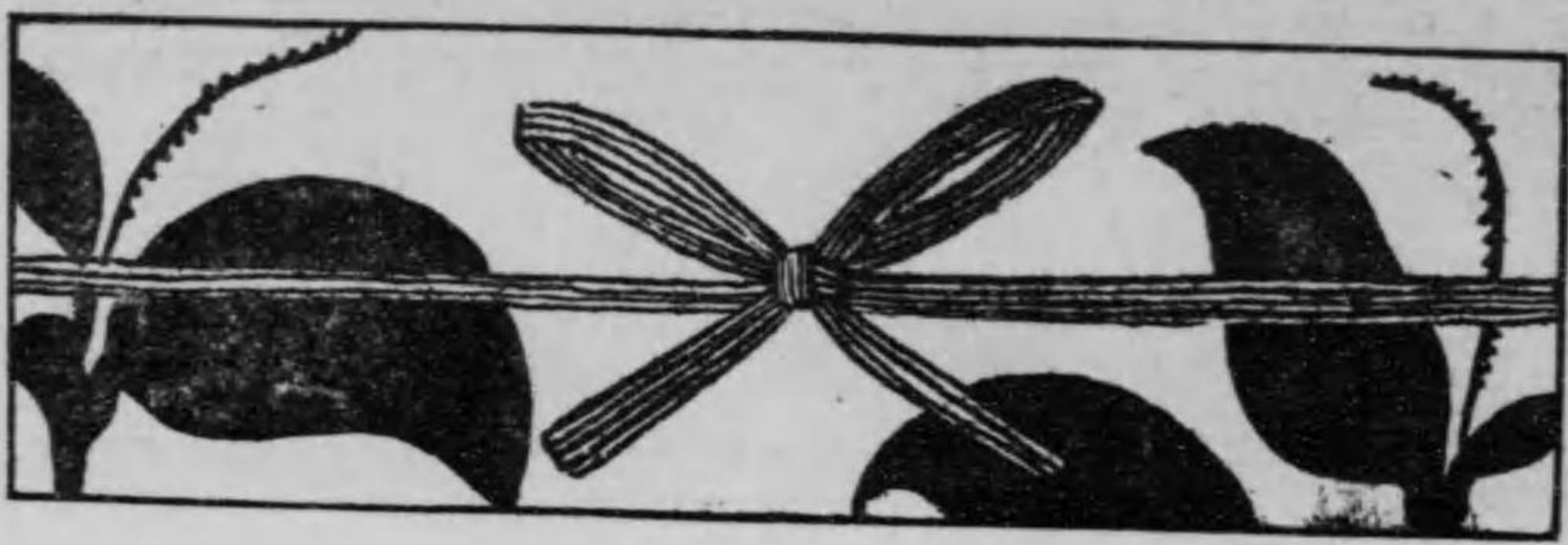
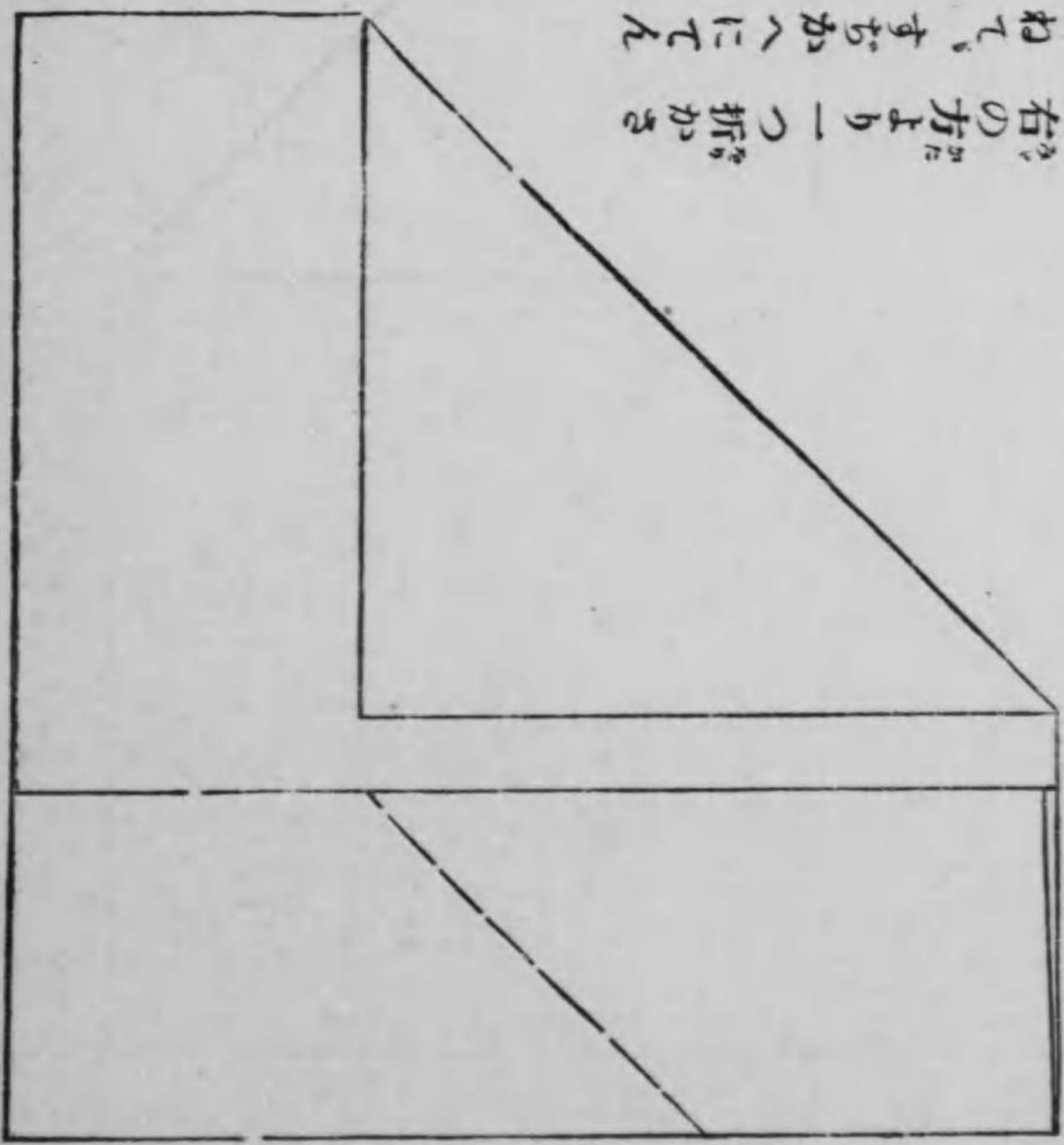
一八三



小笠原流折形

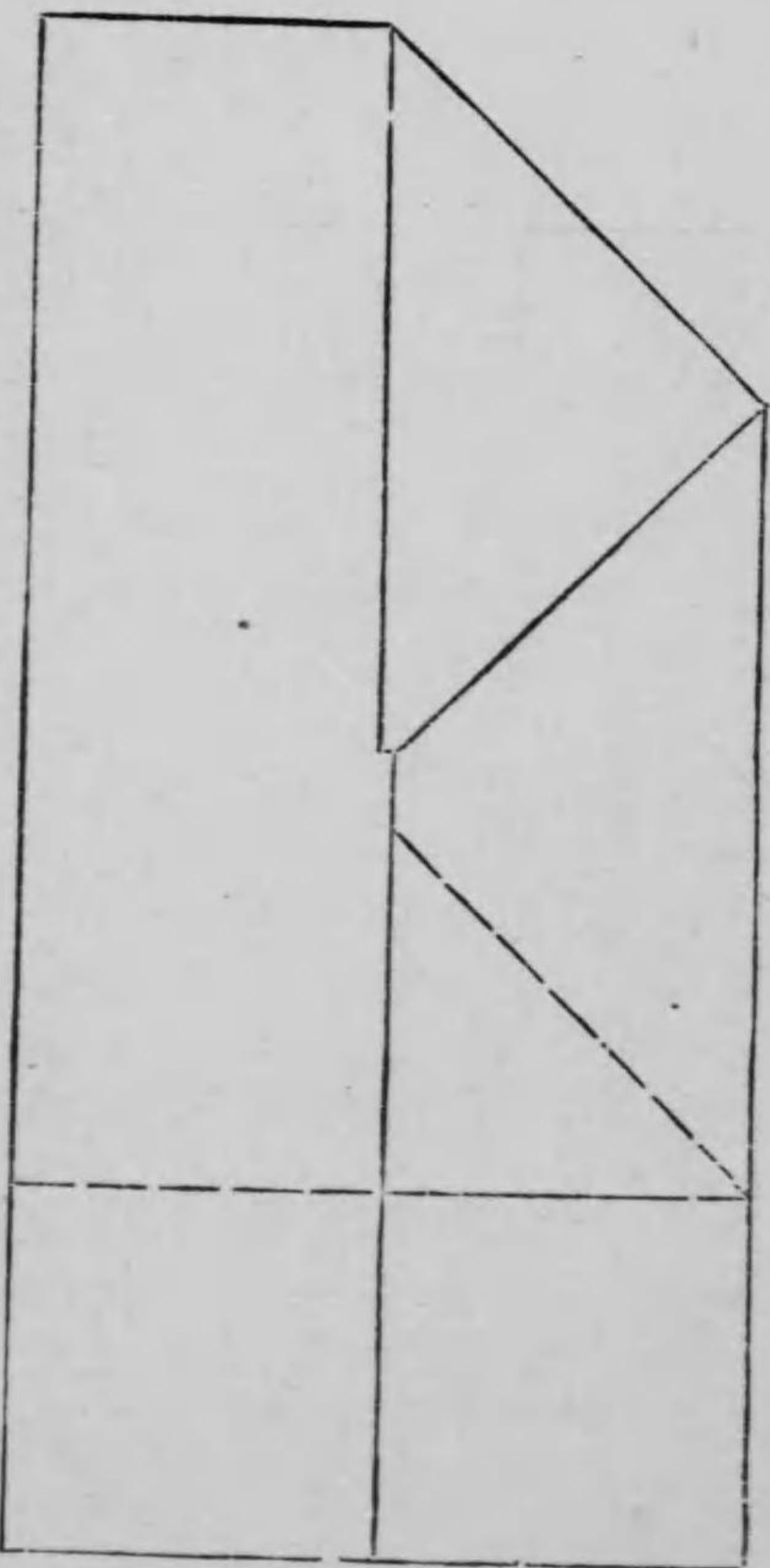
第二百六圖 俗用きなご、ごましは包 (乙の形) をりやう (二)

△右の方より折かる
 ねて、すぢかくにてん
 せん、すぢかくにてん
 せん、すぢかくにてん
 おき、次の圖の如く折
 をひらきて上より折る

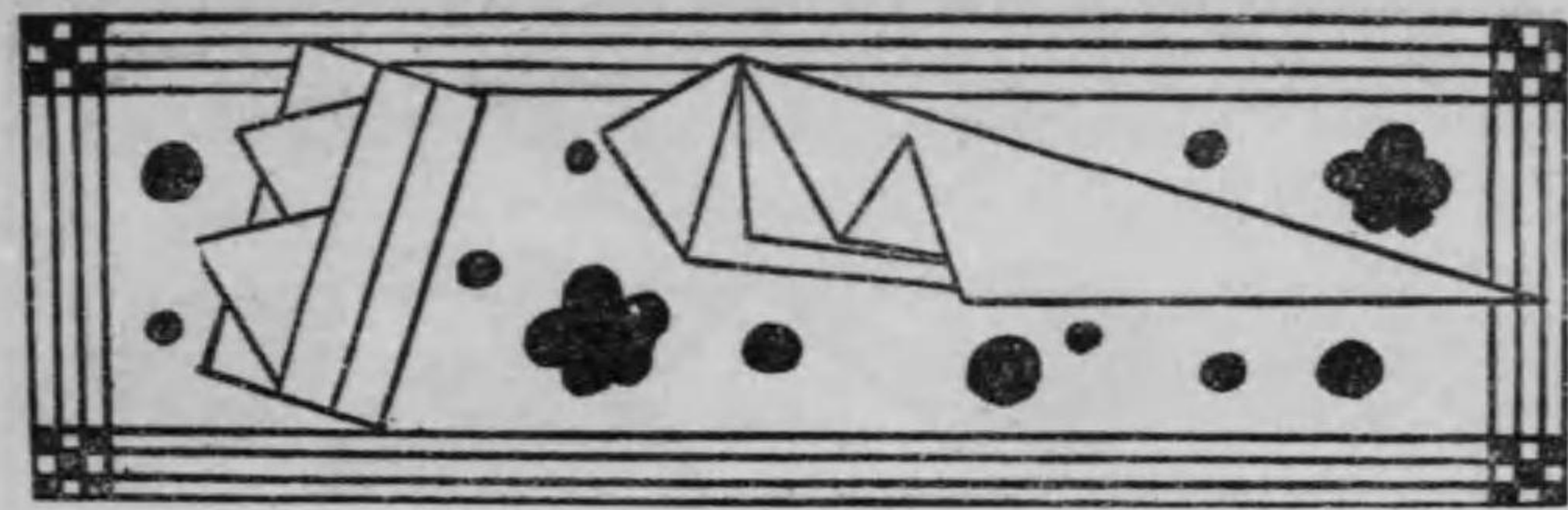


第二百七圖 俗用きなご、ごましは包 (乙の形) △をりやう (三)

△前の圖を右にひらきて上の方より三角の角へと二つに折りたる所なり△次にすぢか
 ひの點線の所を上へ折りながら前圖てん線の所を折れば次の圖の様になるなり。

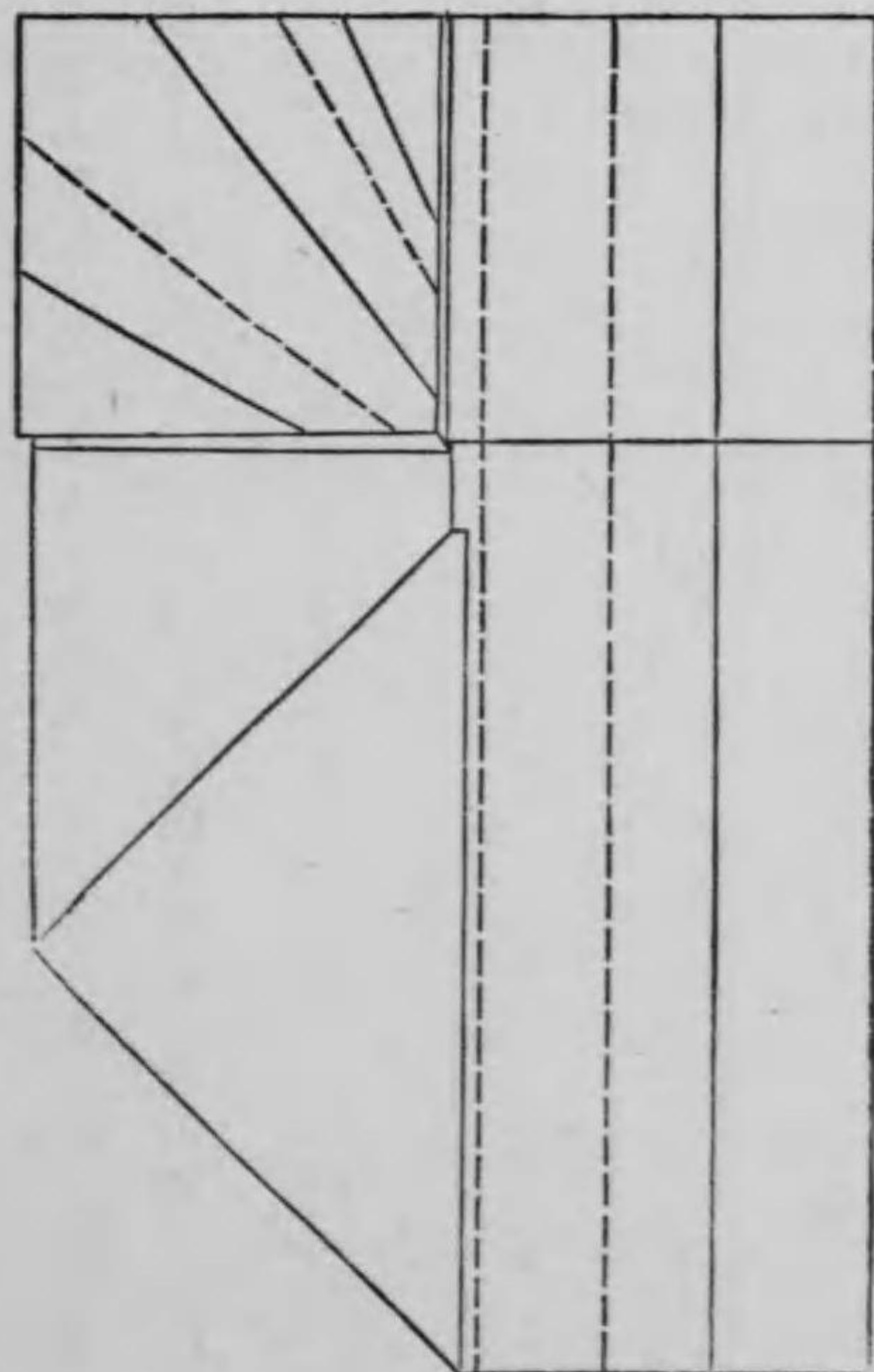


第六卷 新薬味類折形圖解

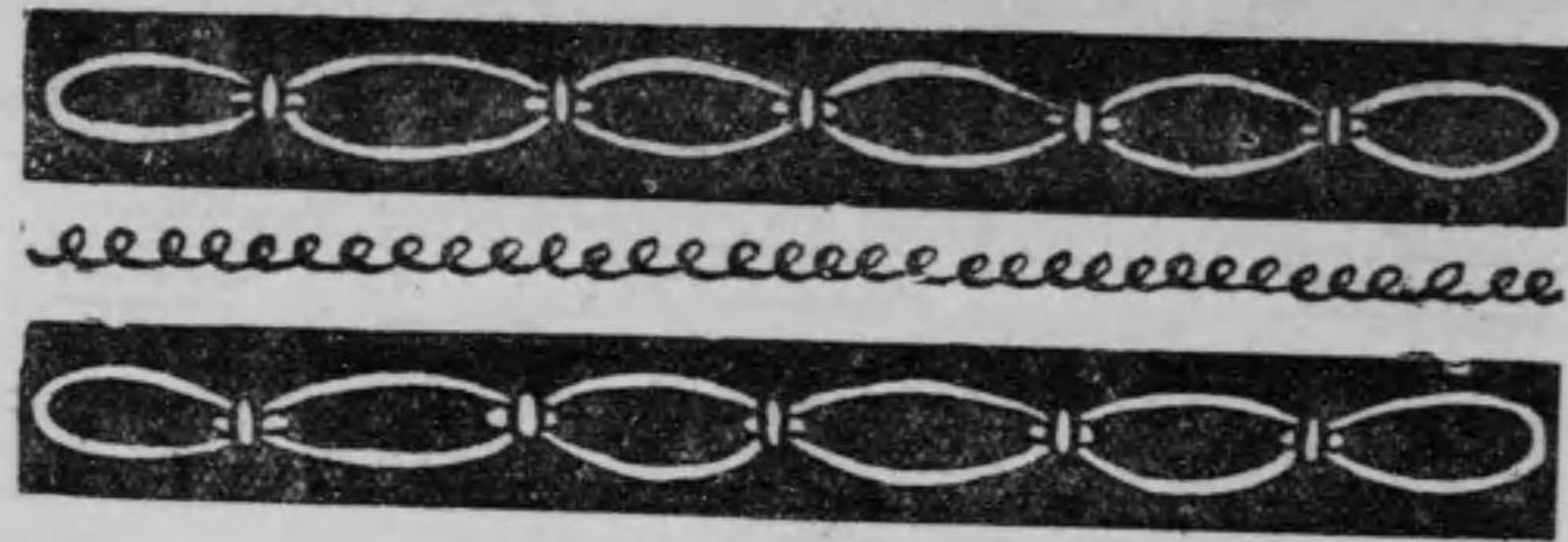


小笠原流折形

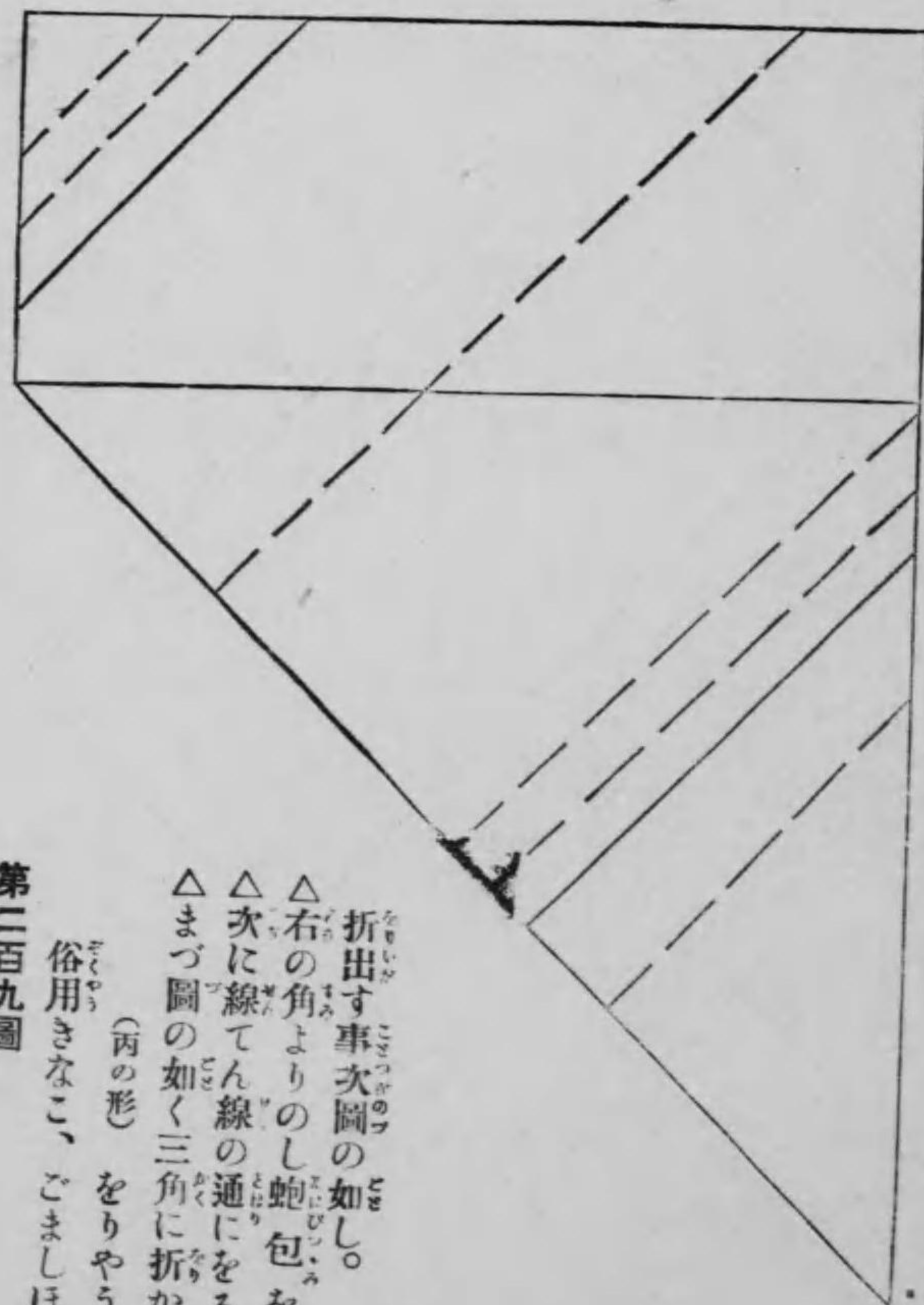
第二百八圖 俗用きなこ、ごましほ包 (乙の形) △折様 (四)
 △前圖説明の手順にて折出したる角形の所にてのし鮑包を折ること圖の線にてしるべし。



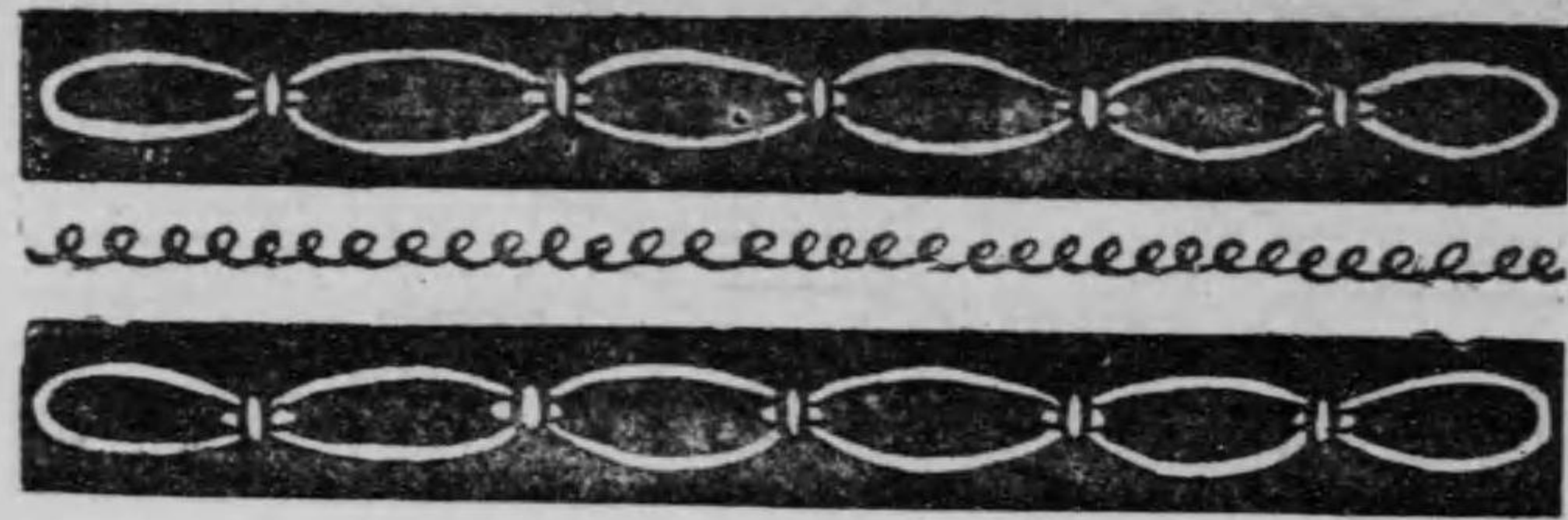
△右の方の折やうは普通大豆粉包のごとし、折上りの圖を見て知るべし。○折上り圖の下の方は裏に折るなり。



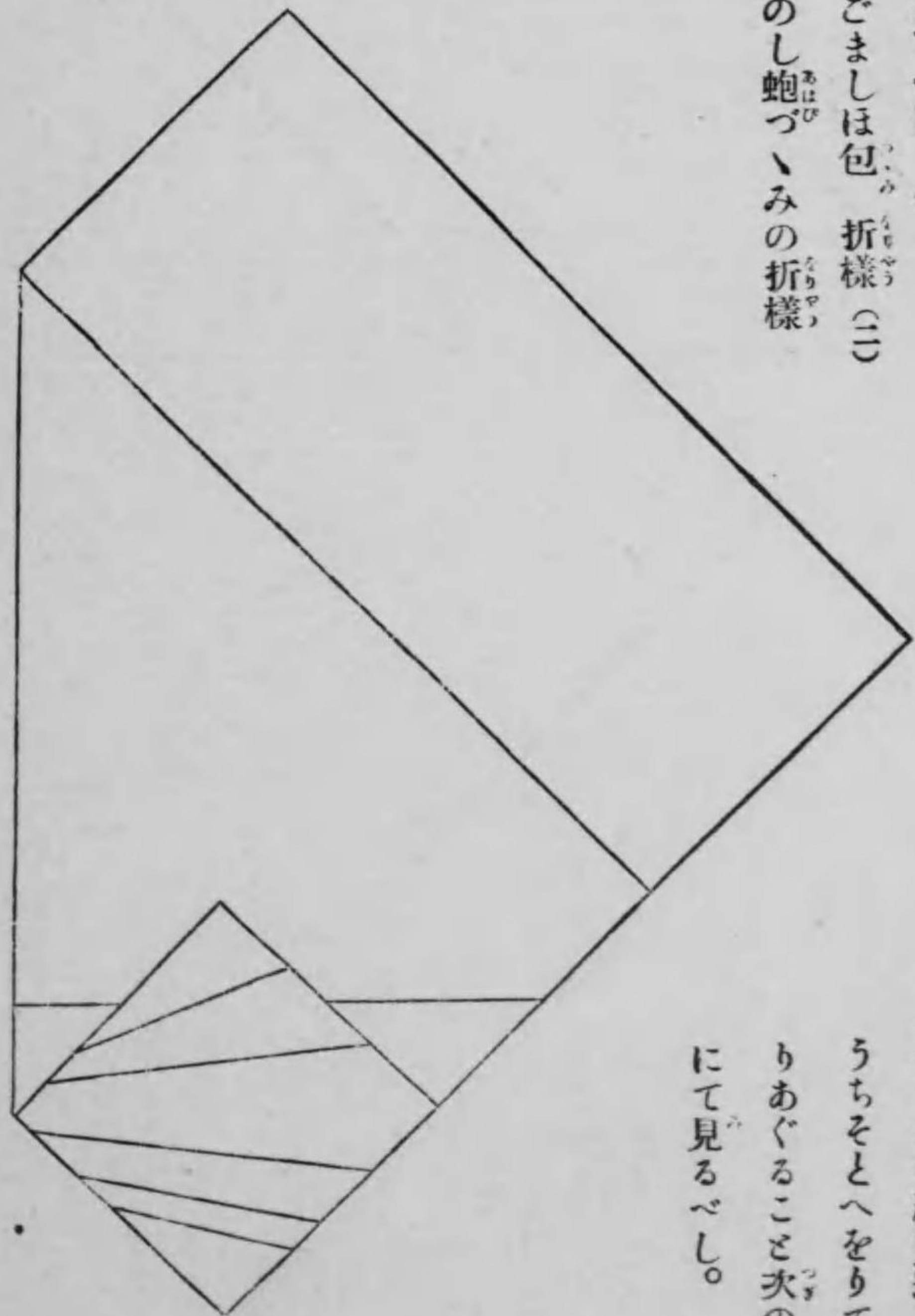
十一、同 (丙) これも同じ、右の折形にはおされり。



折出す事次圖の如し。
 △右の角よりのし鮑包を
 △次に線てん線の通にをる。
 △まづ圖の如く三角に折かさね
 (丙の形) をりやう (二)
 俗用きなこ、ごましほづみ
 第二百九圖

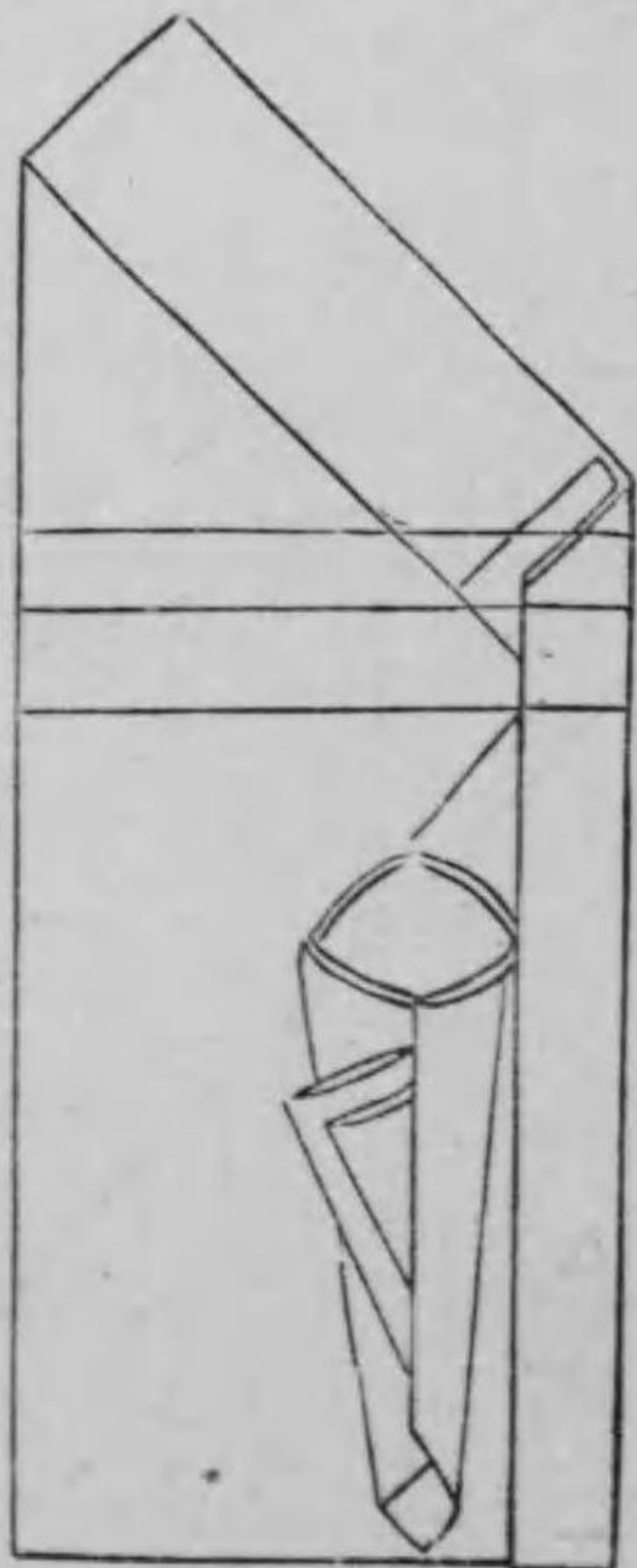
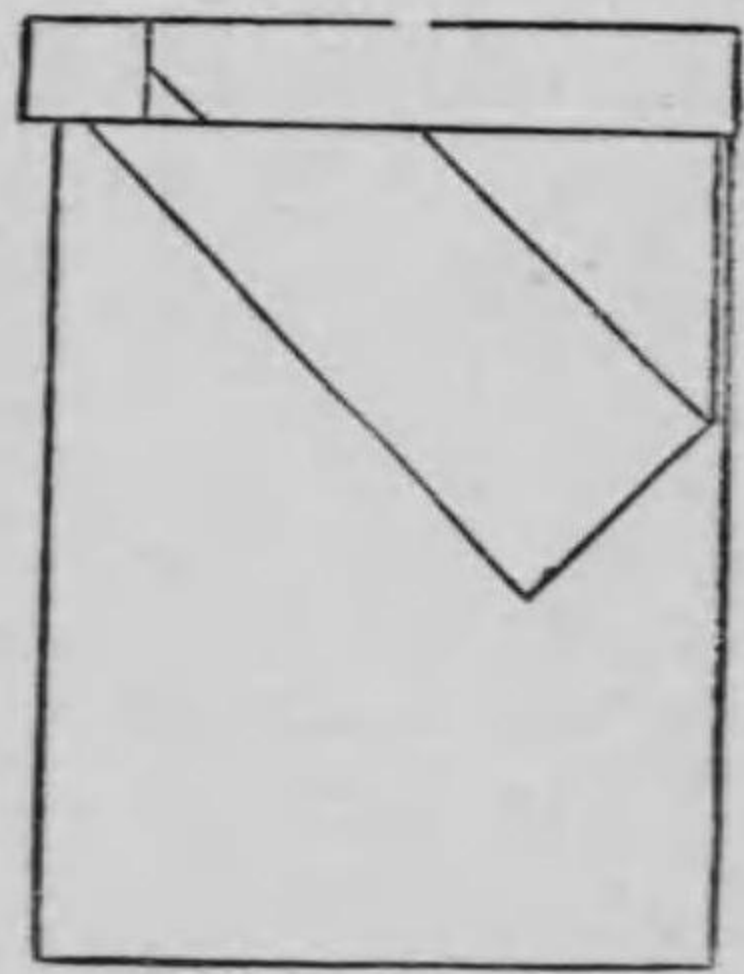


小笠原流折形
 第二百十圖 俗用きなこ
 ごましほ包 折様(二)
 ○のし蛇づゝみの折様



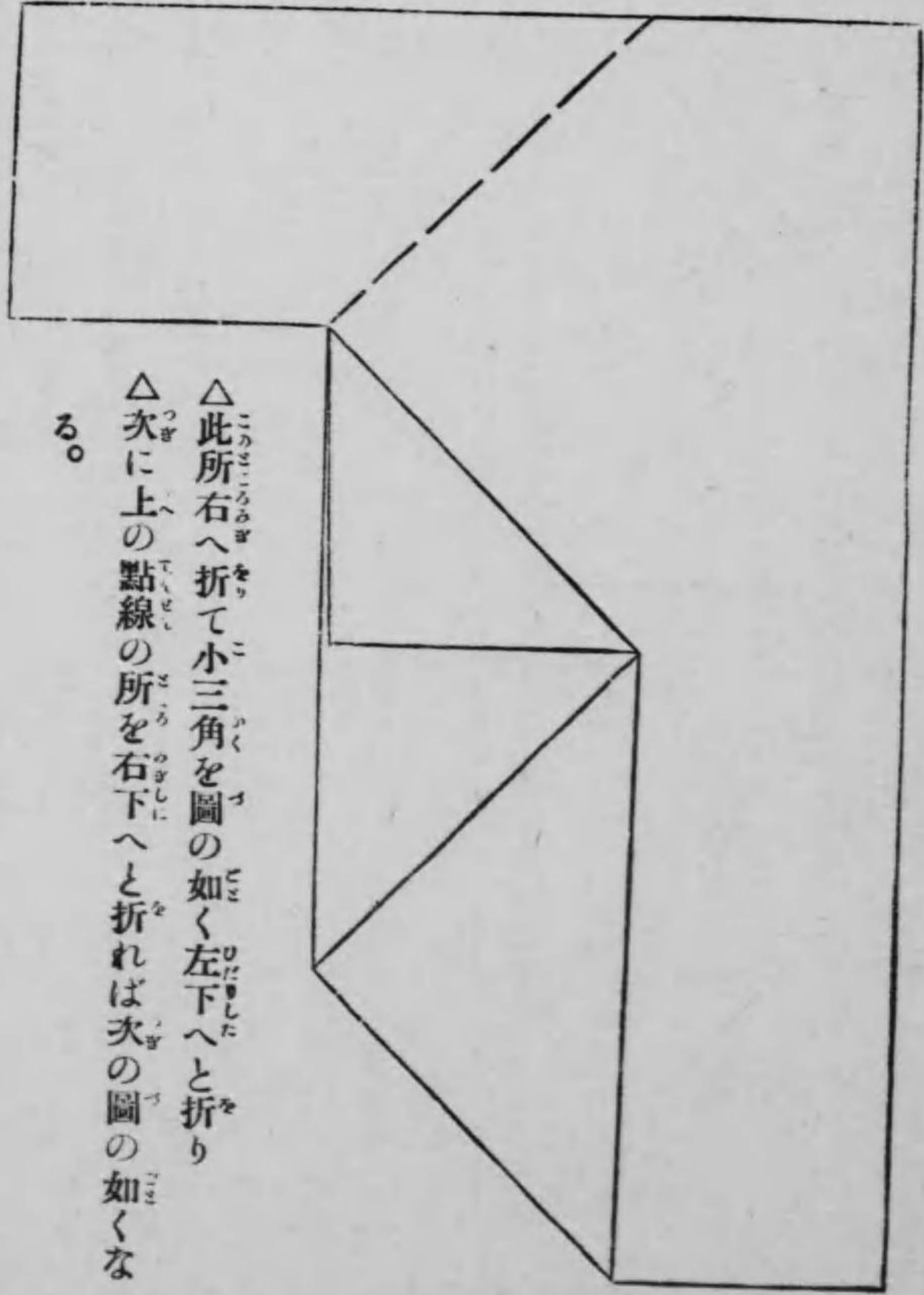
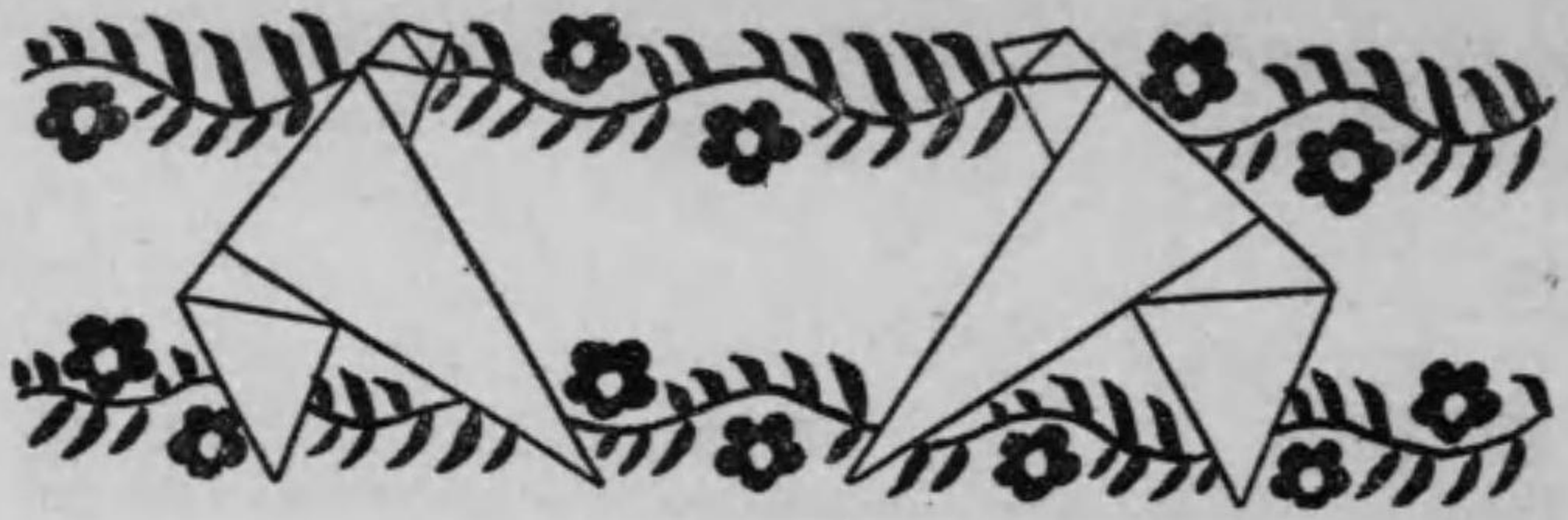
一八八
 △次に前の線の通りに
 うちそとへをりてを
 りあぐるここと次の圖
 にて見るべし。

第二百十一圖 俗用大豆粉、胡麻鹽包 (丙の形)
 △をりあがり、下包に粉を
 包みて上より入れ、圖の
 如く
 上の方を裏の方へをるべ
 し。



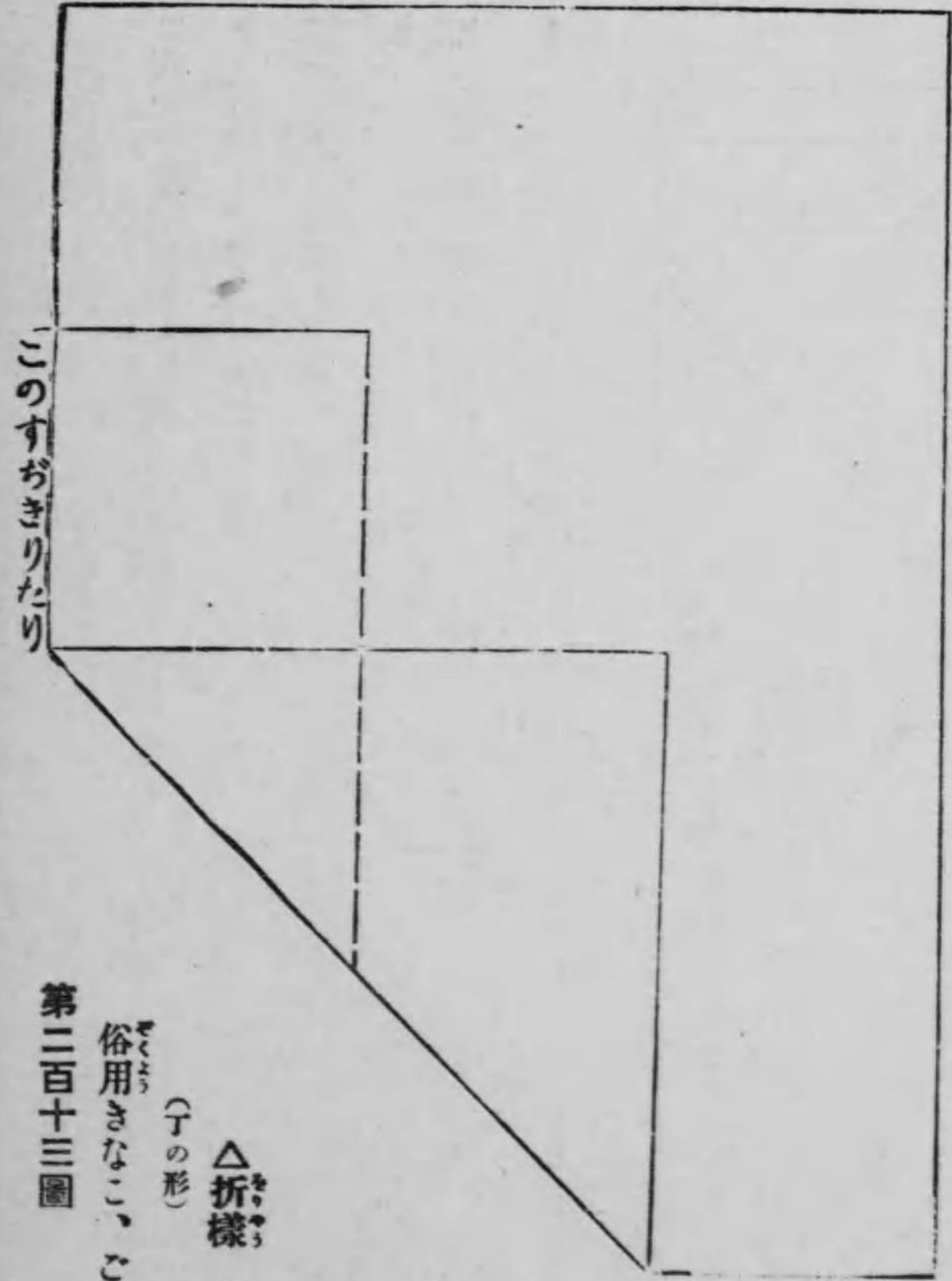
第二百十二圖
 俗用きなこ、ごましほ包
 △をりあがり

うらの圖



△此所右へ折て小三角を圖の如く左下へと折り
 △次に上の點線の所を右下へと折れば次の圖の如くなる。

第二百十四圖 俗用きなこ、ごましほ包 (丁の形) △折様

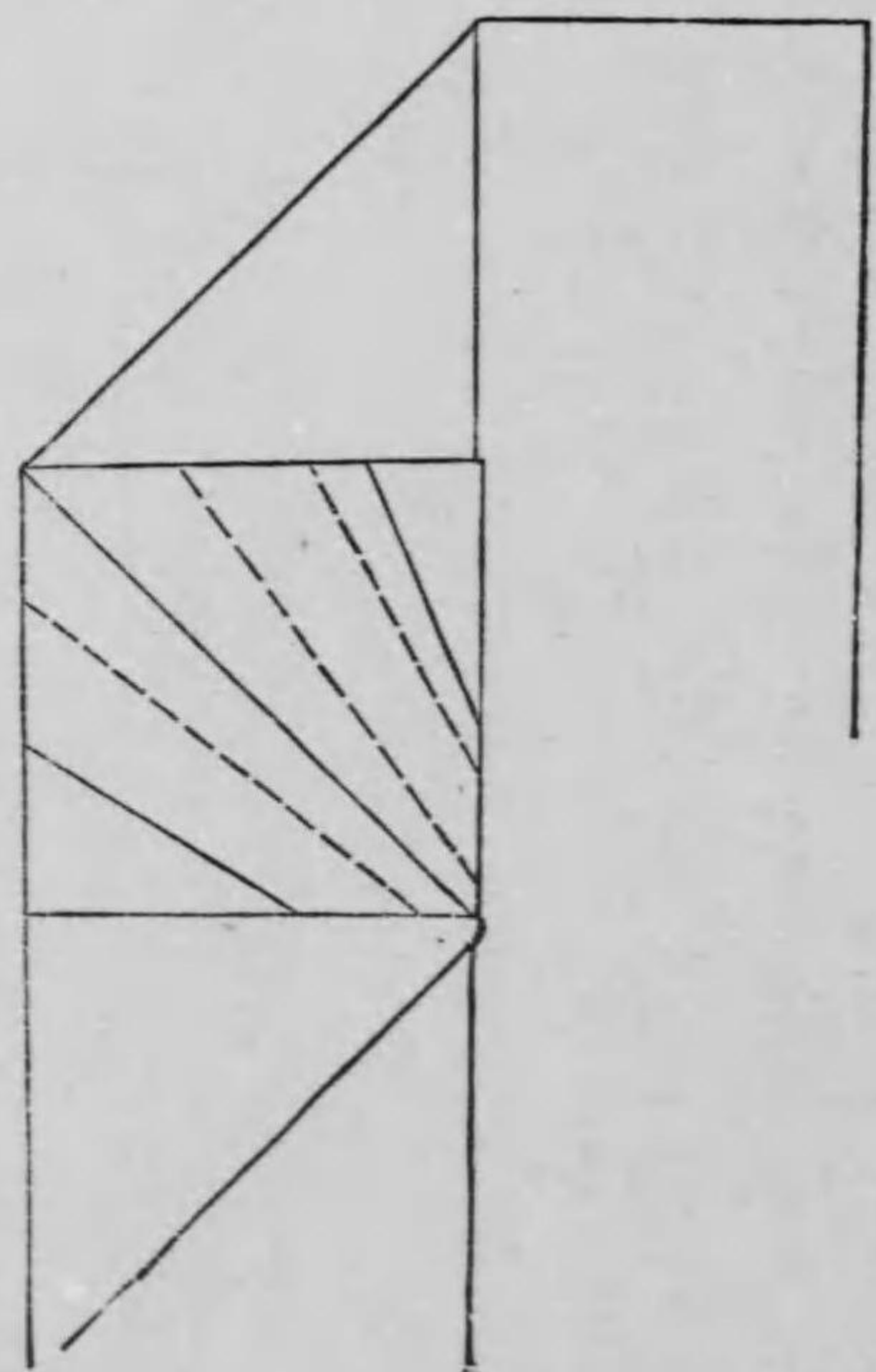
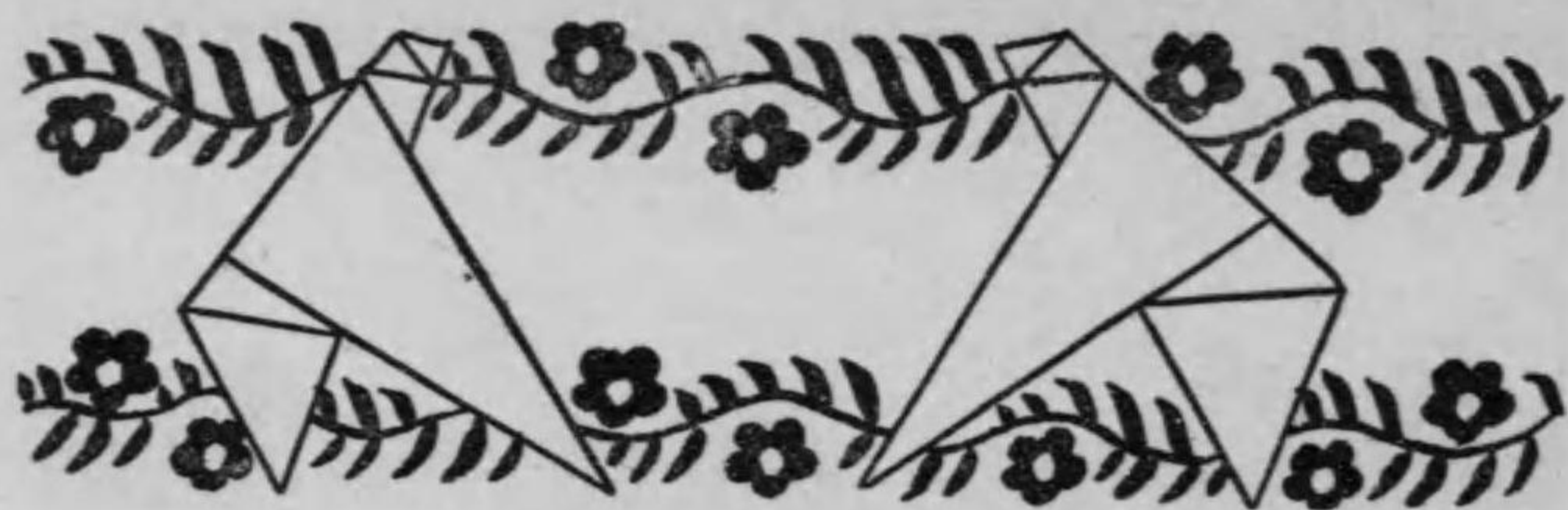


このすぢぎりたり

第二百十三圖 俗用きなこ、ごま鹽包 (丁の形)

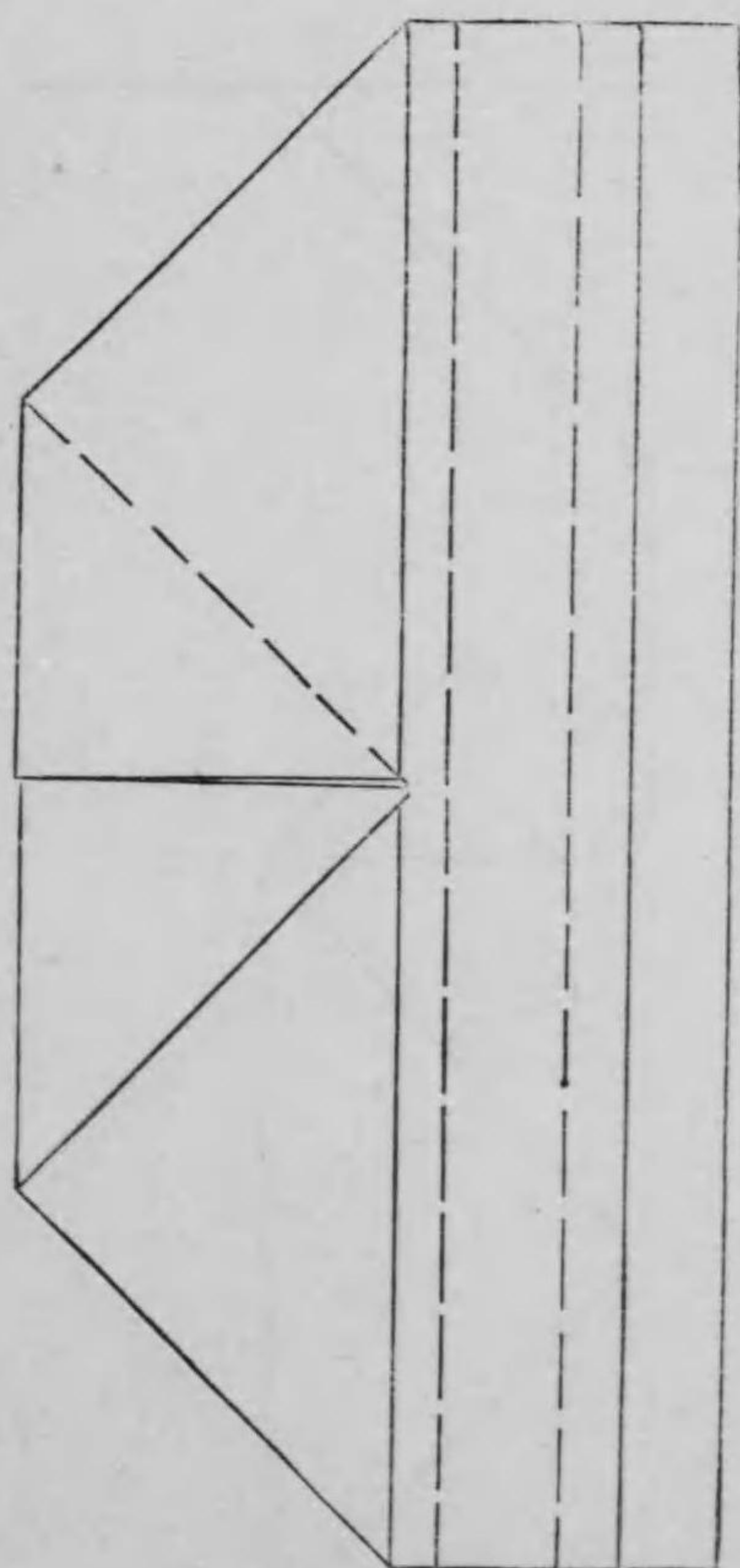
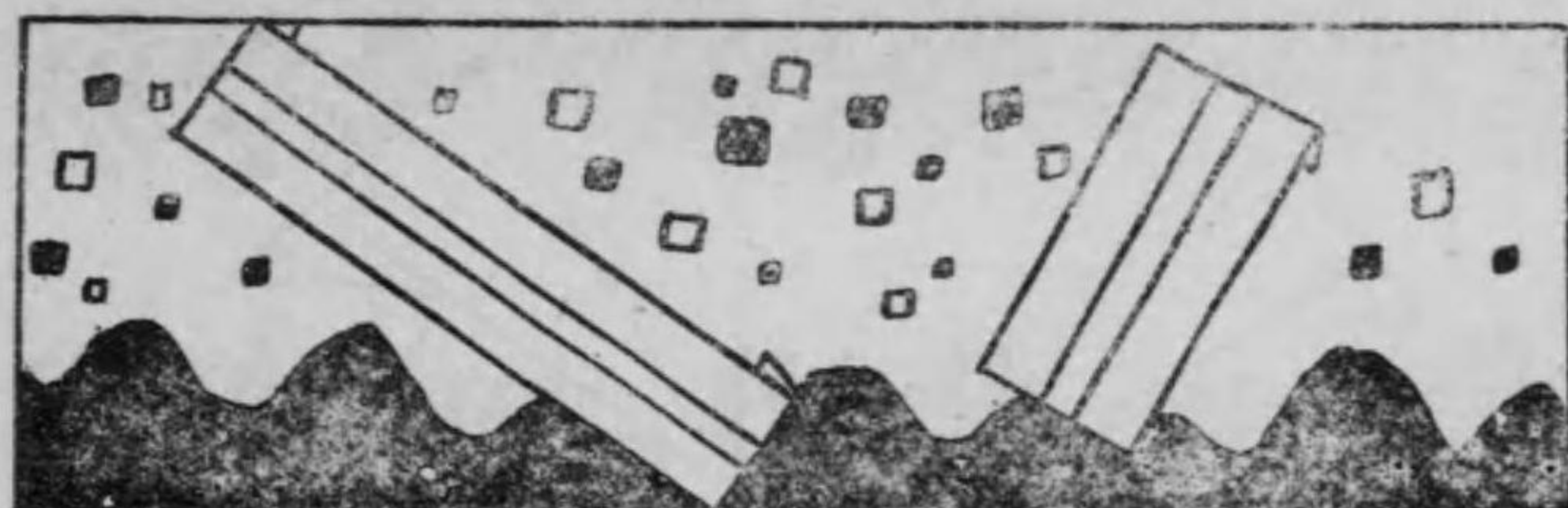
△折様 (二)

小笠原流折形
 十二、同(四) これも同じ、一箇所裁つ所あるゆゑ、手遊の折もの、様にていたく
 おとれり、但俗用なればいたしかたなし。

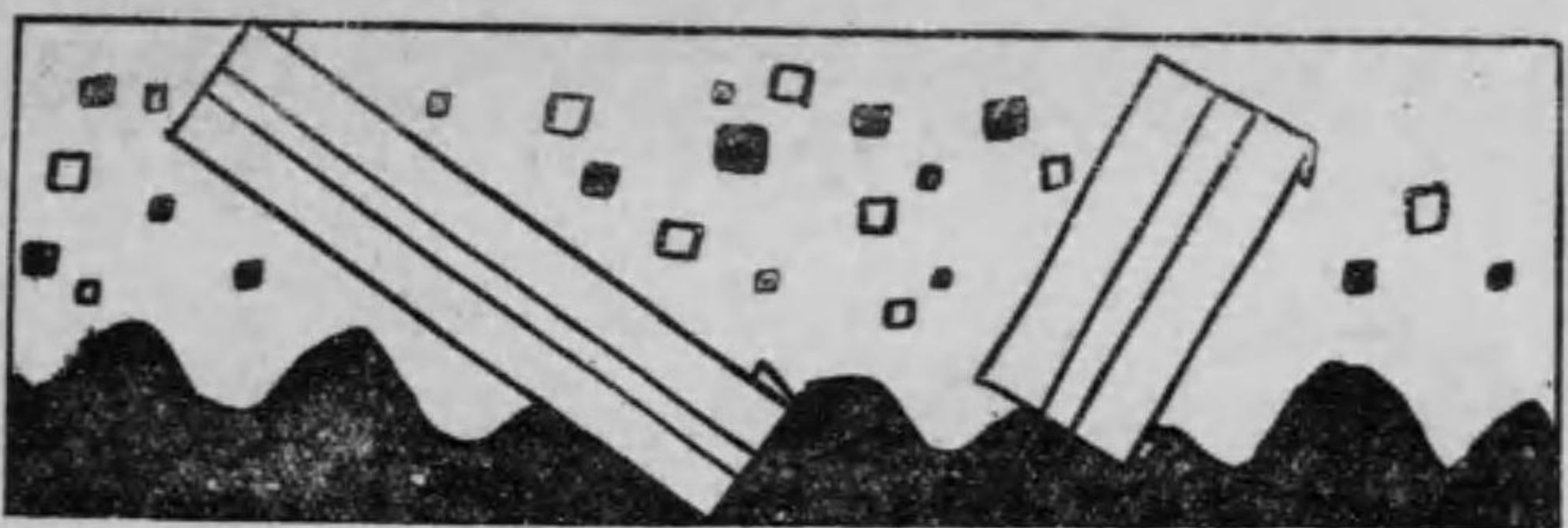


第二百十六圖 俗用きなこ、ごましほ包 (丁の形) △をりやう (三)

△前の圖より小三角二つを出して、のし蛇包を折る。



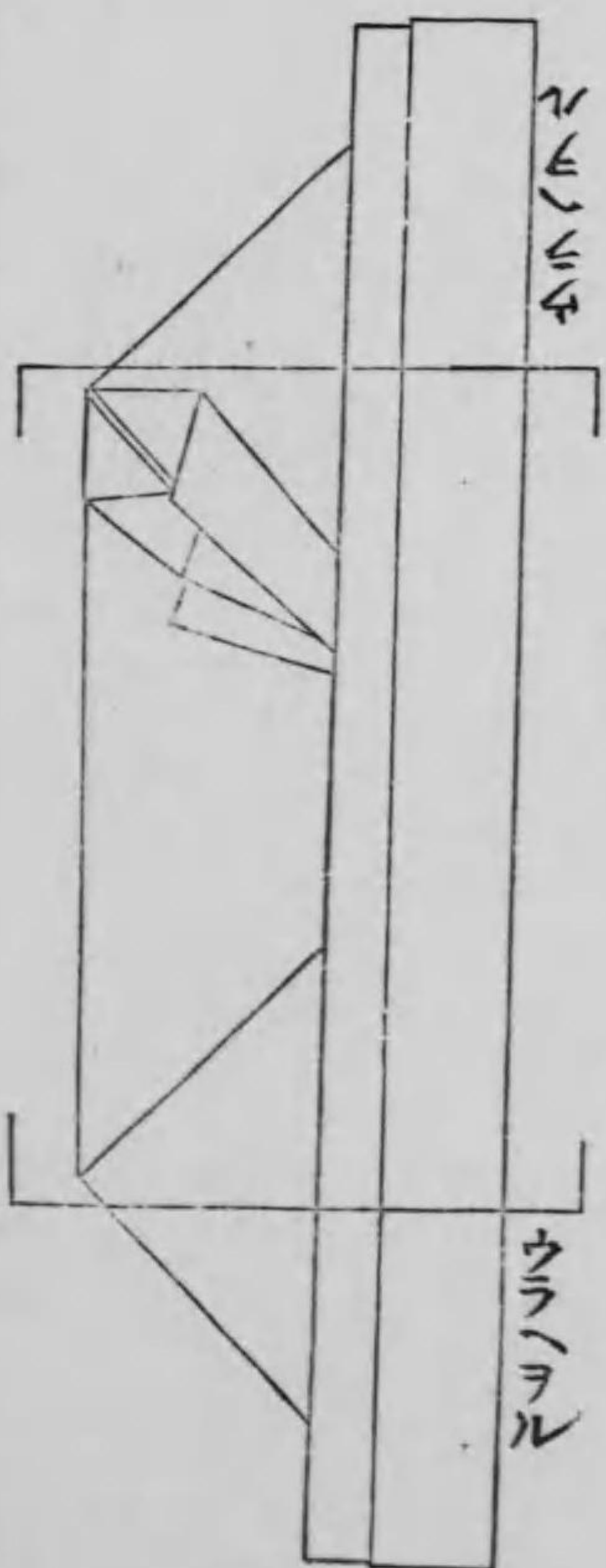
第二百十五圖 俗用きなこ、ごましほ包 (丁の形) △折様 (三)
△左のてんせんの所を上へ折かへして、のし蛇包ををること次の圖にて見るべし。



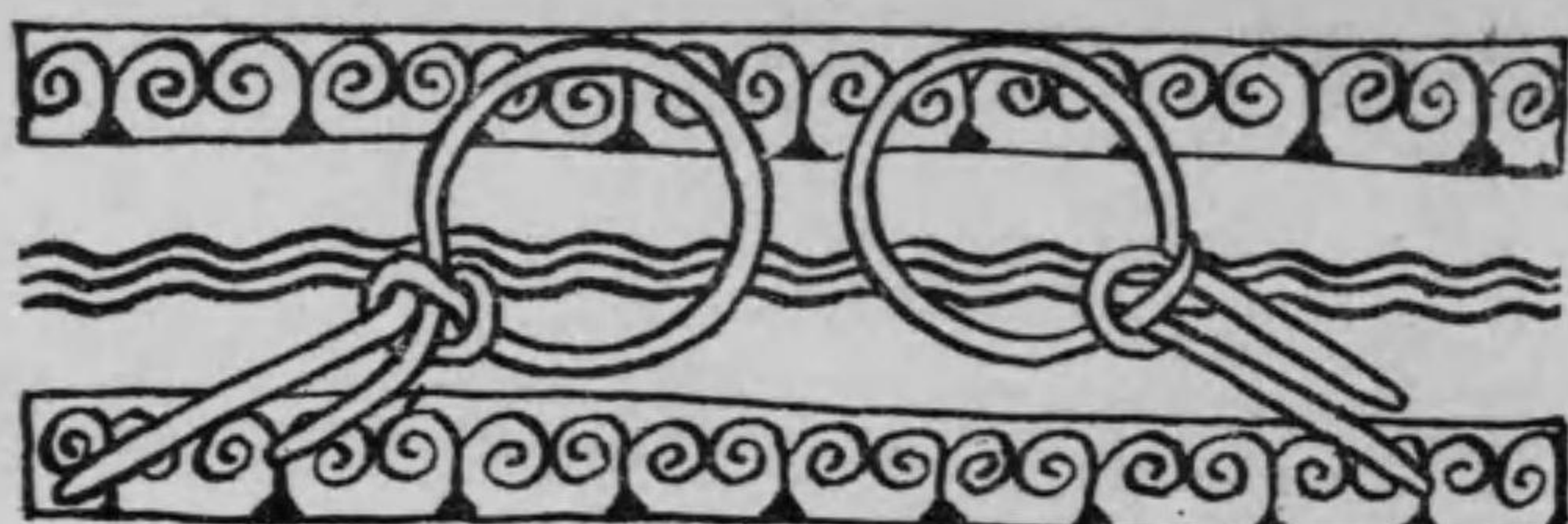
小笠原流折形

第二百十七圖

俗用きなこ、ごましほ包（丁の形）折あがり



右四種は折形すなほならねば、縮圖にてはよく折方をあらはしえぬところあり、ゆゑに大略にしるしおきつ、こゝろむる者、考ふべし。
 ○この俗用ていもの世間におほし、正しき教へにあらねば、何にてもよけれども、知らぬ人々は、これらをも、よき物の數に交へてもあつかふが可笑ければ、こゝにことわりおくなり。



第七卷

音樂類折形圖解

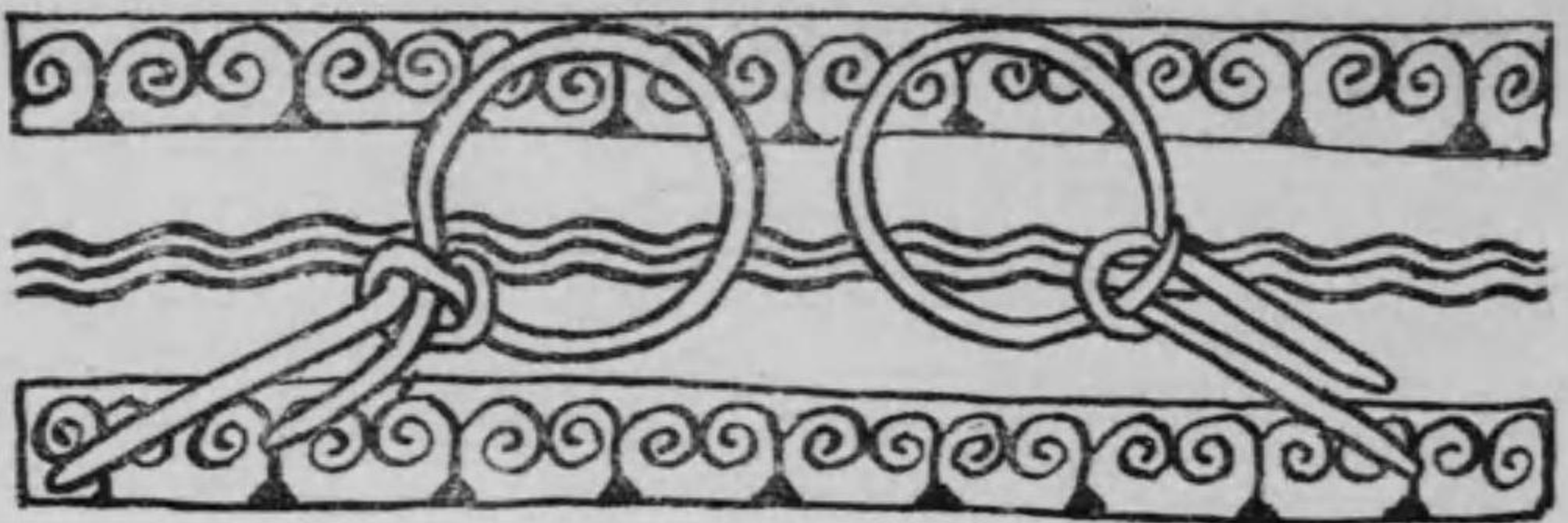
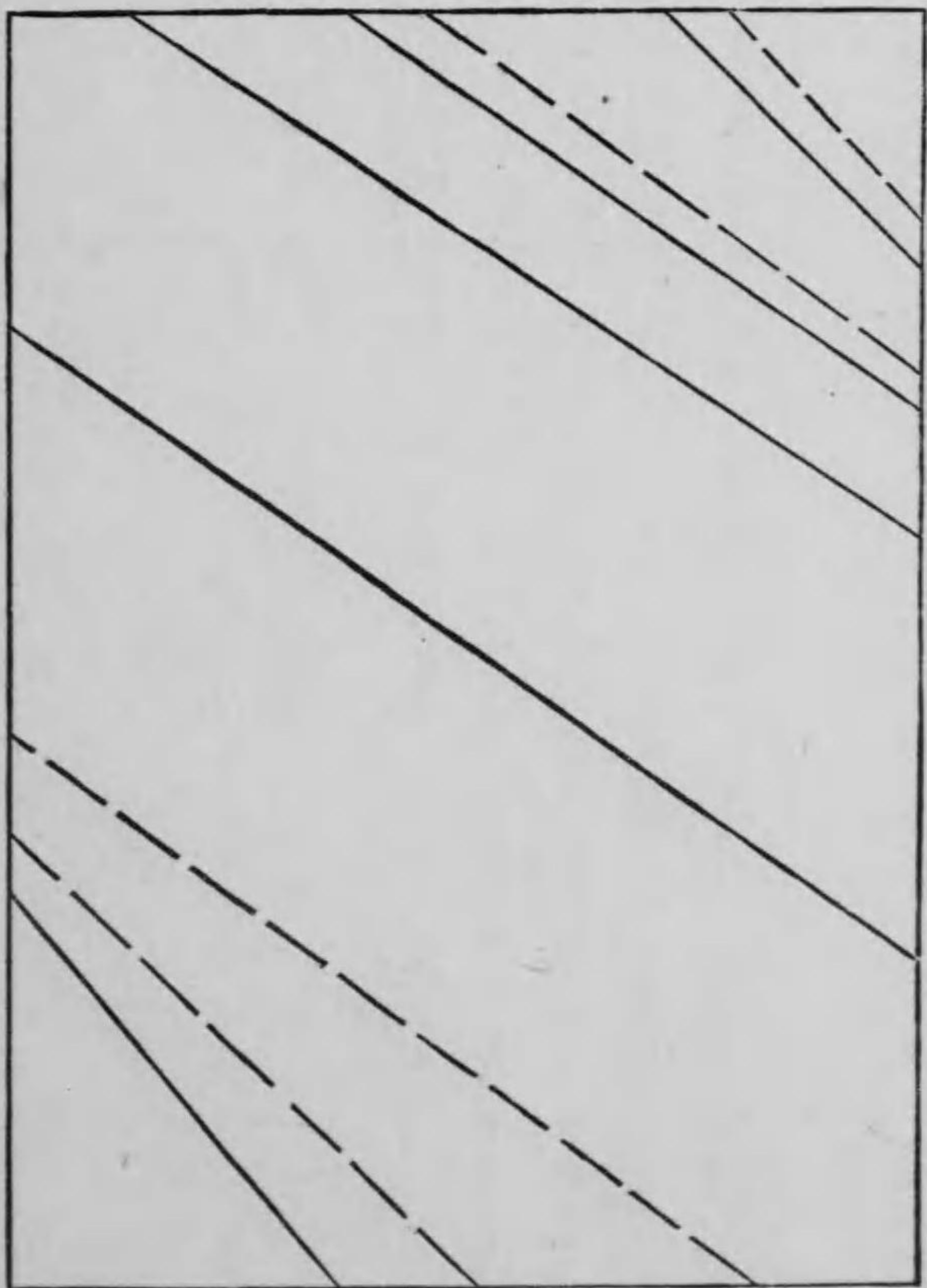
一、歌舞音曲本包 色奉書がさね、銀水引、細結、もろわな、上書あるべし。其本の種類によりて、白がさね紙をもて包むべし。檀紙に箔おきたるものにてよし。
 『此たぐひの包形は、其古代の舞樂ならば、包様も古風に調ふべく、又近古の猿樂ならば、包様も其時代の趣向によるべく、又近世の琴三味線ならば、近き折形に包みなすべく、又現今の異國風の管絃樂ならば、包形も今様に拵ふべきなり。』



小笠原流折形

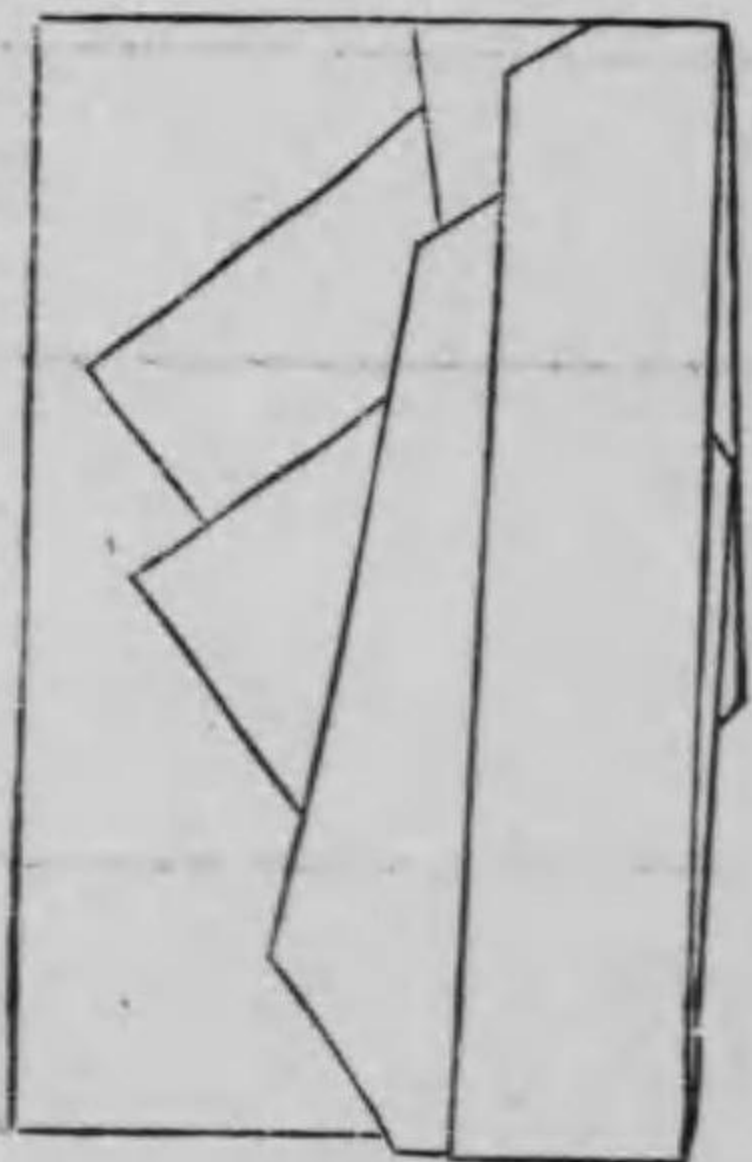
第二百十八圖

歌舞音曲書類包 △をりやう



第二百十九圖

歌舞音曲書類包 △折あがり



○此包形は特にはなやかな

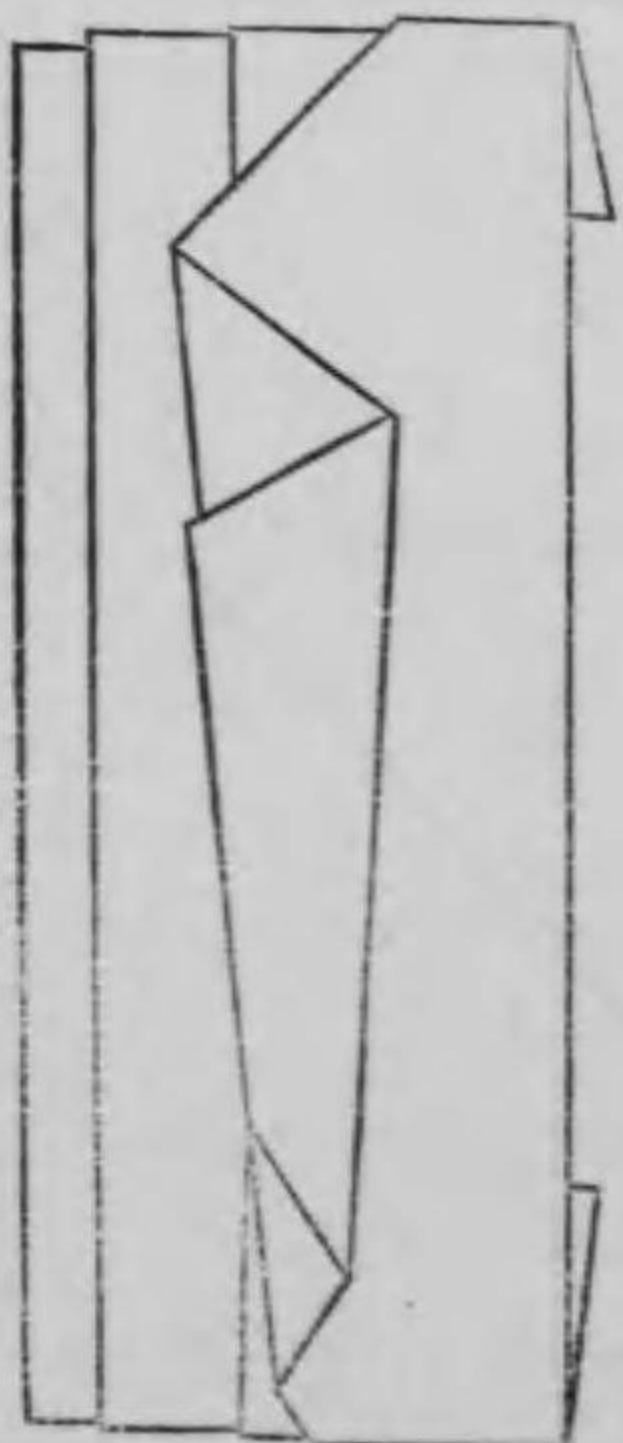
紙水引にて飾るべし。

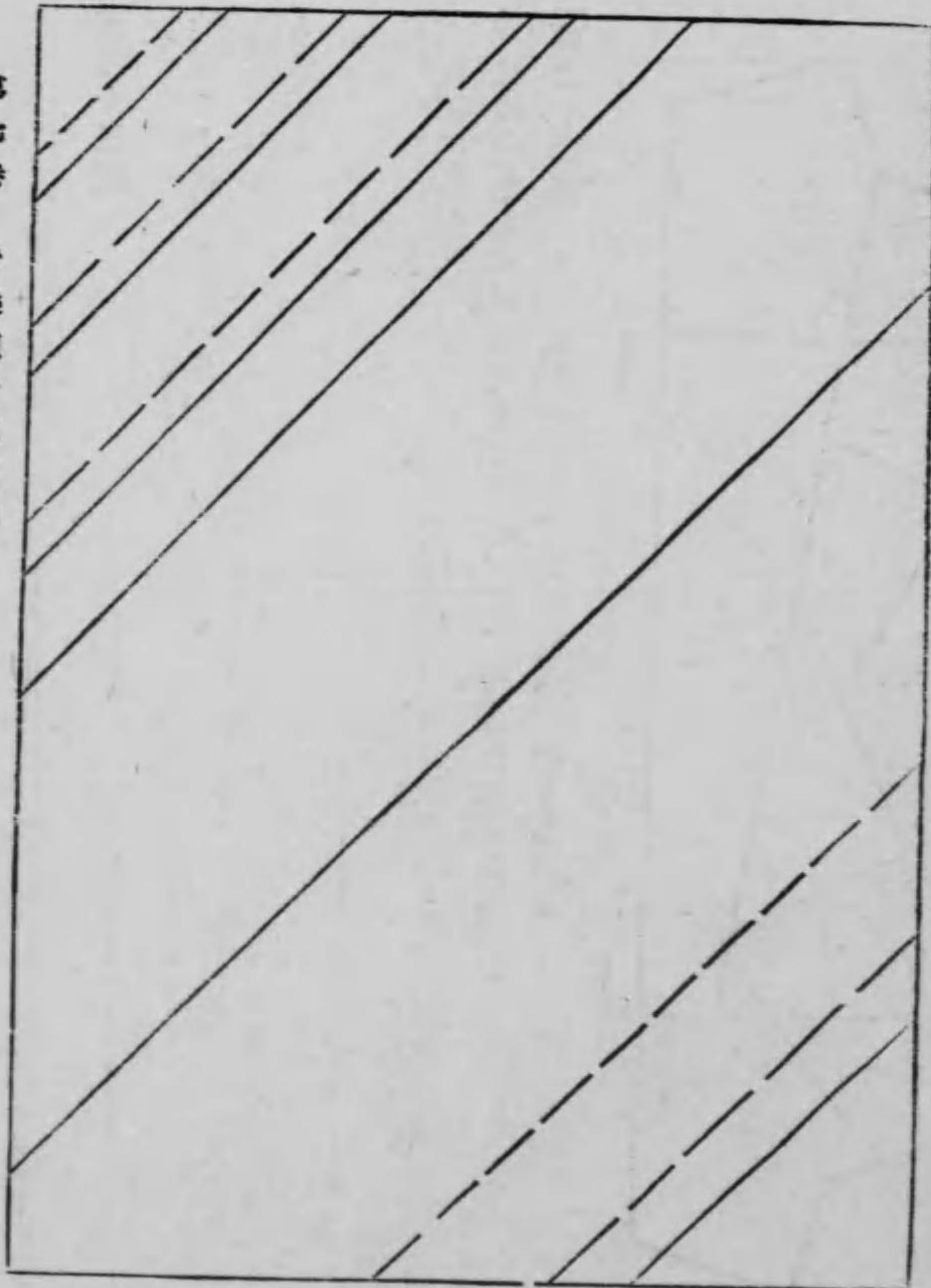
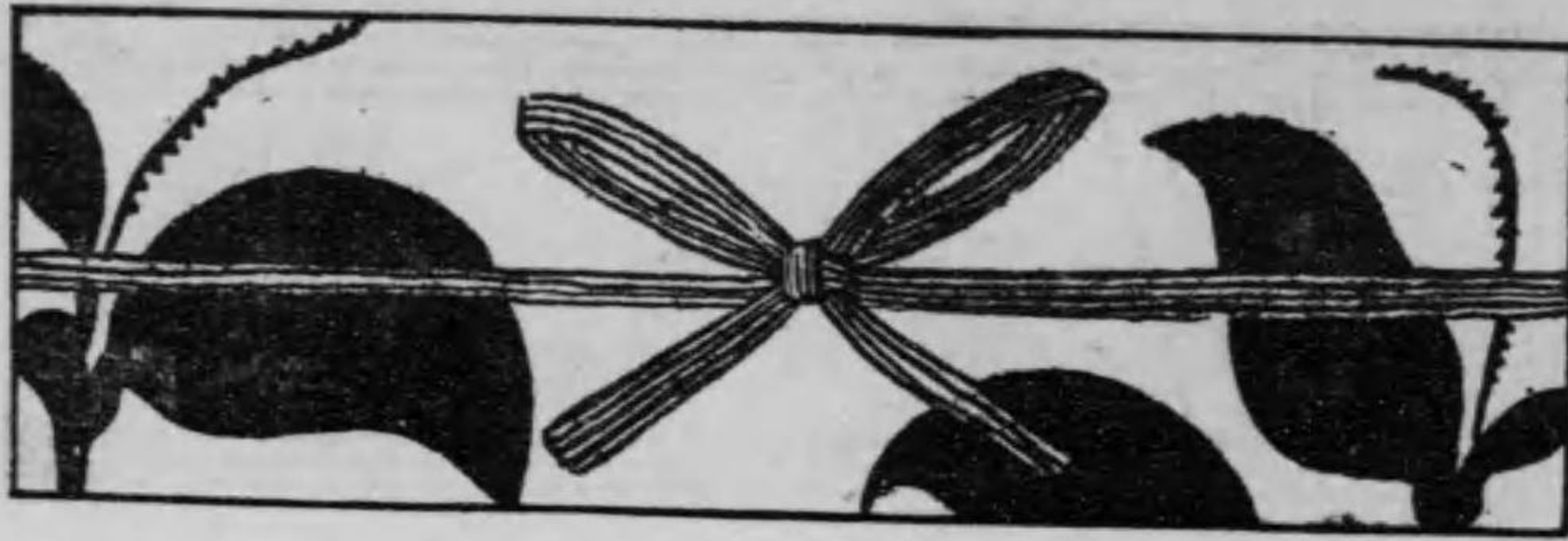
二、舞扇包 色紙、白べにうら、銀紙に色紙がさねにて、水引金銀にて結ぶべし。
花結つくる事もあり。

第二百二十圖 まひあふぎ包

△をりあがり

○これも花やかなる包かたに飾るべし。

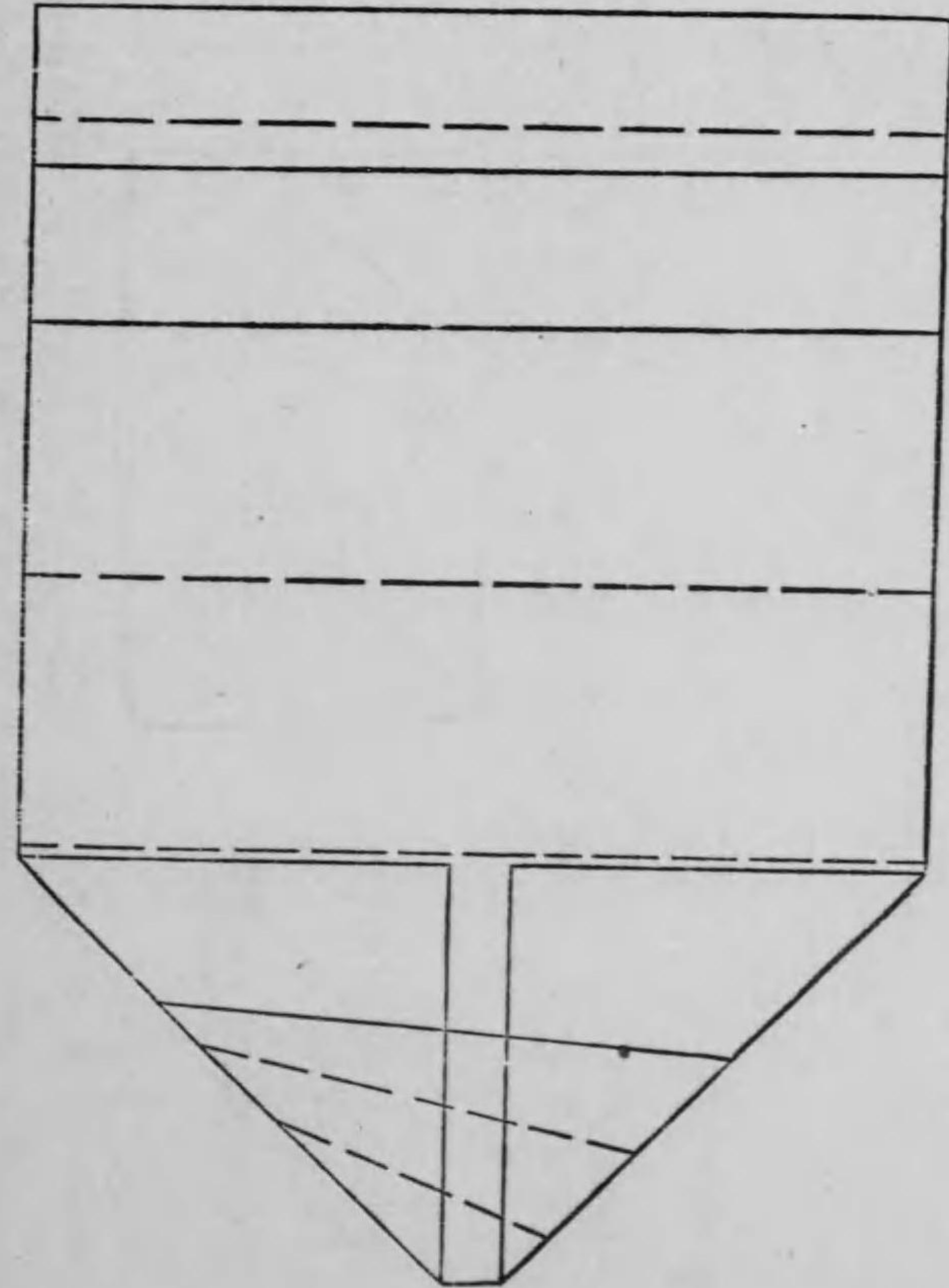


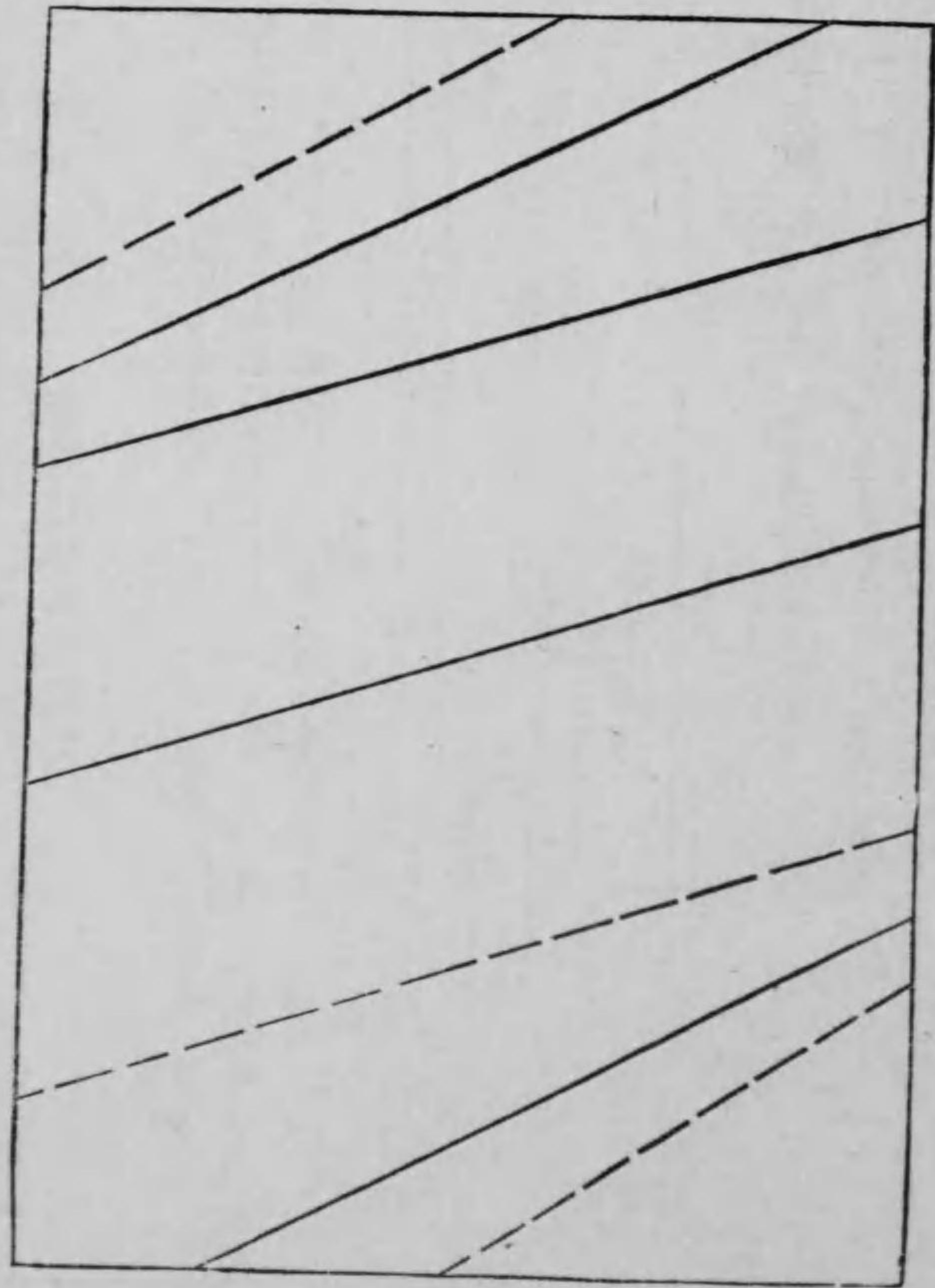
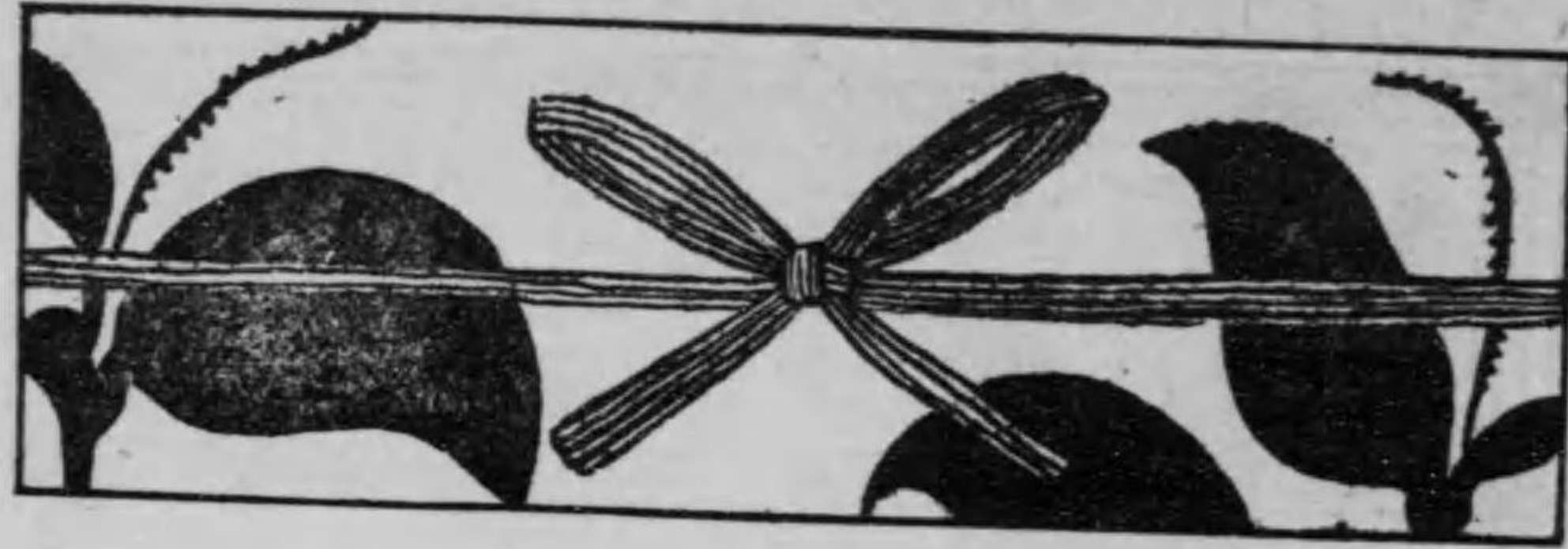


三、琴柱琴絲琴瓜包 これも色奉書がさねよし、水引金銀、琴の種類により絹紐にて結ぶこともあるなり。
 第二百二十二圖 ことぢ、こといと、こと瓜包 △折やうかた紙

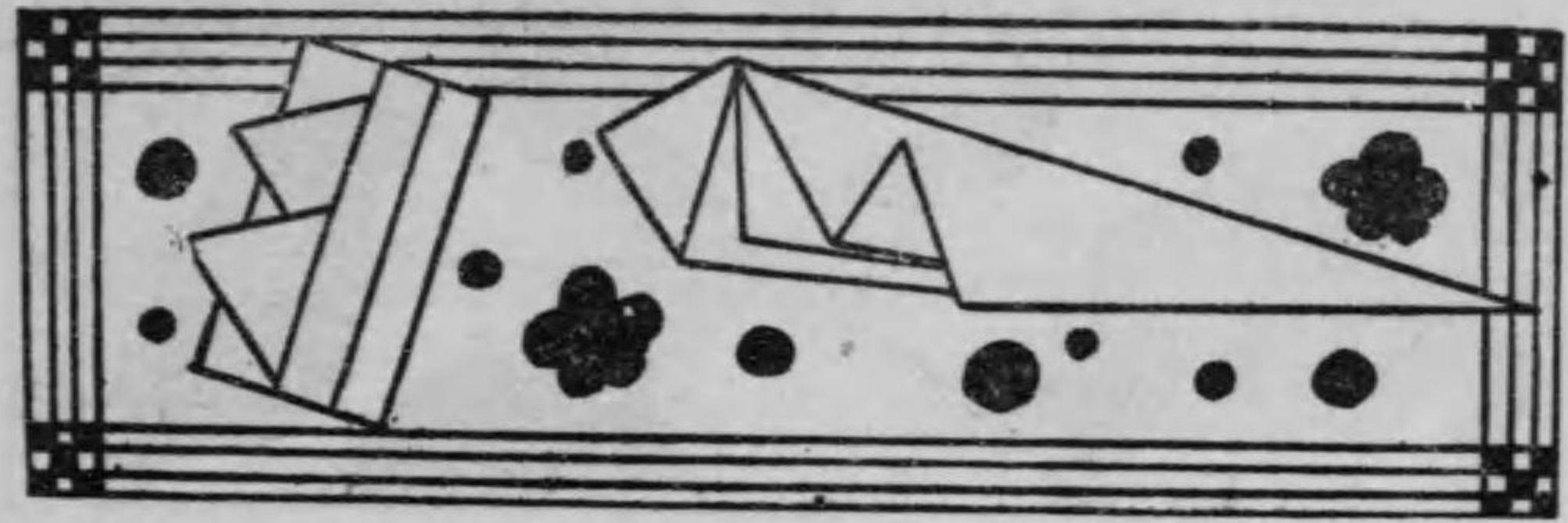


第二百二十一圖 まひあふぎづゝみ △折様かたかみ





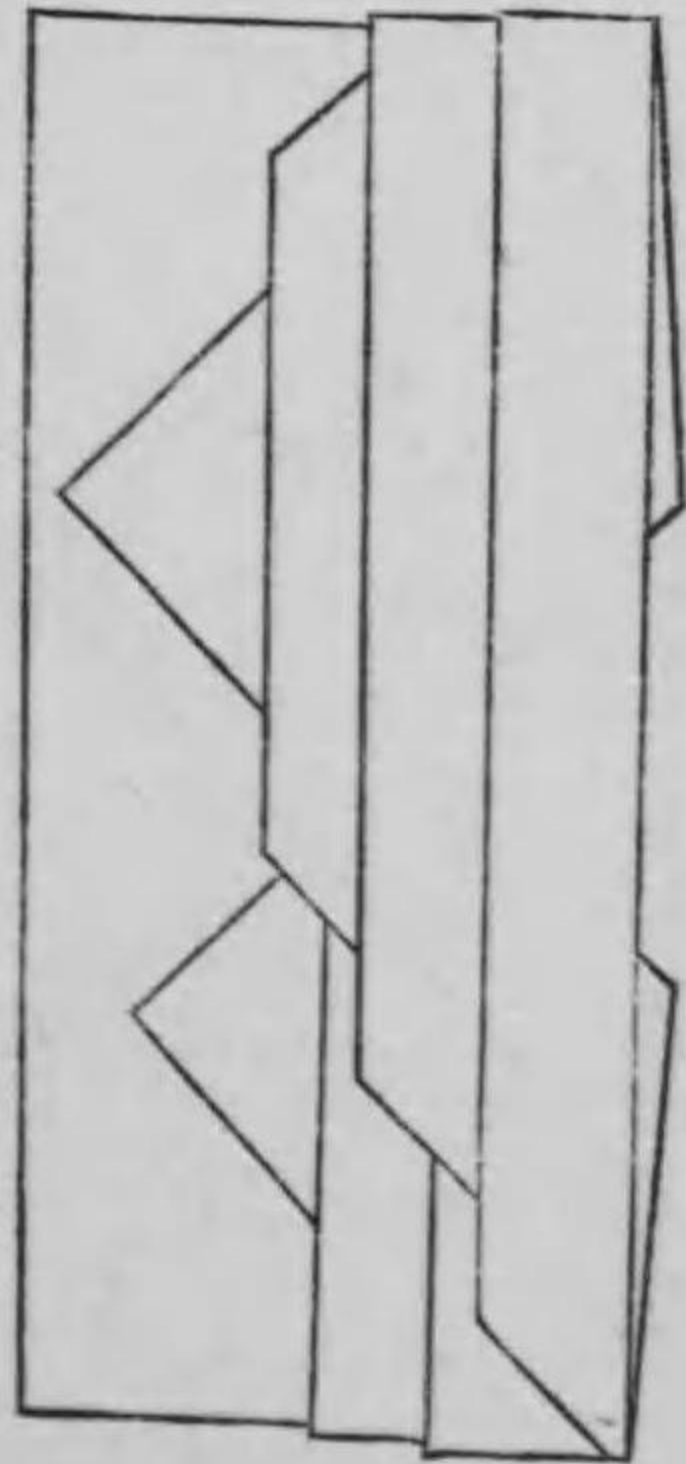
第二百二十五圖 さみせんのはち、こま包 △をりやう



第二百二十三圖

琴柱、こと糸、ことの爪包

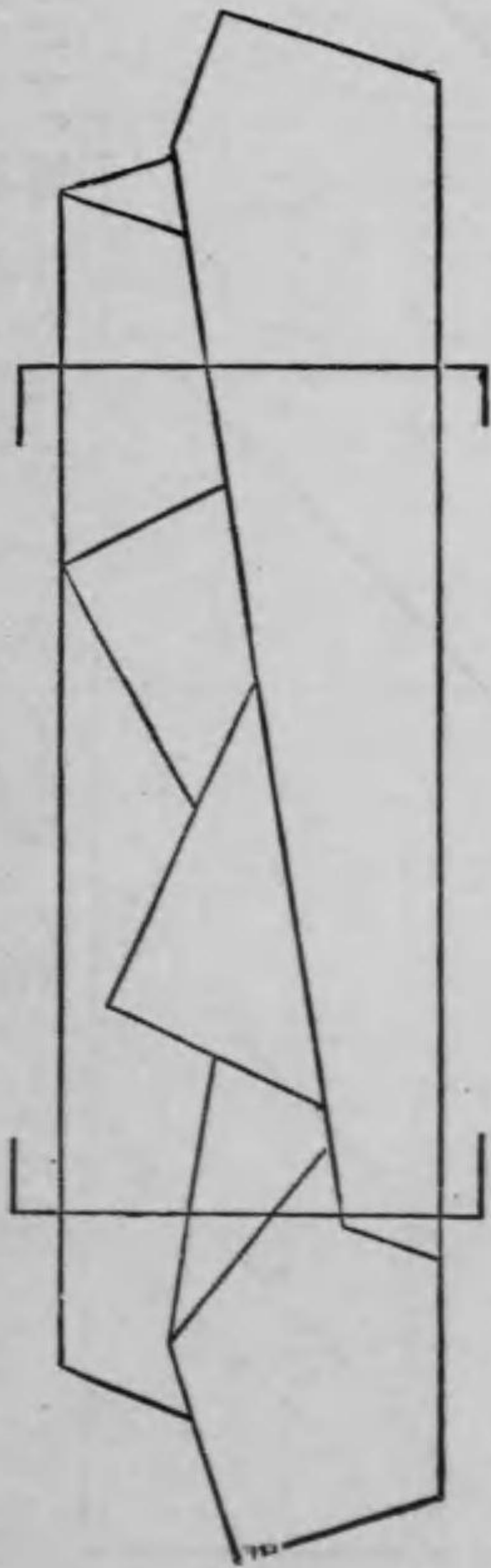
△をりあがり

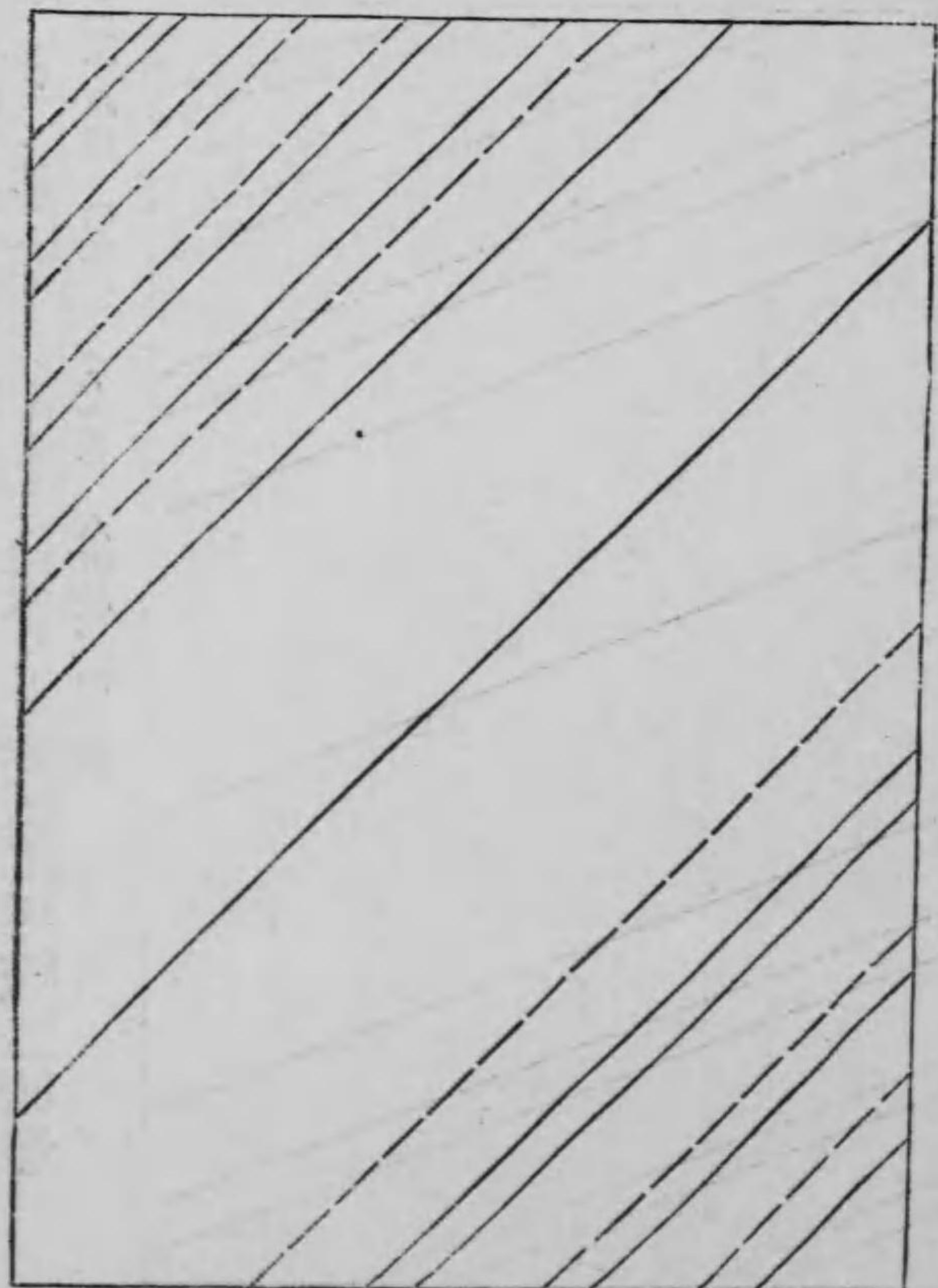


四、三味線撥駒糸包 これは白にべにうら、白に水色のうらの奉書がさねにて包むべし。又模様ある厚紙にてもよろし、右二種書付水引あり。

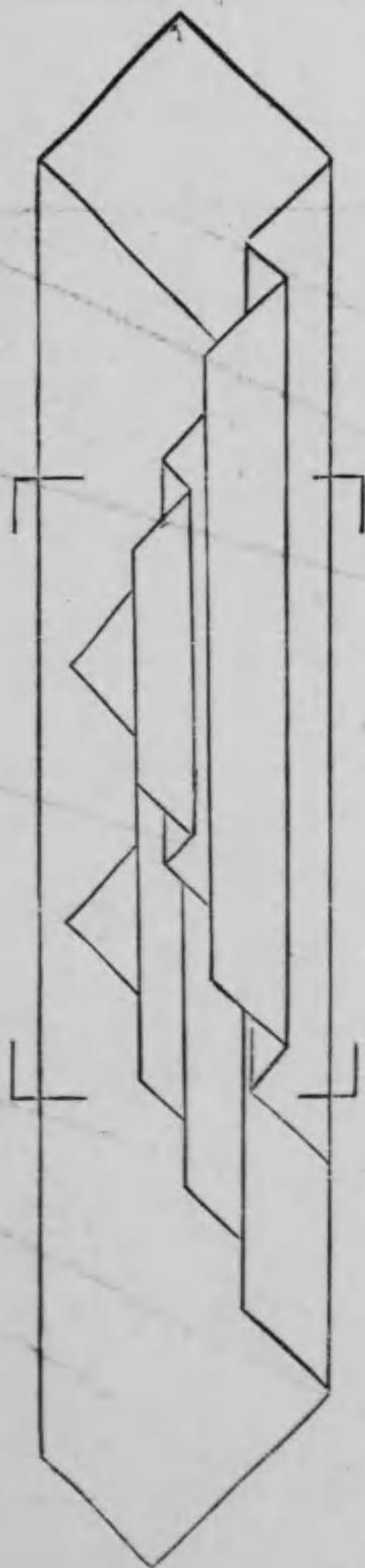
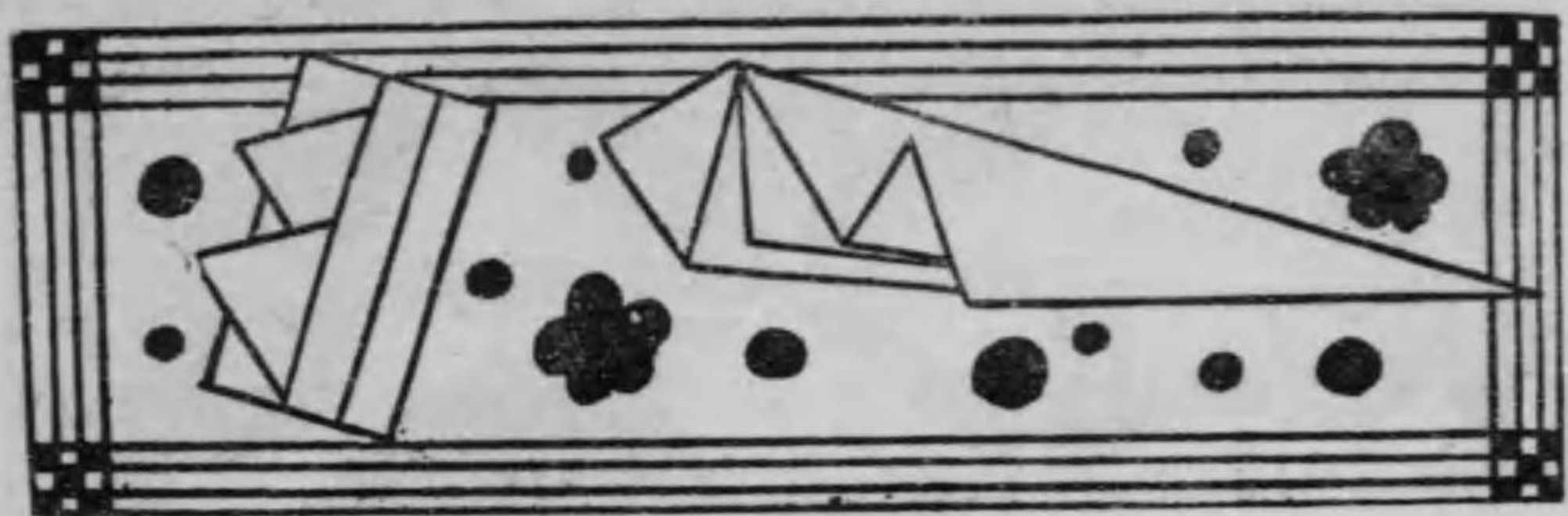
第二百二十四圖

さみせんのはち、こま包 △をりあがり



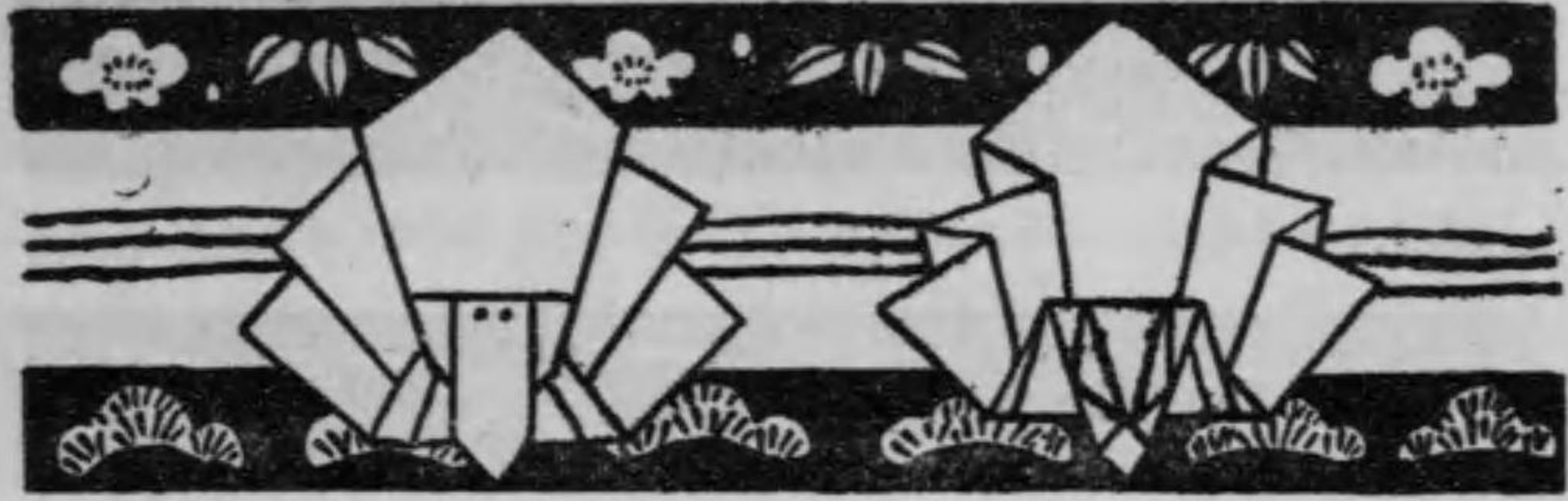


第二百二十七圖 香づゝみ (甲の形) △をりやうかた紙

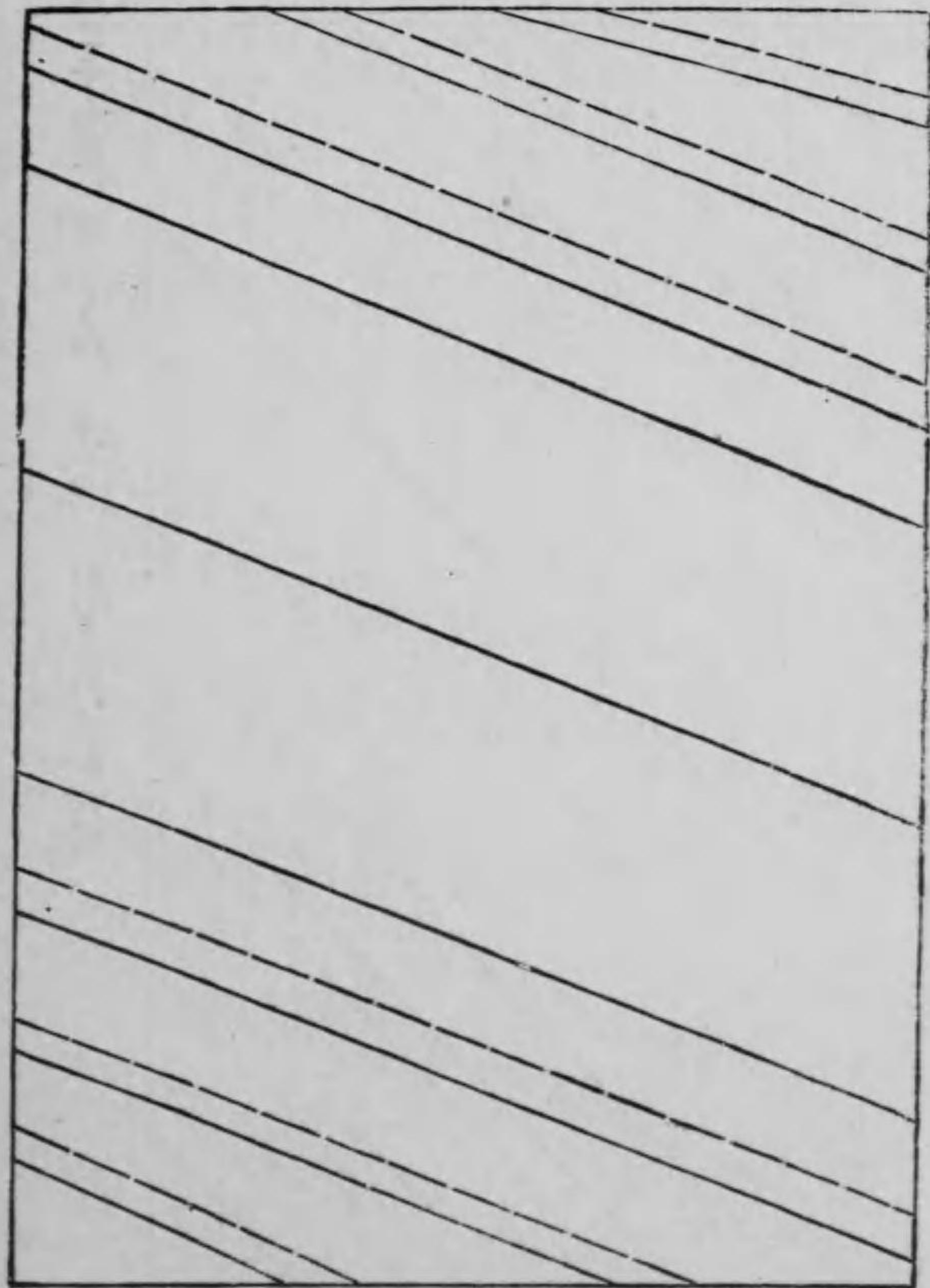


第二百二十六圖 香づゝみ (甲の形) △をりあがり
「」しるしの所 上下ともうらへをりてよし。

一、香包 (甲) 沈箱に入る時は、水引をかけず、進物にする時は、水引をかくるなり、紙は檀紙がさね、檀紙に色奉書をかさねてもよし、水引は白くれなぬ、細結もろわなにもする、又銀水引にも、書付は香の名稱をかくべし。

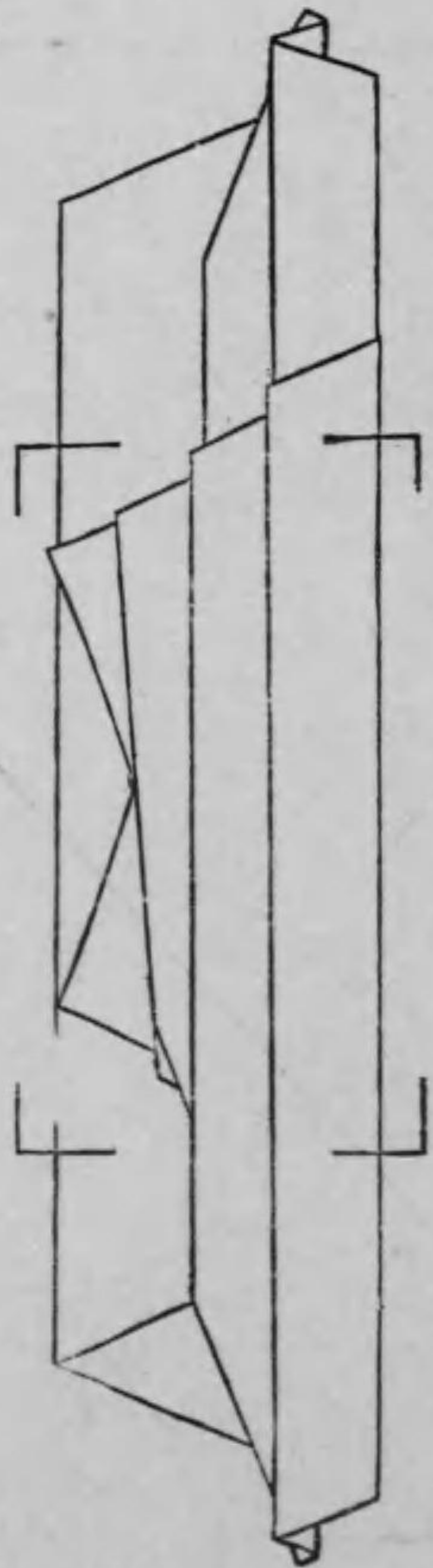


小笠原流折形
 二、同 (乙) 右に同じ、これは次の折形なり。廣奉書に白紅の水引也。
 第二百二十八圖 ○香包 (乙の形) △折様、かた紙



二〇四

第二百二十九圖 香包 (乙の形) △をりあがり

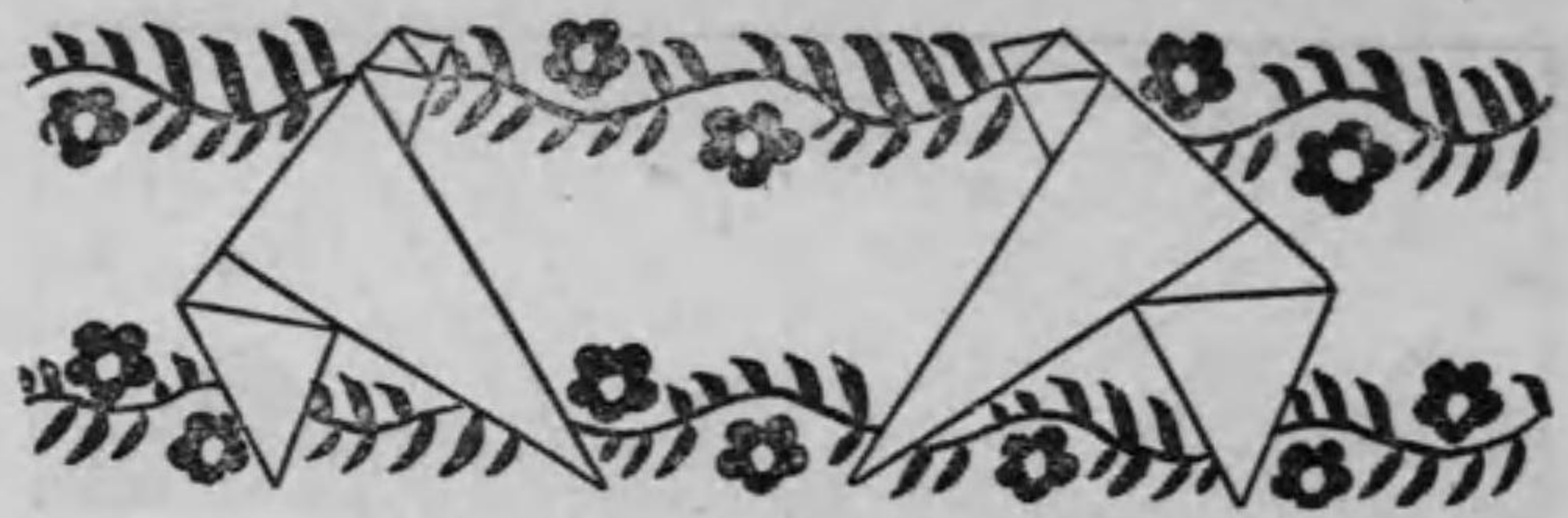


三、同 (丙) 右に同じ、これは次の次の折形なり、中奉書に紅白水引。

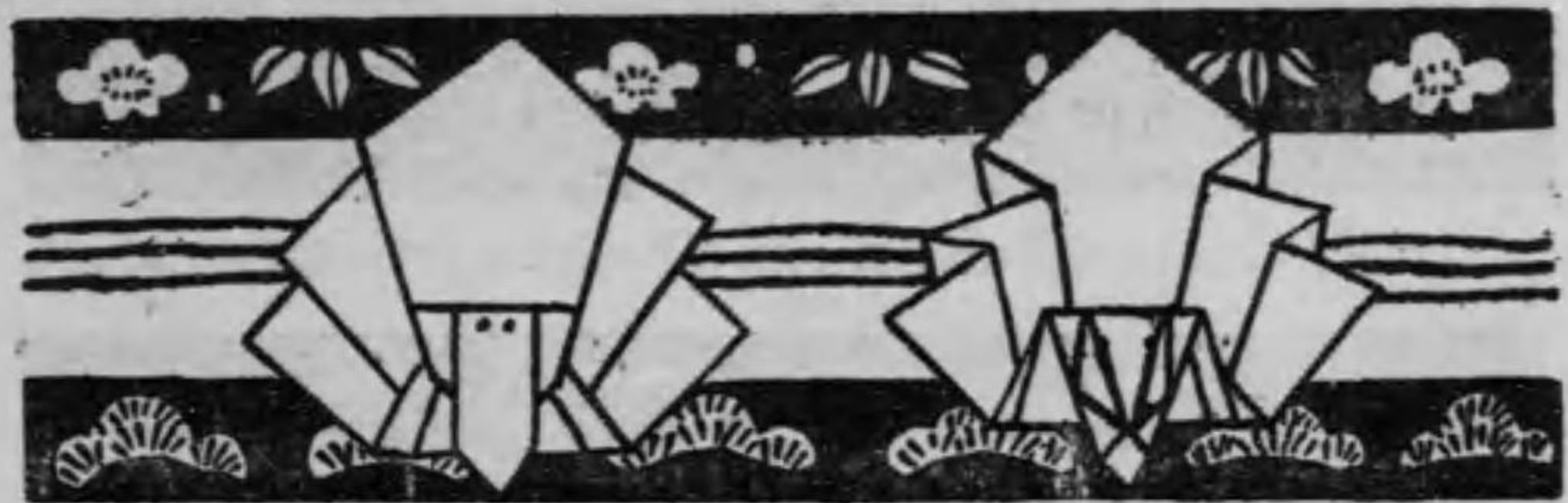
第二百三十圖 かうづゝみ (丙の形)

△をりあがり
 ○上下うらへをりたり





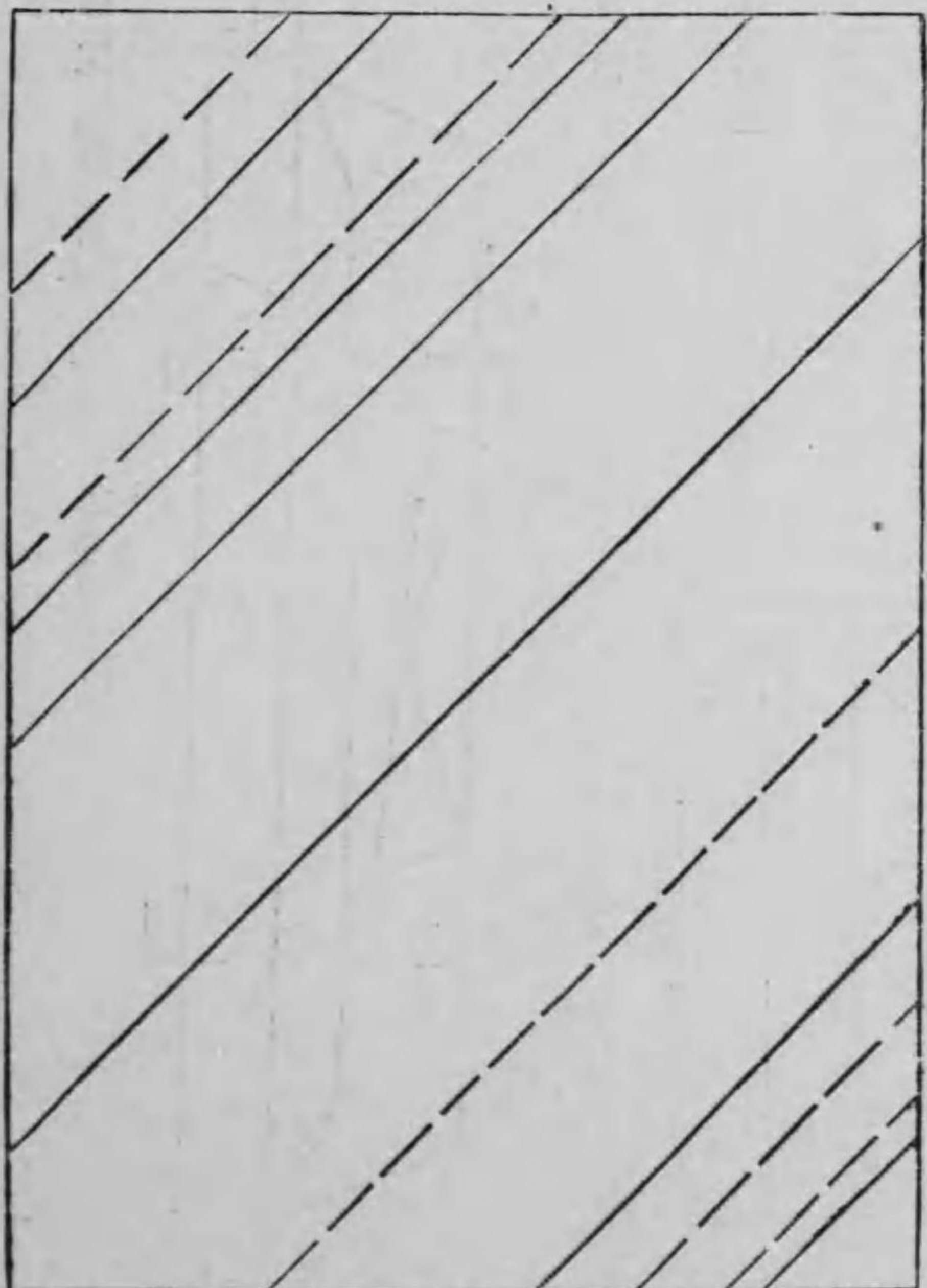
右三種の香包は、尋常の包方なり、香の遊のかたの教へにつきたる、香包には、古
 十組、中古十組、新十組の三十組、それ々の小包、十組づゝの惣色の包方あり。
 古十組の惣包小包には表絹地金散し極彩色、裏布目金なり、小包表金裏銀の重ね
 なり、中古十組の惣包小包には表銀散絹地彩色繪なり、裏無地金なり、小包表銀裏
 紅なり、新十組の惣包小包には表絹地無地銀彩色繪なり、裏無地銀なり、小包白紙
 裏重紅なり、小包の繪様それ々の香によりてるがきなしたり、花月香の櫻月の繪、
 宇治山香に宇治山川景色、舞樂香に樂器の繪、花軍香に梅櫻の繪、古今香に流水散
 花などの彩色繪をあらはし、折形もさまざまことなれり、この折方は、香の教への
 方につきての他の包物の折力と共に數多ければ、別にとて、まじへしるさず、すべ
 ての包物の心入として、香の彩色繪のつかい方をもまなびて、いろゝの繪様を、
 上品の進物の包紙にゑがくもよろしきなり。

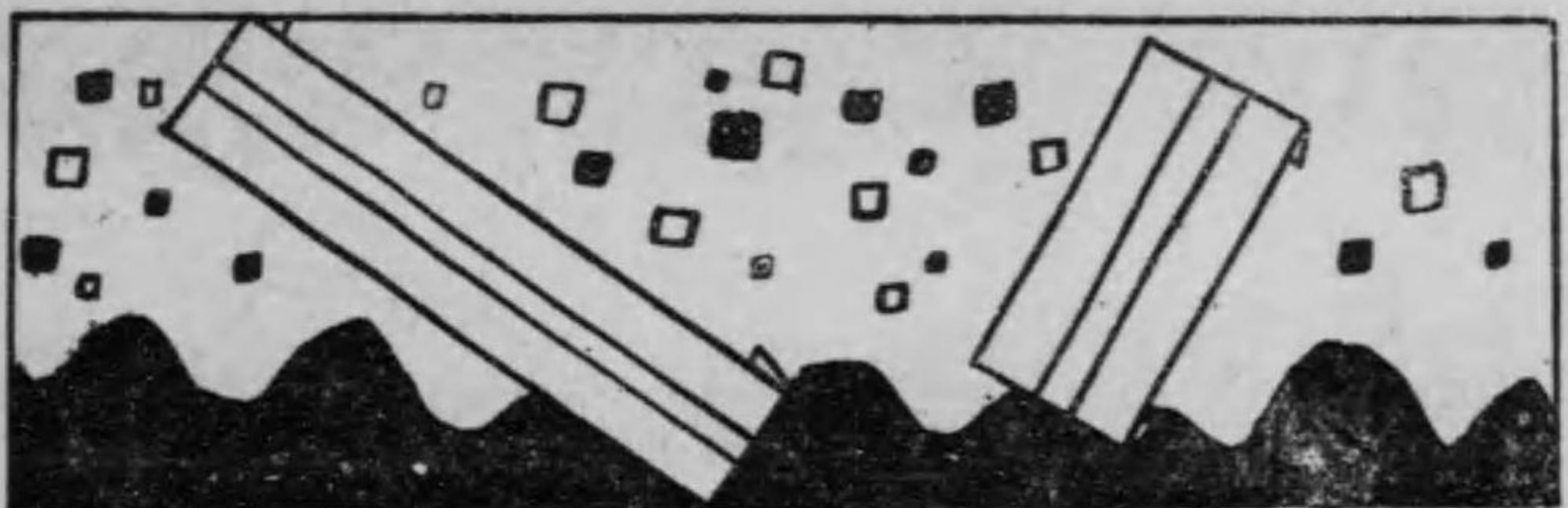


第二百三十一圖 かうづゝみ (丙の形) △をりやう。かた紙

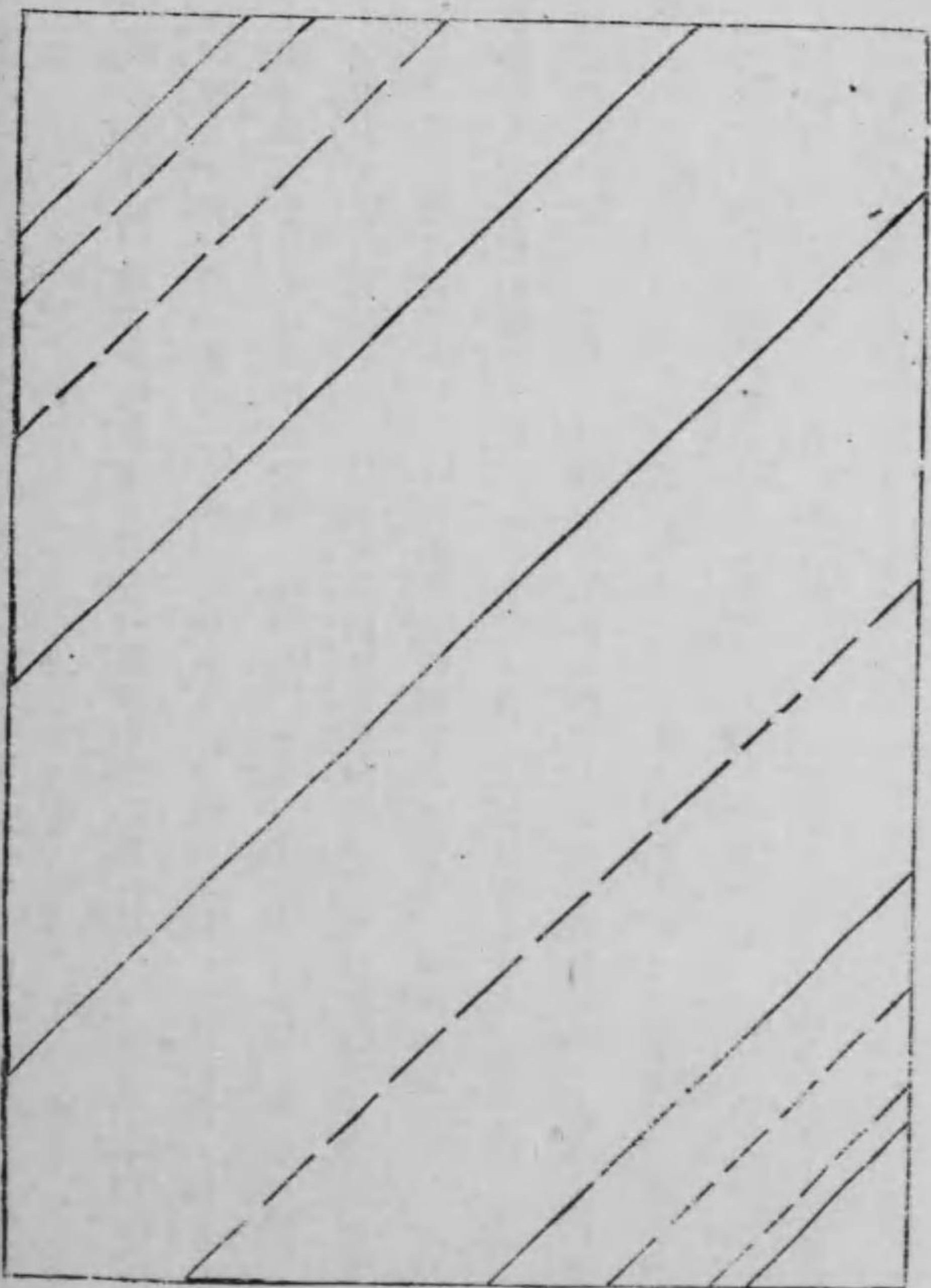
小笠原流折形

1104



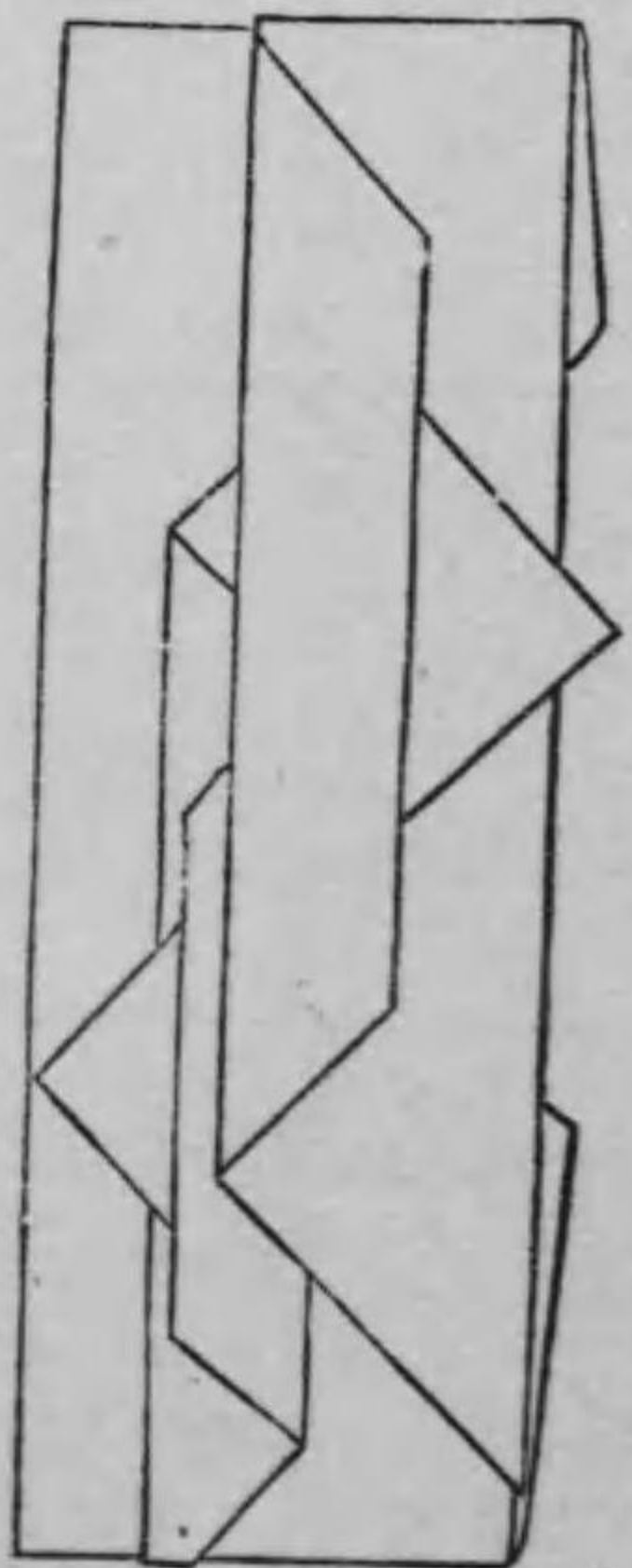


小笠原流折形
 二〇八
 四、茶杓、茶七包、これはすくふ方を上にむけて包むなり、白紙かさね。
 第二百三十二圖 ○茶しやく ○茶さじ包 △をりやうかた紙



第二百三十三圖

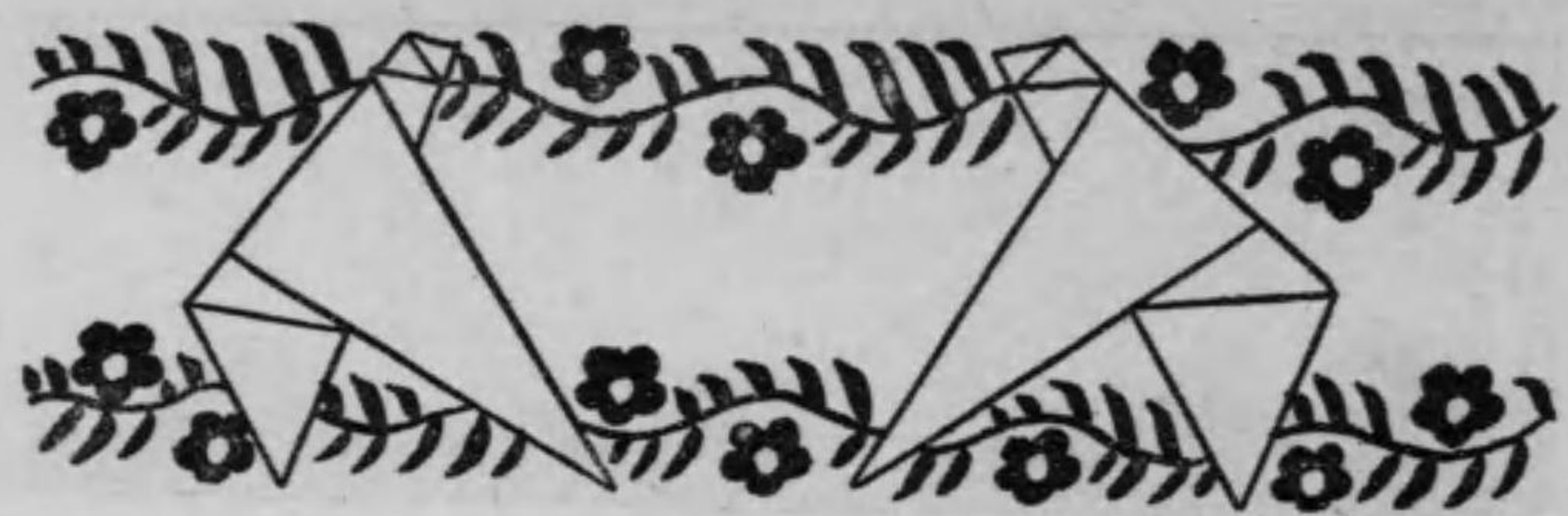
○茶しやく、茶さじ包
 △をりあがり

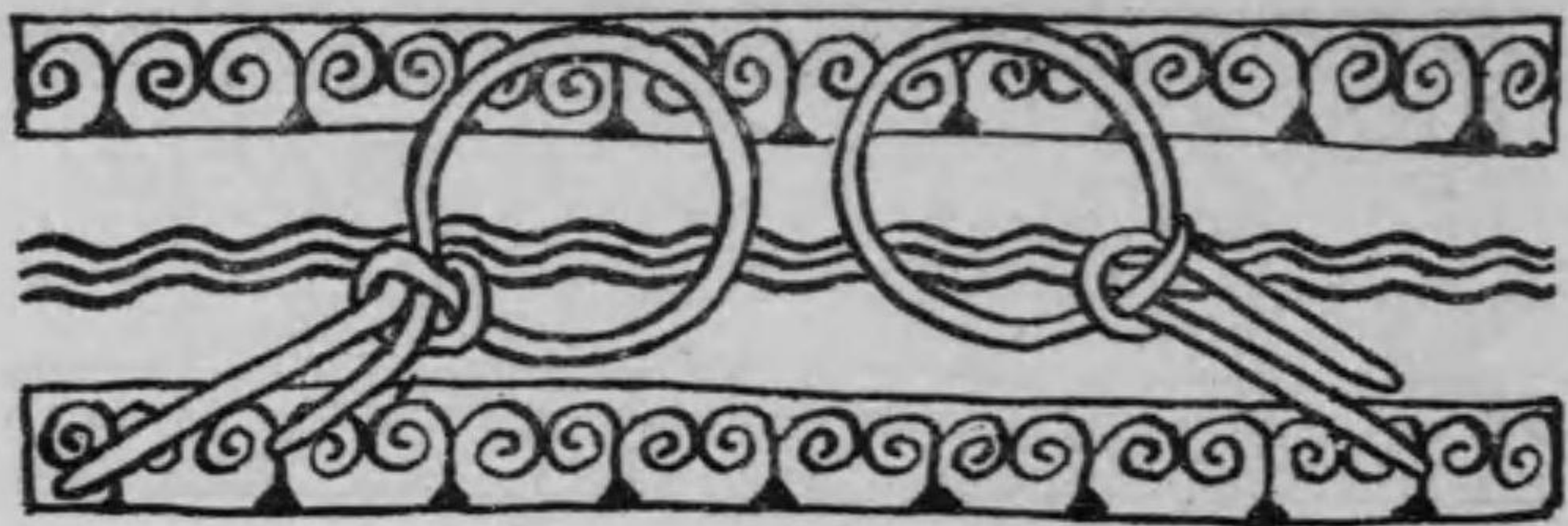


五、服紗茶巾手巾包、これも白紙がさねなるべし、花美たらぬがよし。

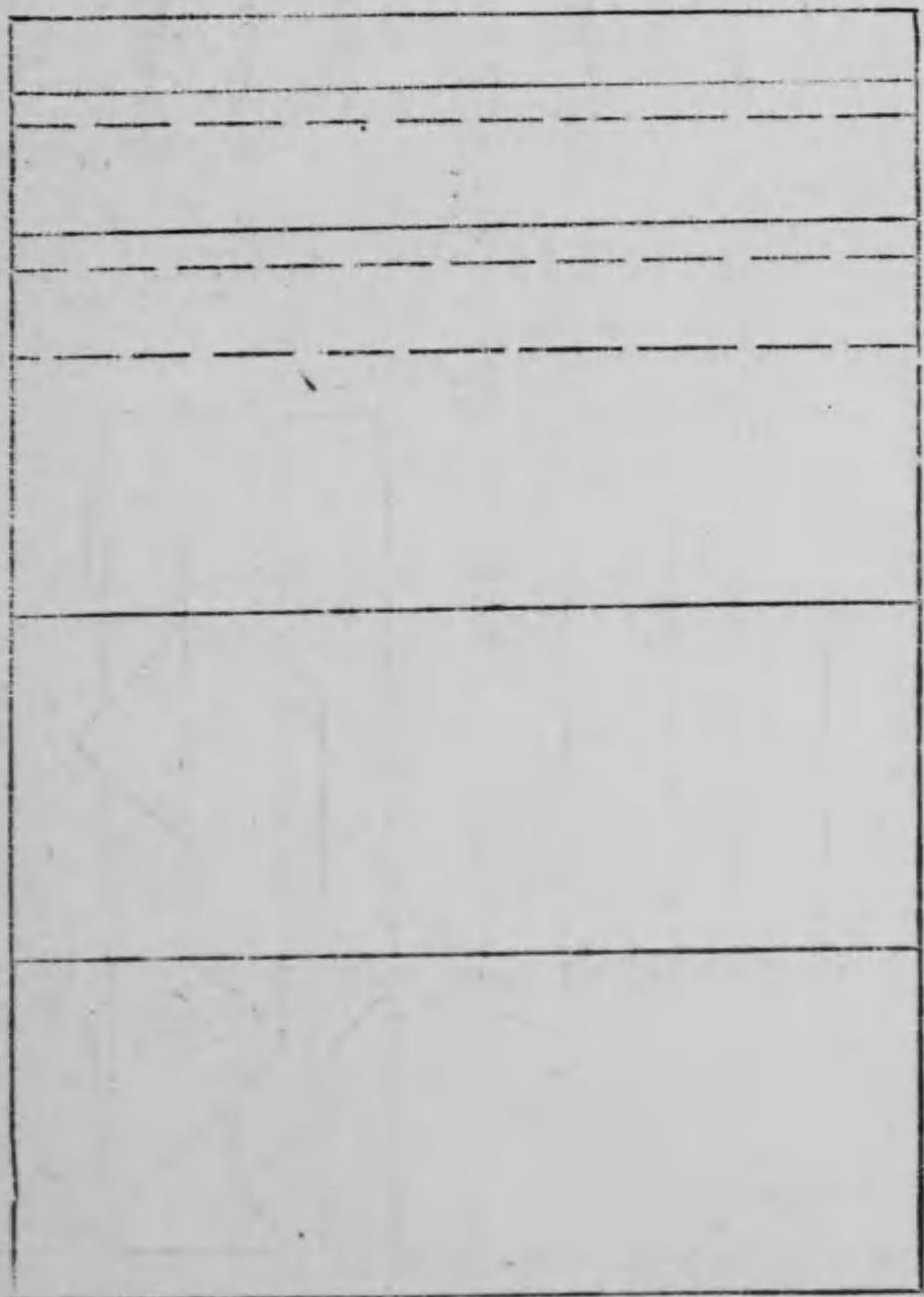
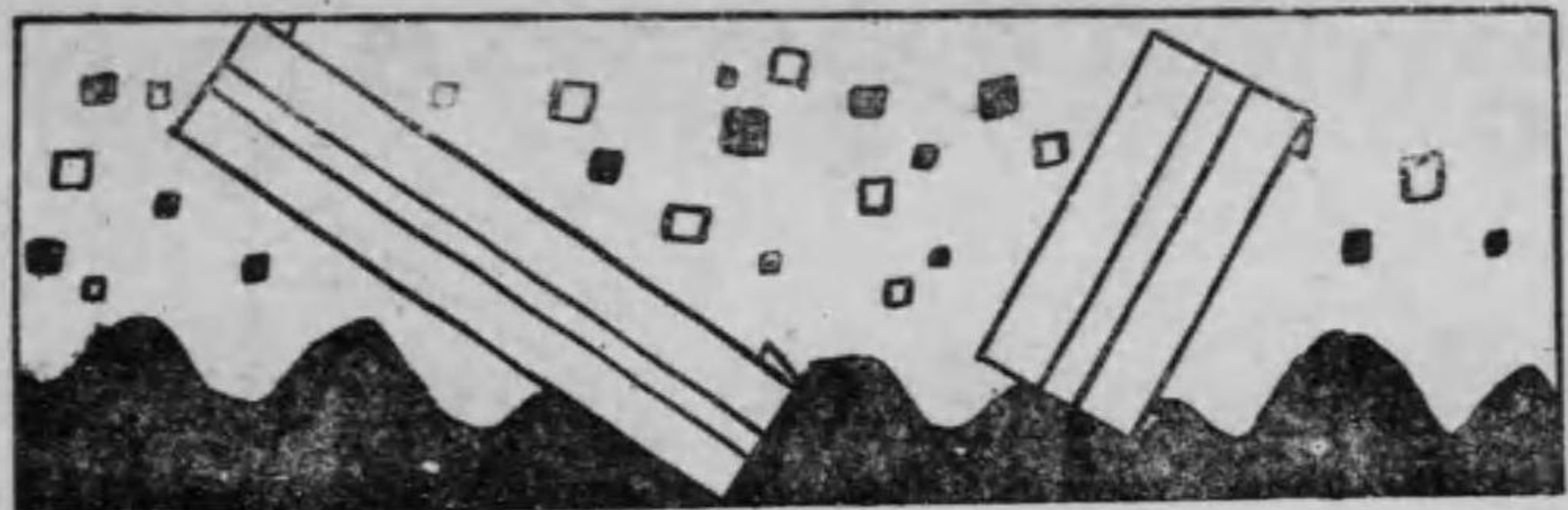
第二百三十四圖

○ふくさ
 ○ちやきん
 ○てぬぐひづゝみ
 △をりあがり



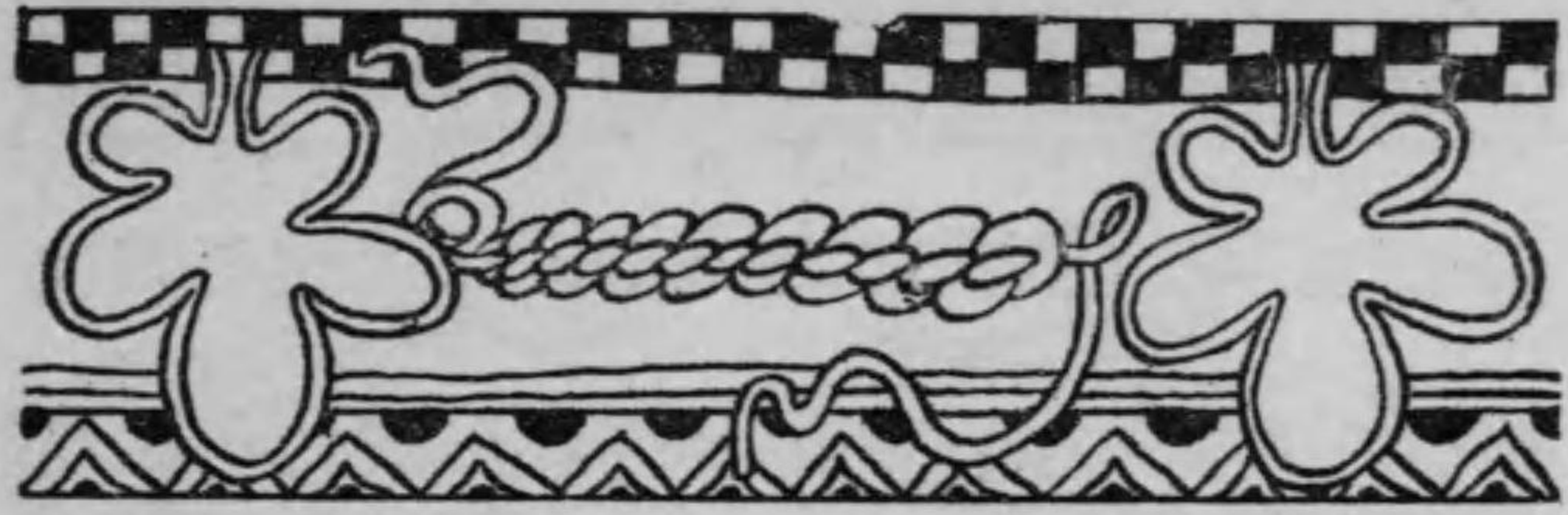


六、木の花包 (甲) 折形の内に花のもとを下結してとめ、合せて水引かくるなり、紙は色紙にても、白紙にても、水引白くれなる、もろわな、細結にもする、此折形いろく、花の遊びのこをしふる人々の方にあるなり、其種類は、福壽草包、梅包、櫻包、桃包、柳包、石竹撫子包、つゝじ包、牡丹芍薬包、百合包、川骨蓮包、菊包、梅もどき包、おもと包、桔梗菫萱女郎花包、紅葉包、蓮花包、葉蘭紫苑包、水仙花包、山茶花つばき包、などなり、この包方のさまを彩色刷にて近年京都より出版の物もあり、花の遊びについての折方なれば、別にとてこゝにまじへず、○折形のもとしすべきは「包の記」の木の花包よろし、この折形もそれによりて折なしたる近世の形ともいふべきものなり。水引古風には「かたわな」に結ぶなり。



第二百三十五圖 ふくさ、茶巾、てぬぐひ包、△折様、かた紙

小笠原流折形



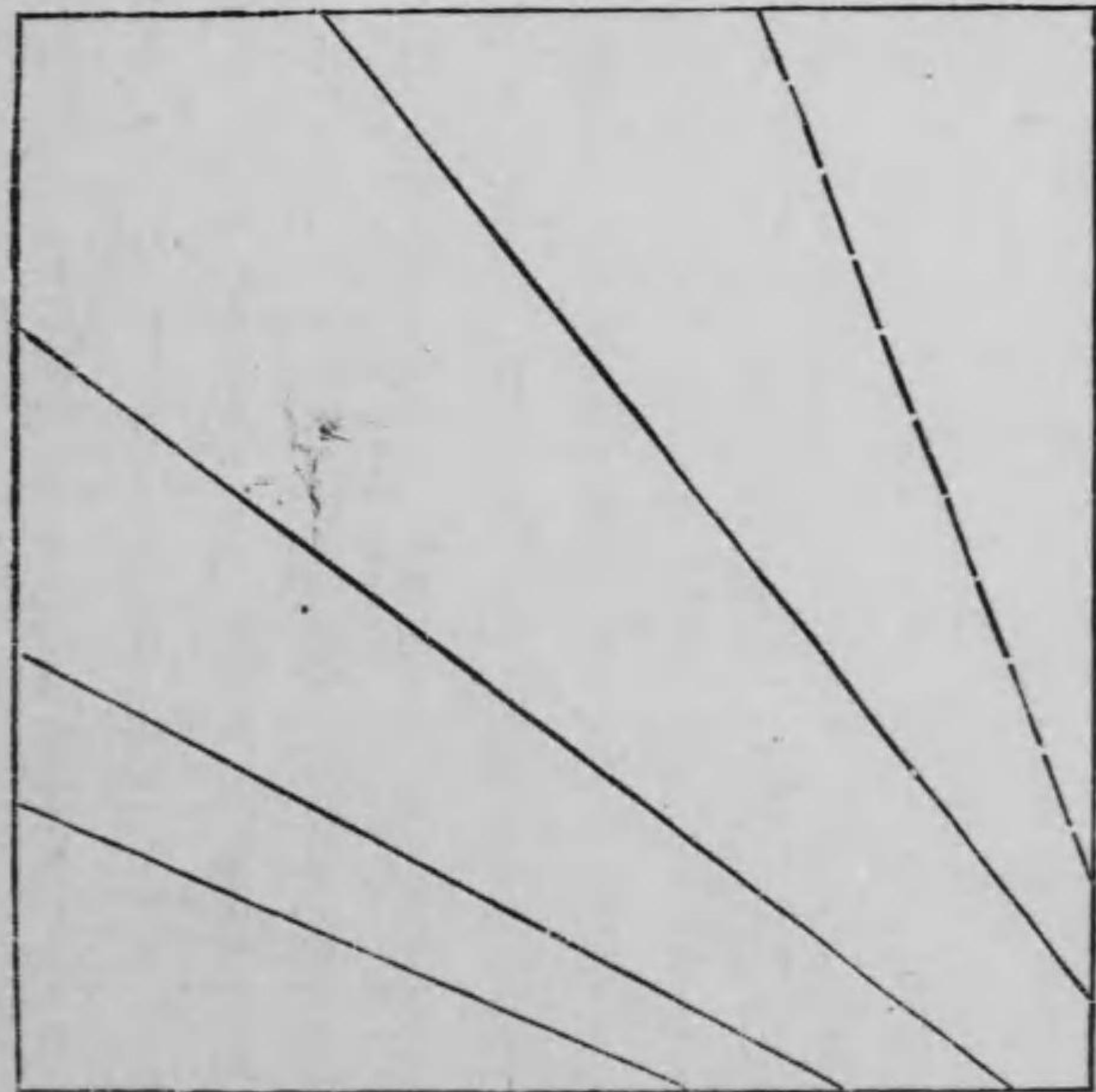
第二百三十六圖

○木の花づゝみ

(甲の形)

△をりやう

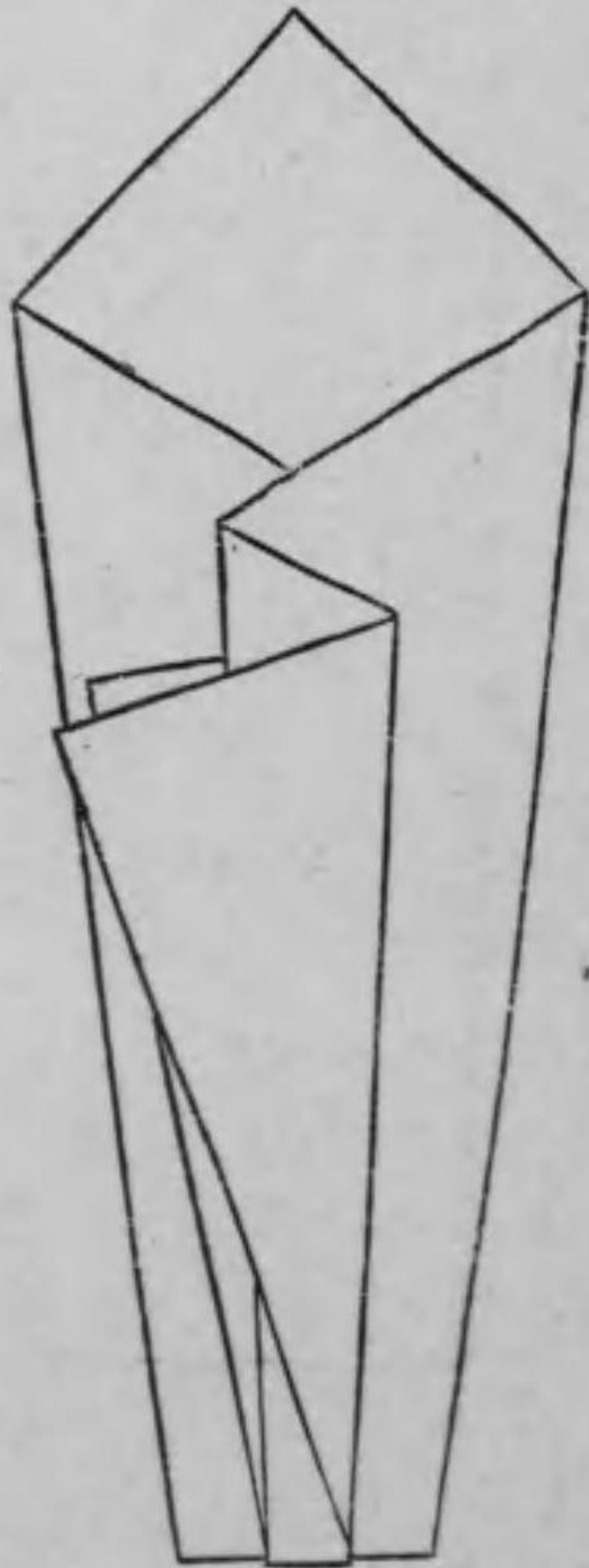
かたがみ



第二百三十七圖

○木の花づゝみ (甲の形)

△折あがり

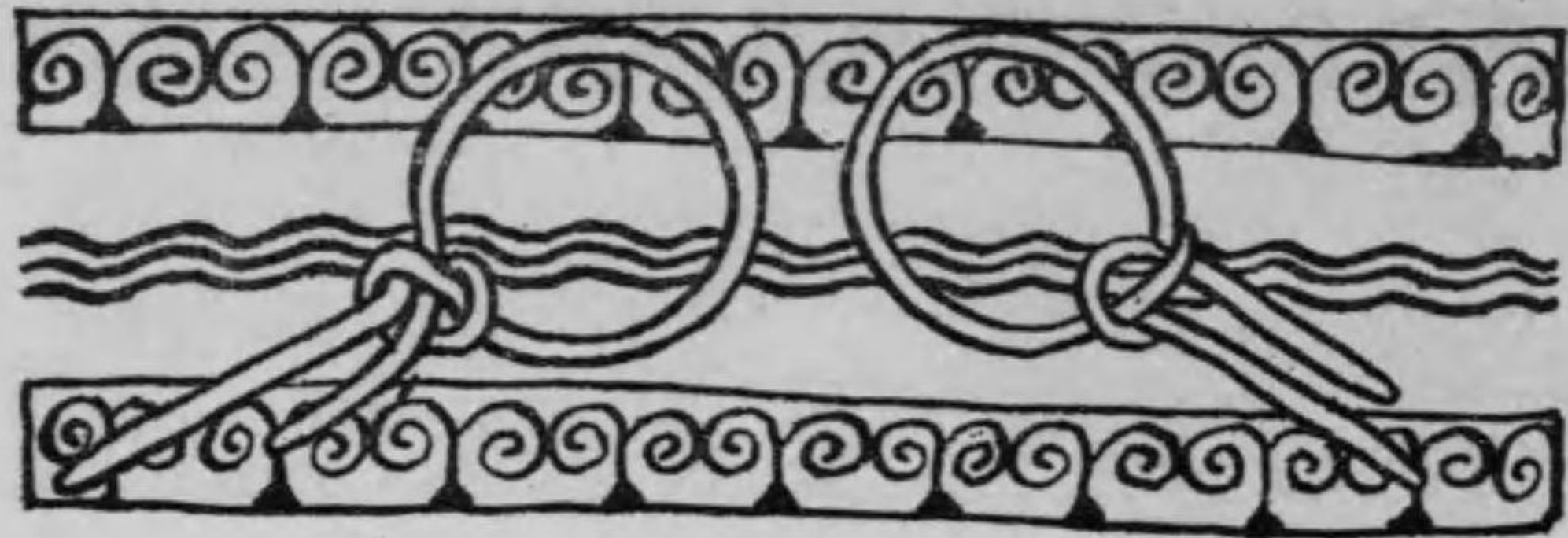
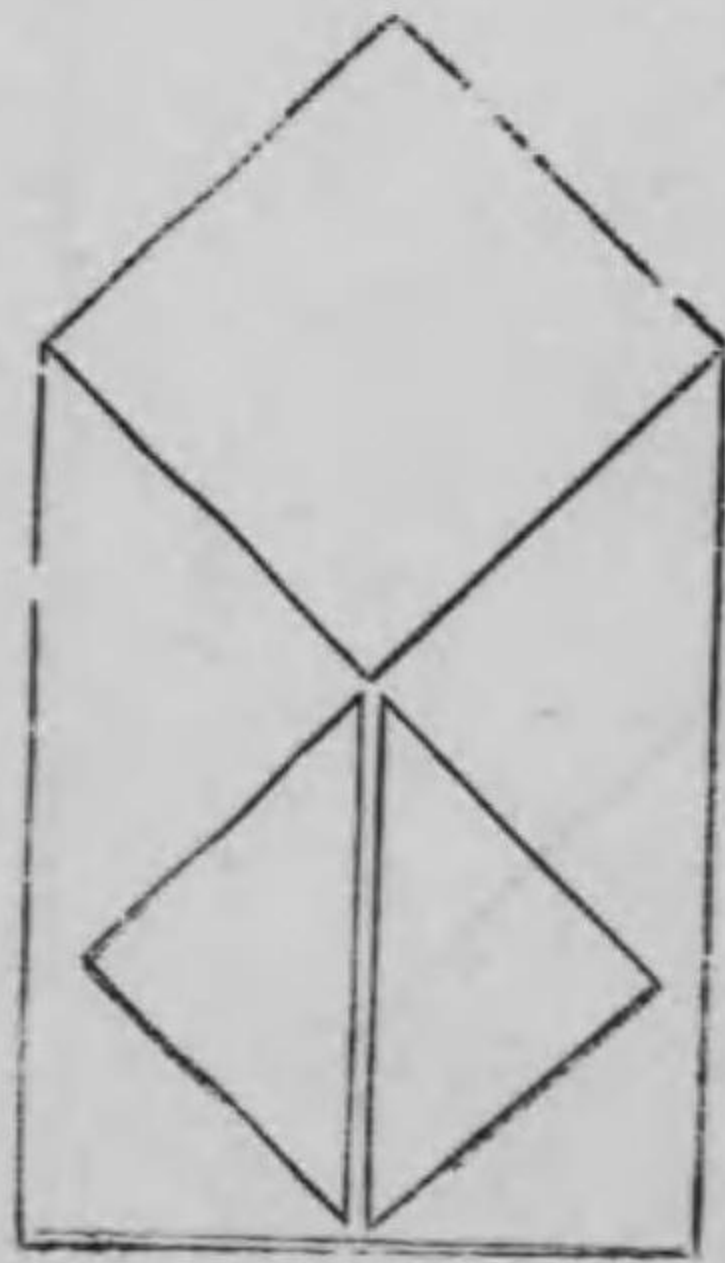


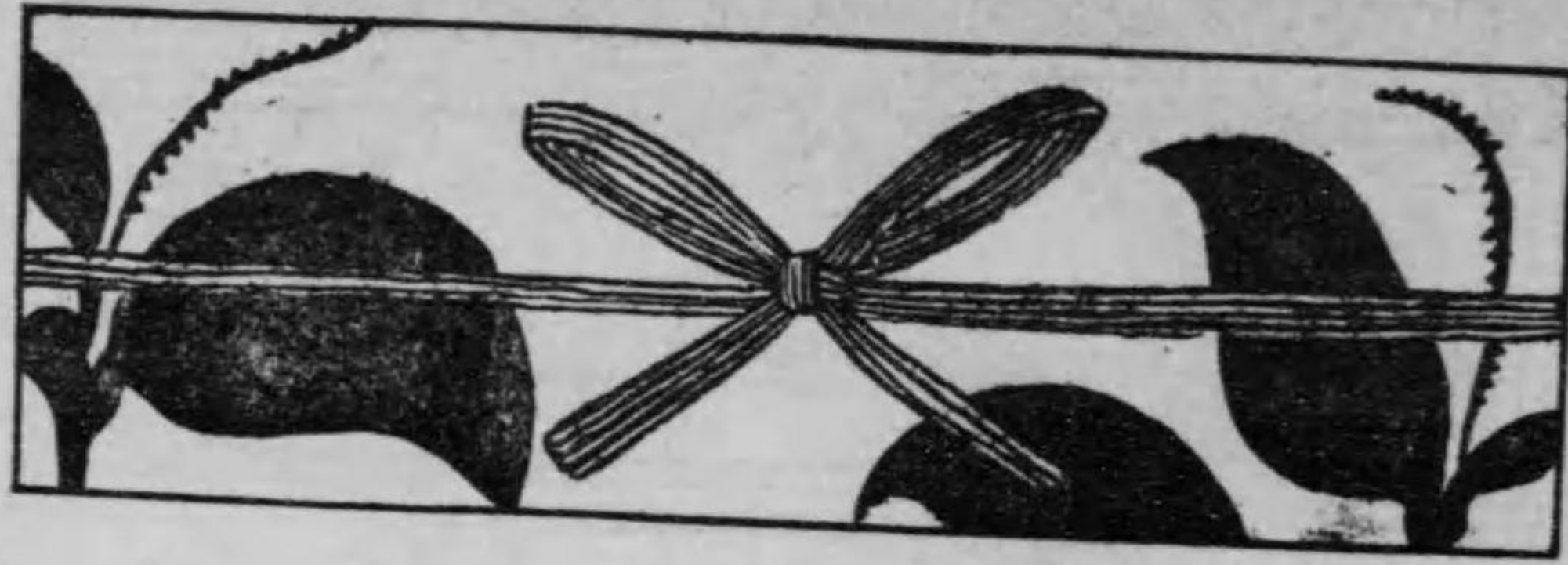
七、同(乙) これも同じ、水引もろわななり、折形の内、見えぬ所にて下どめをして、折形を合せて水引かくるなり、かけやううらより穴をあけて水引を出してもろわなに結ぶ方、しかとしまりてよろし。

第二百三十八圖

○木のはな包 (乙の形)

△をりあがり





第八卷 香茶花類折形圖解



第二百四十圖 木のはな包

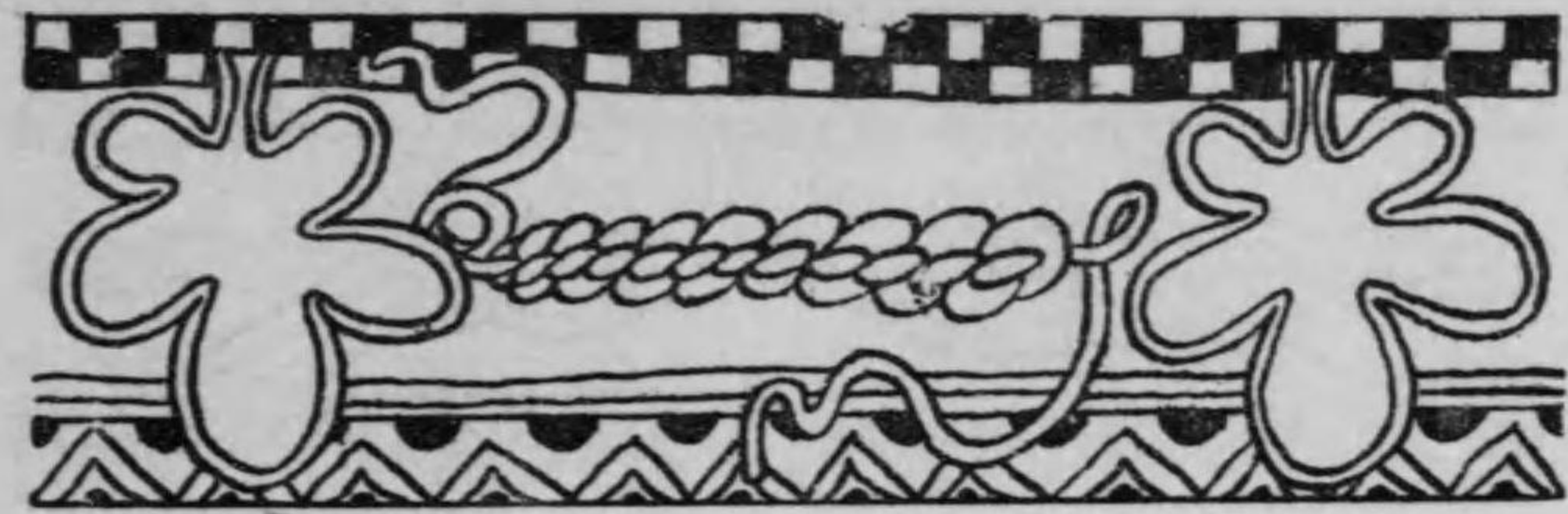
(乙の形) 前の圖を二つに

折りたる所なり。

△點せんと黒せんと

折りやうにて

をりあぐるなり。



小笠原流折形

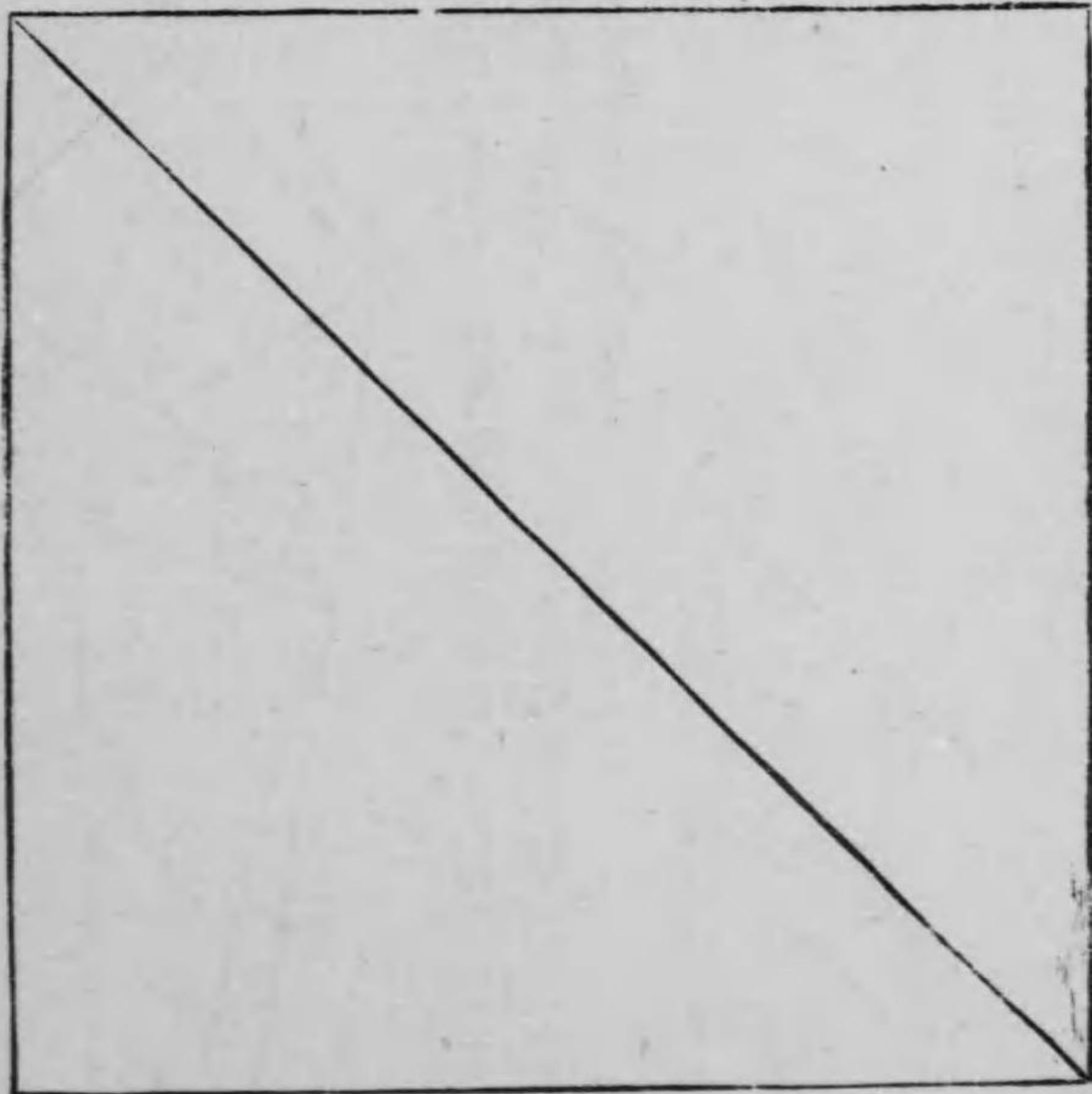
第二百三十九圖

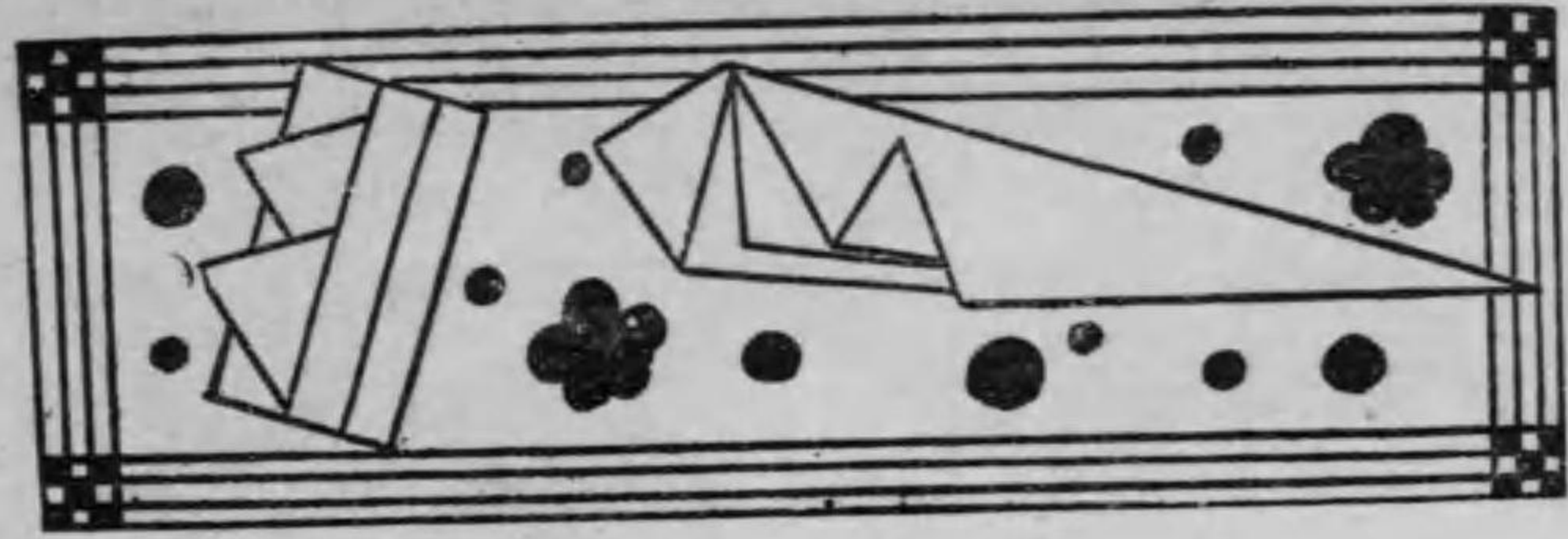
○木のはな包

(乙の形)

△をりはじめ

二つ折り





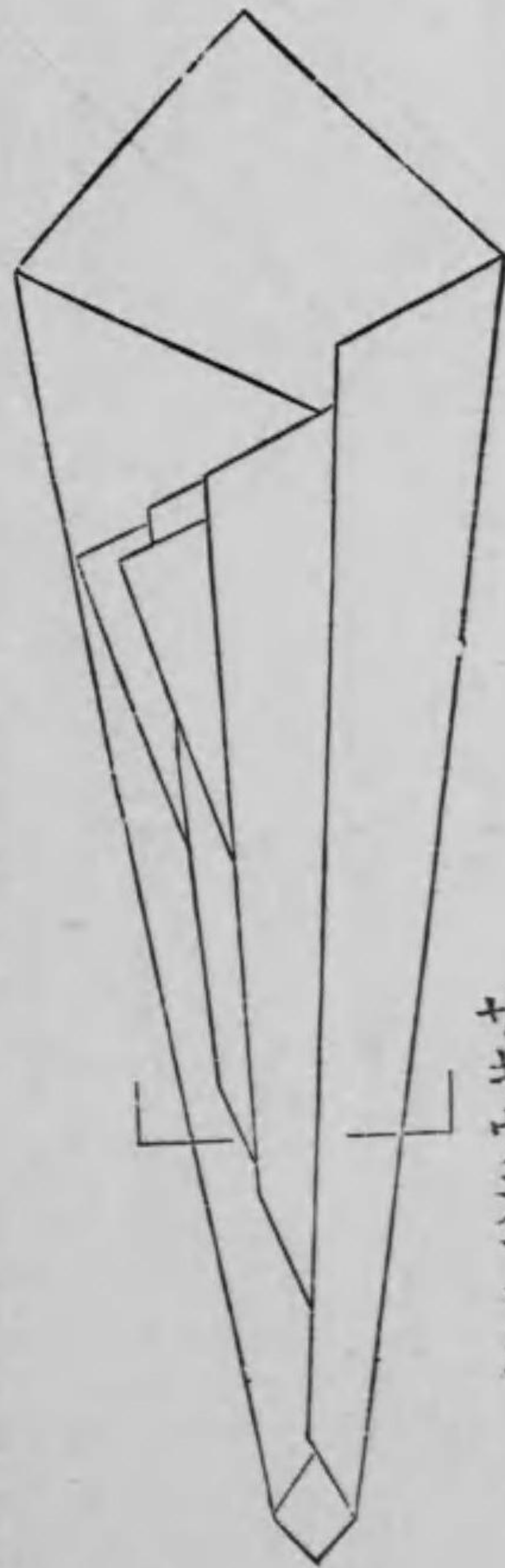
小笠原流折形

八、草花包 白がさね金銀水引にて結ぶことあり、又色紙にてすることもよろし、花の色によりて、かねあひよき色紙をつかふべし、又かさねの紙を花に合してつかふこともあり、水引花結つくることもあるべし。

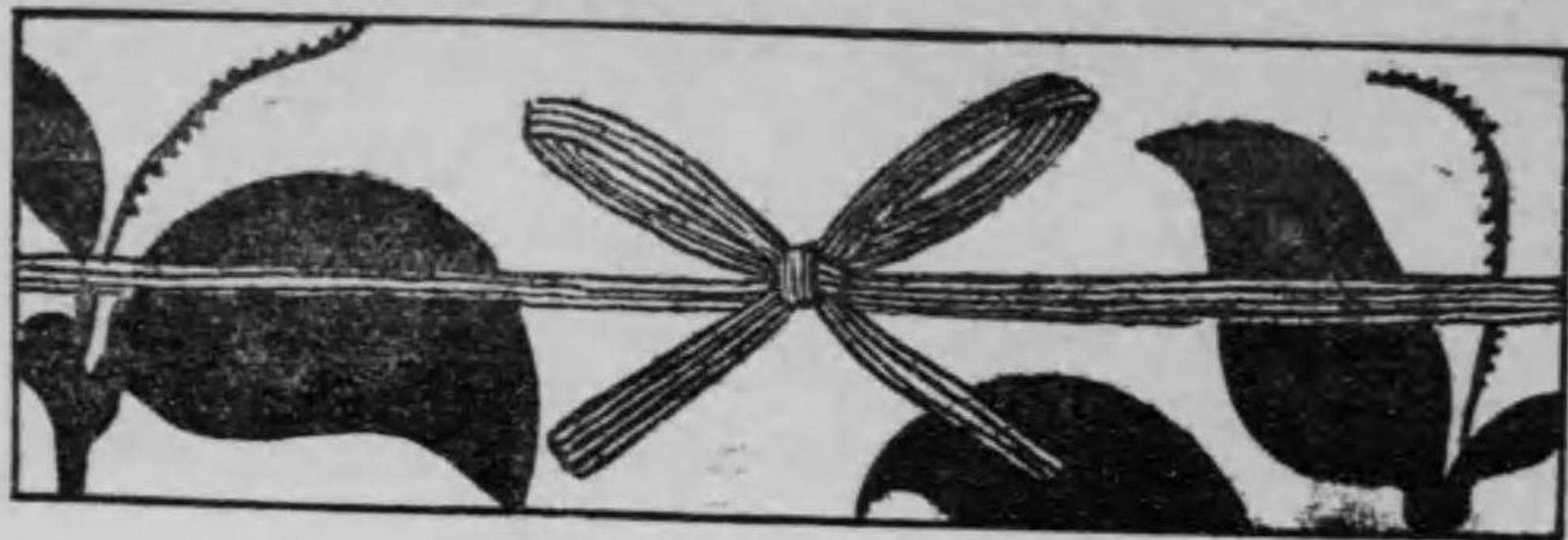
第二百四十一圖

くさばな包 △をりあがり

サキウラヘヲル



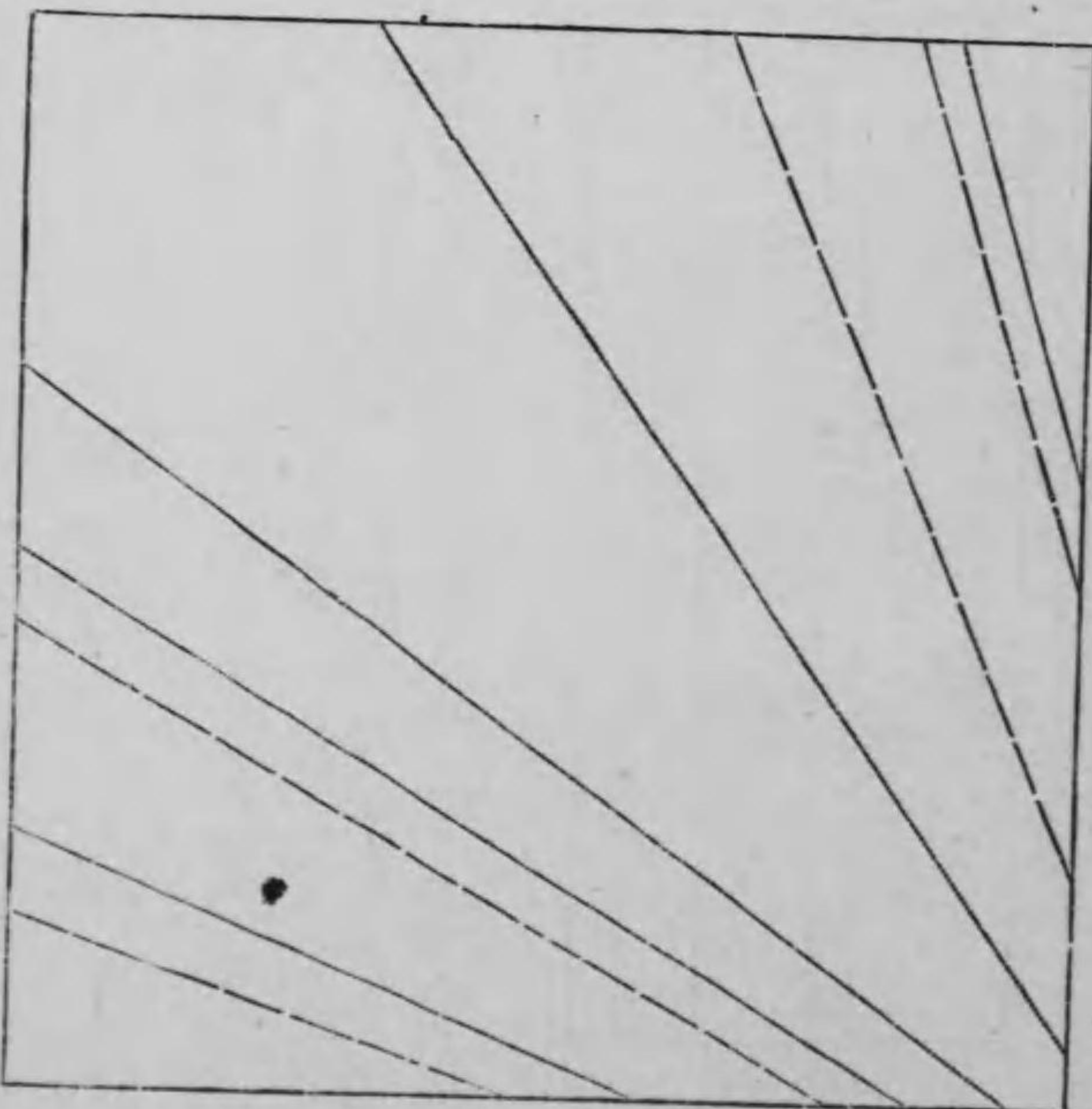
○また歳事の部にもいひたるごとく、木の花も草花も進物にそふる時の包形には、造花をおもにつかふべし、○形のことなれる折櫃の上にそへて贈る時、又烏臺白木臺



第二百四十二圖

草花包 △折様、いたかみ

へ進物をのせて飾るをりに、造花を包みて添る事つねの事なり、是の造り花は京都製のもの吉、實物寫生の物は見おとりするもの也、造花の飾につかふ花は、つくりものらしくして上品に出来たる花よろし、寫生ぶりて下品なるはよろしからず。



第九卷 雑用類折形圖解

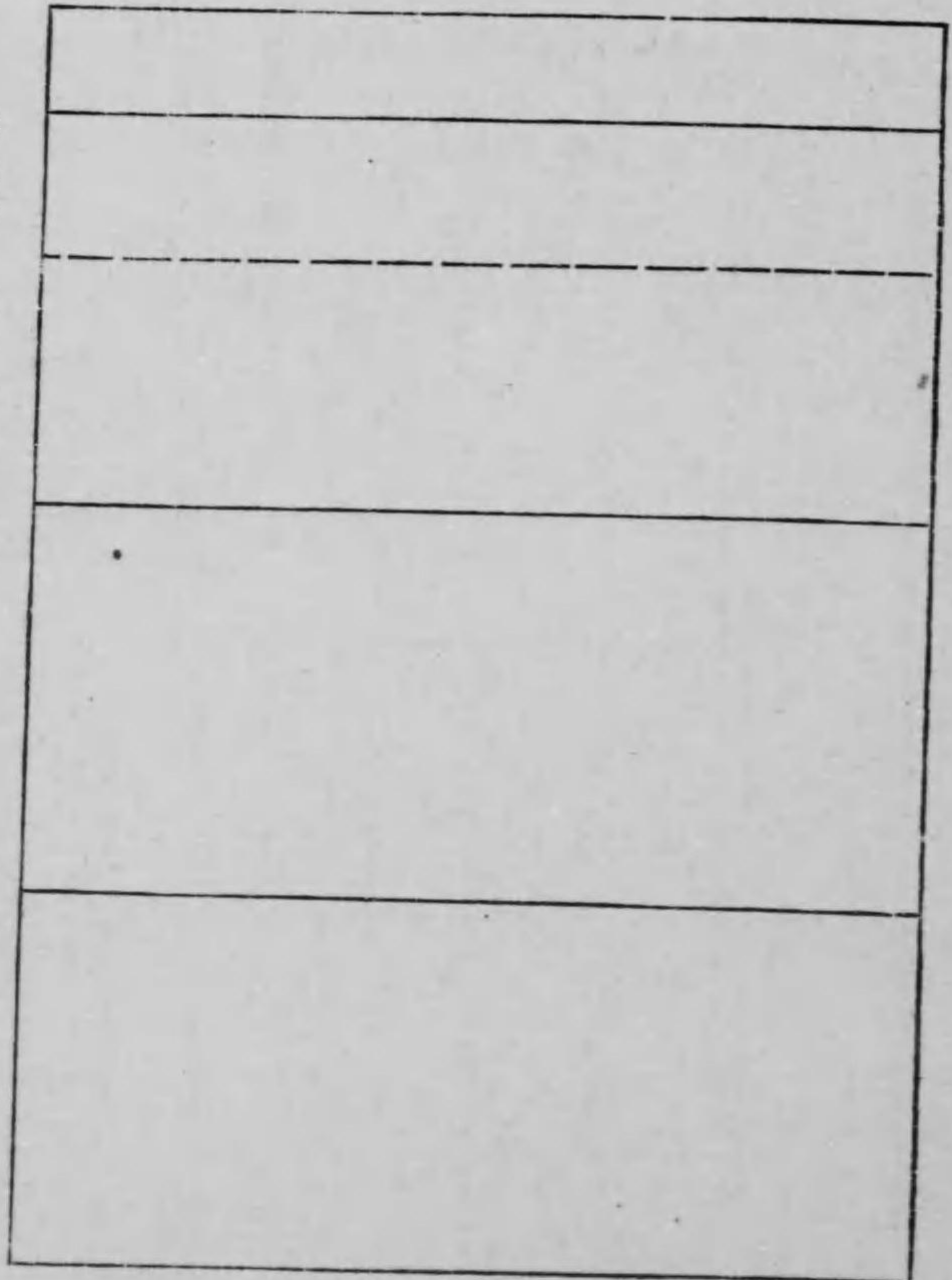
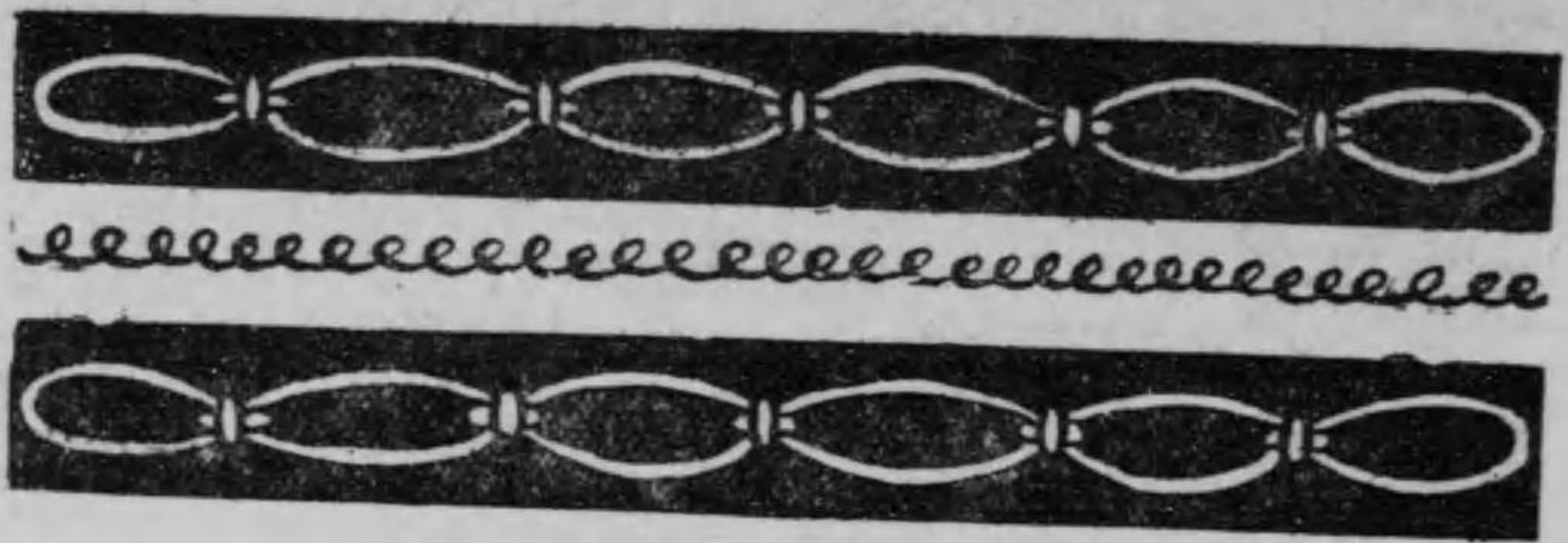
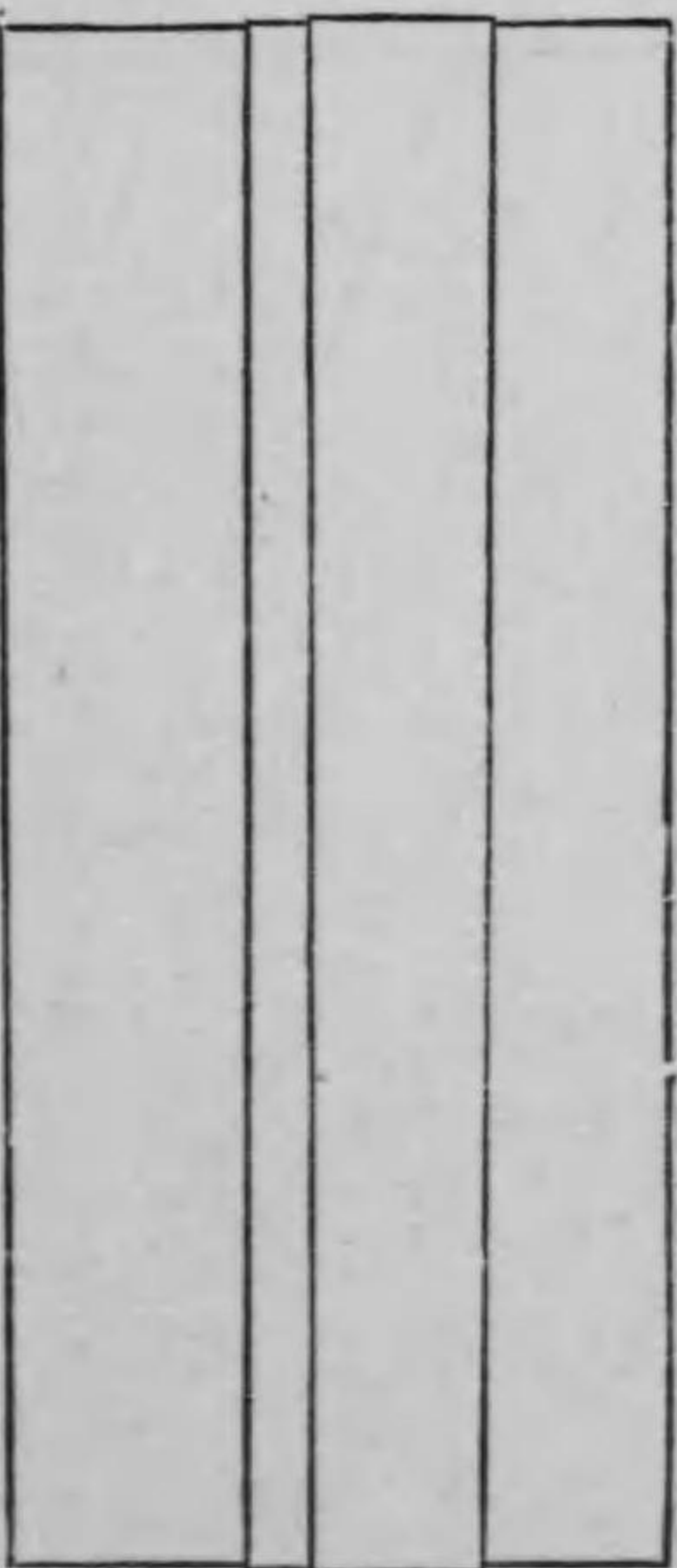


一、萬葉包 (長きもの) 常にも、祝にも、何にても包みて、進物にも、裝飾にもつかふ折形なり、平たき物にも、丸きものにも、平きものは紙をかさねて包むことつねのごとし、丸き物の細きものは、用紙を二つ折にしても包むなり、白紙べにうら、白紙がさね、色紙がさね、水引もいろくに飾るなり、包む品物によりて見はからふべし。

第二百四十三圖

萬葉包 (長き物)

△をりあがり



第二百四十四圖 萬葉包 (長き物) △かたがみ



小笠原流折形

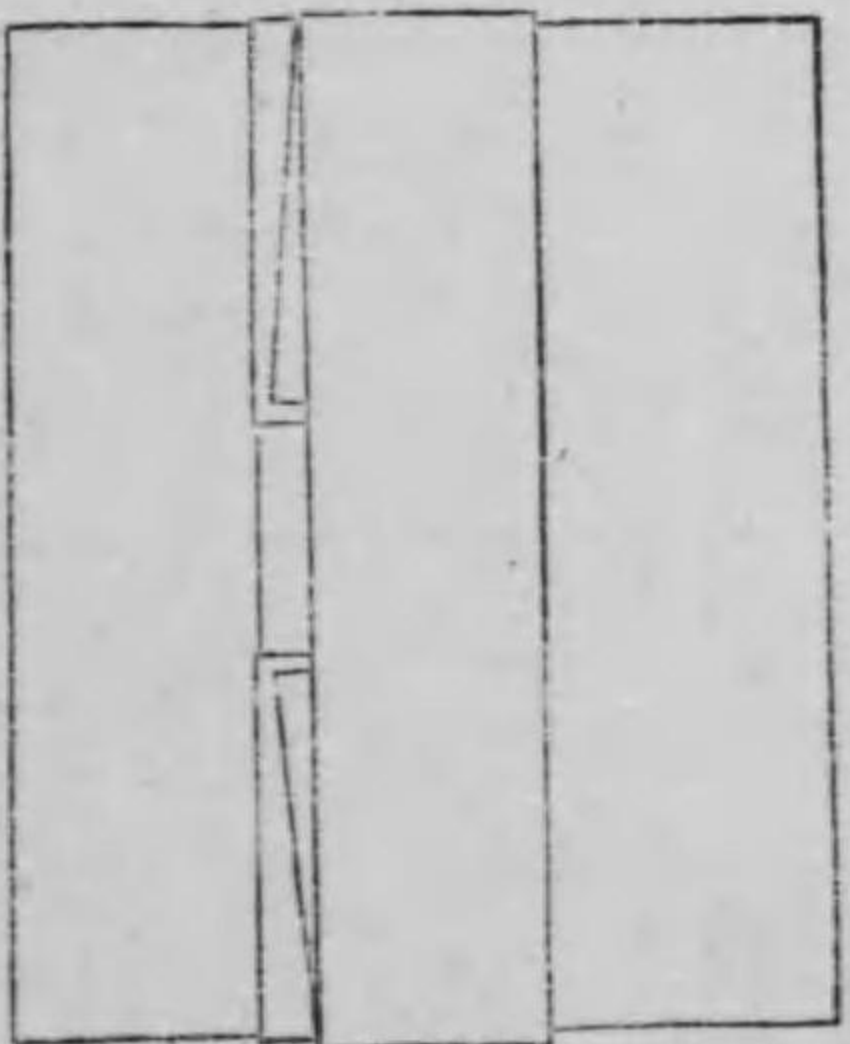
二、同 (短きもの) たけみじかき物を包む、つかひ方紙水引とも右のごとし、古傳には平きものは水引もろわなに結ぶ、丸き包物にはかたわなに結ぶなり、今は丸き物にも、細結もろわな等にも結ぶなり。

第二百四十五圖 萬葉づゝみ (みじかきもの) △をりあがり

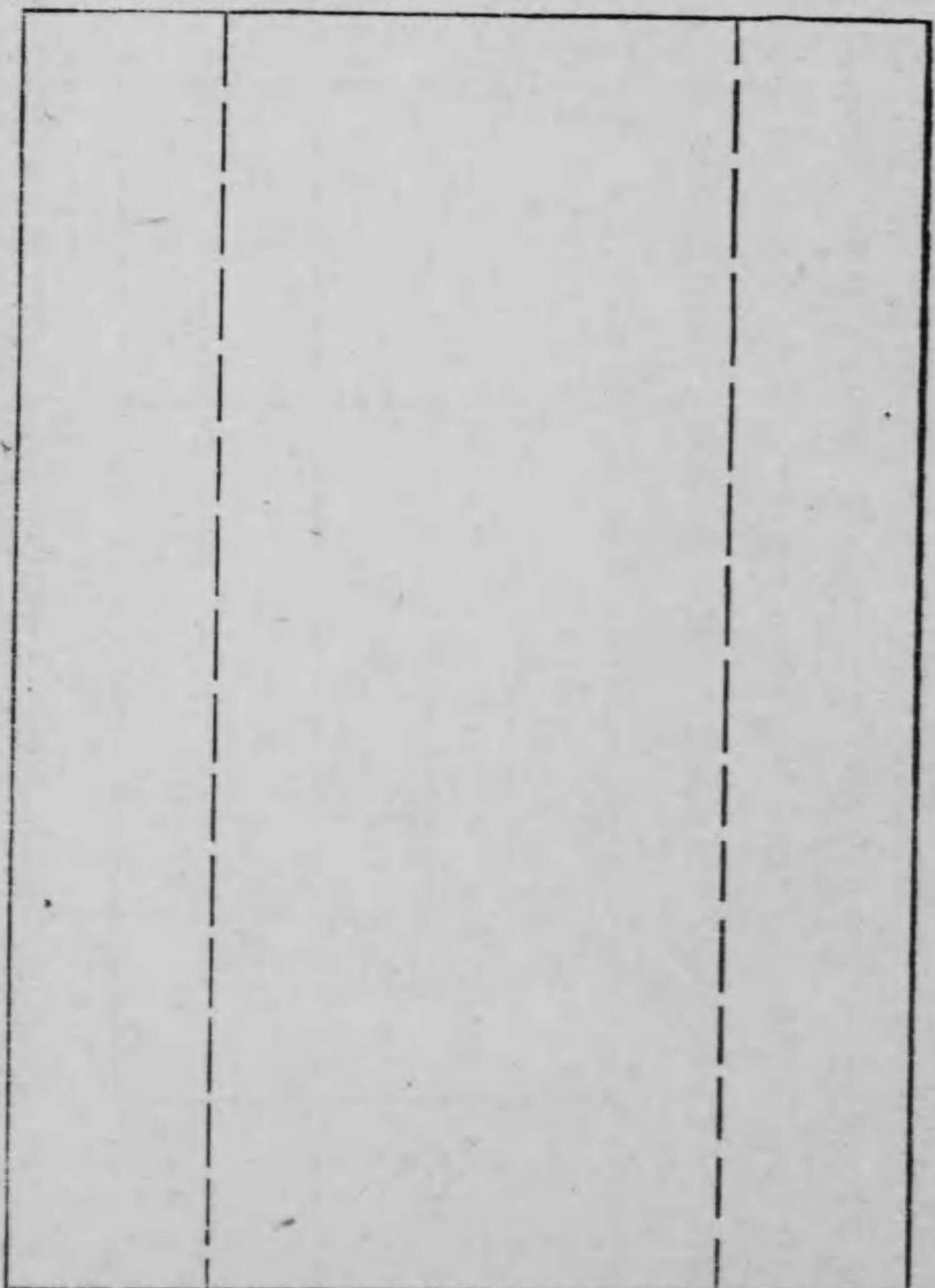
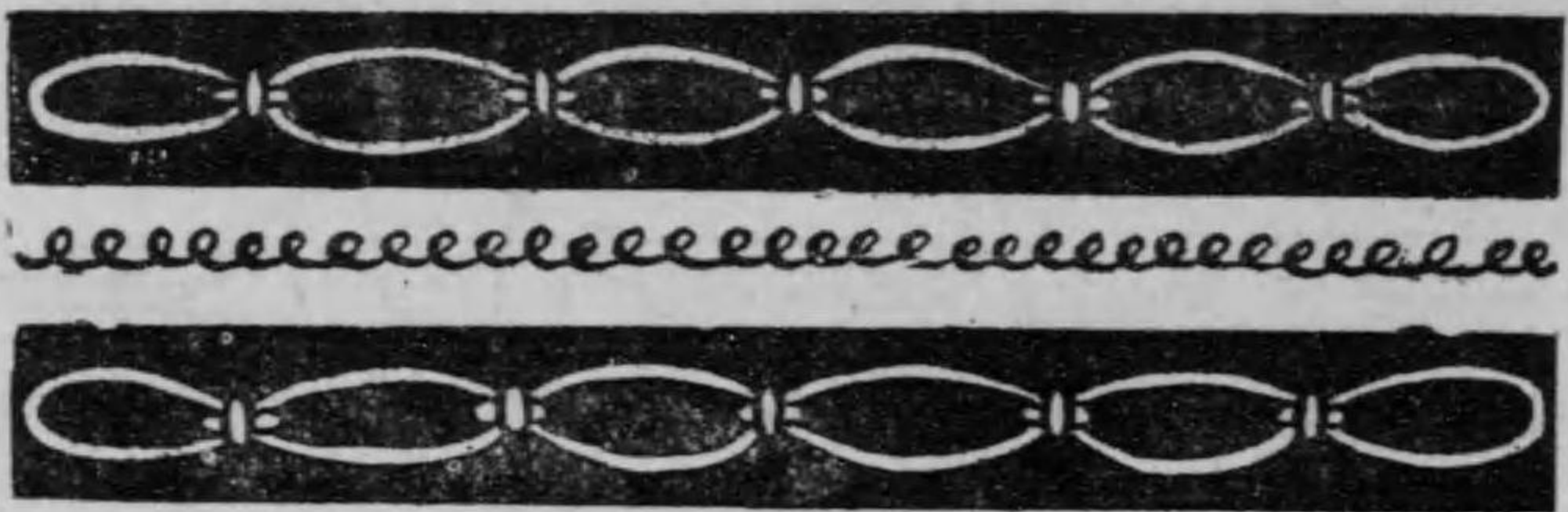
○紙の寸法は物によりて

大高太奉書中奉書

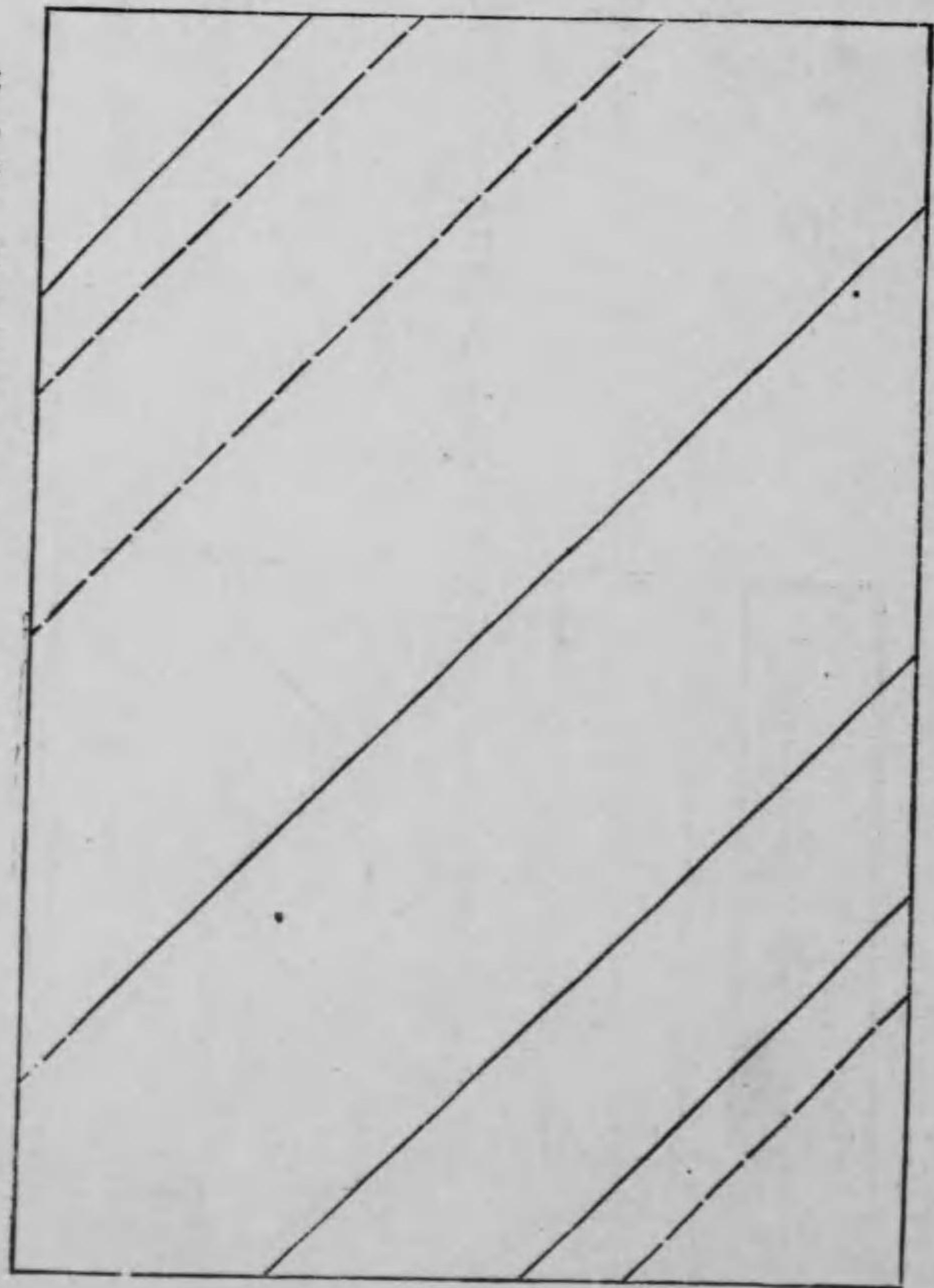
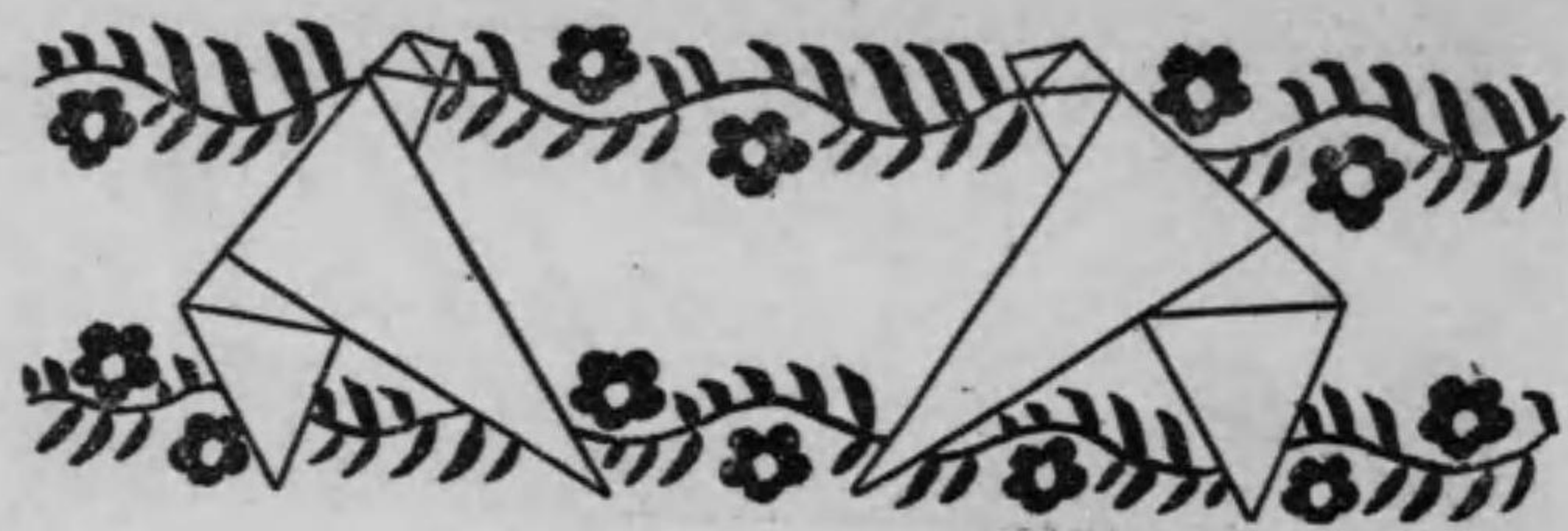
いろく〜なり。



三三〇



△かたがみ をうはじめ
二百四十六圖 ○萬葉づゝみ (短き物)

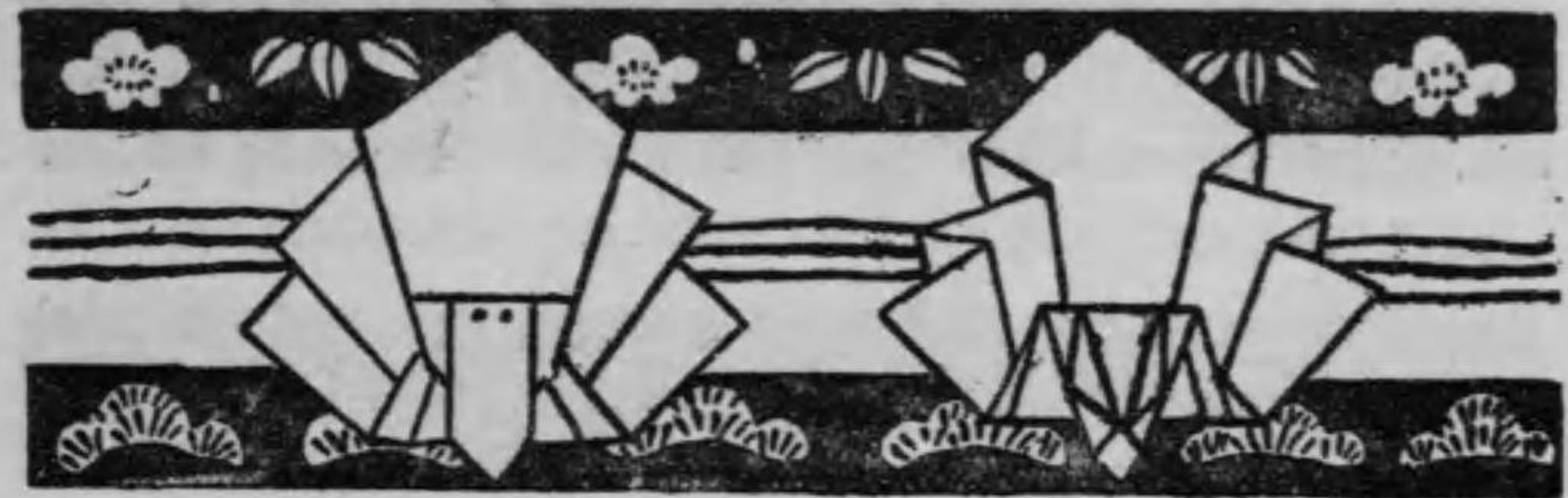


第二百四十八圖

通用貨幣包

(甲の形)

△折様



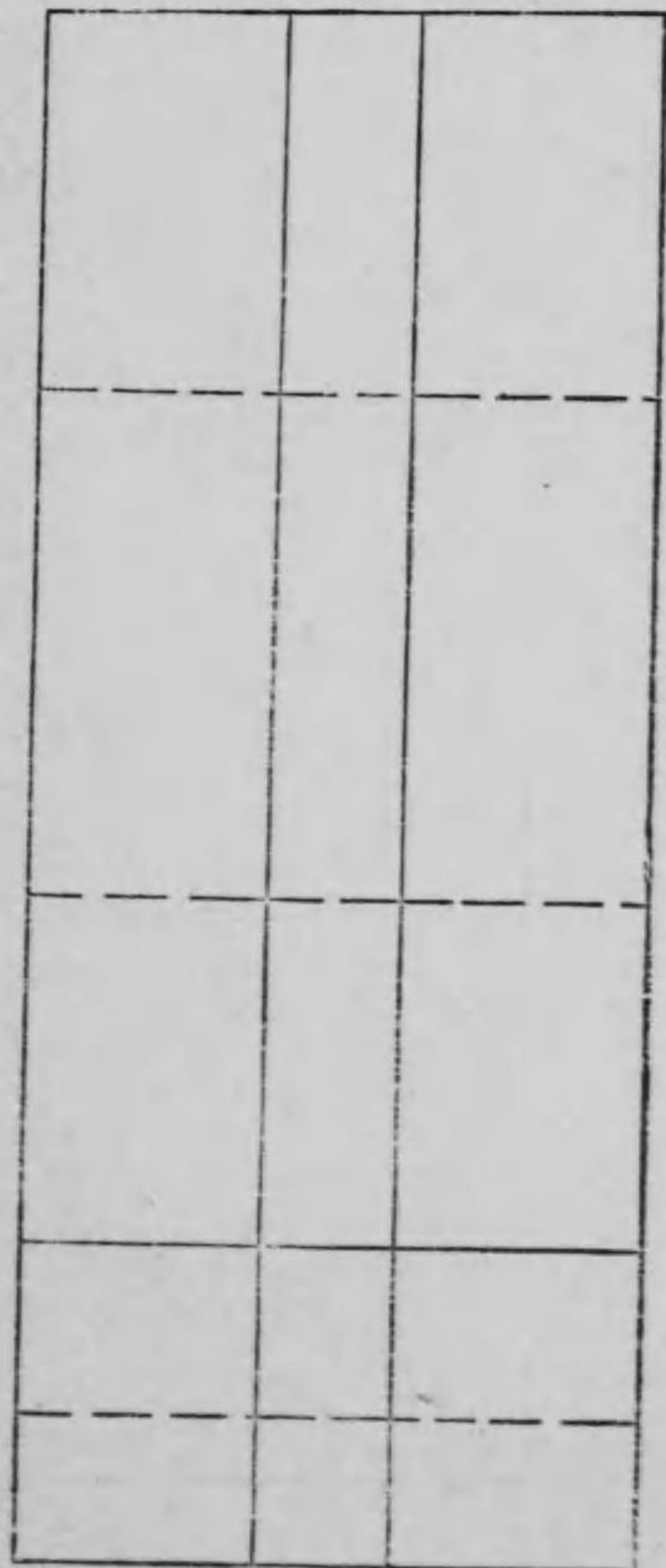
第二百四十七圖

萬葉包(みじかき物)

△折様

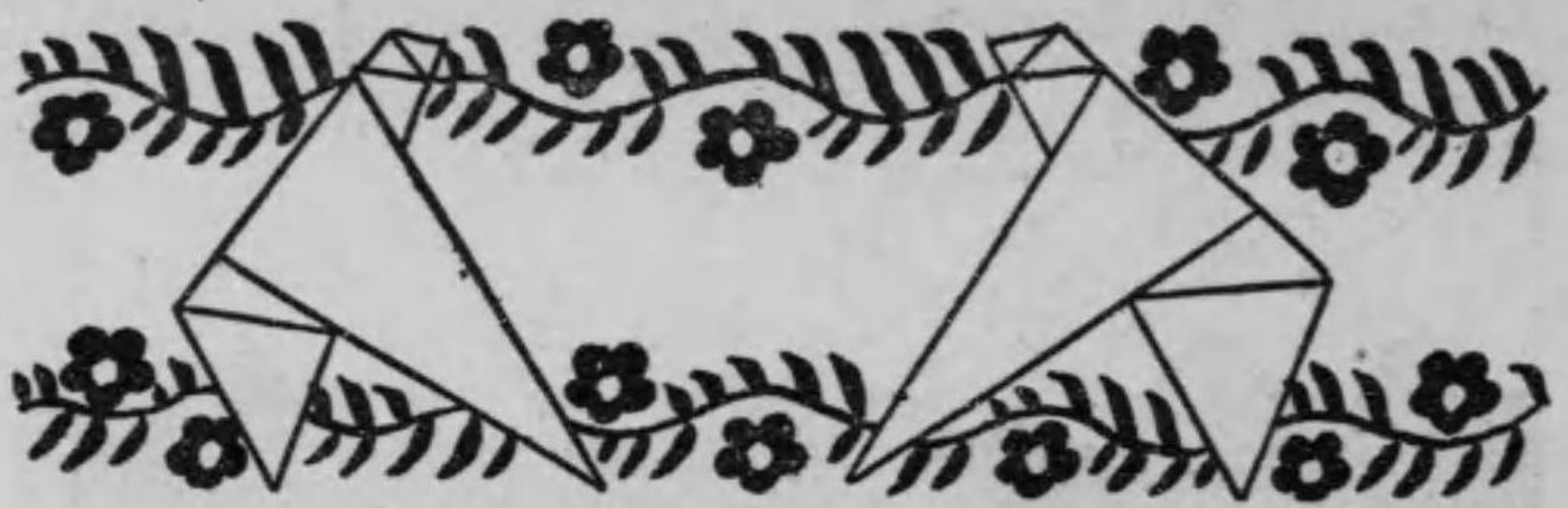
(二)

下 上



下 上

三、通用貨幣包 (甲) 金銀貨幣を包むには和ら紙にて下包あるべし、紙幣の時は下包なし、上書あるべし、何々料とも記し、たゞ金何圓とも記すべし、水引かくる、もろわな、細結にもする、奉書紙がさね、紅白水引を常とす、祝の時は檀紙金銀水引にてかざるなり、炮結もつくるなり、白紅水引にても結ぶ、もろわなにすべし。

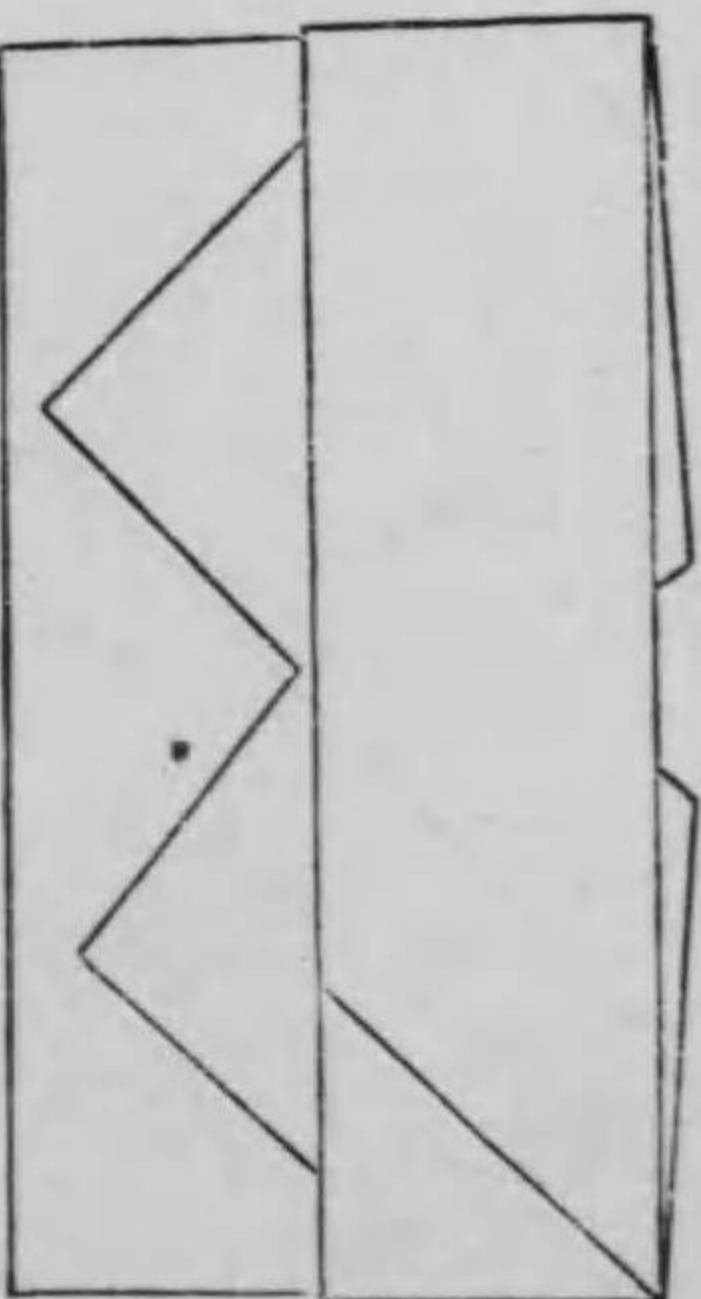


小笠原流折形

第二百四十九圖

通用貨幣包 (甲の形)

△をりあがり



二二四

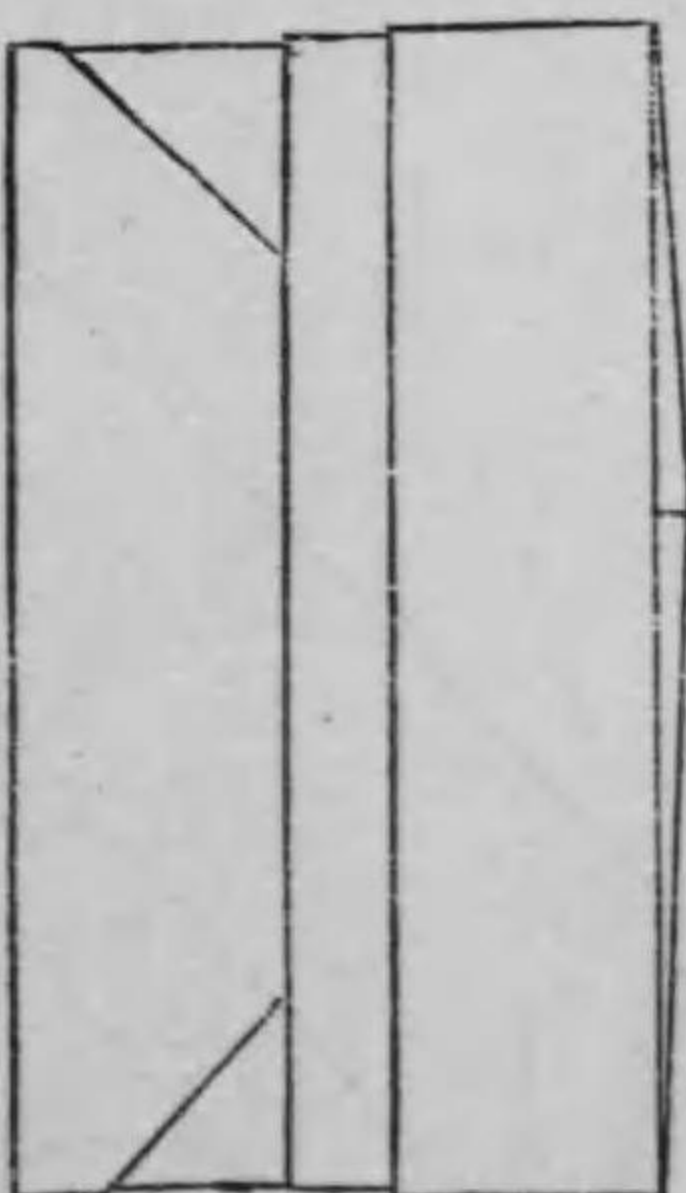
四、同 (乙)

右に同じ、次の方へつかふ折形なり、大奉書紅白水引。

第二百五十圖

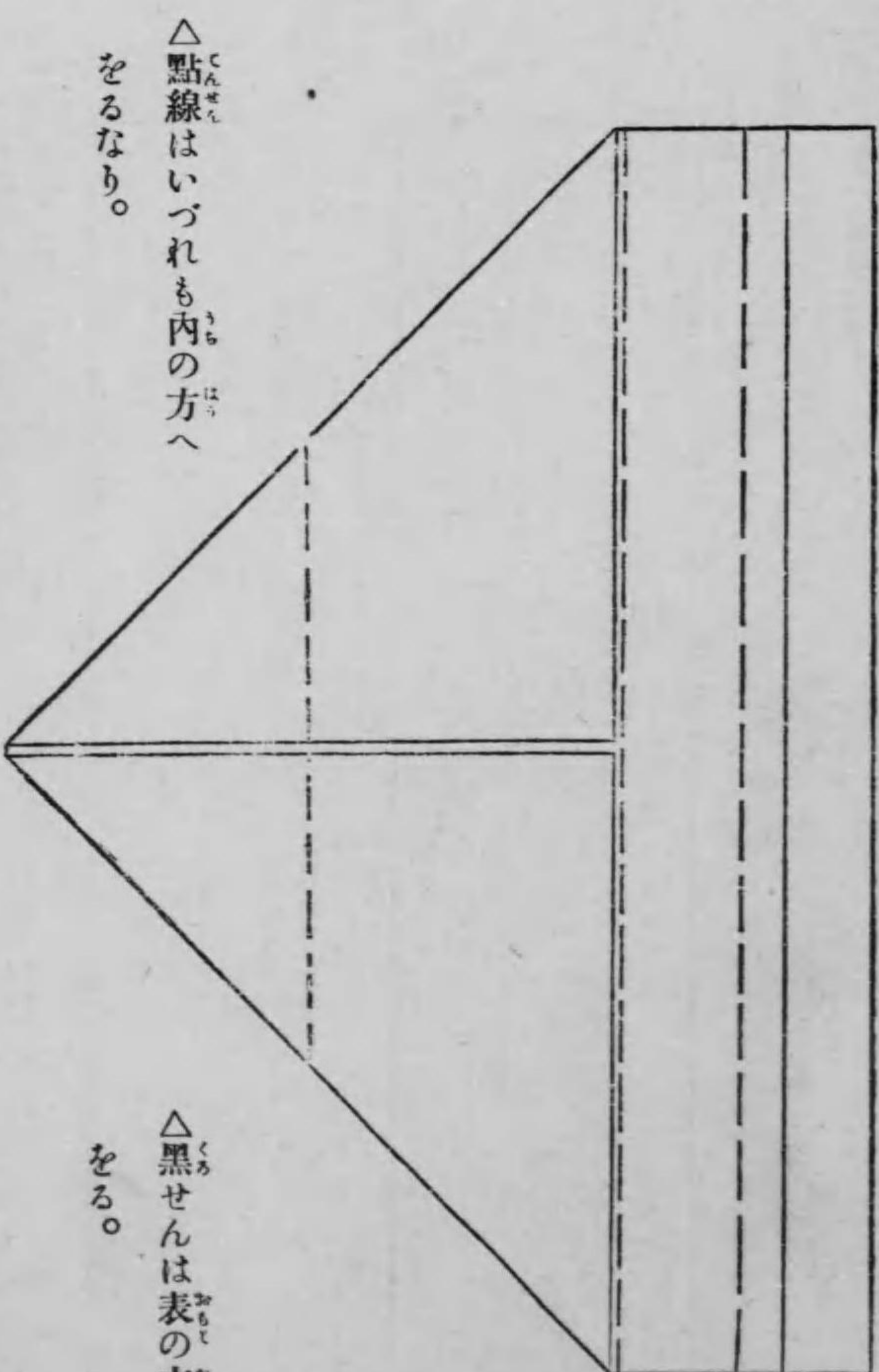
通用貨幣包 (乙の形)

△をりあがり



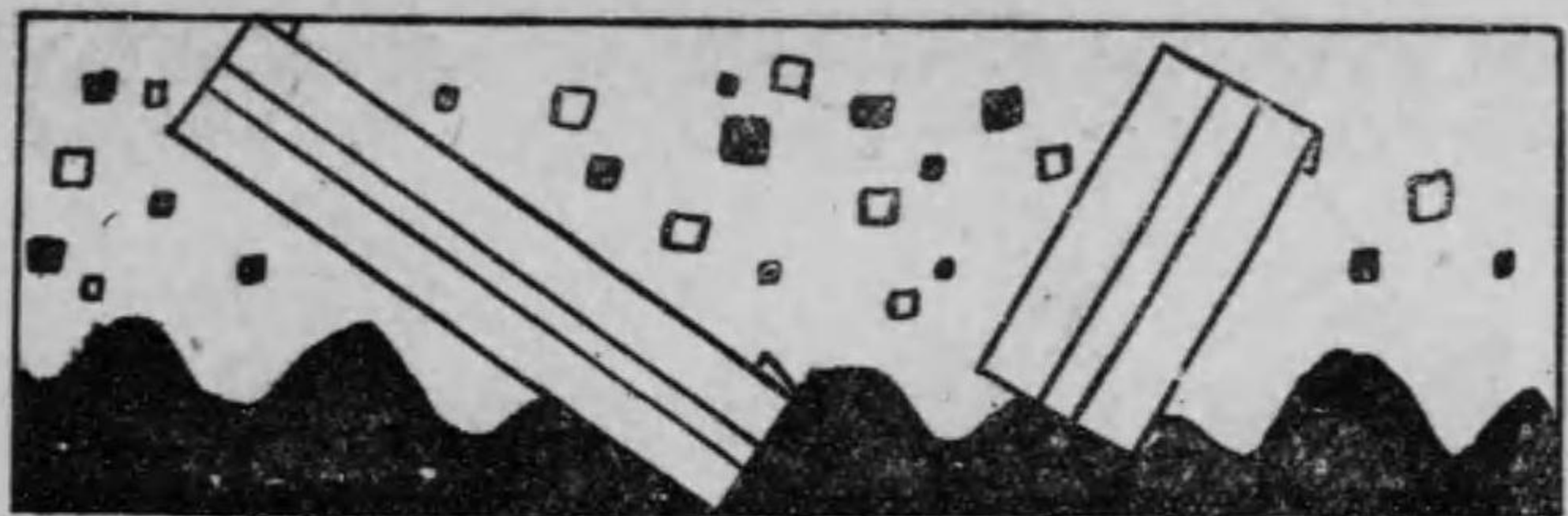
第二百五十一圖

通用貨幣包 (乙の形) △をりやう

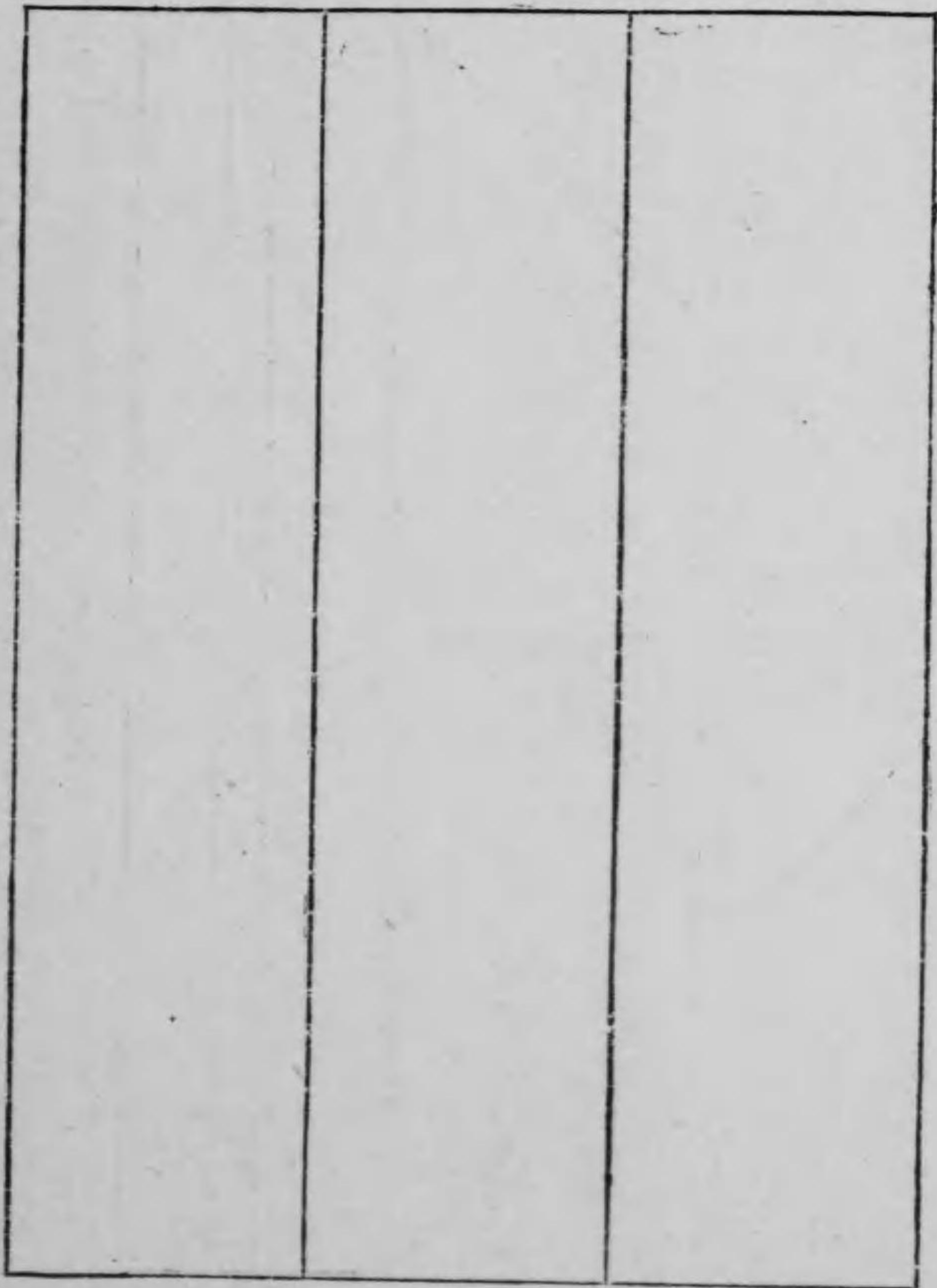


△點線はいづれも内の方へをるなり。

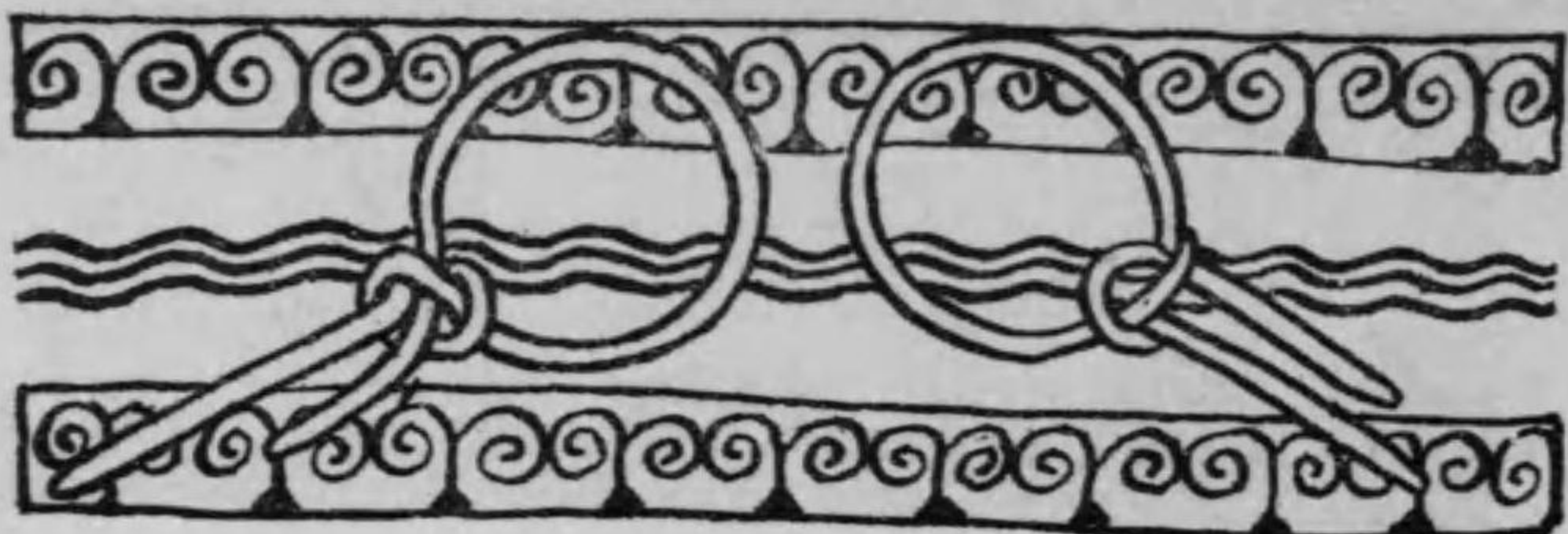
△黒せんは表の方へをる。



小笠原流折形
 五、同(丙) 右に同じ、次の次へつかふ折形なり、糊入紙紅白水引。
 第二百五十二圖 通用貨幣包(丙の形) △三つにをる。



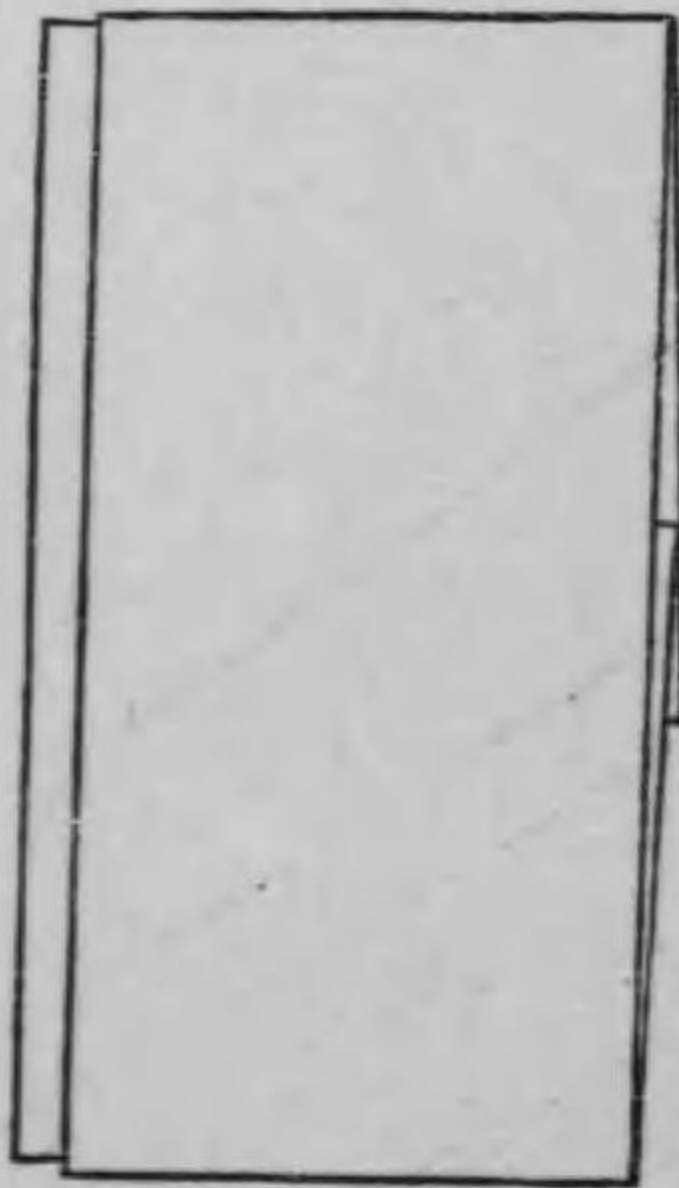
二二六



第二百五十三圖

通用貨幣包(丙の形)

△をりあがり



六、扇子包 二本にても三本にても包む、下結を折形の内にて裏より通し中にて結留
 て、折形を合せ、上に水引をかくる、奉書紙べにうら、紅白水引、銀赤水引、梅結
 にて飾るをつねとす、色紙かさね、白紅水引金銀水引にてもろわな結にもするな
 り、古傳に一包に十本をいゝ折形あり「包の記」に見えたり。



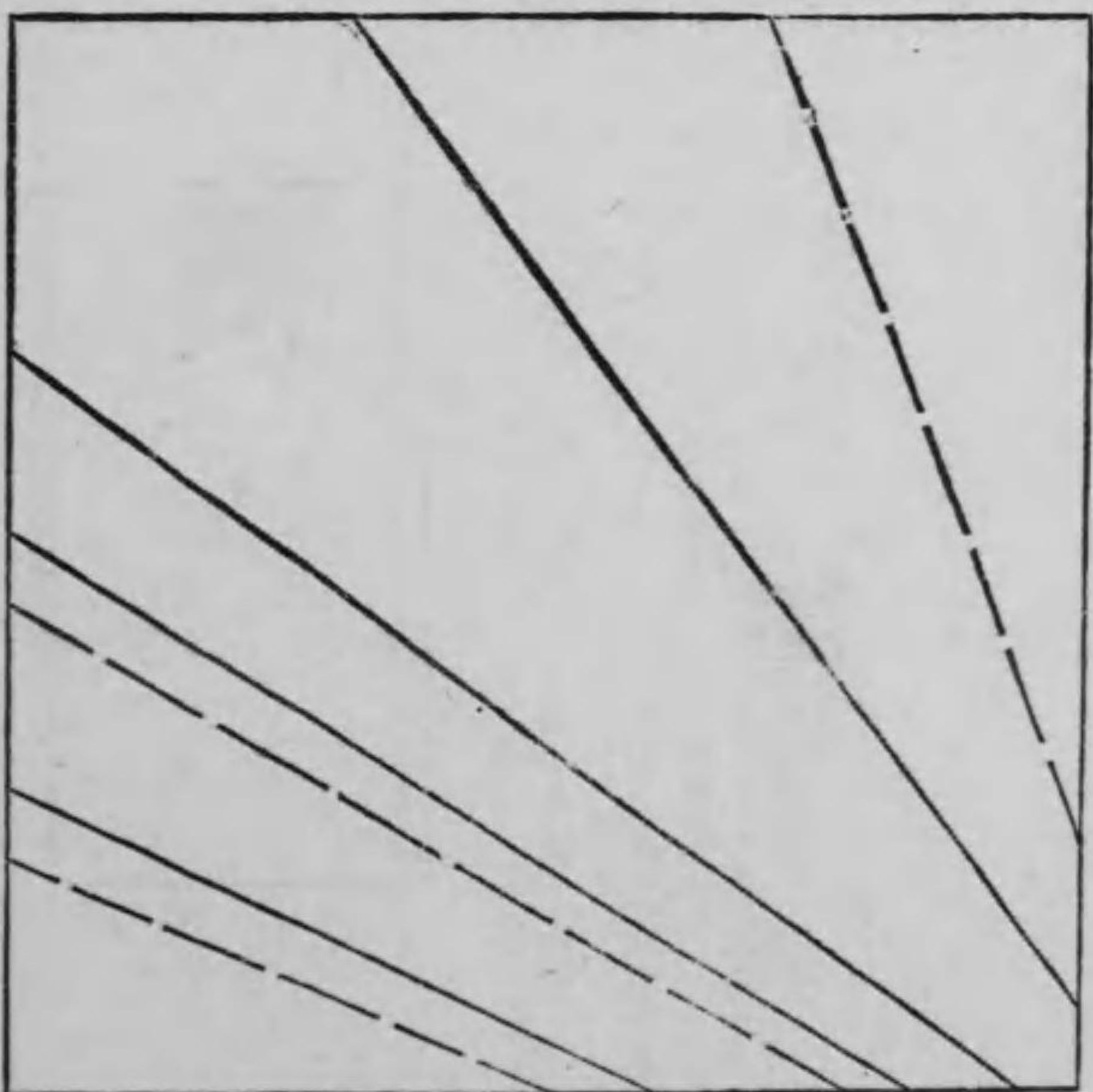
小笠原流折形

第二百五十四圖

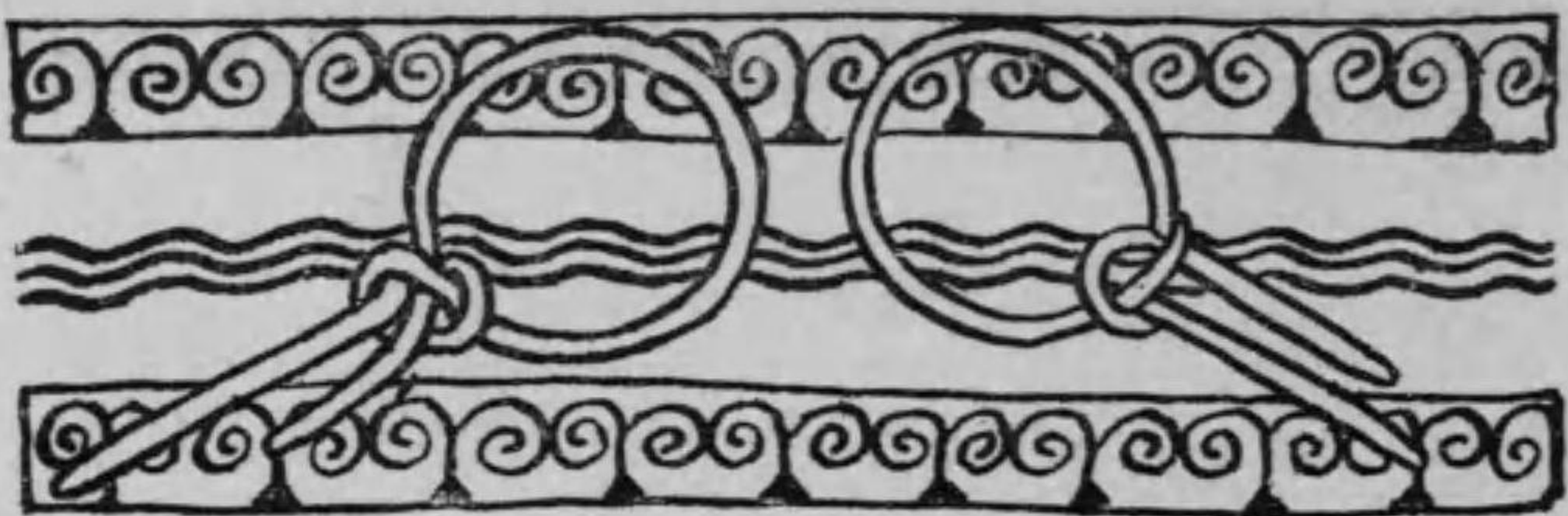
○扇子包

△をりやう

かたかみ



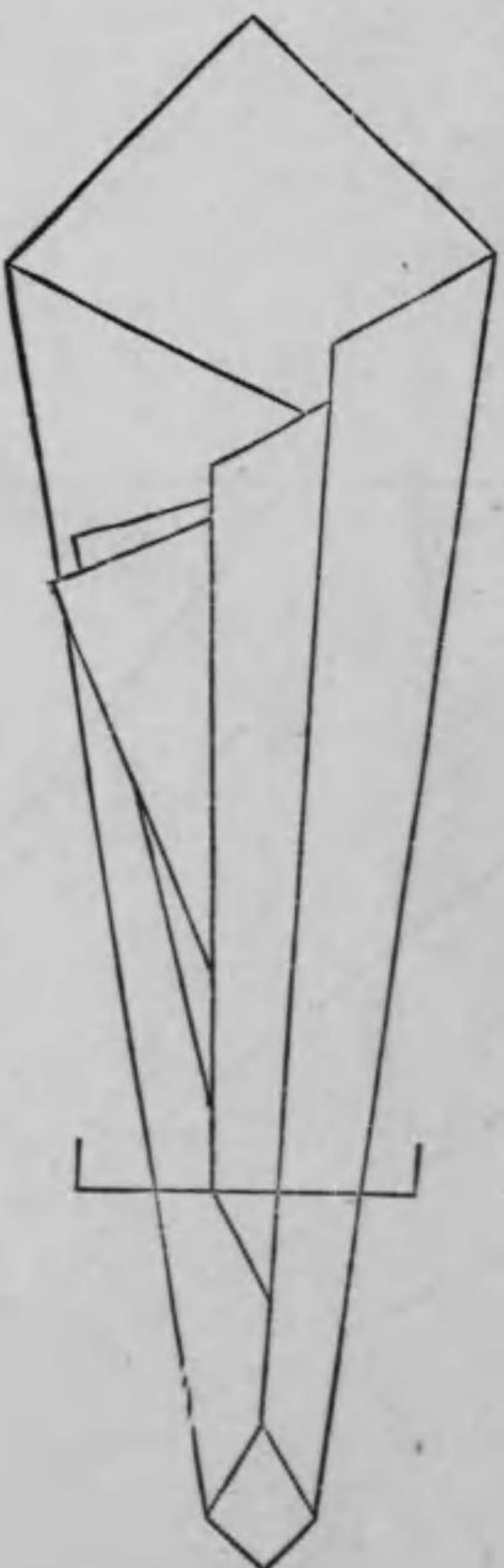
三二四



第二百五十五圖

扇子づゝみ

△をりあがり



七、箸包 きはだちたる膳につかふなり、本式に箸のだいとて土器をつかふ、其次に包形をつかふなり、上位には檀紙おもて、内奉書紙にて金銀水引細結、中位には奉書がさね金銀の紙を細くたちて下をとむる、其次には糊入紙がさね、紅紙ほそくたちて下をとむるなり、いづれも柳の白箸なり、位により尺の長短あるべし、此ほか菓子の楊枝をも包むにつかふなり、箸楊枝包とてほかにも包形あり。



小笠原流折形

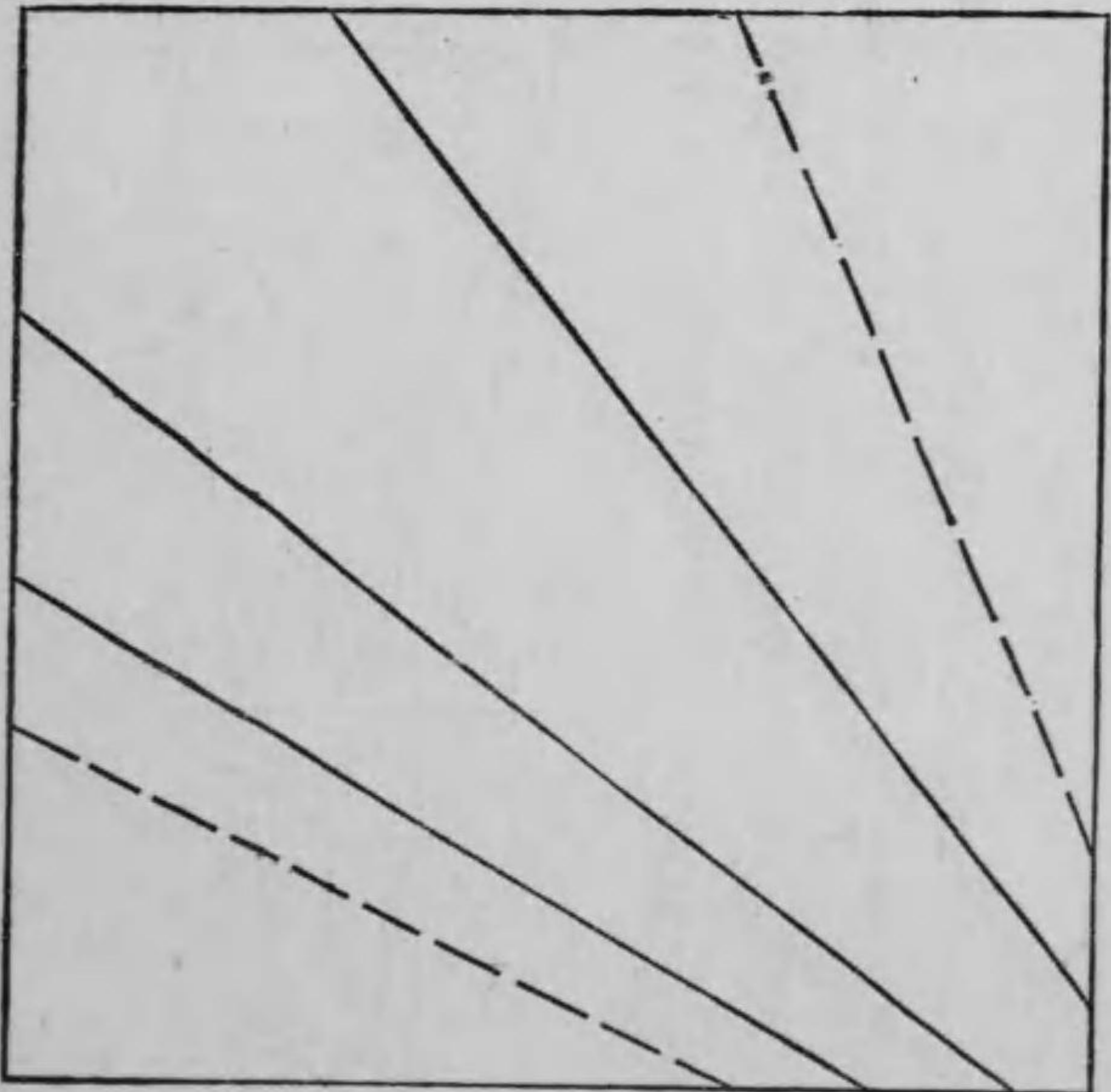
第二百五十六圖

○はしづゝみ

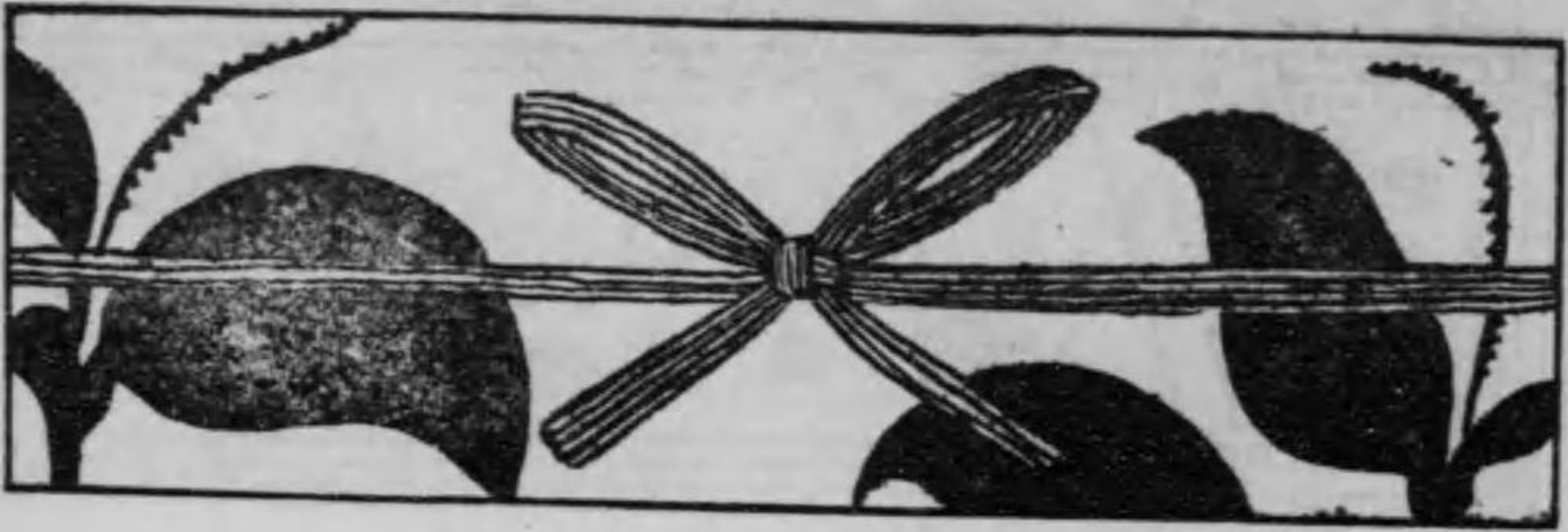
△をりやう

かたがみ

○寸法は曲尺にて五寸四方を普通とす。

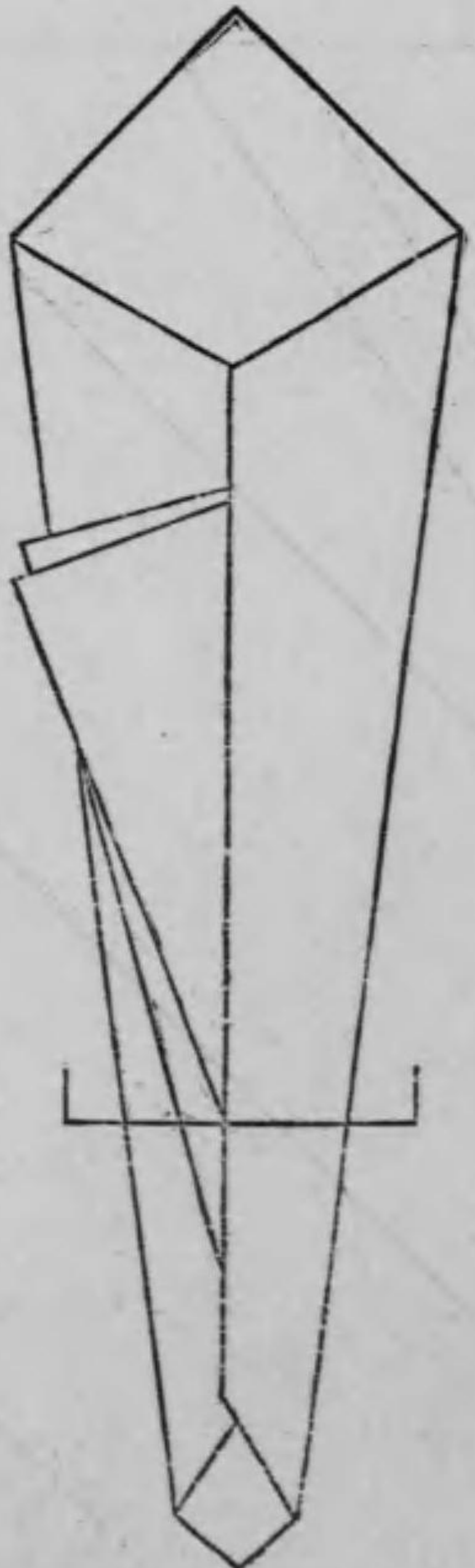


二三〇



第二百五十七圖

はしづゝみ △をりあがり



○右扇子包も箸包も下の方を丸く裏へ折るべし。

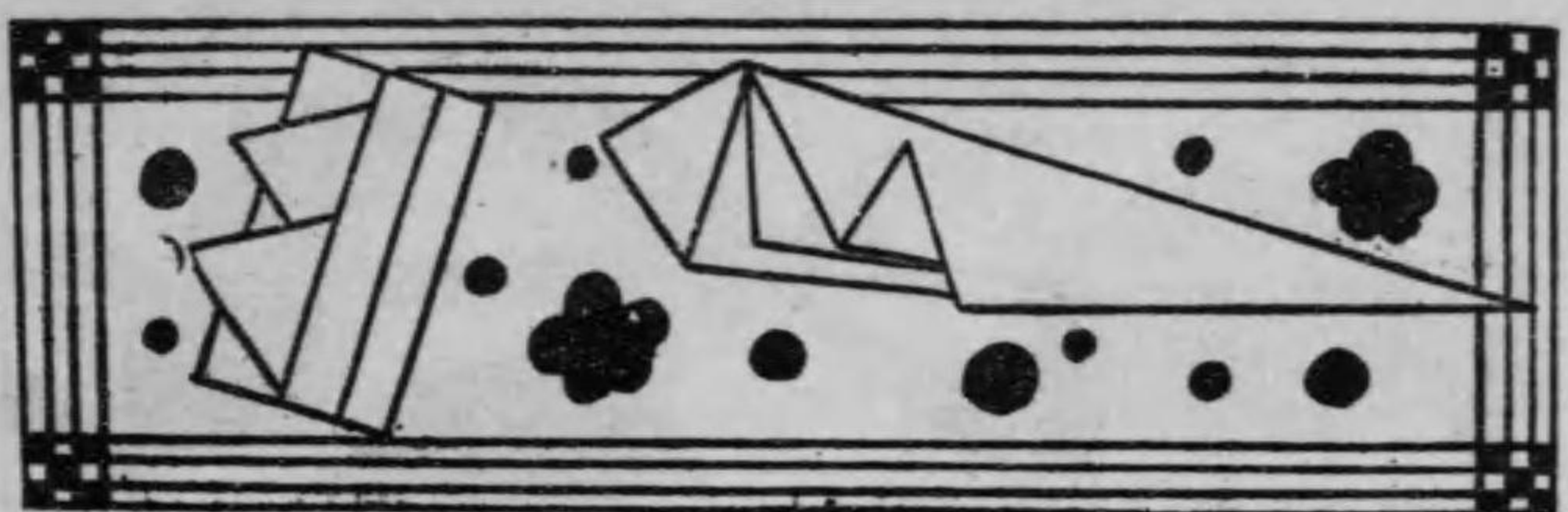
ハ、酒盞包

さかづき何にても包む、上位には「水晶紙」にて包み、薄様の色の紙捻

にて結びて、造松、造花の枝につけて進物とす、其次々には、色紙かさね金銀水引

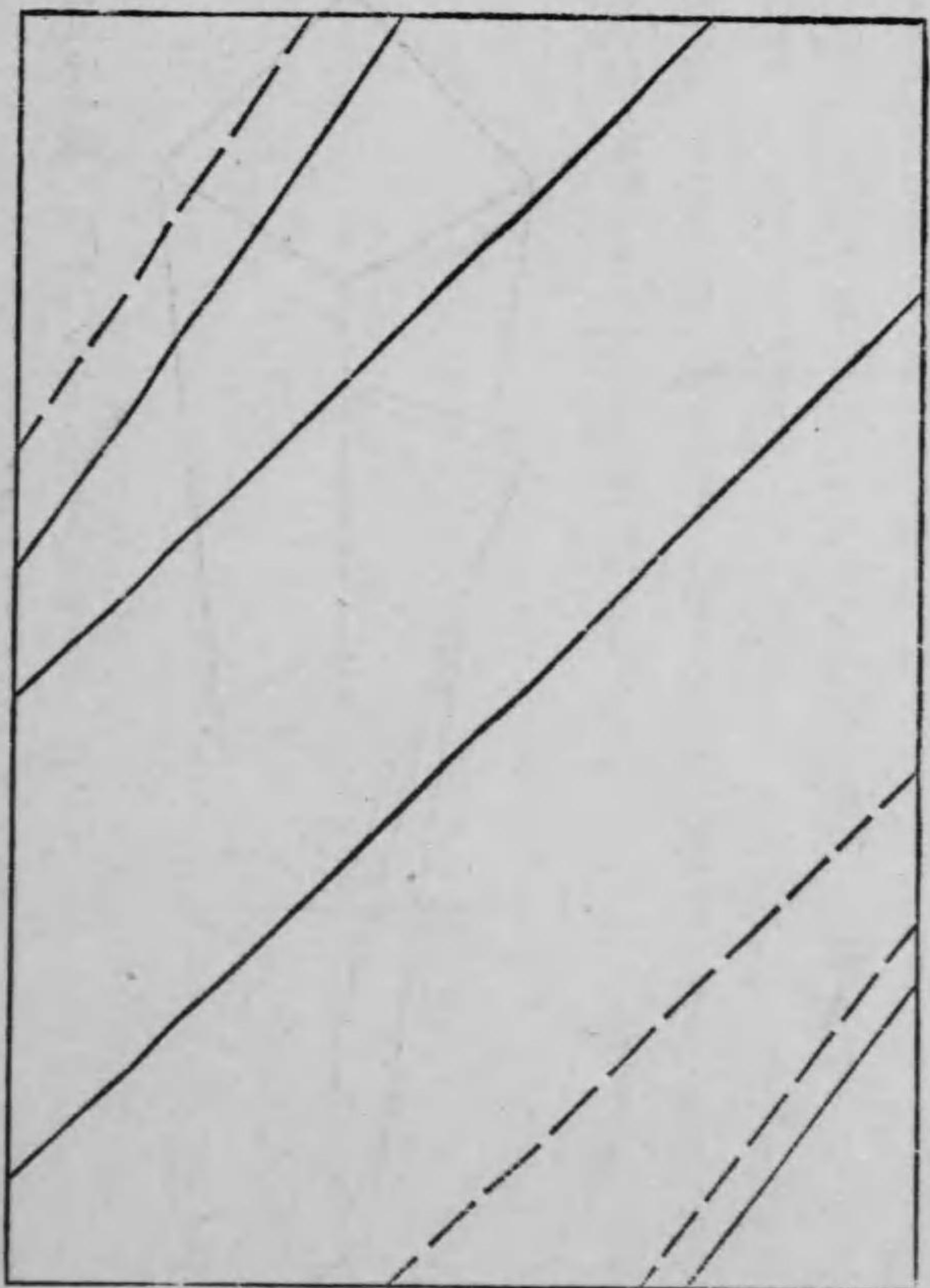
にて飾る、下包和紙にて包みて入るなり、金盃銀盃、塗盃なにも同様なり。

箱は別にそへて送るべし。



小笠原流折形
 第二百五十八圖 さかづき包 △折様、かたかみ

二三二



第二百五十九圖

さかづき包

△をりあがり



九、手遊包 (甲) 白紙べにうら、紋紙、模様紙などにも、水引は花やかなる段水引、金赤銀赤にても、品によりて包形のふくらみたるには片わな結にすべし、細結、兩わな常のことなり。

第二百六十圖

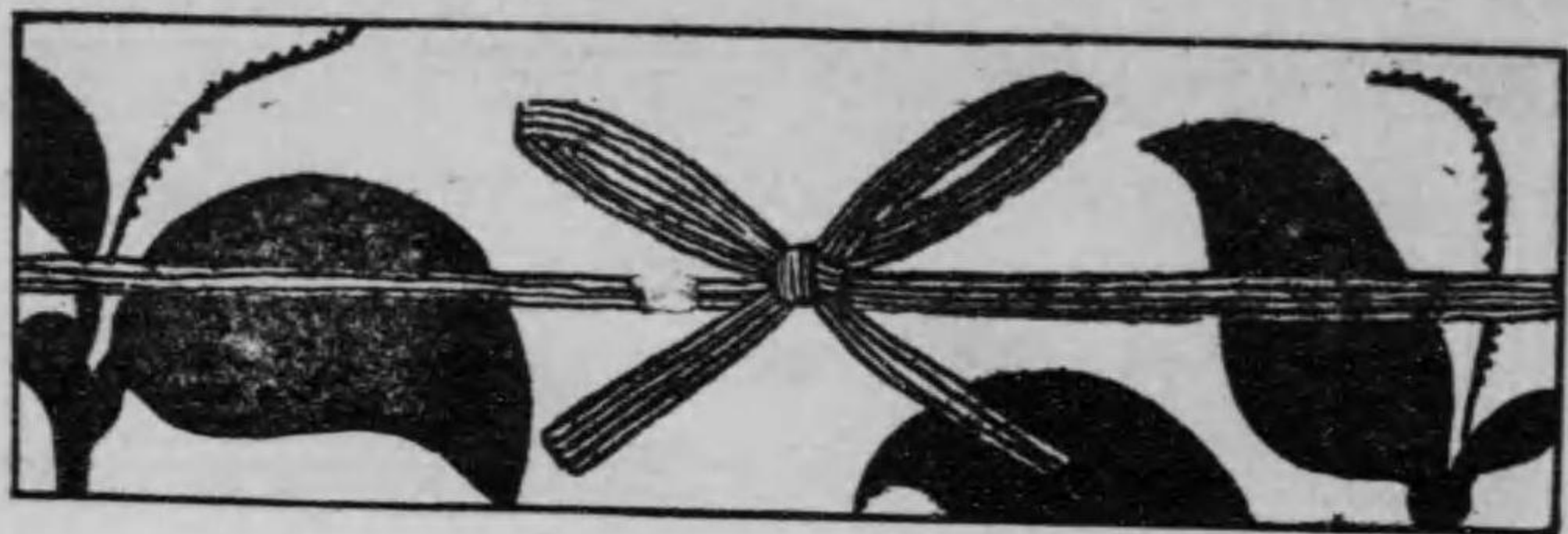
○おもちや包 (甲の形)

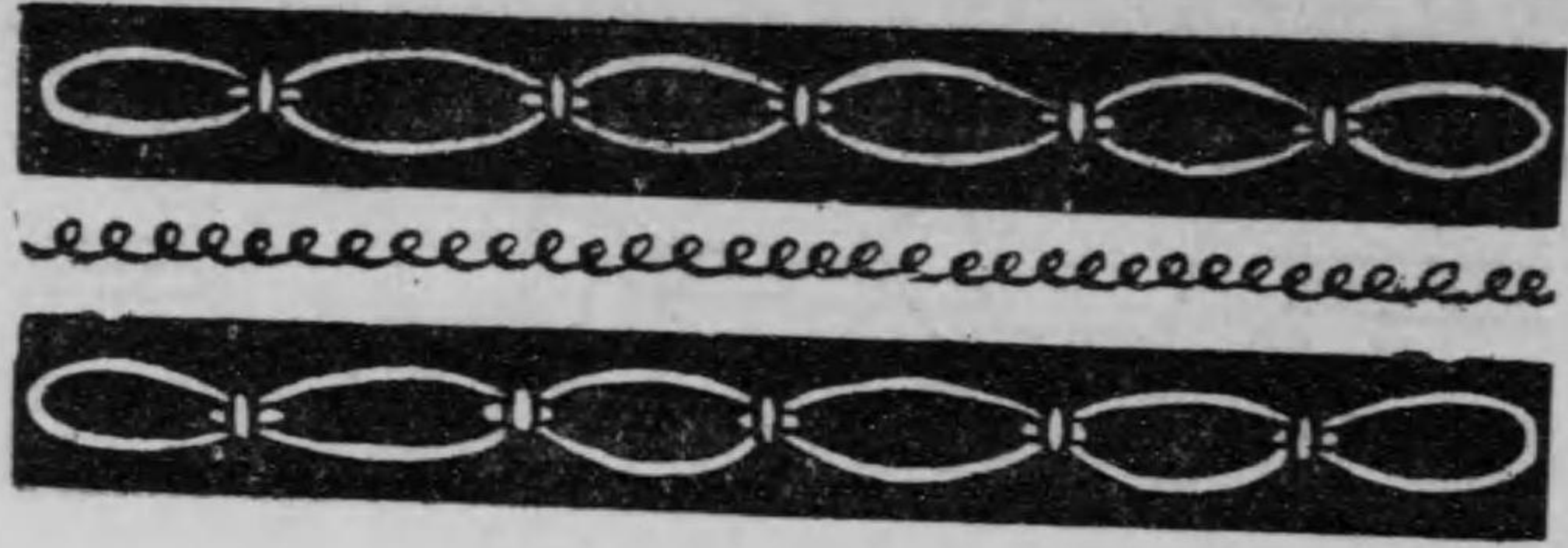
△をりあがり



第九卷 雑用類折形圖解

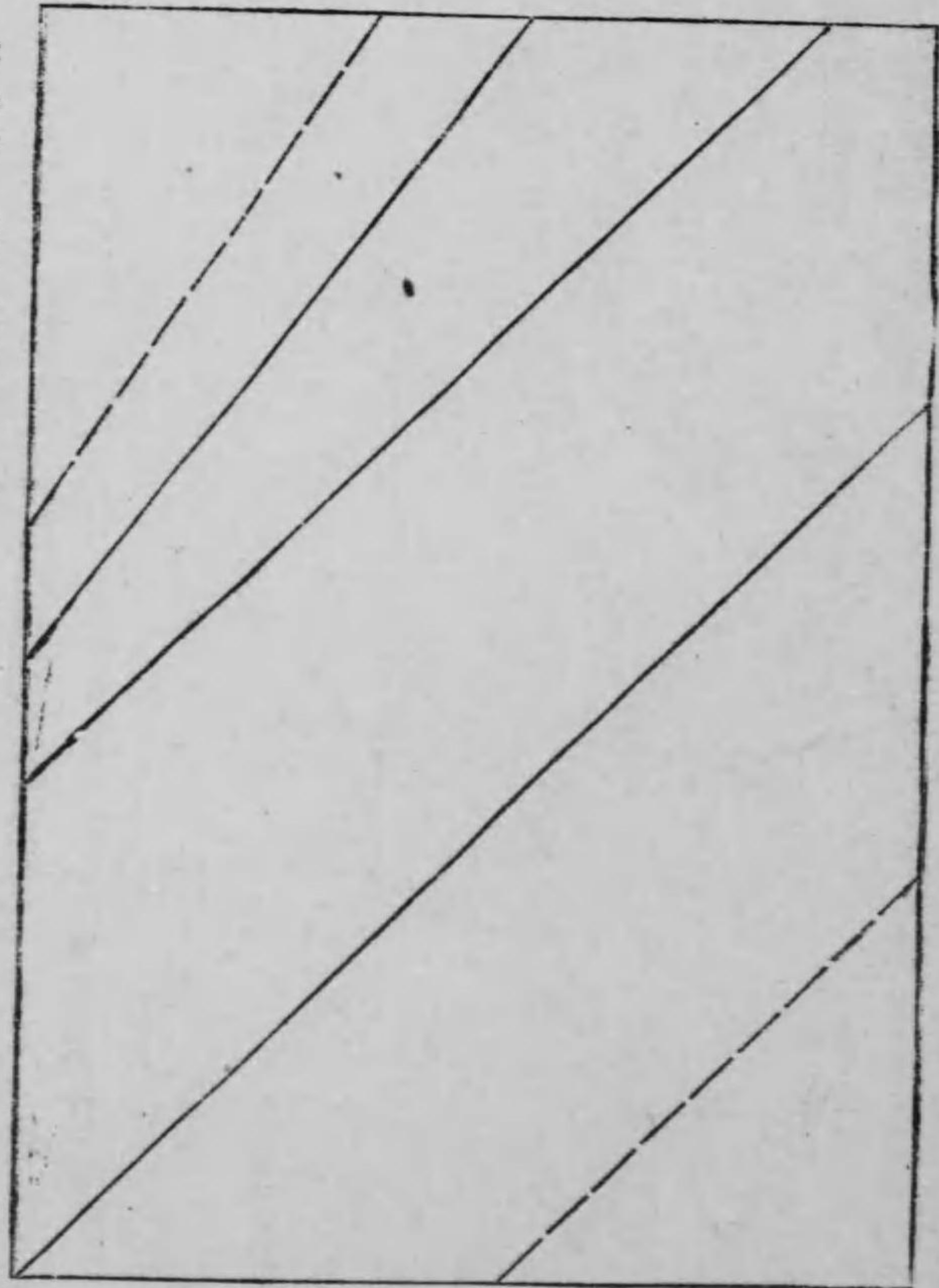
二三三



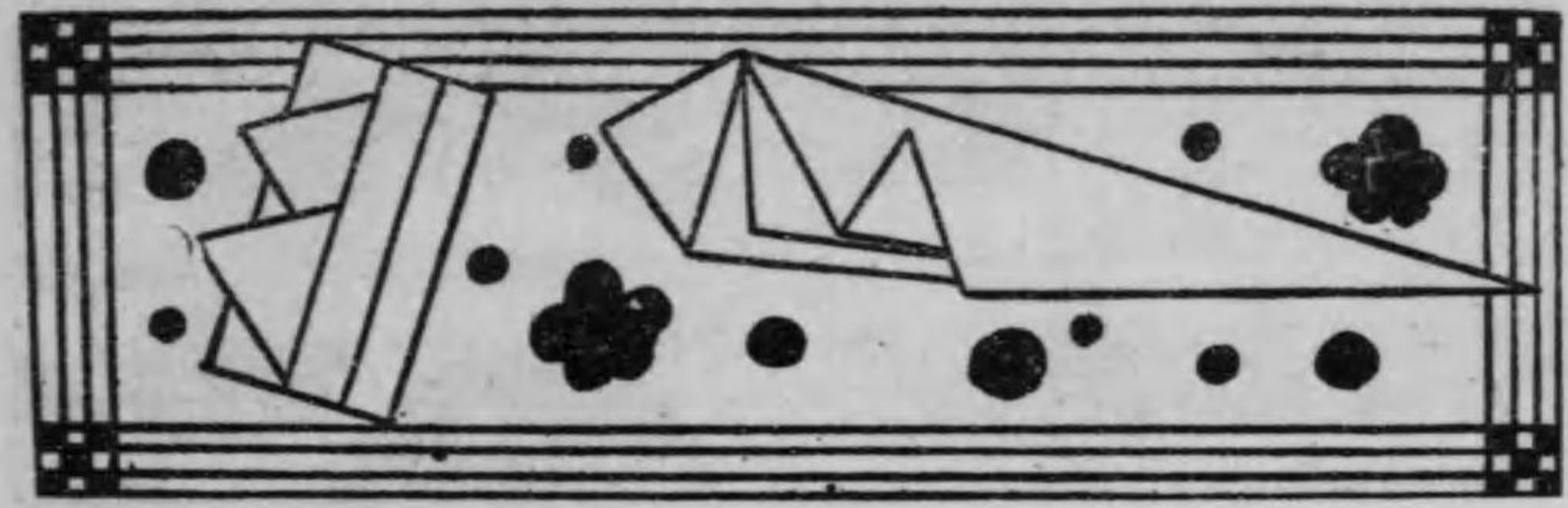


第九卷 雑用類折形圖解

二三五

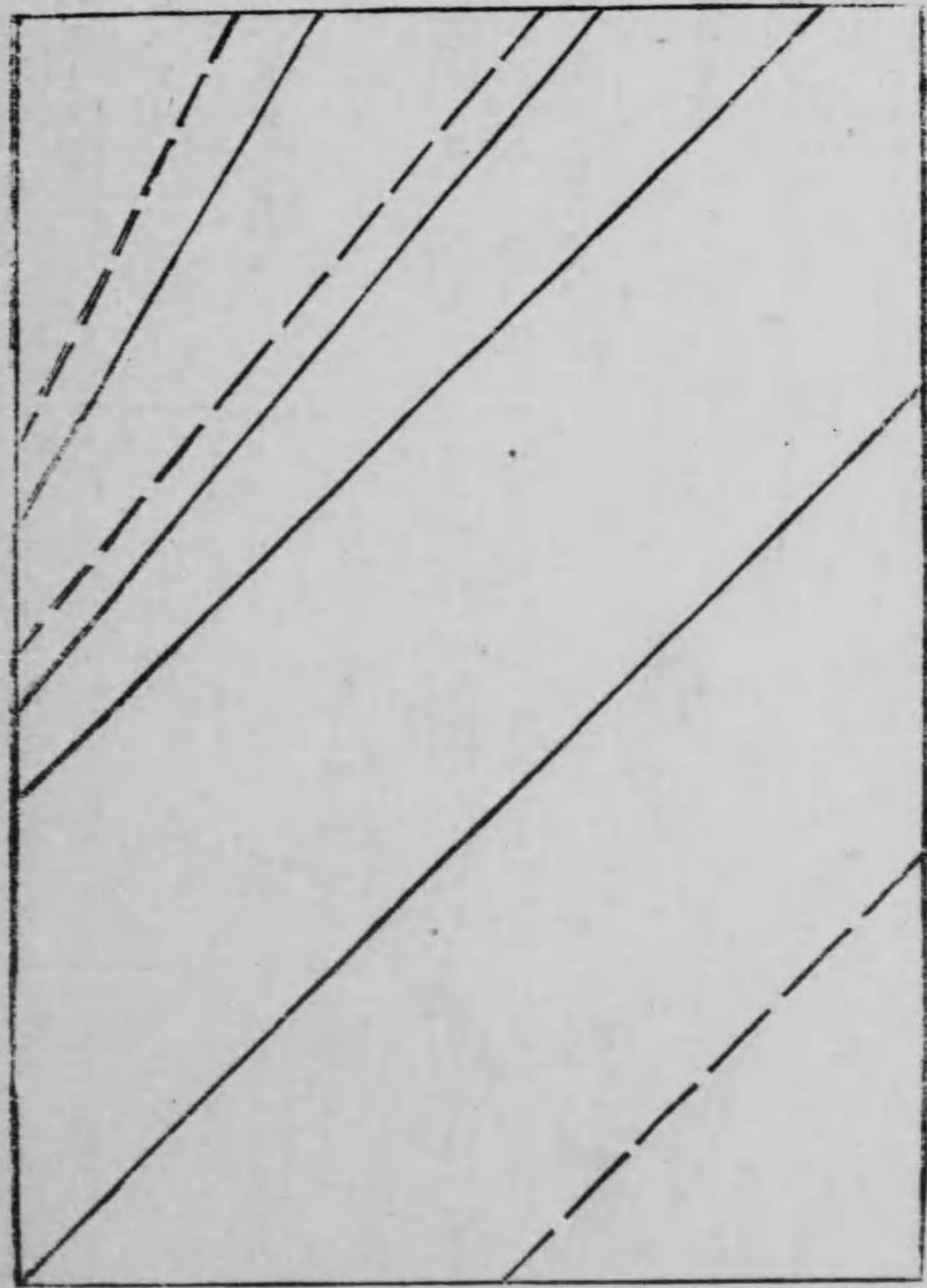


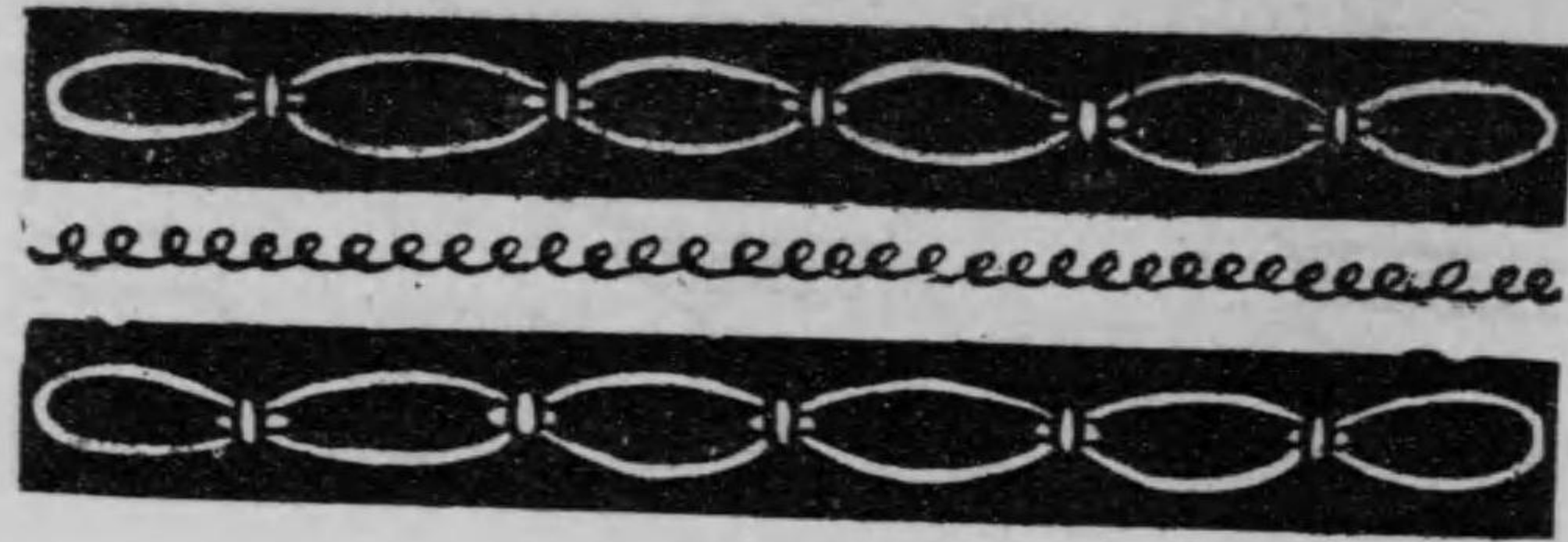
十、同おなじく (乙) 右みぎに同おなじし。第二百六十二圖 手遊包てあそびかみ (乙の形) △折おやう、かた紙かたがみ



第二百六十一圖 小笠原流折形 おもちや包おもちやかみ (甲の形) △折おりやう

二三四



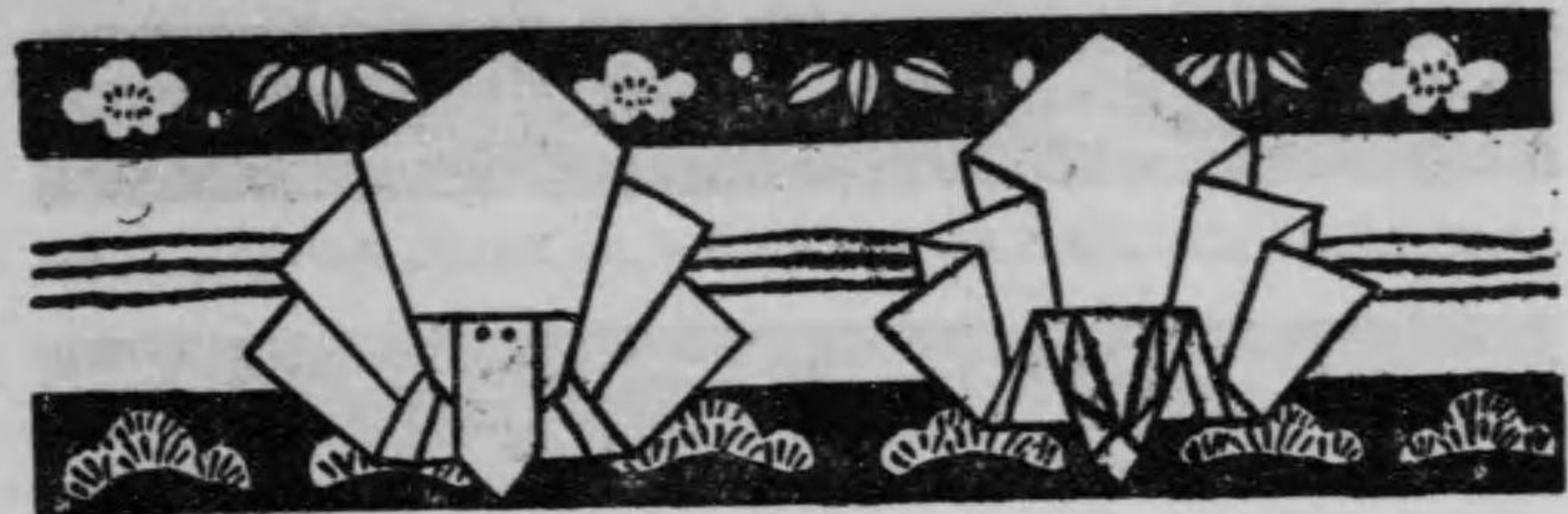
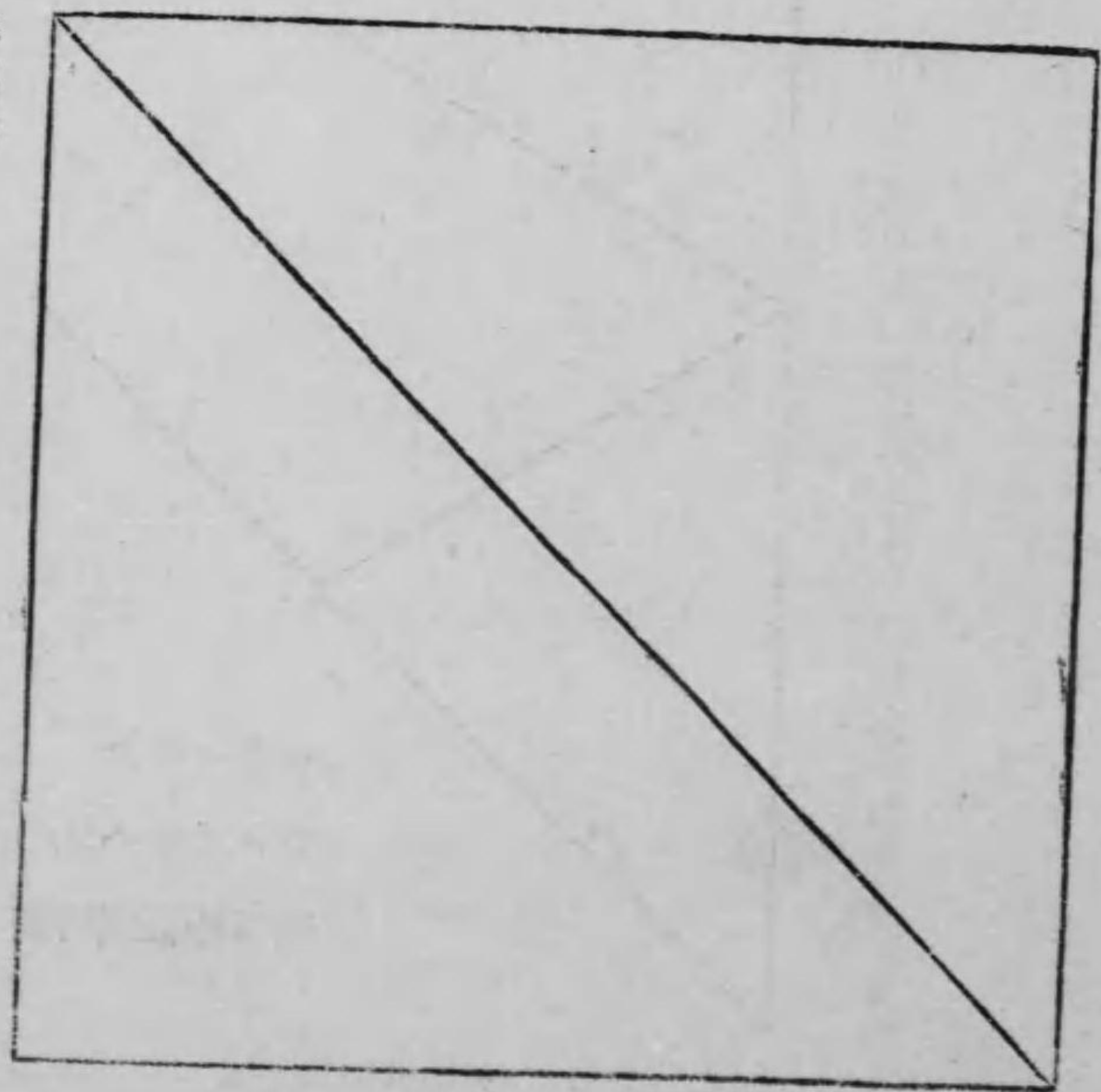


第二百六十五圖

○おくまづゝみ

△をりはじめ

二つにをる。



小笠原流折形



第二百六十三圖

手遊づゝみ (乙の形)

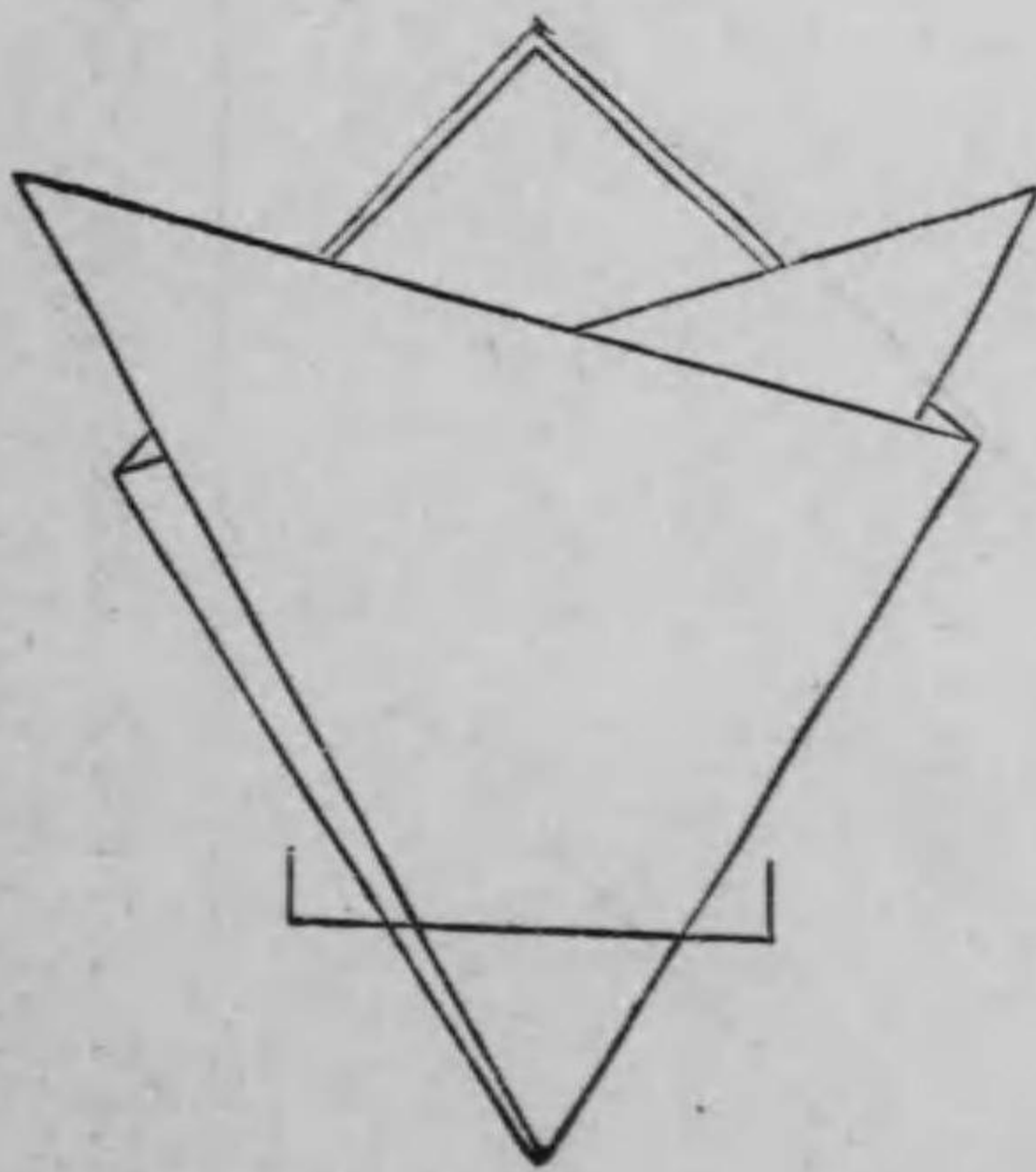
△をりあがり

丁一、神前御供米包 奉書紙、伊豫奉書など、美濃直紙にても、神前に供へてのちいたゞく物の包形なり。

第二百六十四圖

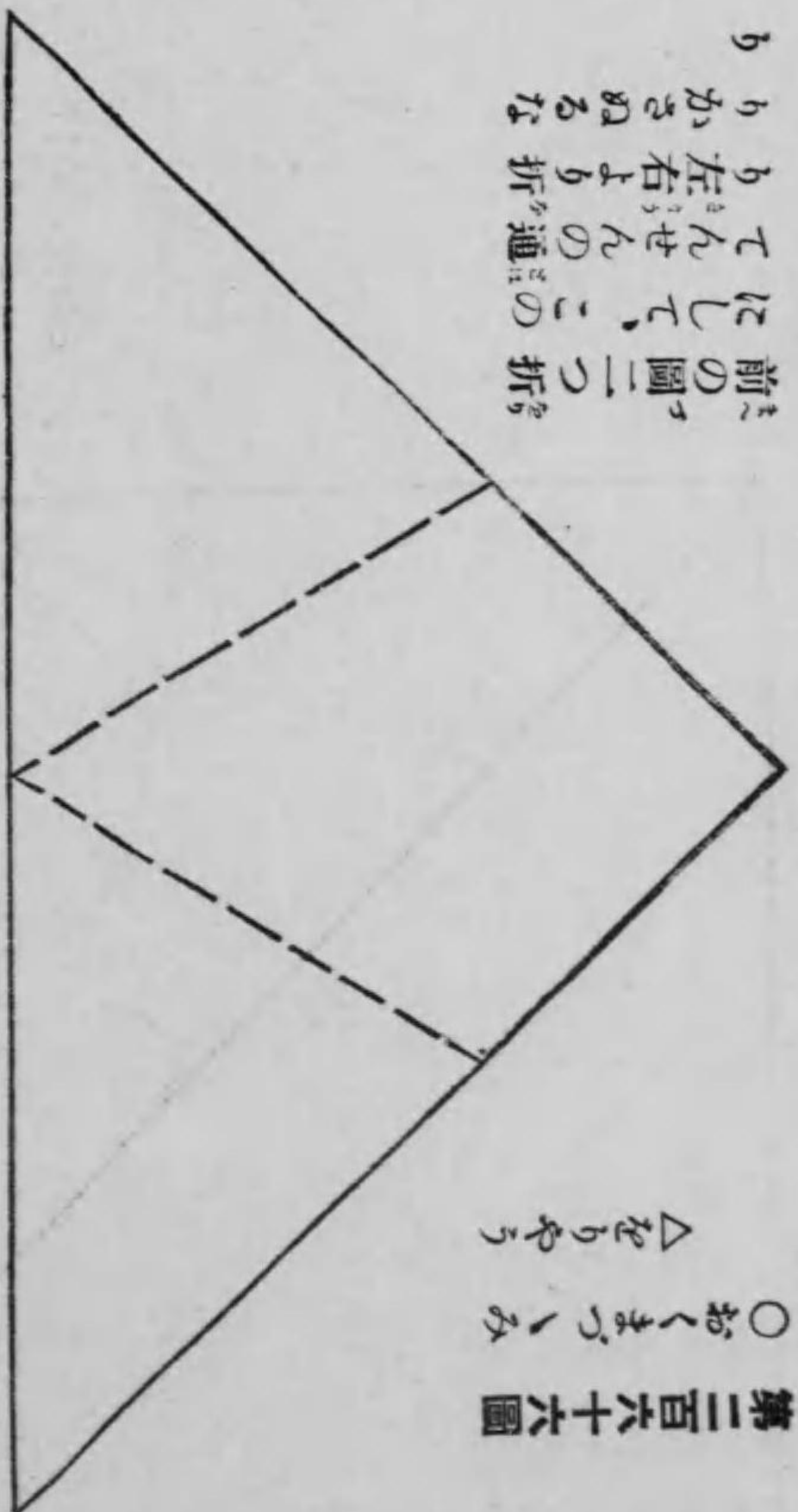
○神前御供米包

△折上り





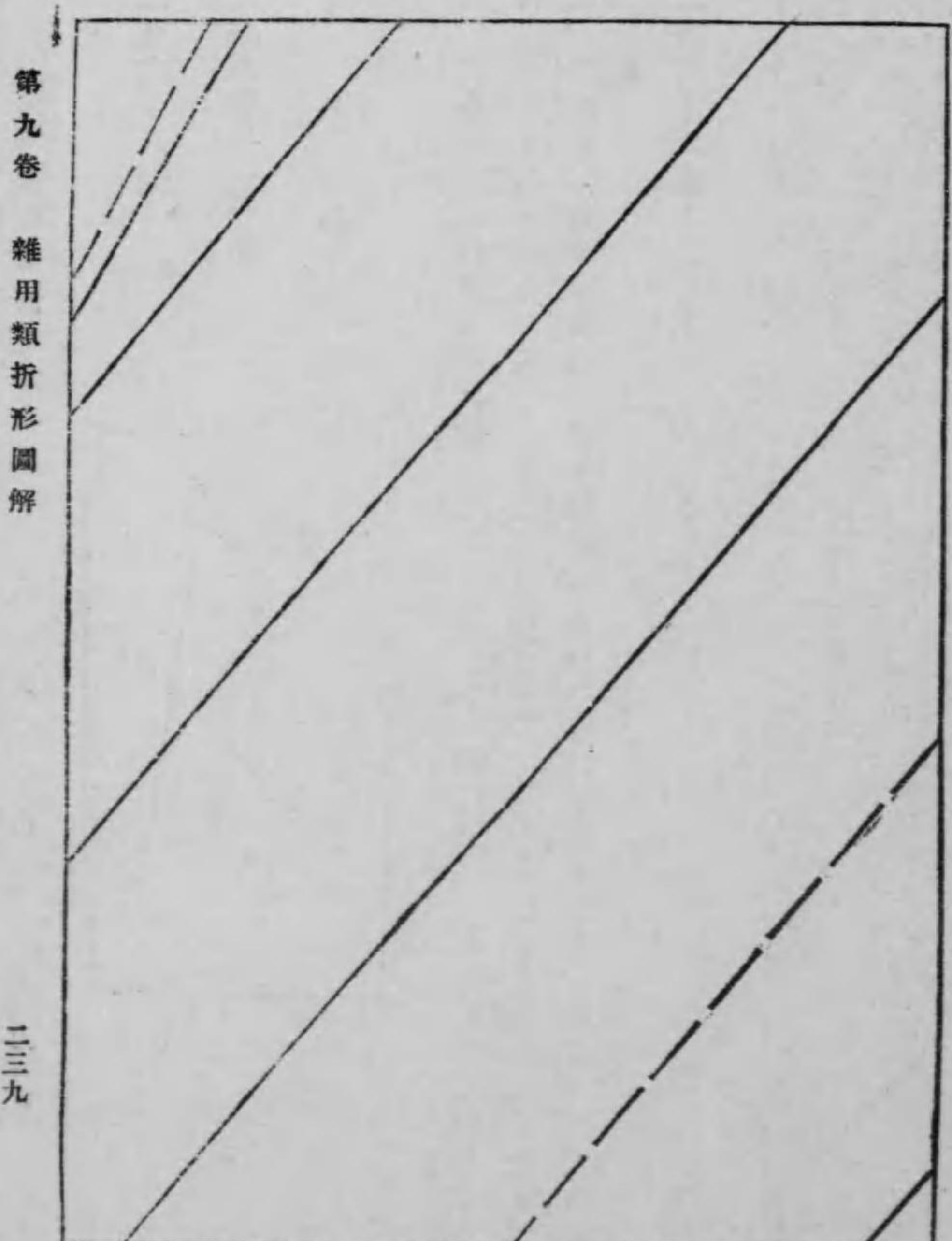
小笠原流折形
 前の圖二つ折
 にしてこの
 てんせんの通
 り左右より折
 りかさぬるな
 り



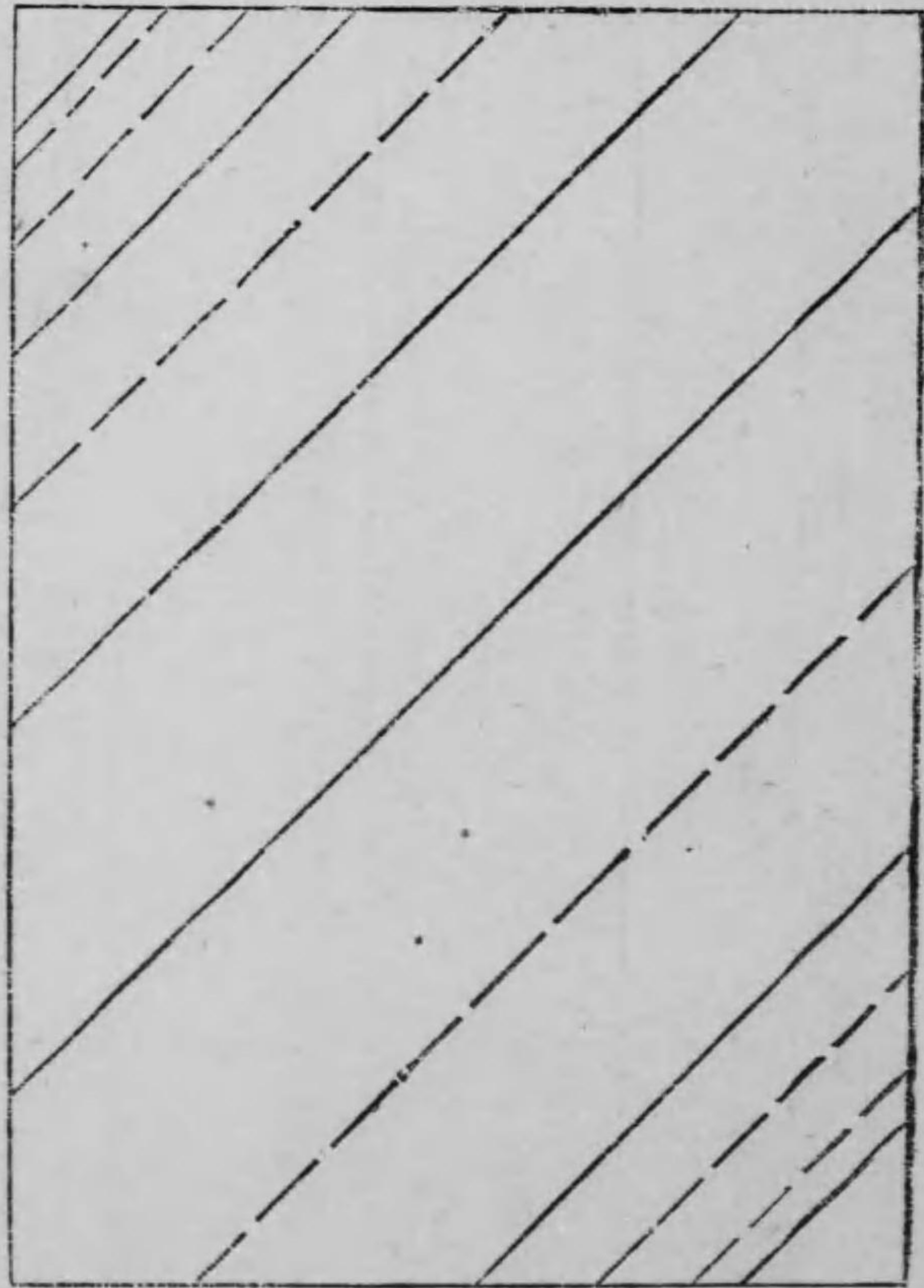
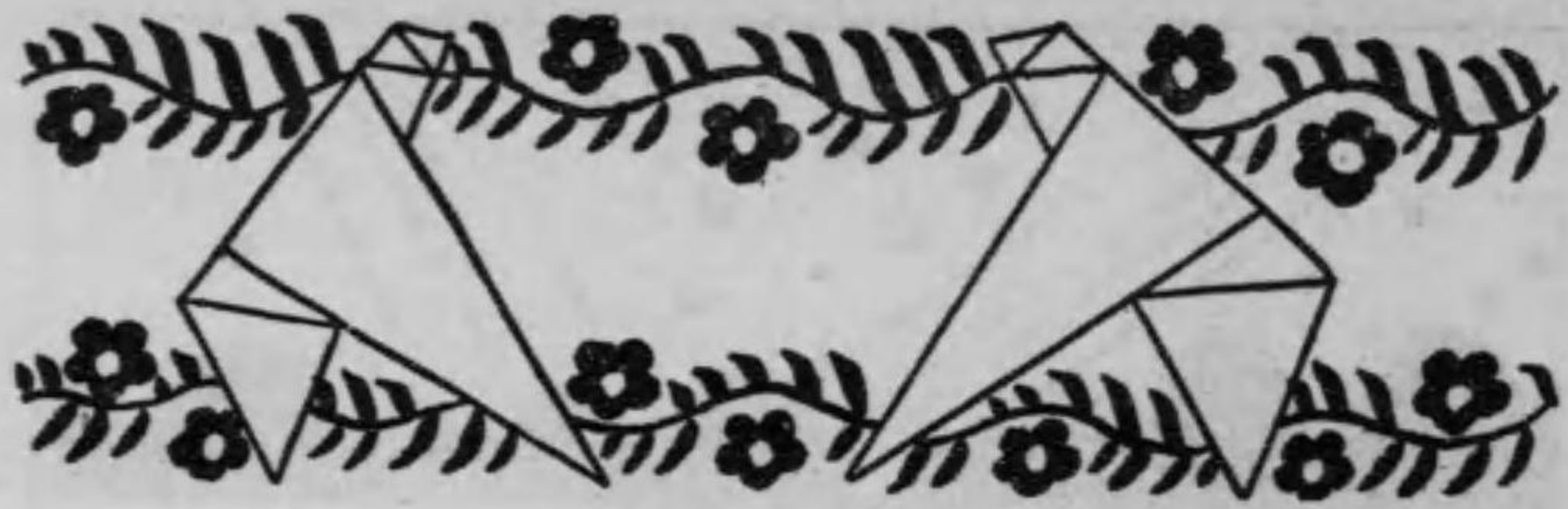
二三六
 ○おくまがみ
 △せりやう

十二、丸薬散薬煉薬包 いづれも元包のものを包むなり、白紙かさね上書あるべし。

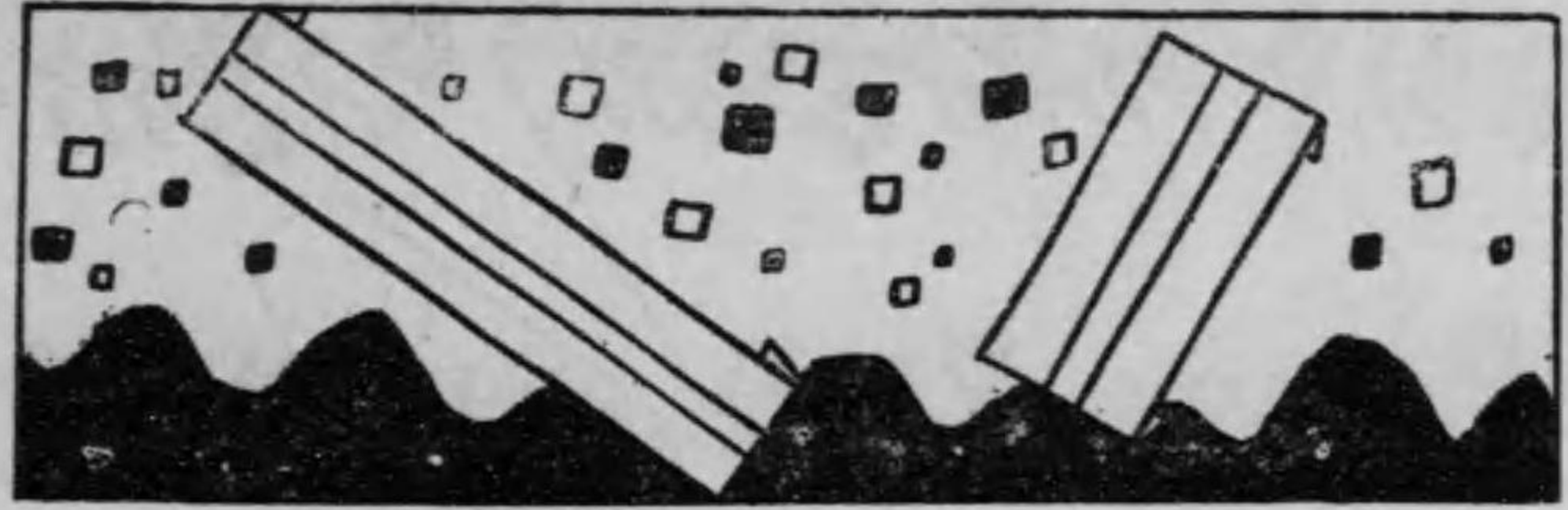
第二百六十七圖 丸薬散薬煉薬包 △折様、かたがみ



第九卷 雑用類折形圖解



第二百七十圖 こんぶ包 △折様



第二百六十八圖

丸藥散藥煉藥包

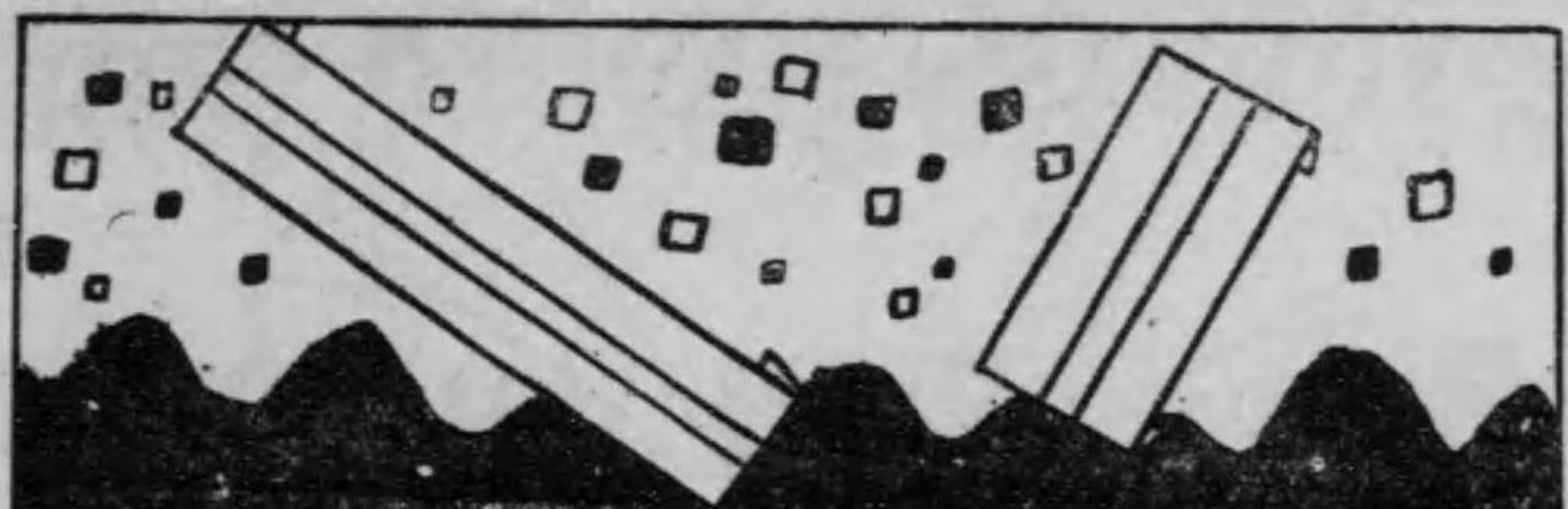
△をりあがり



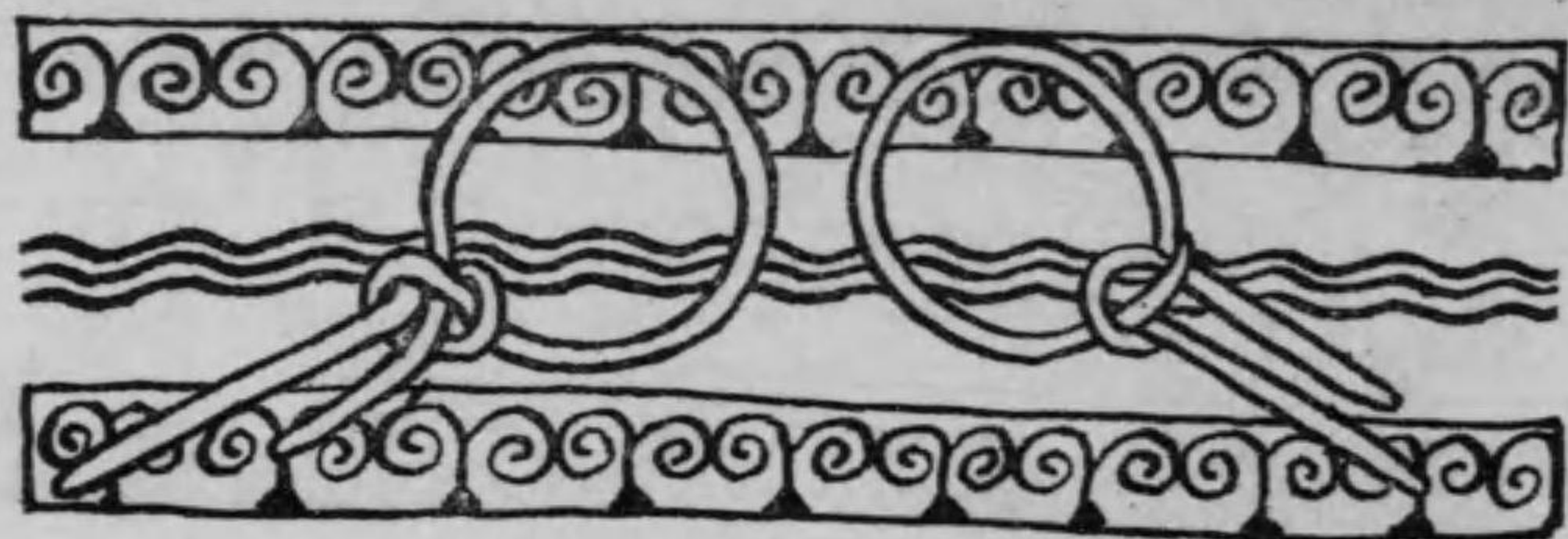
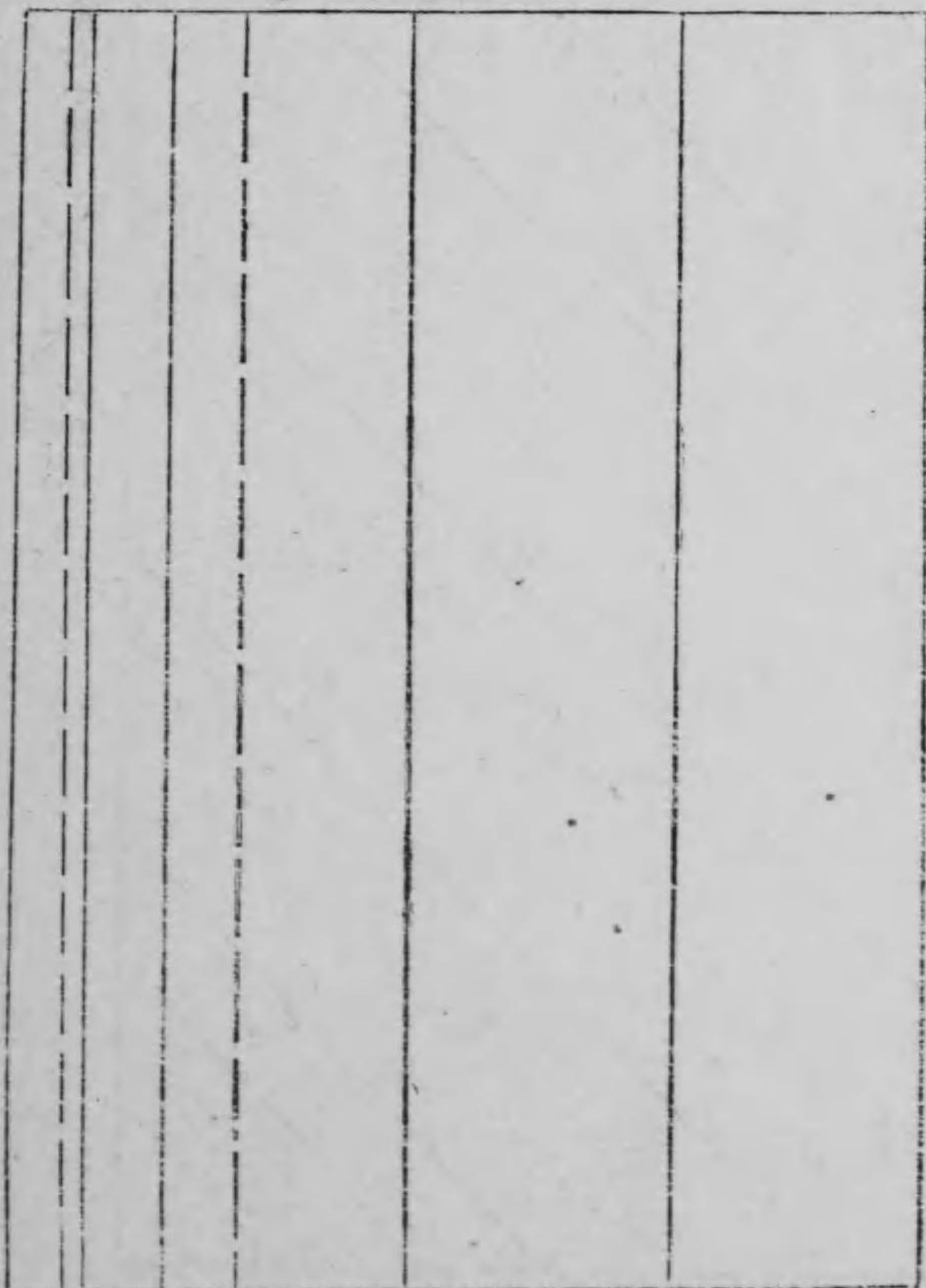
十三、昆布包 これは寺院に物を送るとき、のし鯨に替へて添ておくる包形なり、昆布は葉子昆布を細くたちて三枚にても、折形大ぶりの時には五枚も入るなり、水引は、白、紅、黄紺水引などにて細結、もろわなにも結ぶべし、かざり目だ、ぬをよしとす。

第二百六十九圖 こんぶつゝみ △をりあがり

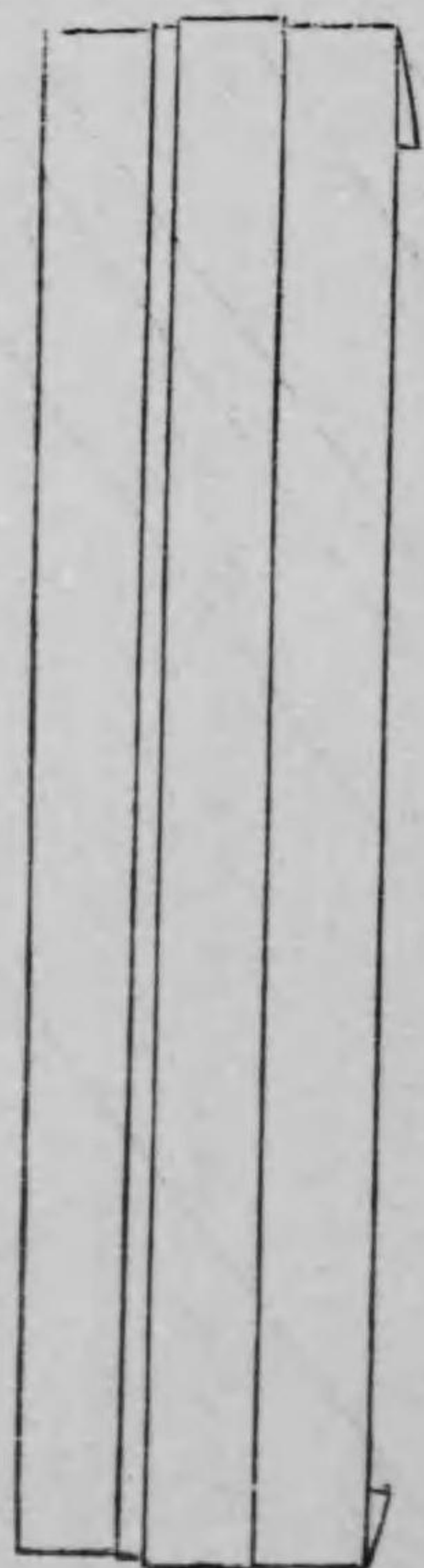




小笠原流折形
 十四、掛字掛繪包 白紙がさね、金銀水引かたわな結にてよろし。
 第二百七十一圖 ○掛物包をりやう かた紙



第二百七十二圖 かけもの包 △をりあがり

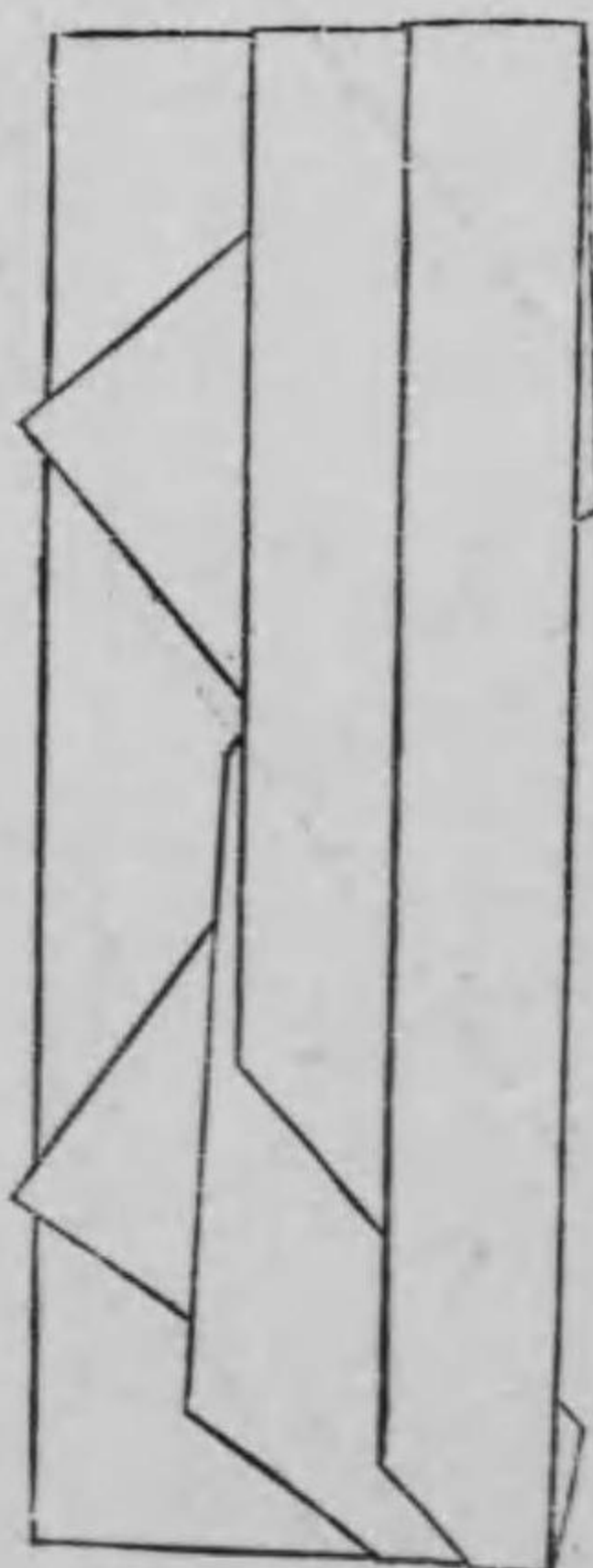


十五 はさみ包 下包あるべし、紙はあつ紙類をつかふべし。

第二百七十三圖

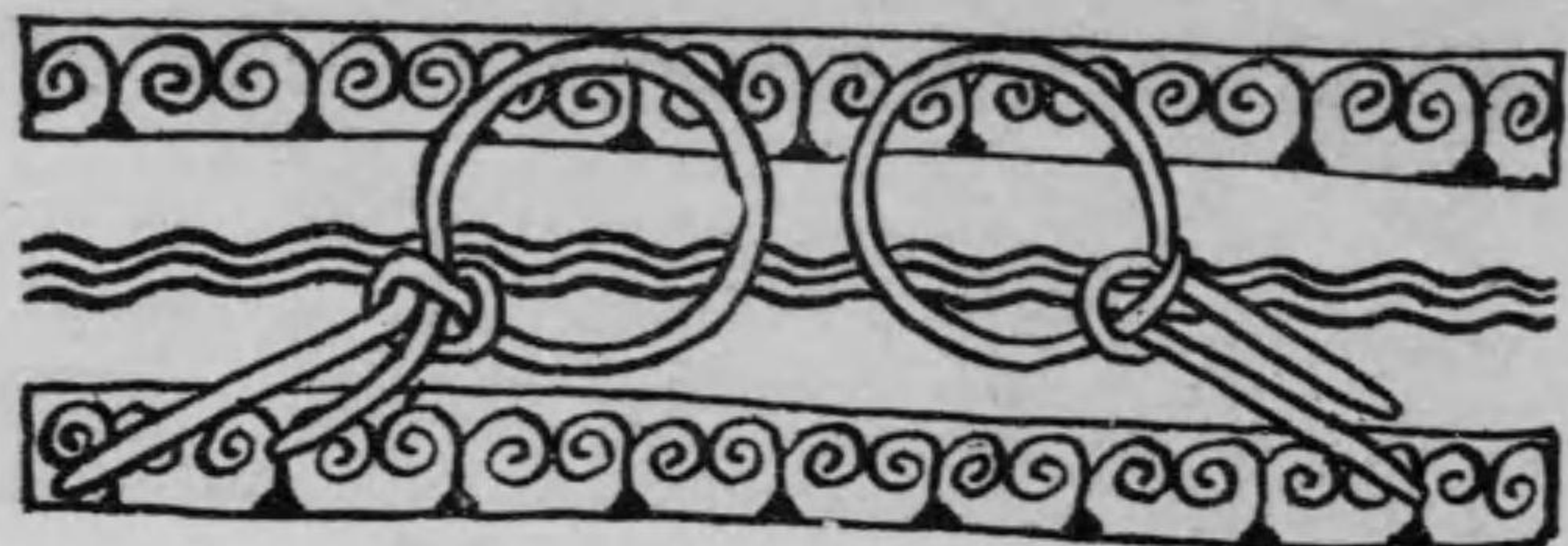
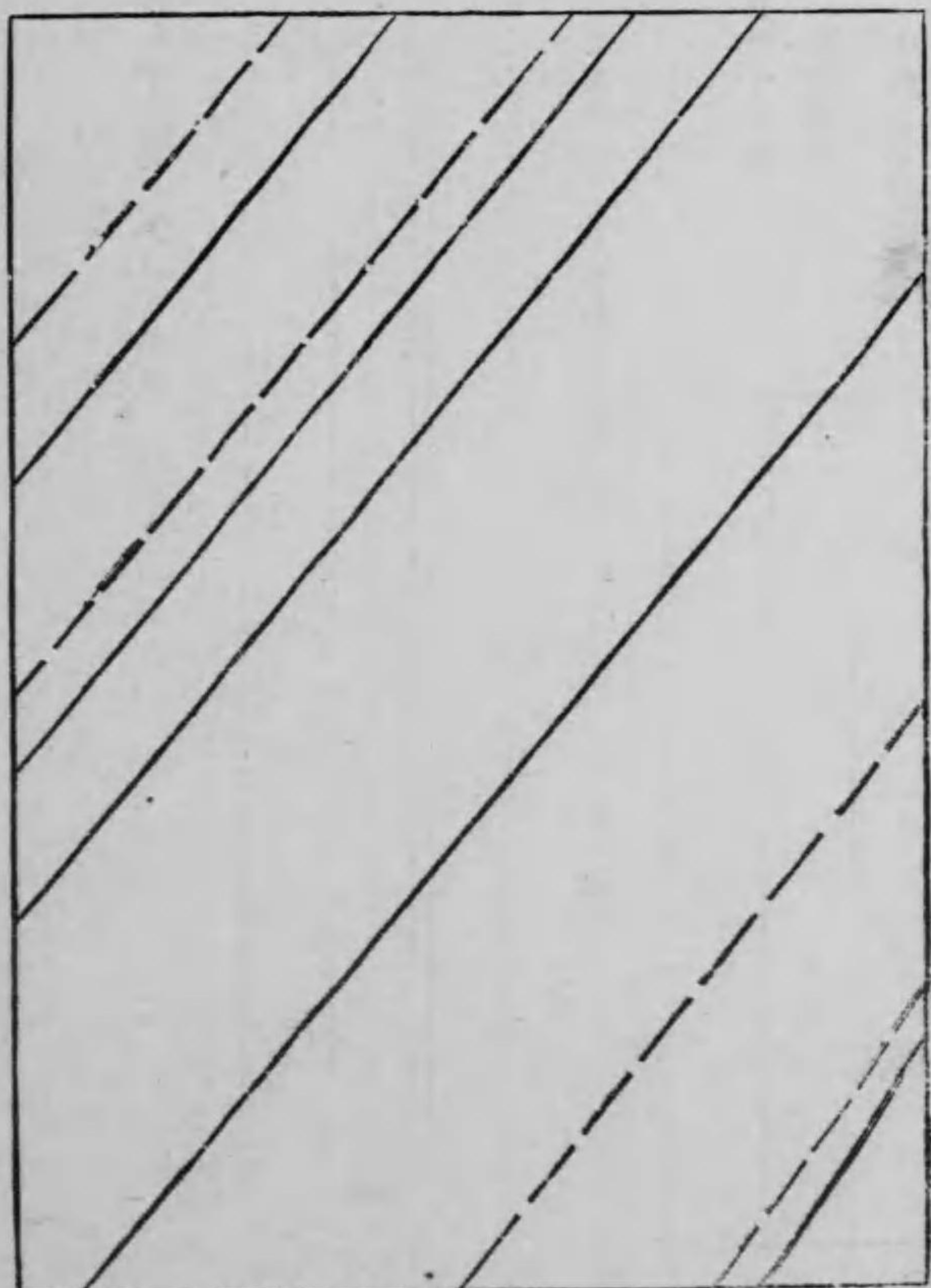
○はさみづゝみ

△をりあがり





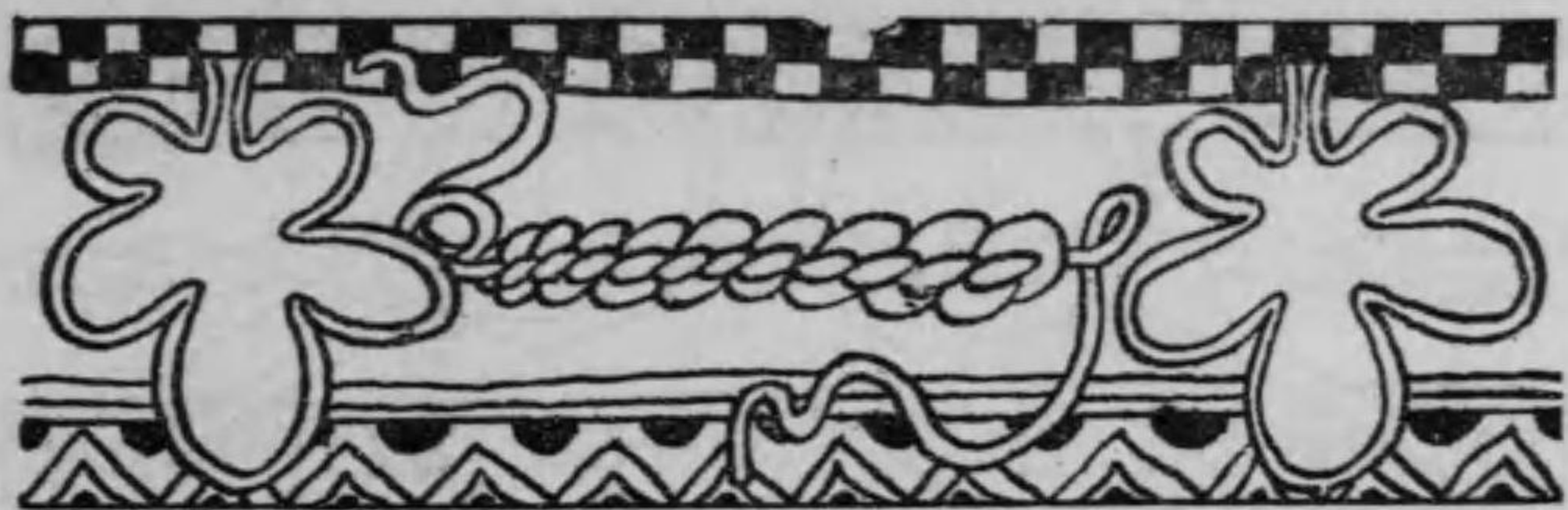
小笠原流折形
第二百七十四圖 はさみ包 △をりやう



第十卷 伸あはび包折形圖解

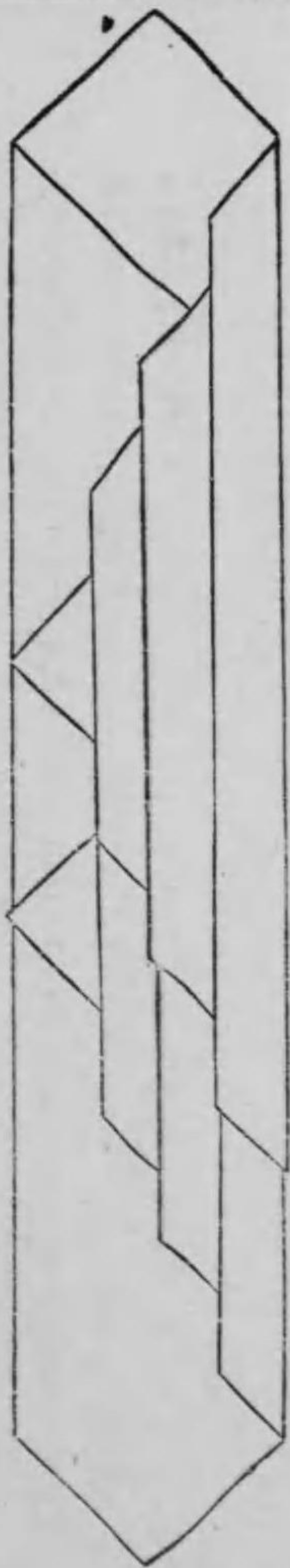
一、伸炮包「眞の形」(甲) 御献上品に御用の包形なり、大尺檀紙がさねに金銀水引、寶珠結にて飾る、本製の伊勢のしあはび包折形の上下に少宛出るほどの長さにて五本も七本も入るなり、又菊つくり花などを共にさし添ることもあるなり、菊結をもて飾ることもあり。

『のし炮の本製は、其品すくなくし、伊勢の神宮にて御用の物あり、其地方にては『伊勢松坂新町腰節問屋魚齋商店』に注文すれば壹把十本たばねのもの貳把以上なれば販賣するなり○本製は高價なり炮の價によりて時價の高下あり。』



小笠原流折形

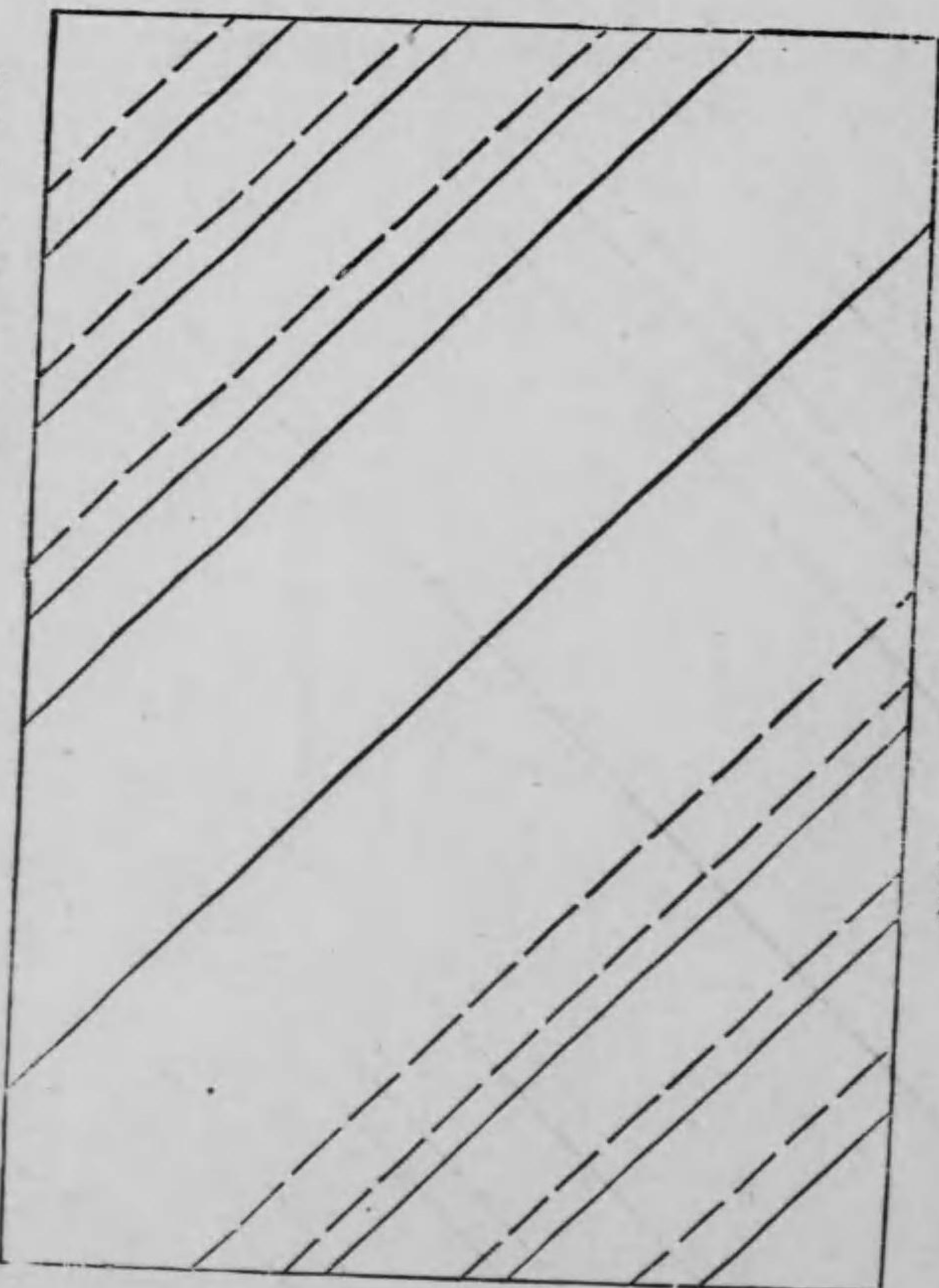
第二百七十五圖 のしあはび包 (眞の形) (甲) △折あがり



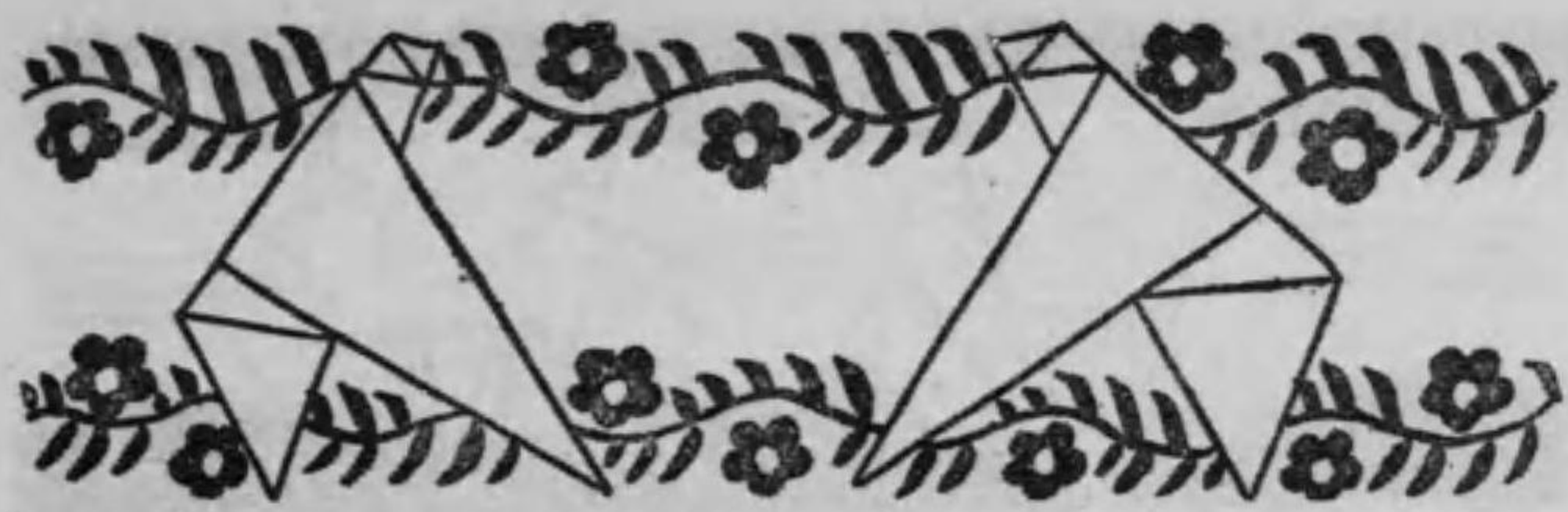
○寸法は添ふる物品のおほきさによりて定むるなり。普通尺一寸餘幅六寸餘の絹布地のたゝみたるたんものならば、のし蛇包のたけ一尺三寸餘は、二寸四分位に折形したるをつかふべし。



第二百七十六圖 のしあはび包 (眞の形) (甲) △折様



第十卷 伸あはび包折形圖解



第二百七

十七圖

のし蛇

包

(真の形)

(乙)

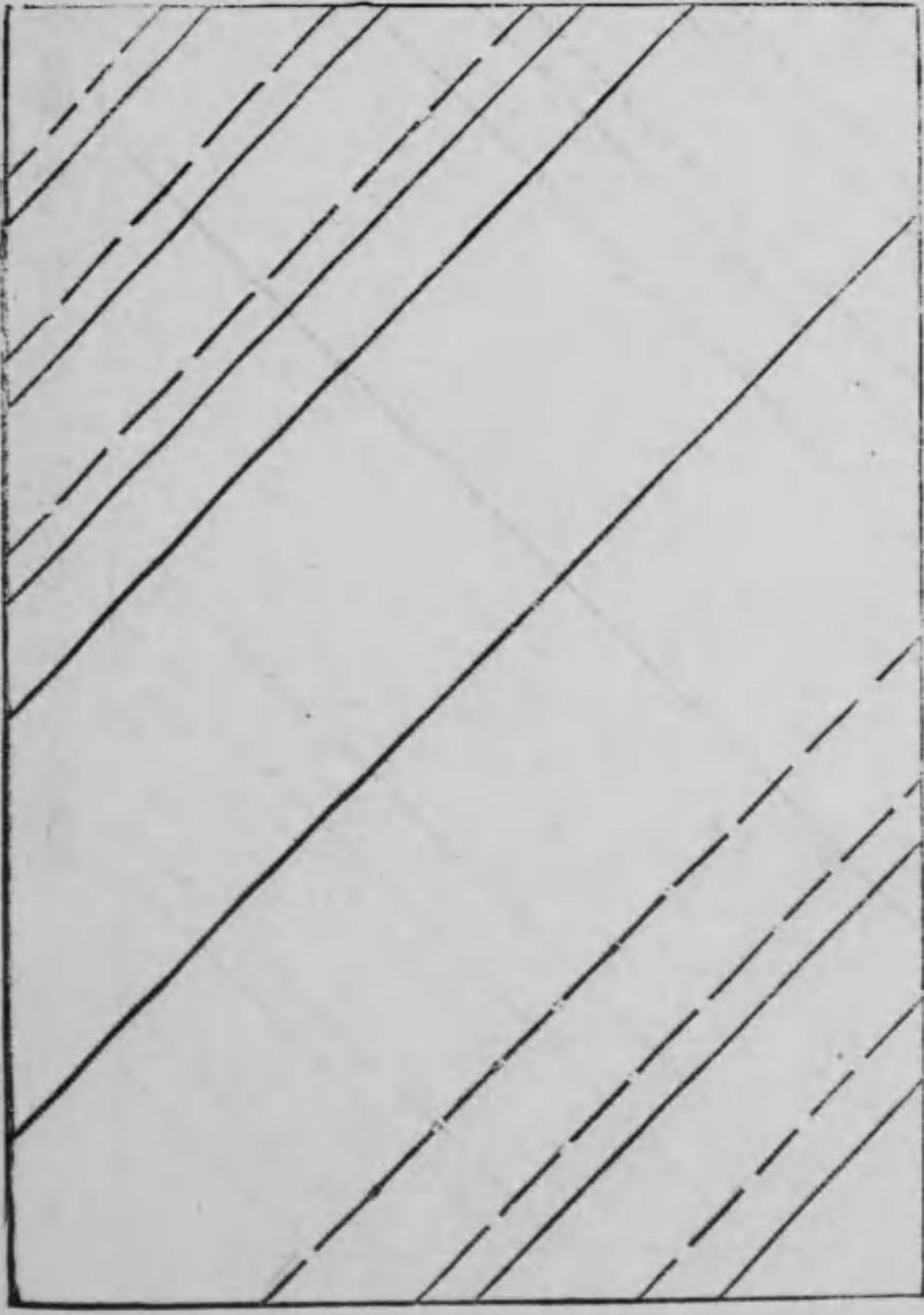
△をりや

う

小笠原流折形

二、同 (乙) 宮家献上品に用る包形なり、中尺だんしかさね、金銀水引あはび結にてかざる、白紅水引つねの事なり、伊勢長鯨五本入る。

二四八



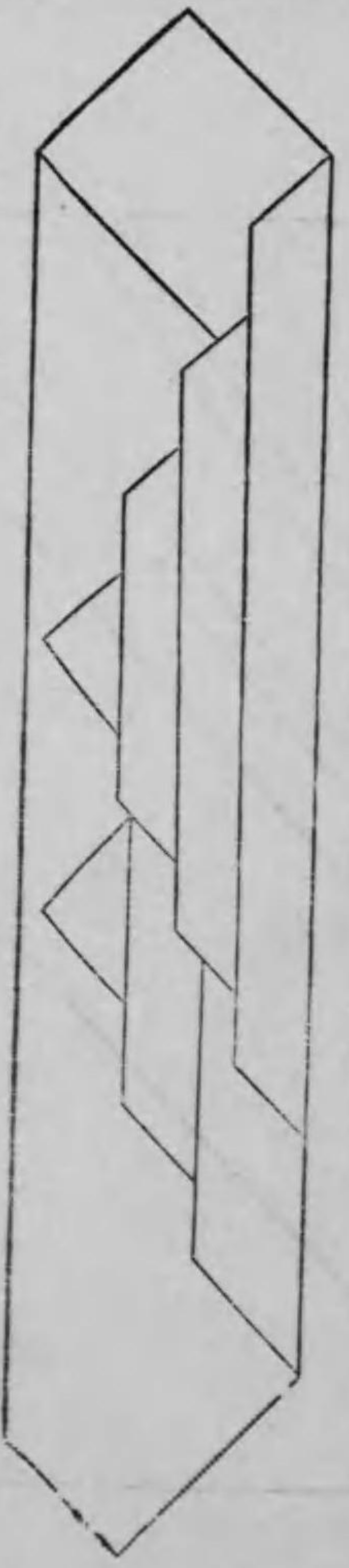
第二百七十八圖

のし蛇包

(真の形)

(乙)

△折あがり



三、同 (丙)

高位高官への進物に添る、色紙かさねにて金赤銀赤水引蛇結にて飾る、伊勢のし蛇三本入る、中を結ぶ水引は三把宛を常とす。

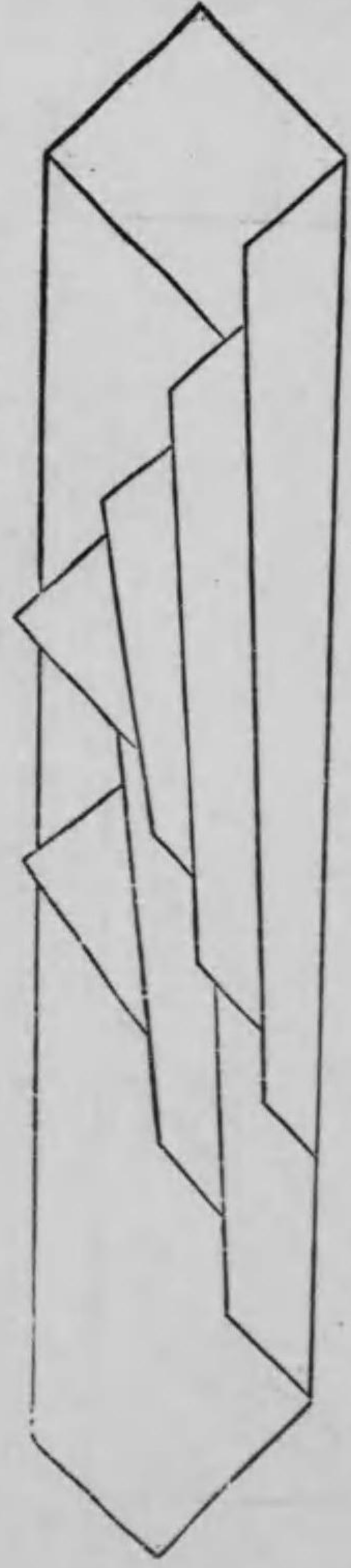
第二百七十九圖

伸あはび包

(真の形)

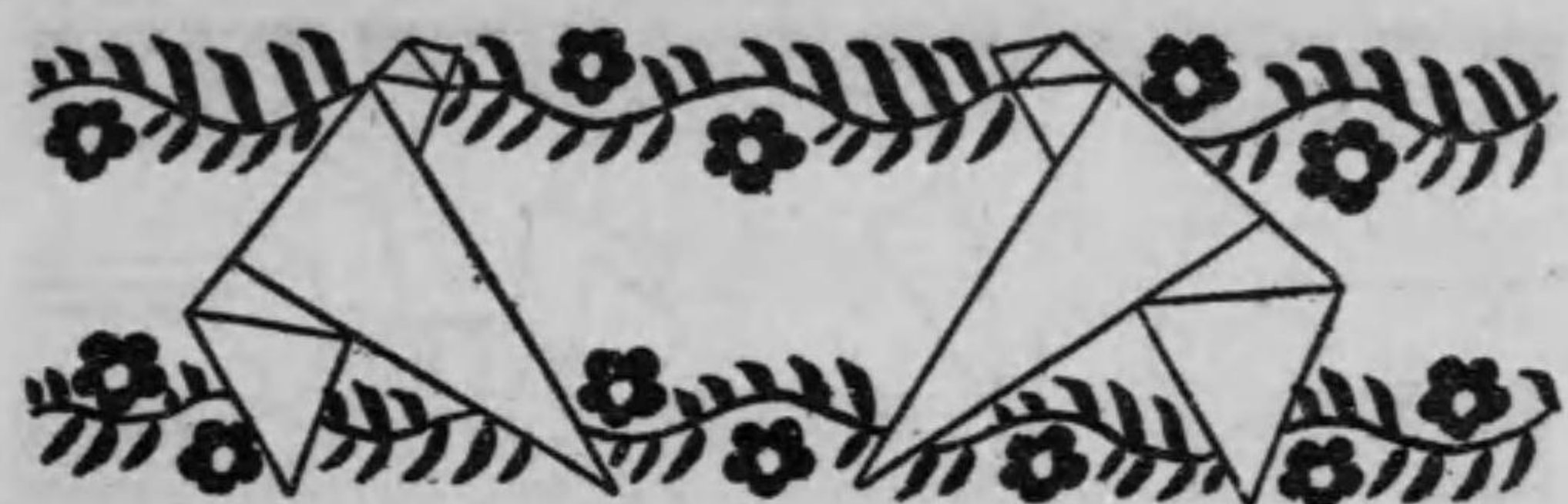
(丙)

△をりあがり

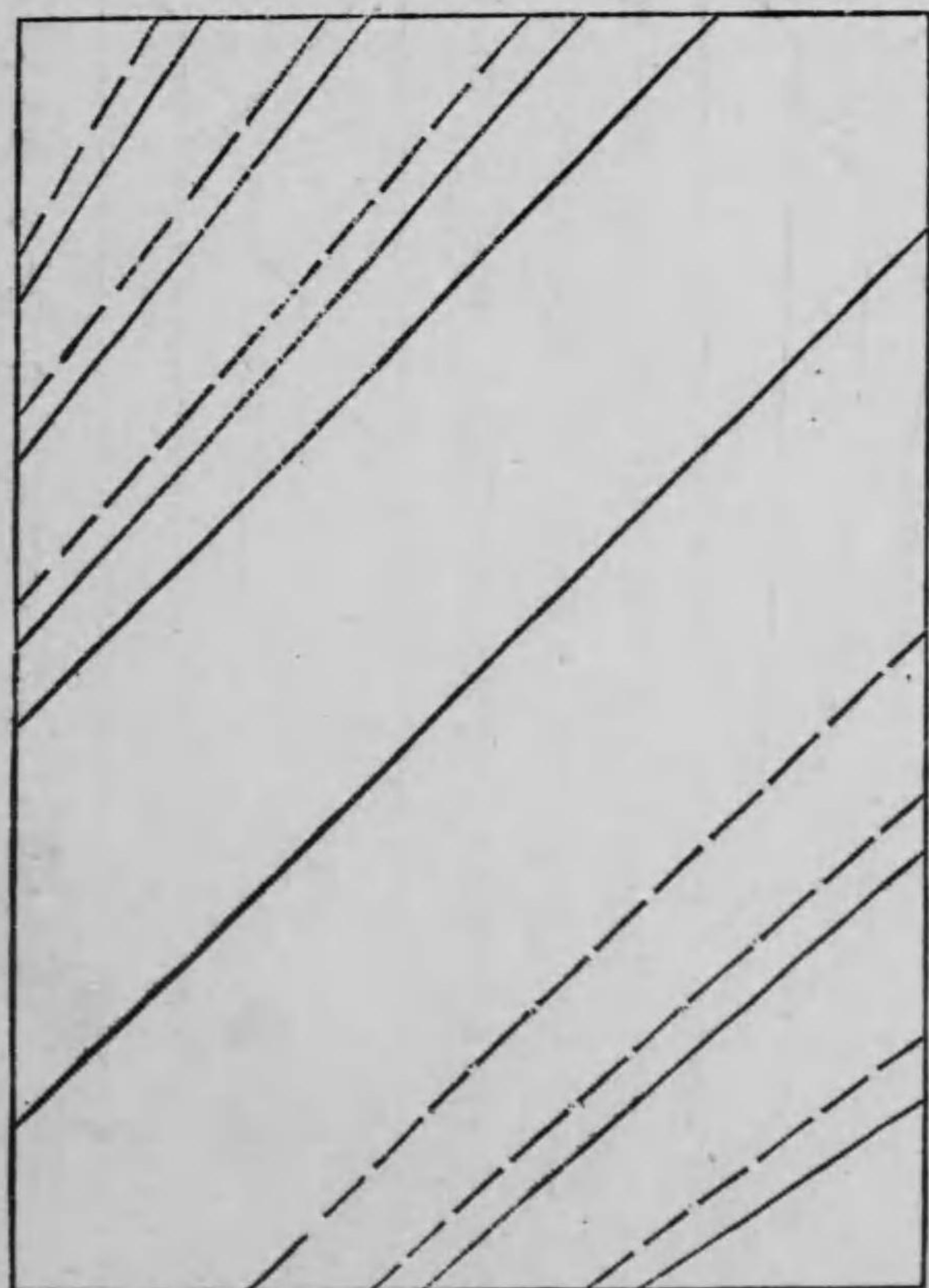


第十卷 伸あはび包折形圖解

二四九

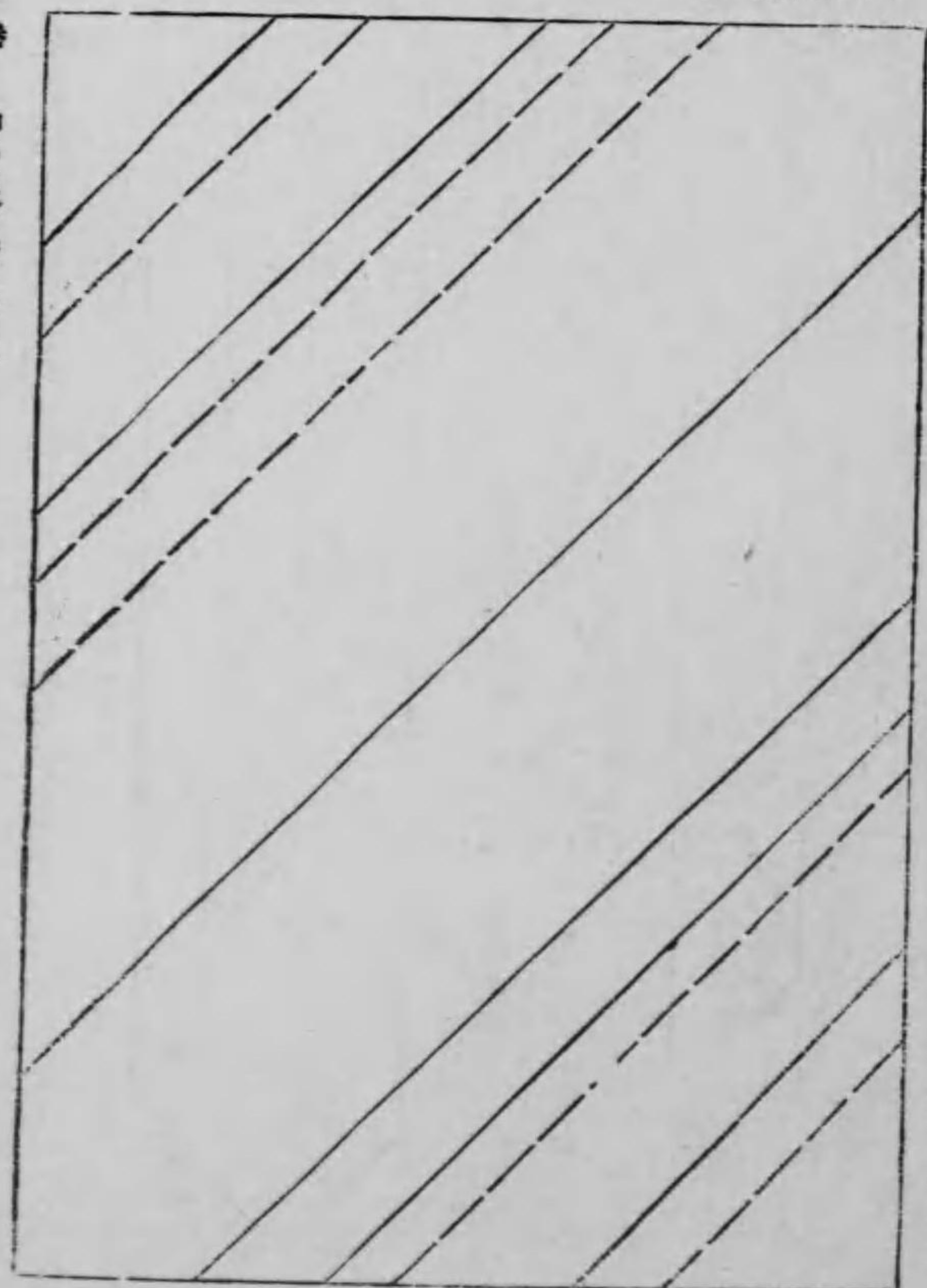


小笠原流折形
第二百八十圖 伸あはび包 (眞の形) (丙) △をりやう



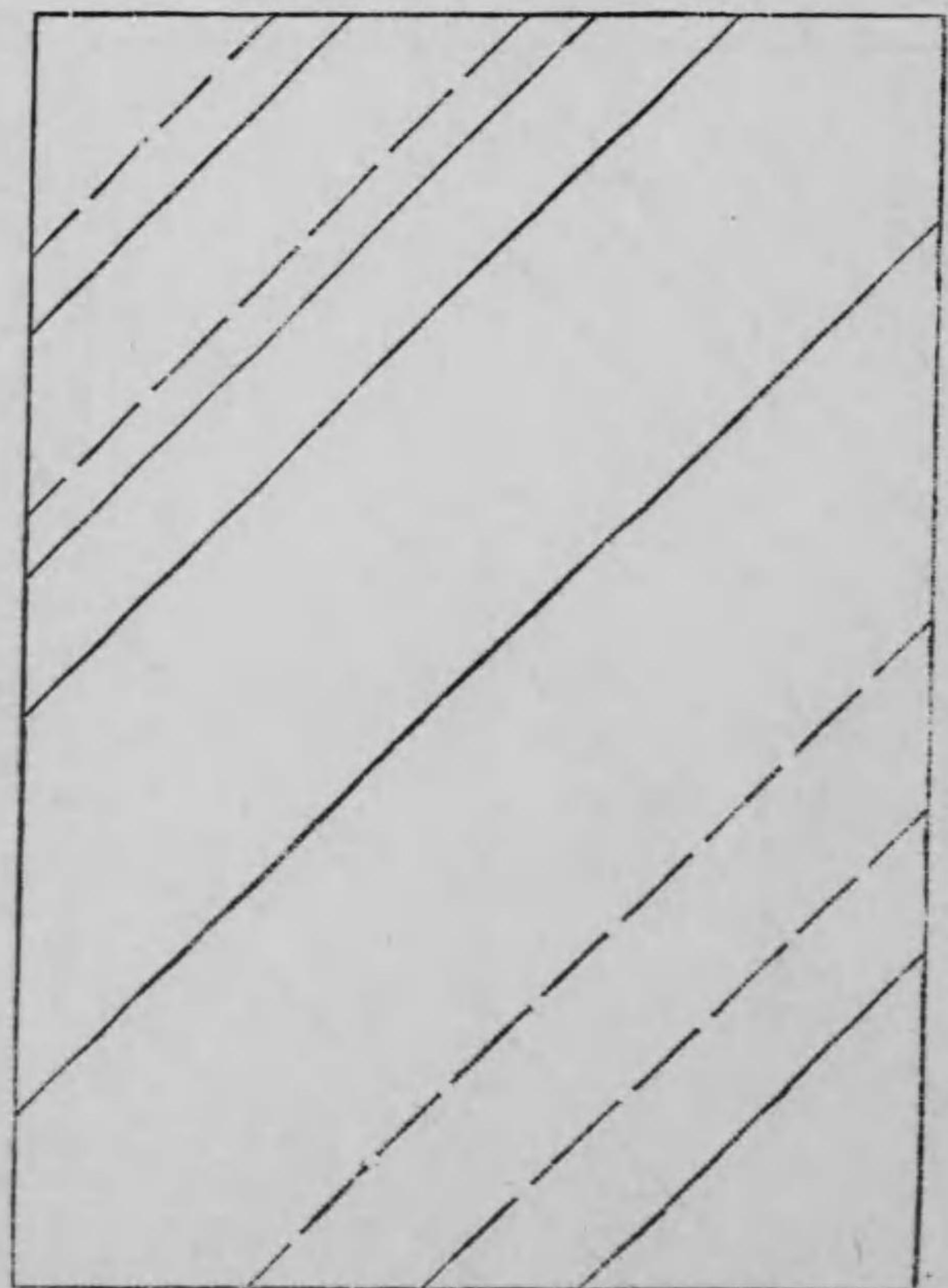
四、同「行の形」(甲) 同位の送物にそふる、同輩にても敬ふ方に送る時の包形なり
大廣奉書、紅がみかさねて、金赤水引にて略したる蛇結をつくる、伊勢のしあは
び三本入
る、中を
結ぶ水引
は二把か
けなり。
第二百八十
一圖
伸蛇づ
み(行の
形)(甲)
△をりやう

第十卷 伸あはび包折形圖解





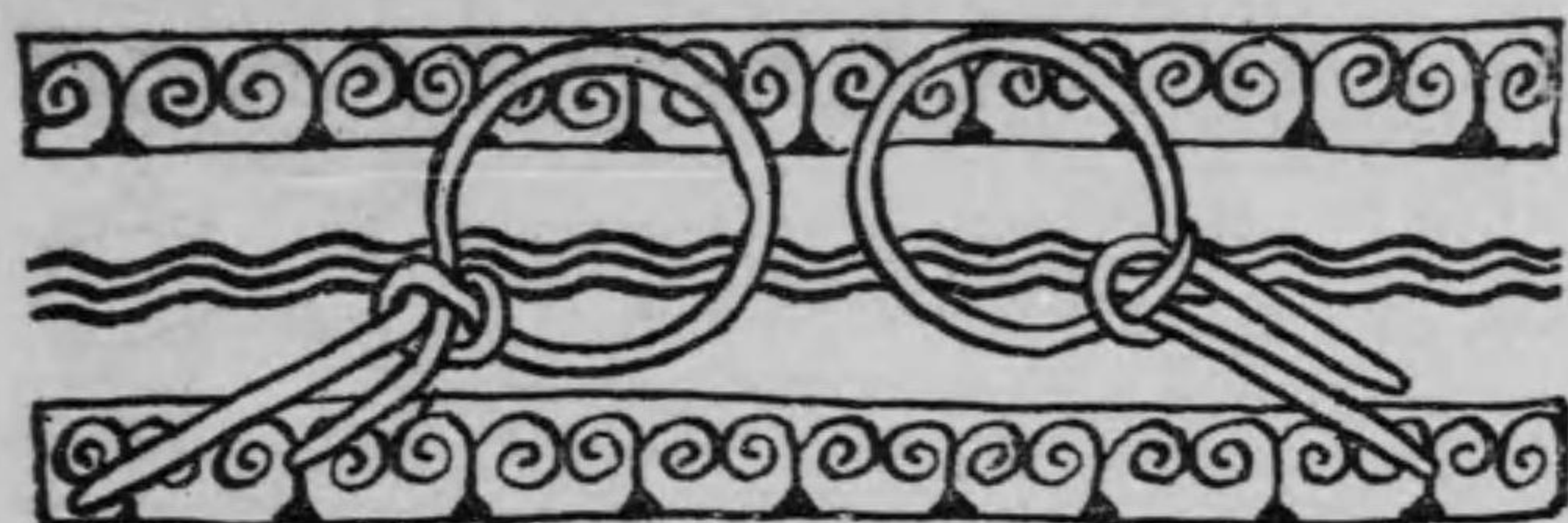
第十卷 伸あはび包折形圖解



第二百八十四圖

伸あはびづゝみ (行の形) (乙)

△折あがり



小笠原流折形

第二百八十二圖

伸あはびづゝみ (行の形) (甲)

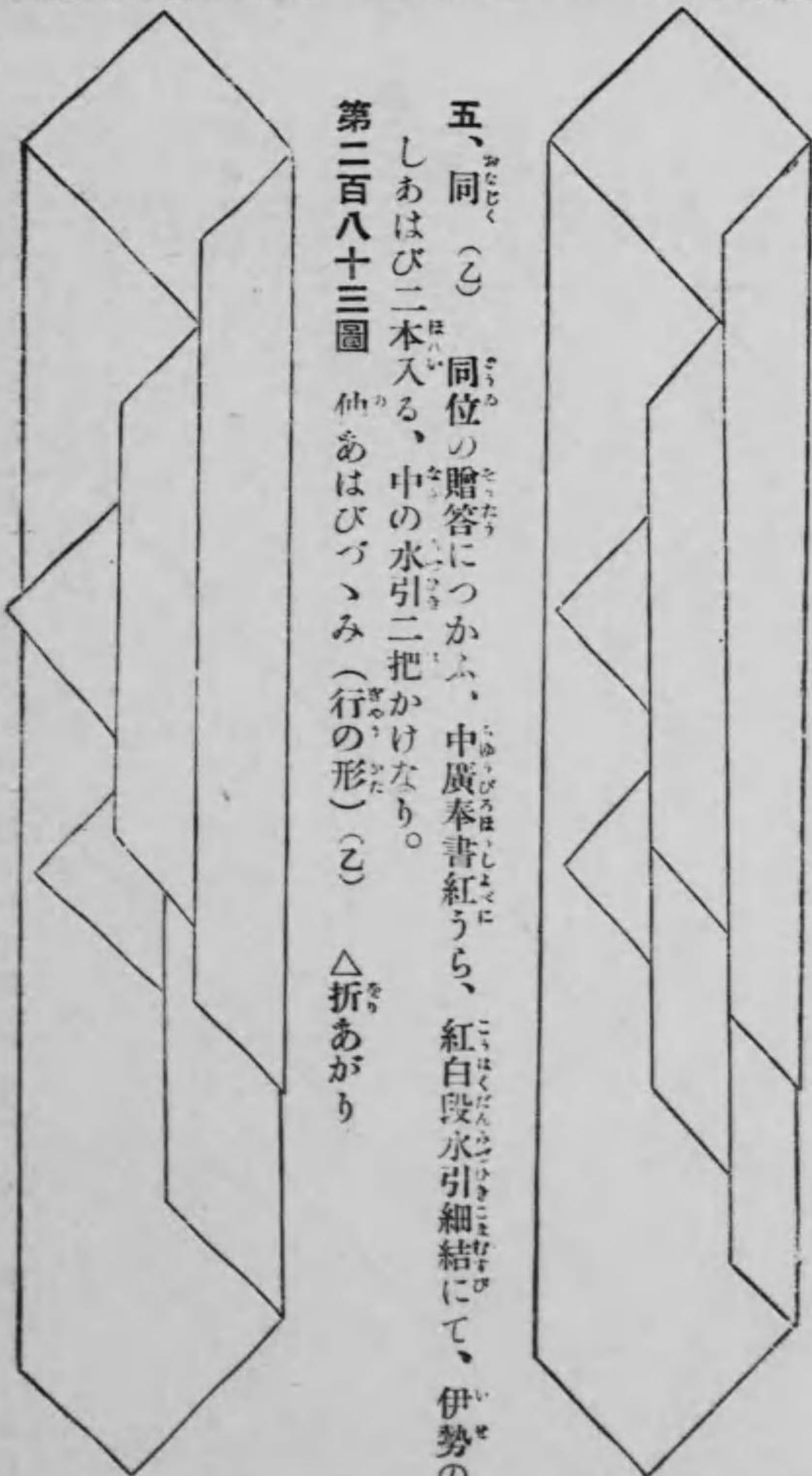
△折あがり

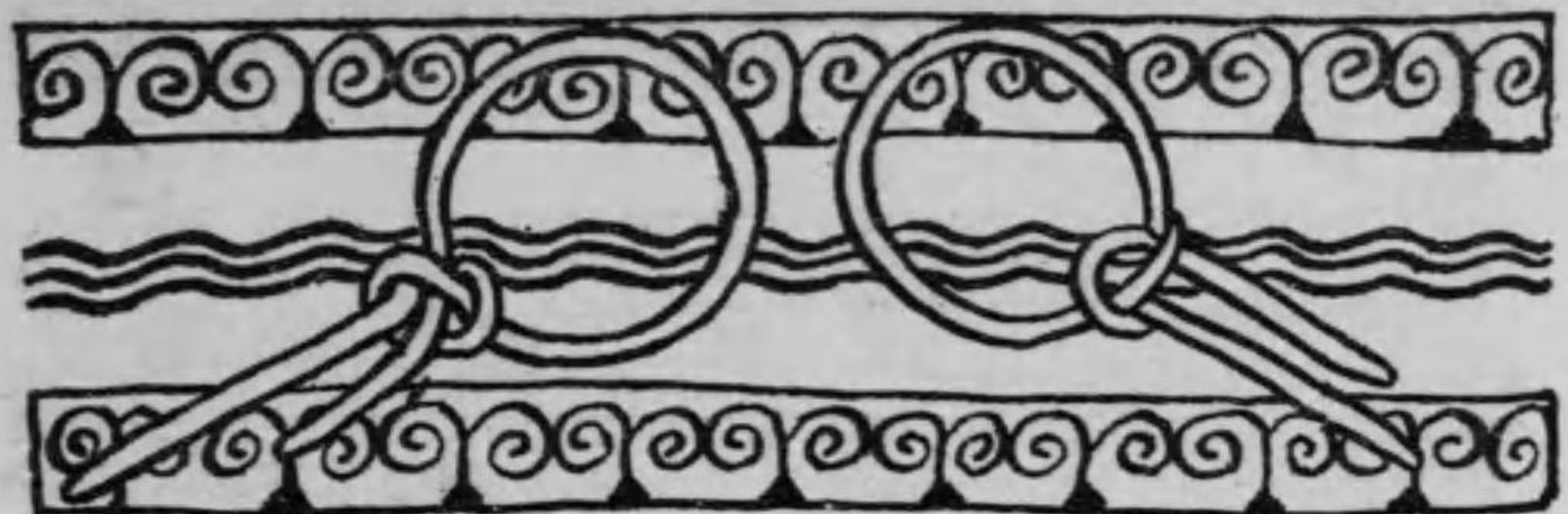
五、同 (乙) 同位の贈答につかふ、中廣奉書紅うら、紅白段水引細結にて、伊勢の
 しあはび二本入る、中の水引二把かけなり。

第二百八十三圖

伸あはびづゝみ (行の形) (乙)

△折あがり





小笠原流折形
二五四

六、同 (丙) 同位にても少しさがる方へ送る包形なり、大奉書がさね、紅白水引、略製のしあはび (はやくひろく鯛のしといふものあり海藻にて製す) 細く截て五本入る。

第二百八

十五圖

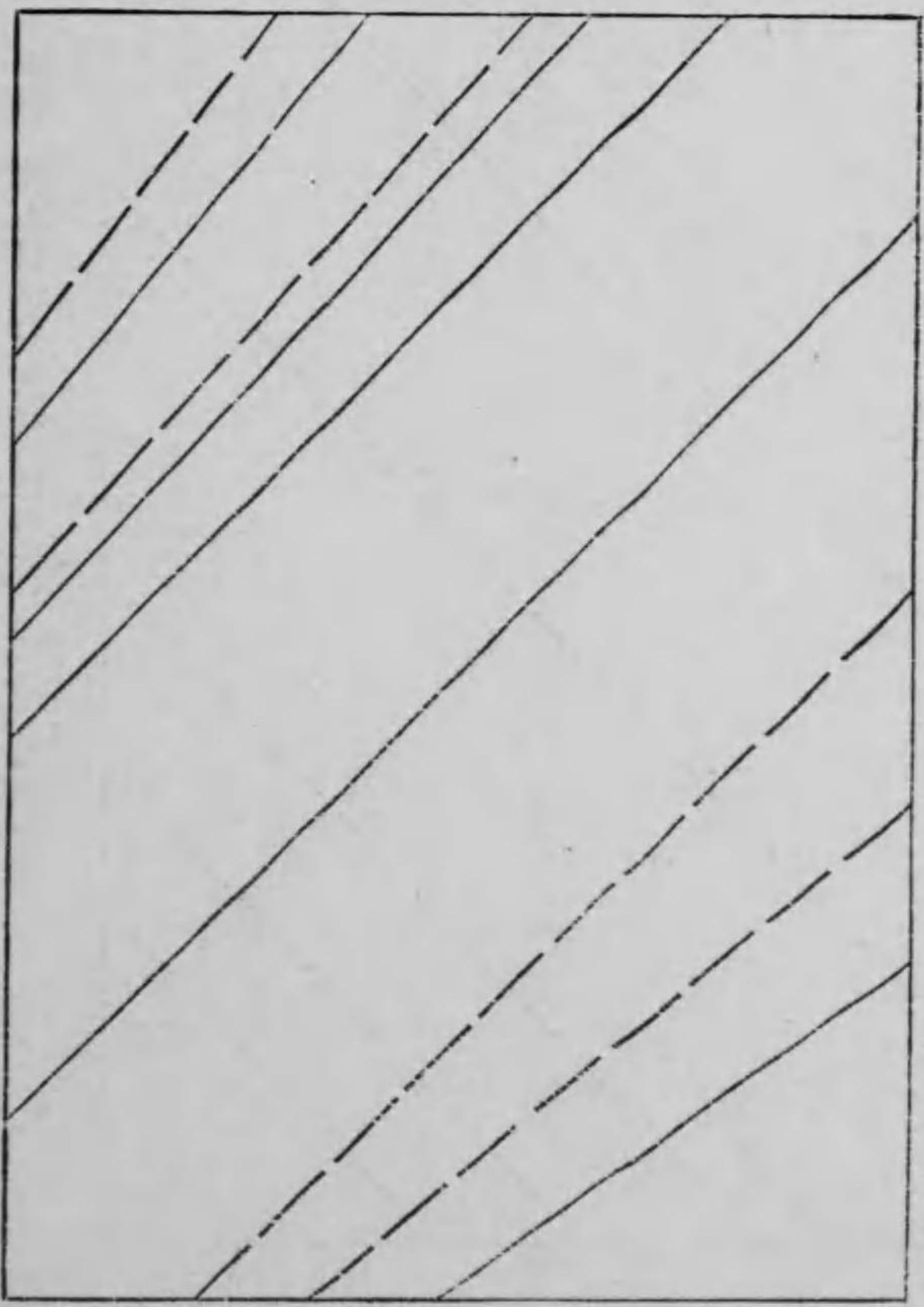
伸咆づ

み

(行の形)

(丙)

△をりや



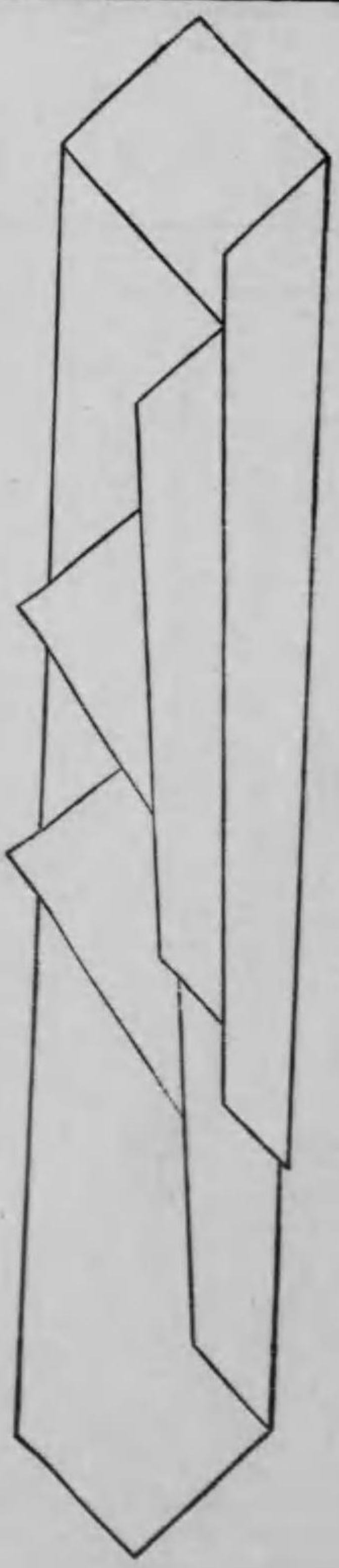
第二百八十六圖

伸咆づみ

(行の形)

(丙)

△をりあがり



七、同 (草の形) (甲) これはさがりたる方につかはす物に添る包形なり。中奉書紅白水引細結にてよろし、略製のしあはび三本入る。

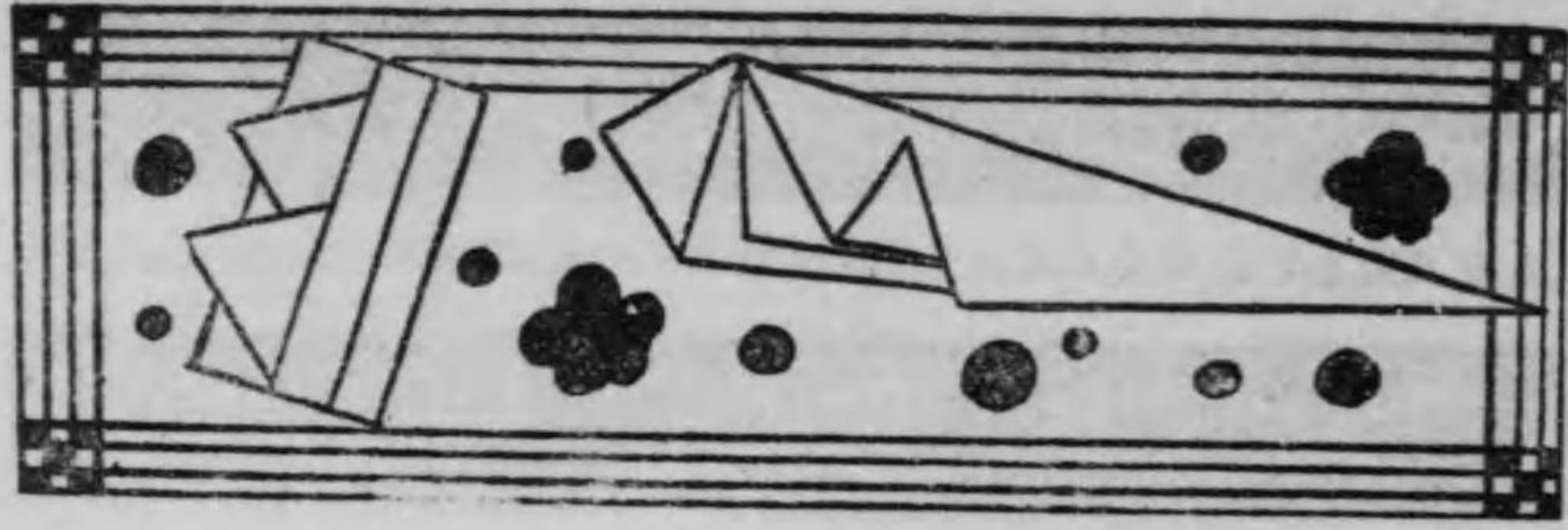
第二百八十七圖

熨斗咆包 (草の形) (甲)

△折あがり



第十卷 伸あはび包折形圖解

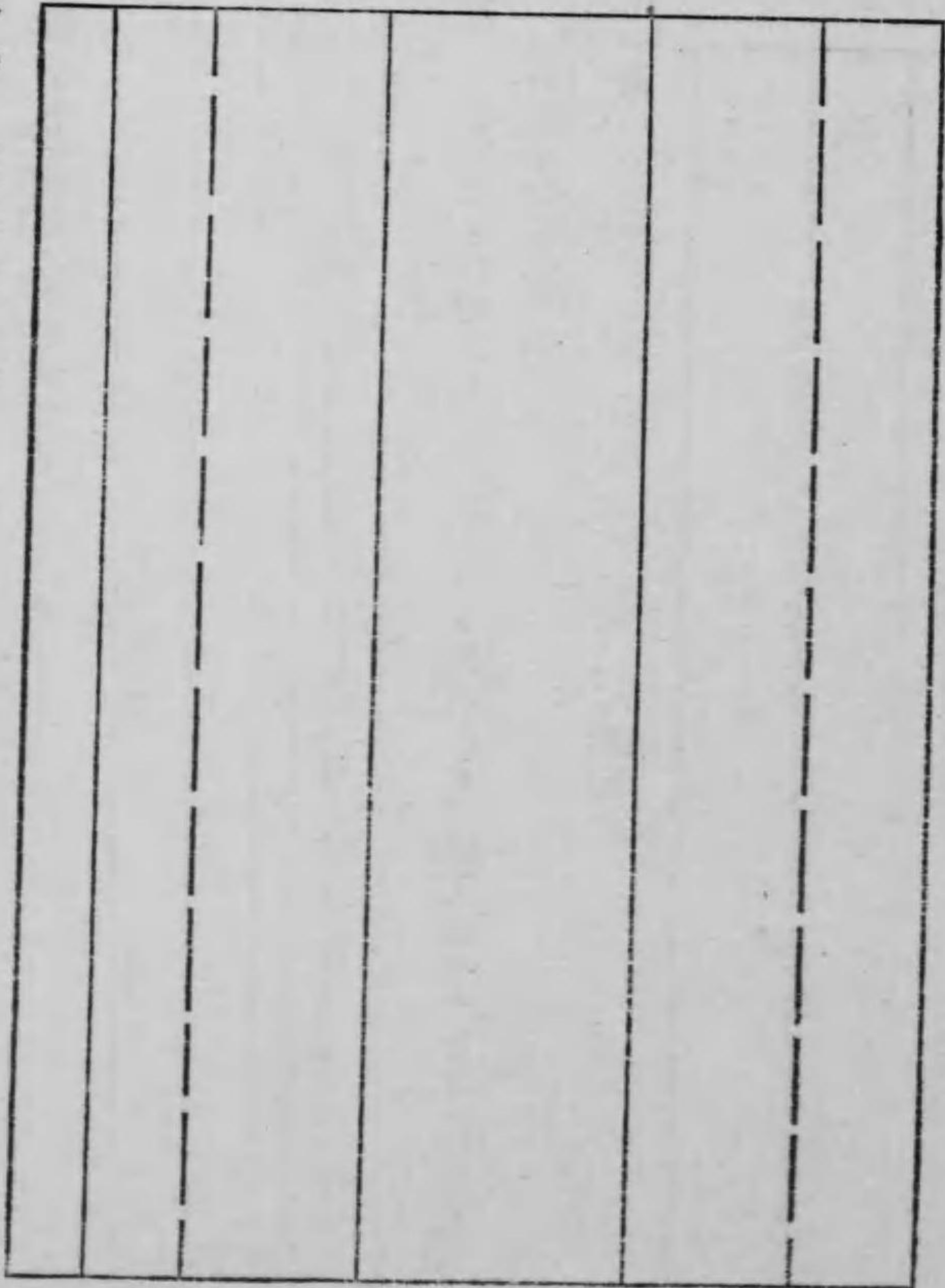


十九圖
 熨斗蛇包
 (草の形)
 (乙)
 △をりや
 う

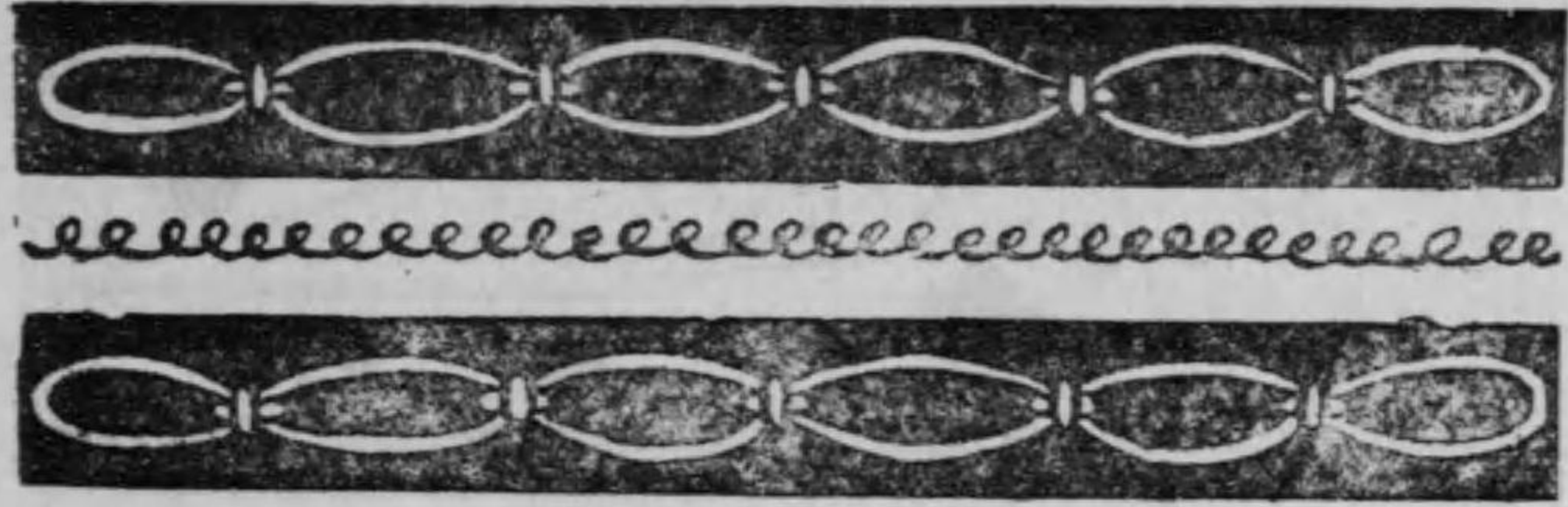
第二百八

八、同 (乙) 右よりも下葎の方へつかはす品にそふる包形なり、小奉書紅白水引にて、略製のしあはび二本入る。

第十卷 伸あはび包折形圖解

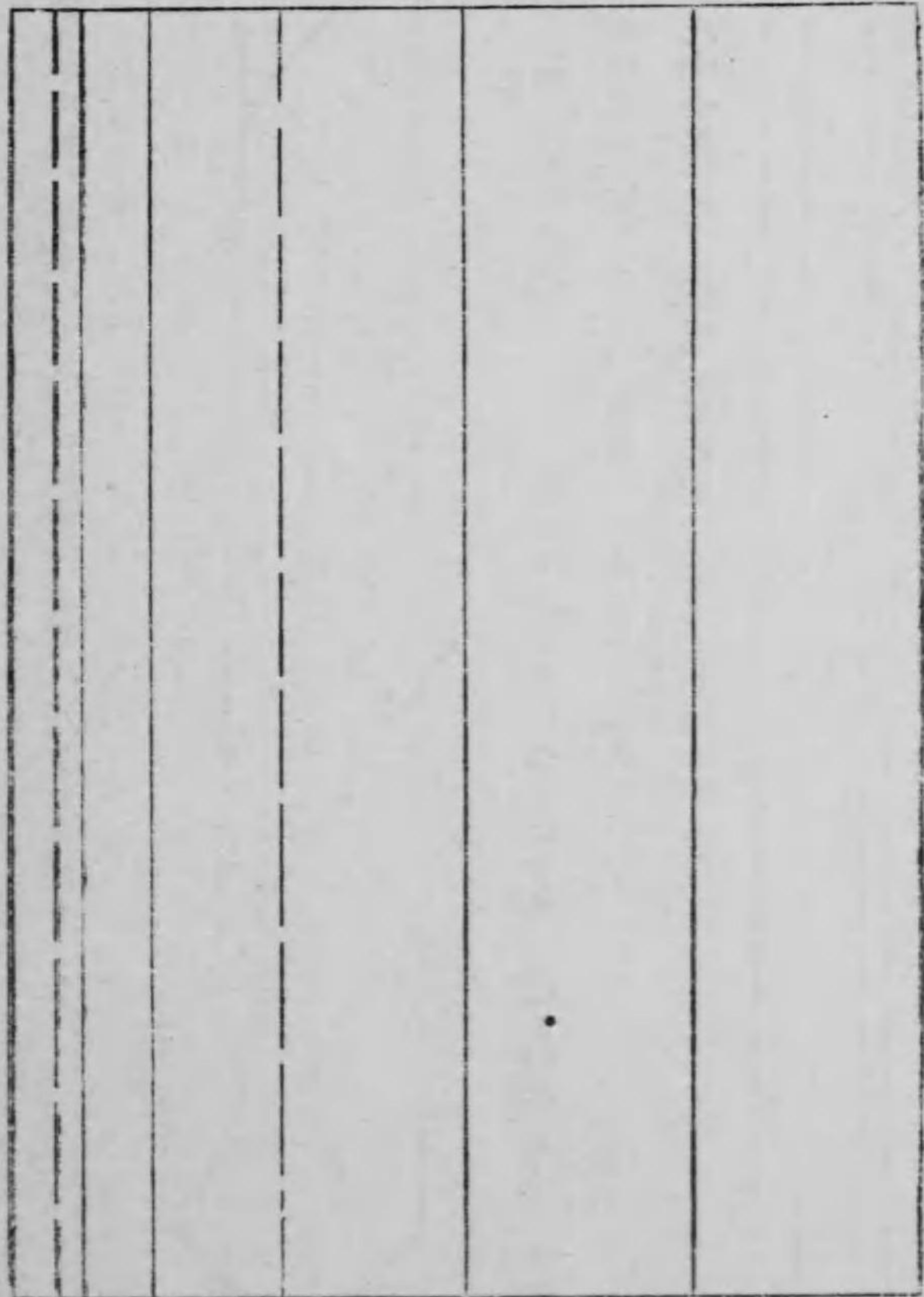


二五七



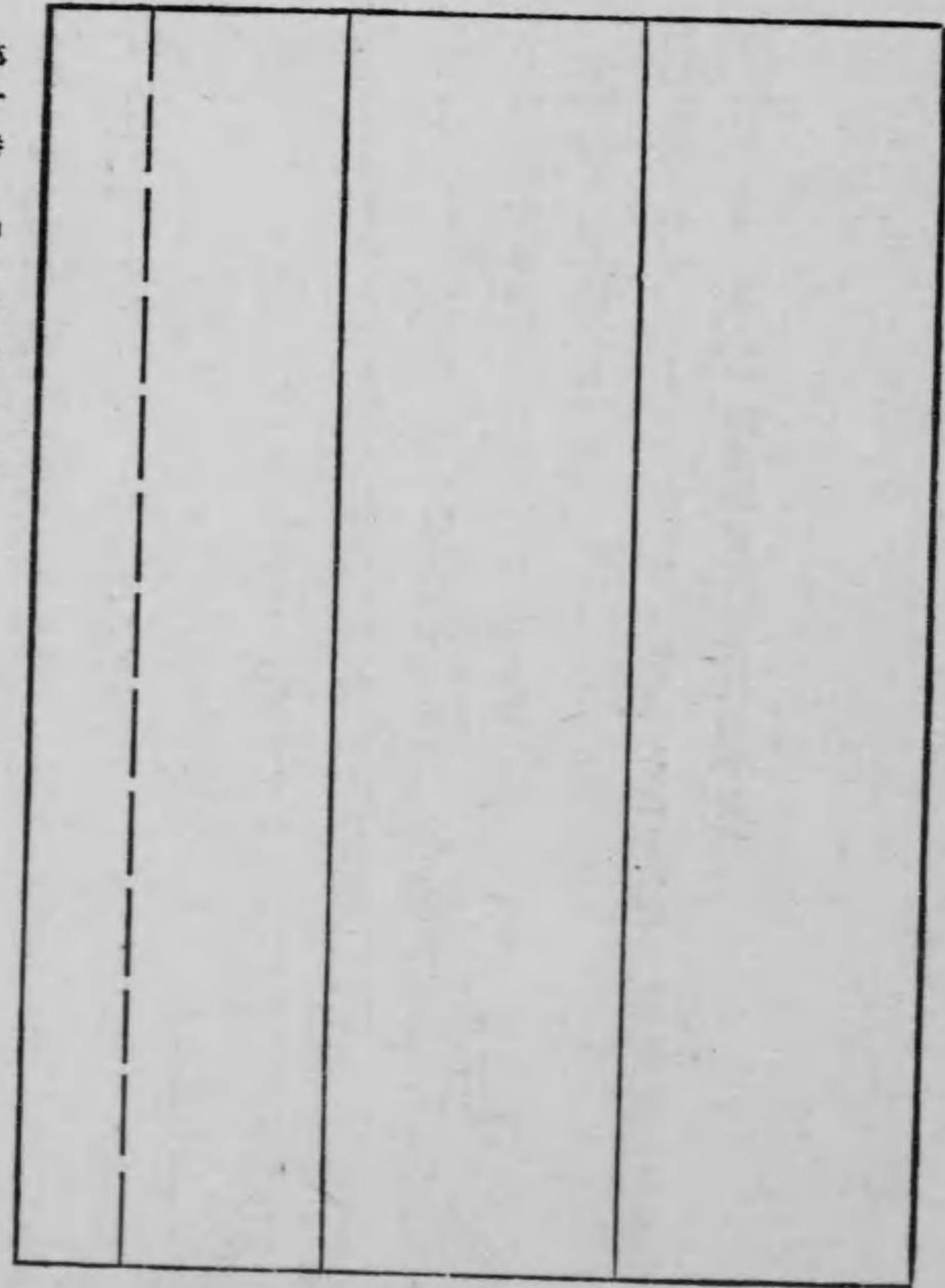
小笠原流折形
 第二百八十八圖 熨斗蛇包(草の形) (甲) △をりやう

二五六

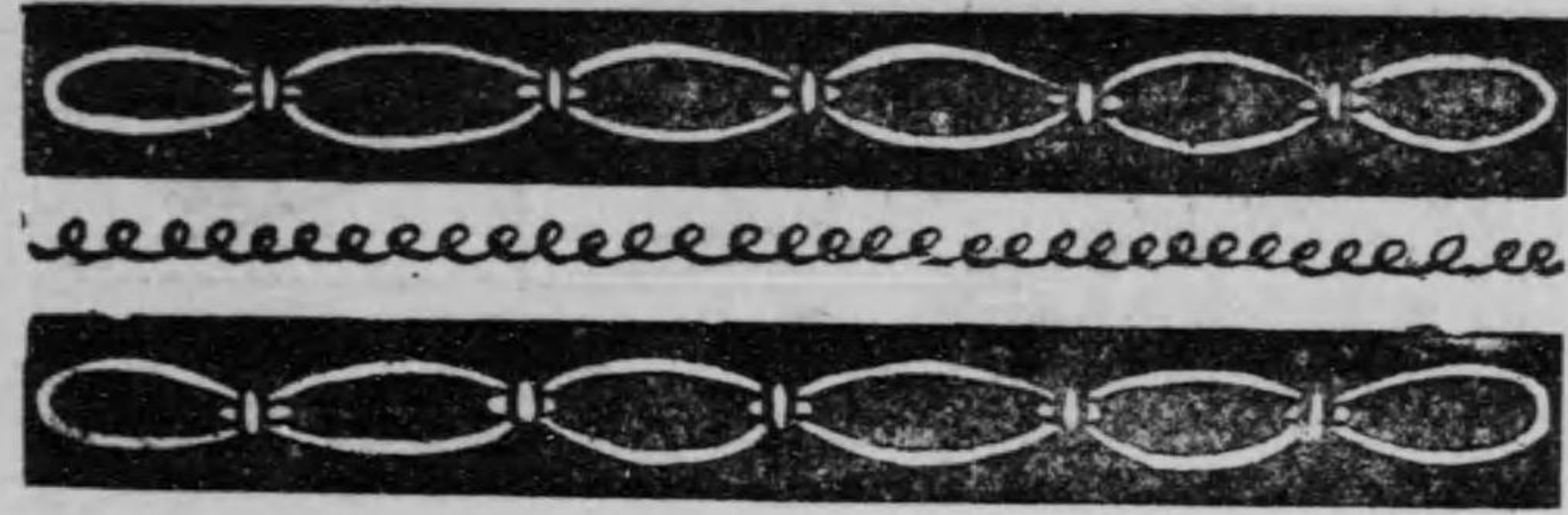




第十卷 伸あはび包折形圖解



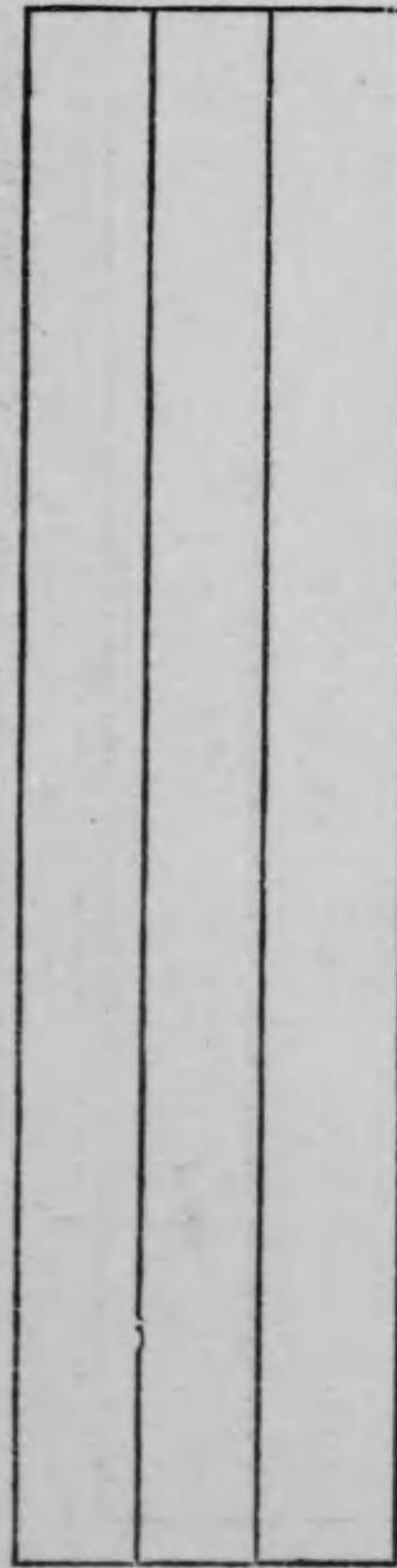
第二百九十二圖 のし匏づゝみ (草の形) (丙) △折やう

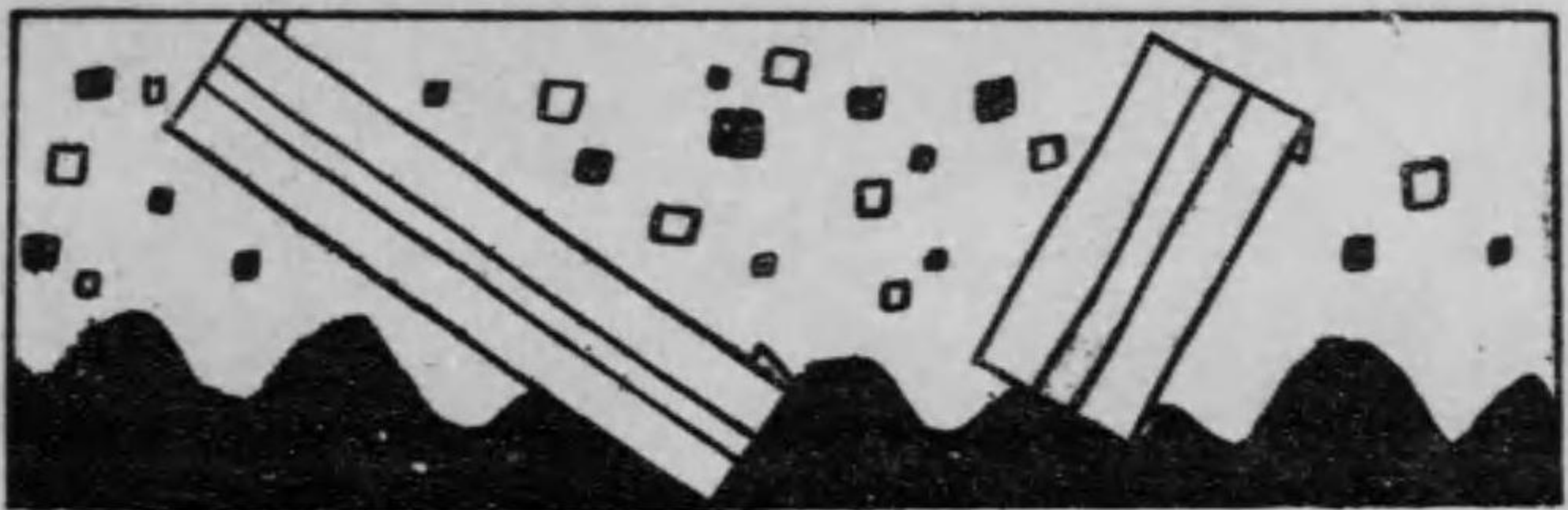


小笠原流折形
第二百九十圖 鬘斗匏包 (草の形) (乙) △折上り



九、同 (丙) これはまた右よりもさがりたる折形なり、糊入紙二つをり紅白水引、略製のしあはび一本入る。
第二百九十一圖 のし匏づゝみ (草の形) (丙) △折上り





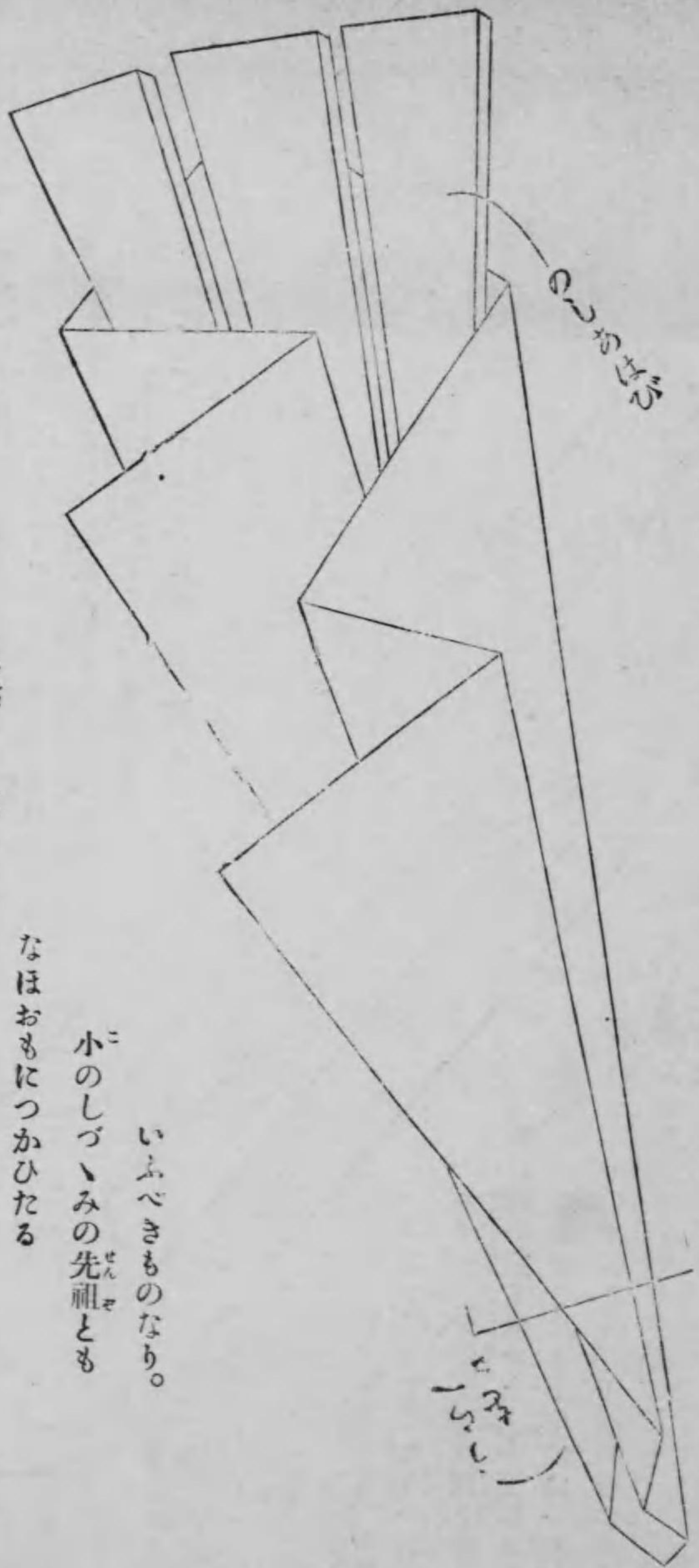
小笠原流折形

「のしあはびの記」近世より初りて今に流行せる、進物に添るのしあはび包の事は、伊勢家の「包の記」寶曆十四年記に左の文あり。

◎のしあはびを包む事(のしづゝみの事なり)當世は、およそ進物には、必魚鳥の類をそへて、進する事、祝ふ儀也、魚鳥をそへざれば干肴、あるひはのしあはび、百本千本そふるもの也、略儀の時は、のしあはび二三本切て、紙に包てそふるなり、さればのしあはびのつゝみやうとて、定る法式はなきことなれども、いにしへ京都將軍の御代に用ひられし包やうは左のごとし、但引渡の包やうなり、進物にそふるにはあらず。

魚鳥を添る時は、のしあはびをつゝみて、そふるには及ばざる也、是當世のならはしなり。(包記)圖は筆を加へ次にのせ置つ。

(附録) 近古(四百年前に引渡しといふ祝の膳につかひしもの) 伸蛇包

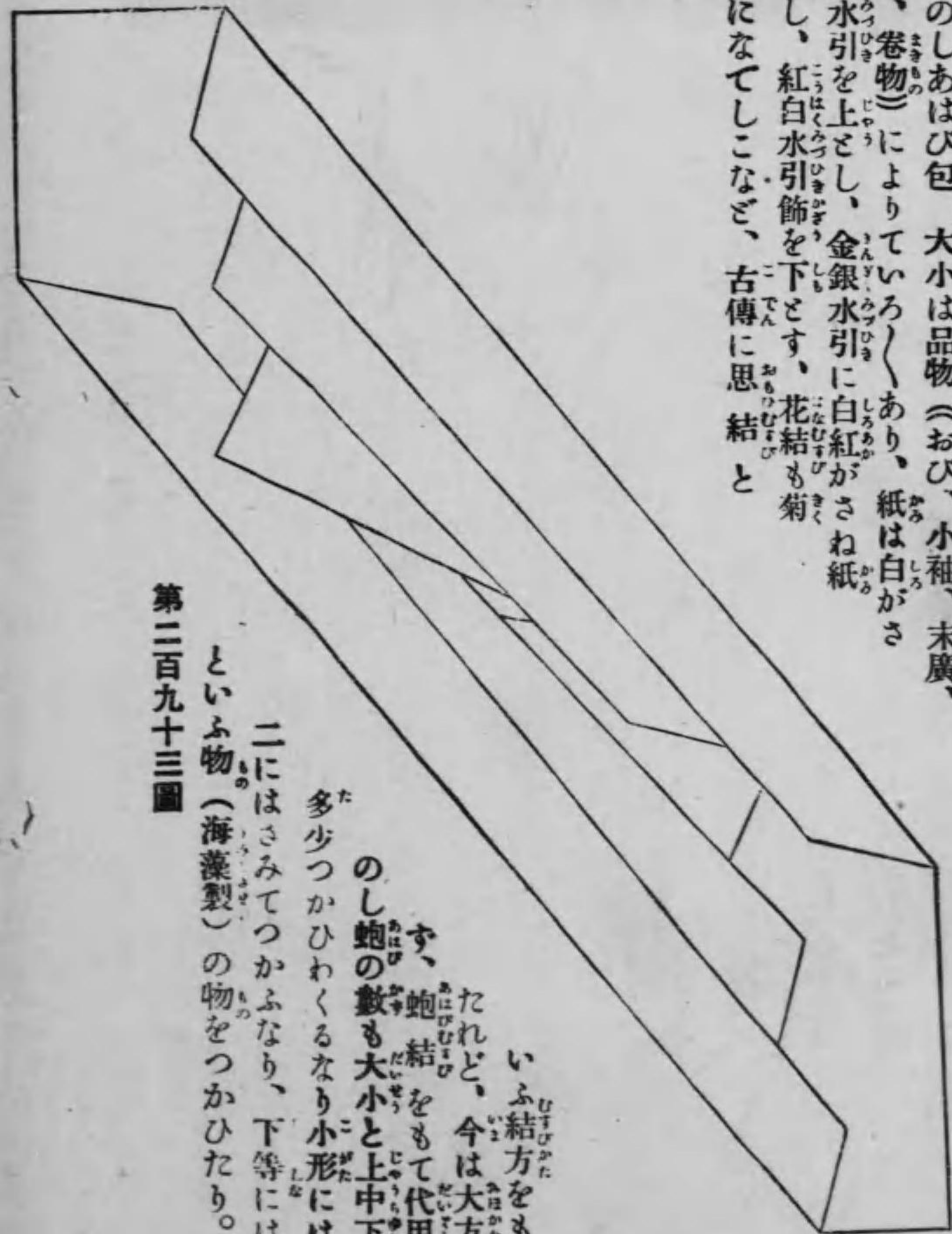


◎近世より今にいたりて

いふべきものなり。
小のしづゝみの先祖とも
なほおもにつかひたる

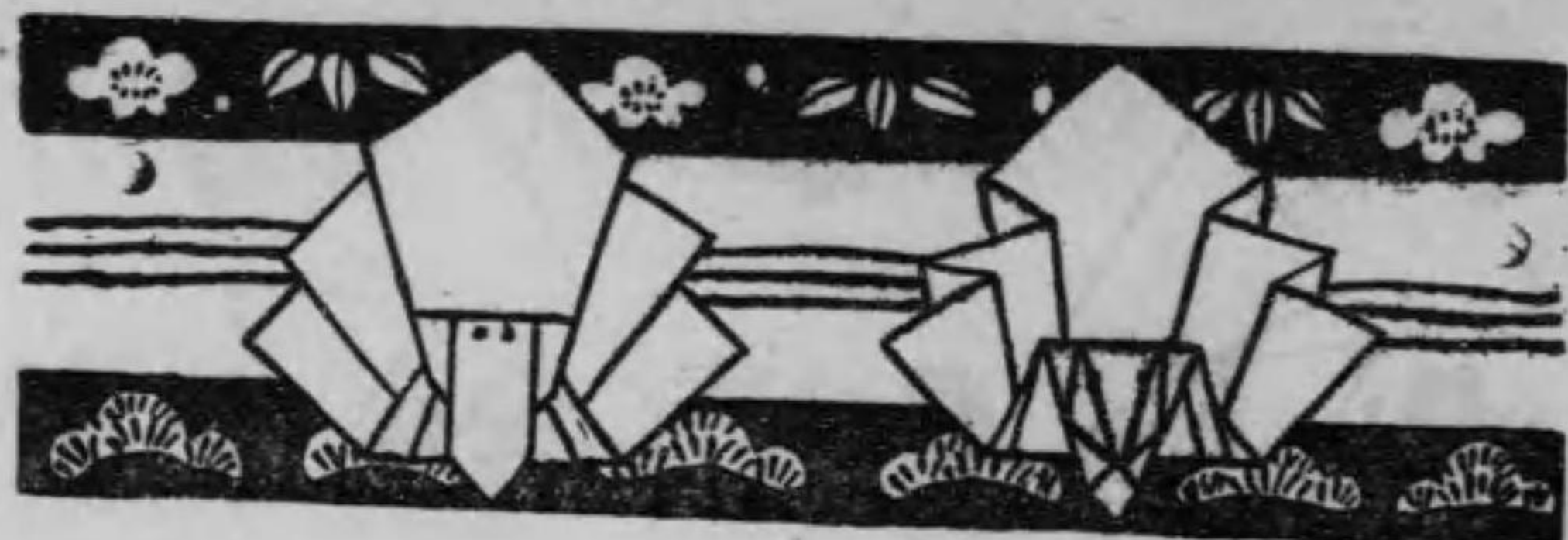
第十一卷 婚禮式折形圖解

一、結納のしあはび包 大小は品物（おび、小袖、末廣、板の物、巻物）によりていろいろあり、紙は白がさね、銀水引を上とし、金銀水引に白紅がさね紙を中とし、紅白水引飾を下とす、花結も菊に寶珠になてしこなど、古傳に思結と

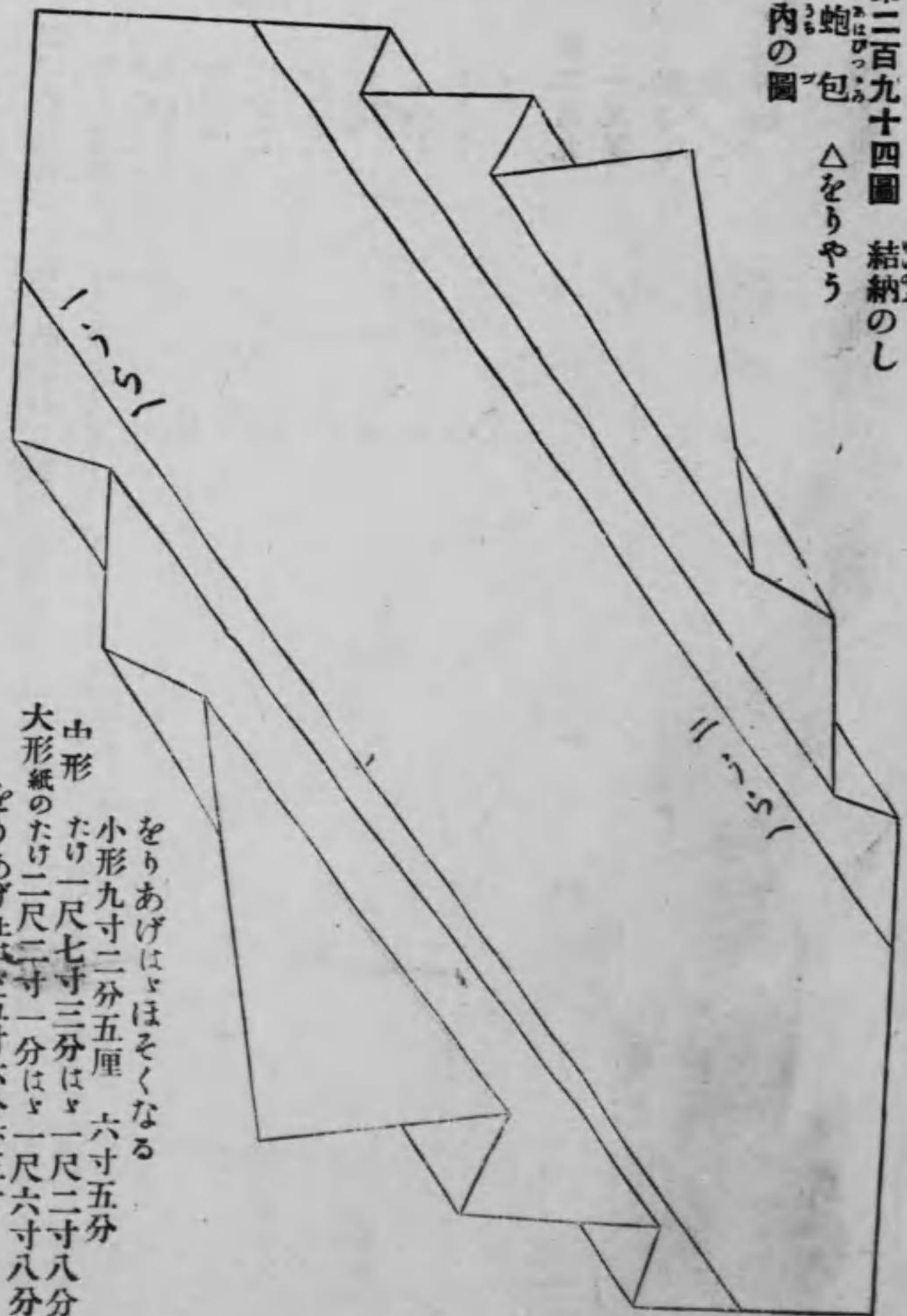


第二百九十三圖

いふ結方をもつかひたれど、今は大方つかはす、蛇結をもて代用とせり、のし蛇の數も大小と上中下により多少つかひわくるなり小形には一本を二にはさみてつかふなり、下等には鯛のしといふ物（海藻製）の物をつかひたり。

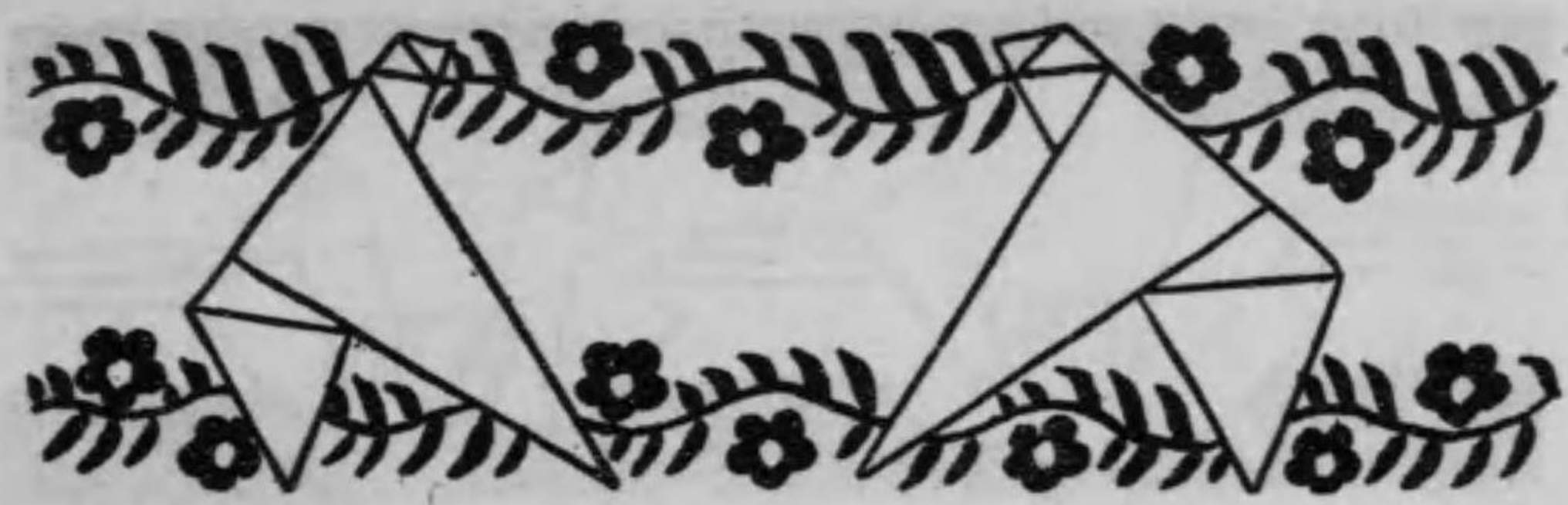


第二百九十四圖 結納のし
内蛇包の圖 △をりやう



第十一卷 婚禮式折形圖解

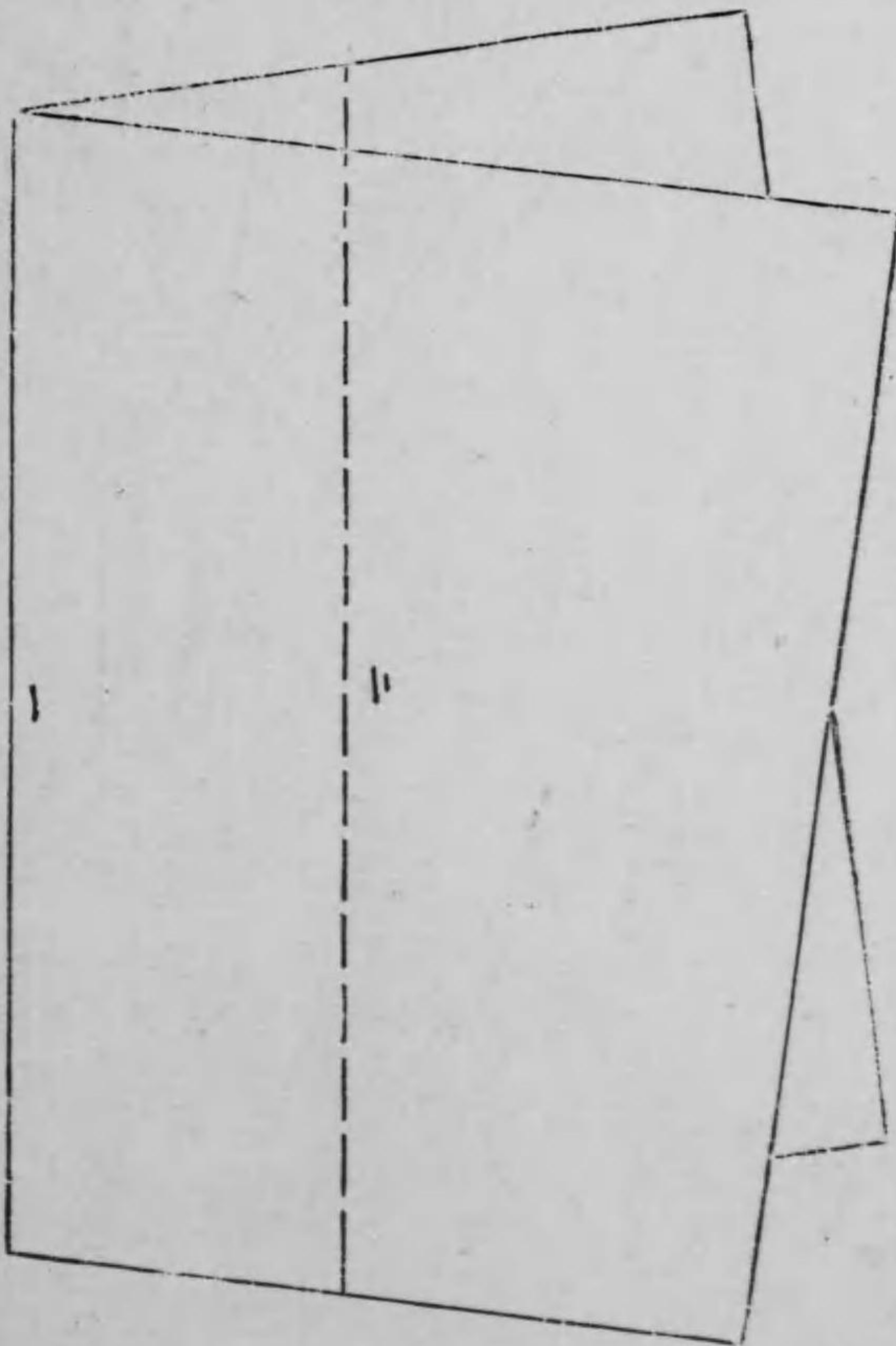
をりあげはほそくなる
 小形 九寸二分五厘 六寸五分
 山形 一尺七寸三分は一尺二寸八分
 大形 紙のたけ二尺二寸一分は一尺六寸八分
 をりあげ上は五寸六分下五寸



小笠原流折形

二六四

二、くちらざし包 結納の衣服を裁縫る用に、其結納前に相互に取かはす式あり、其時の金銀の目をもりたるくちらざしを包むなり、この事の委細「婚禮千代かゝみ、嵩山房發行」に記しおきたれば、こゝにはぶきつ。

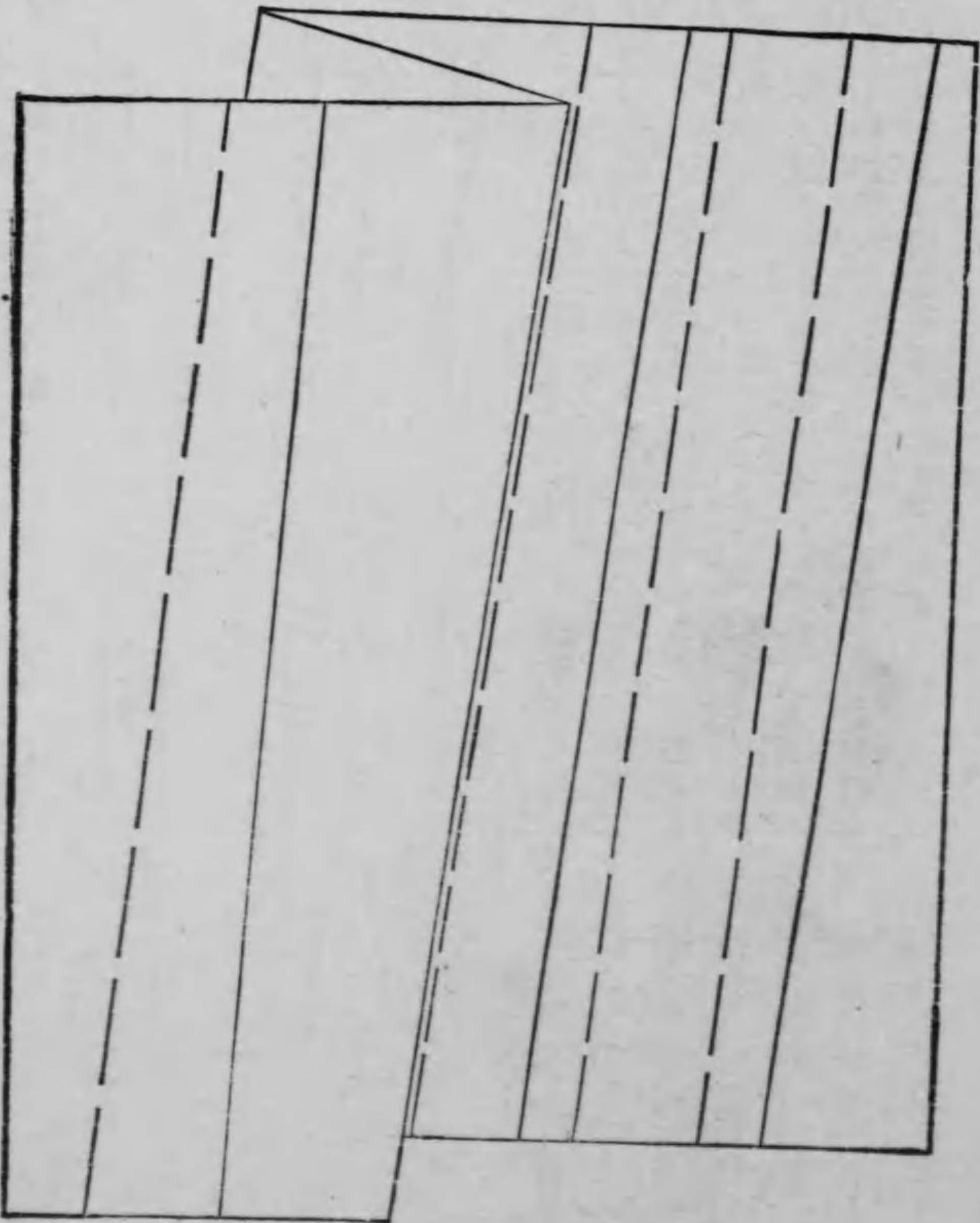


第二百九十五圖
△折始



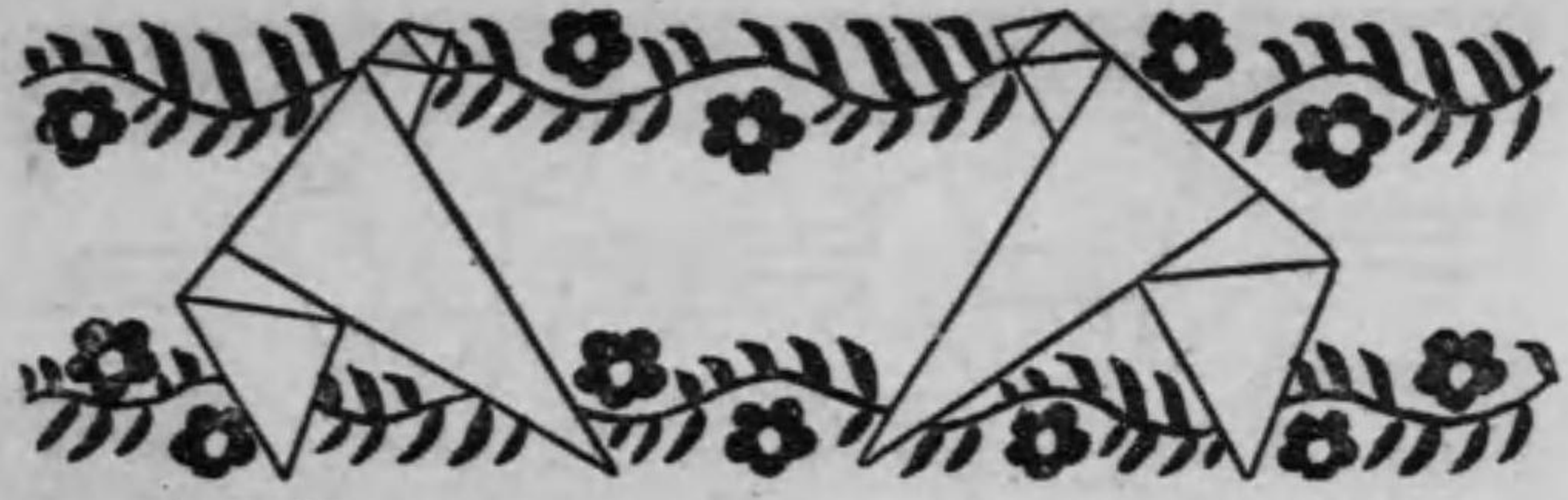
第二百九十六

圖
くちらざし包
△折や
う (UD)



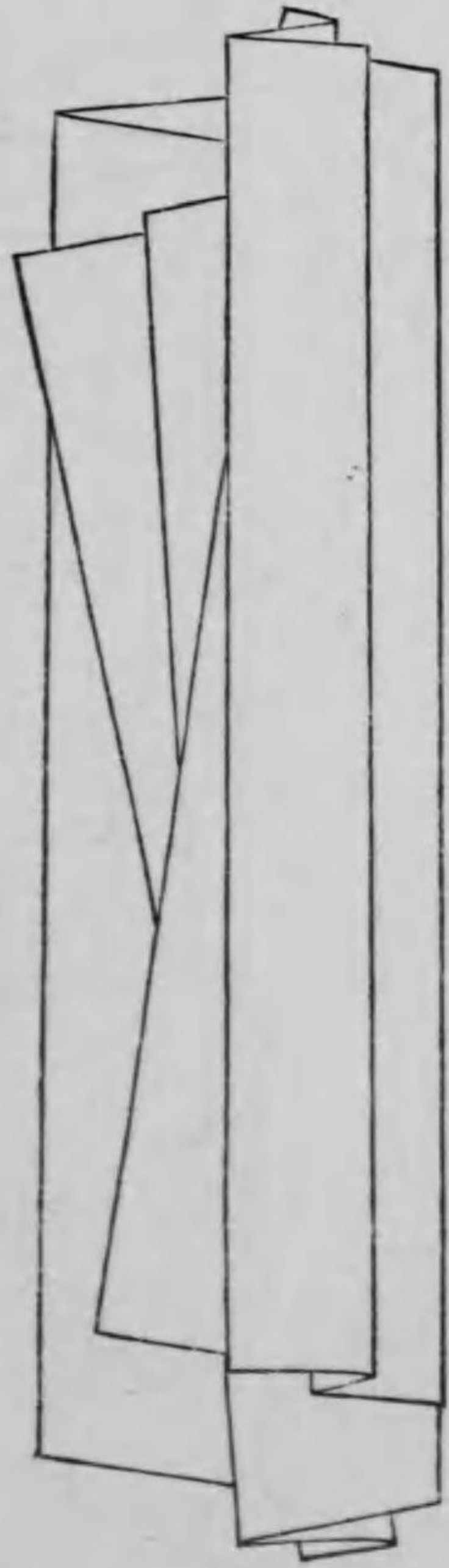
第十一卷 婚禮式折形圖解

二六五



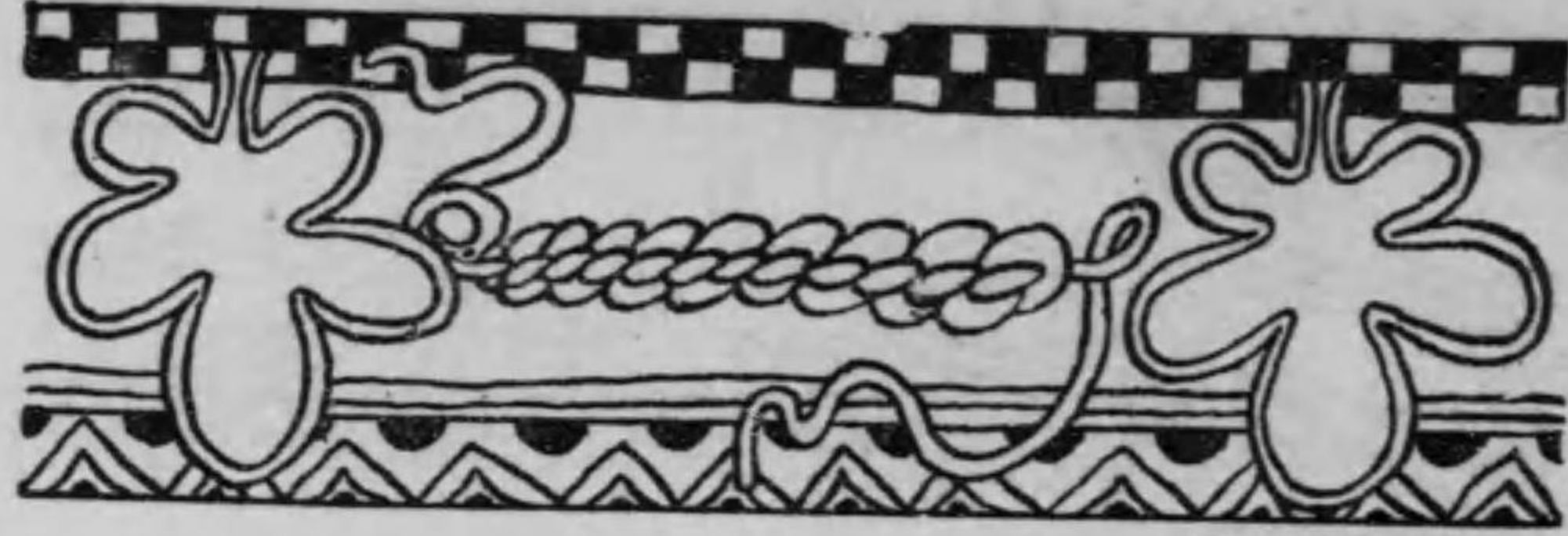
小笠原流折形

第二百九十七圖 くぢらざし包 △をりあがり



二六六

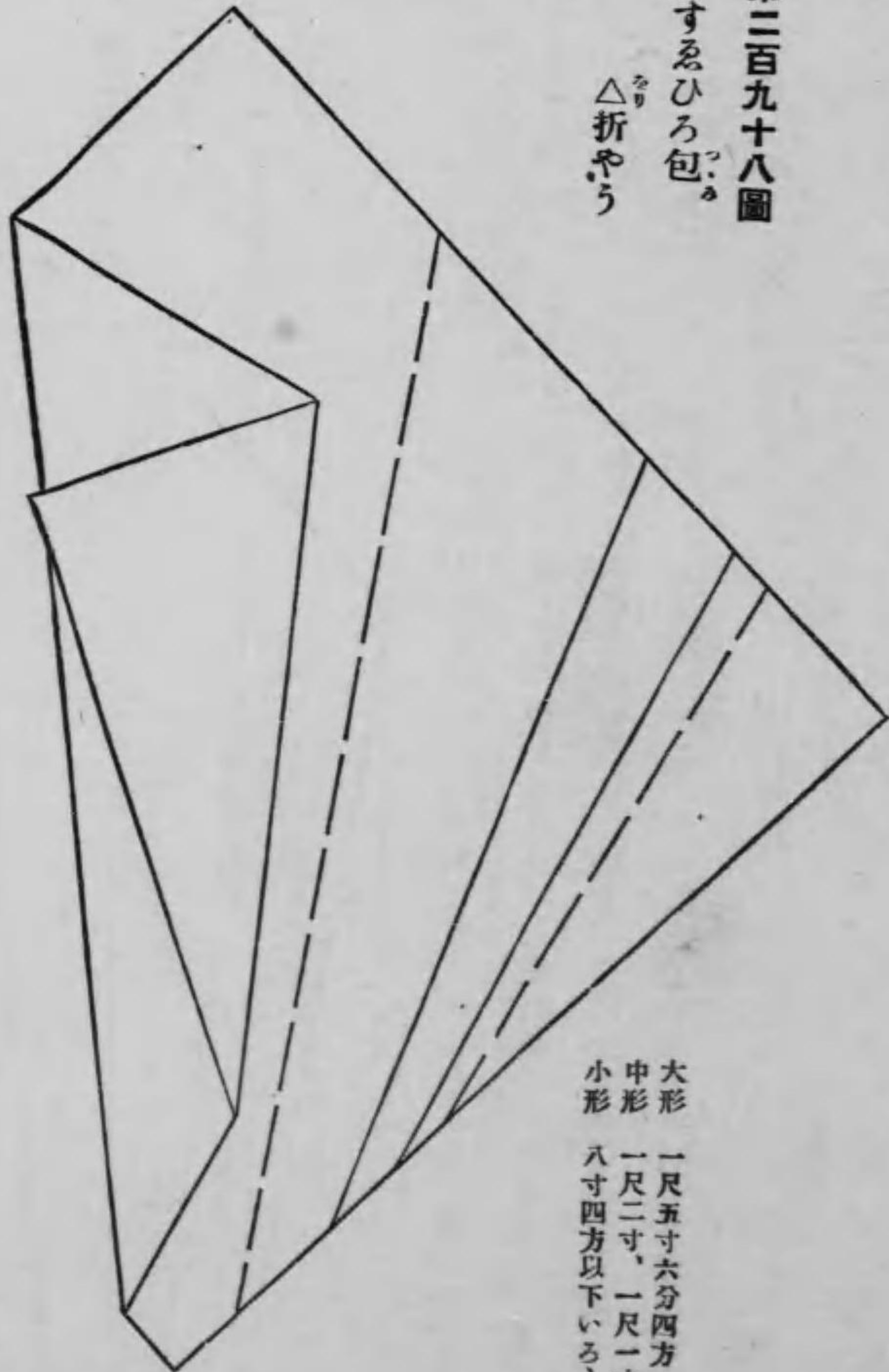
三、末廣包 紙のかさね、前の伸蛇包に同じ、色紙がさねにする事まれなり（實物をつくりやう圖解の條にのせたるも末廣包の一種なり、其折方を上位につかひ、このをり方を普通につかひたり、水引は梅結をつくること古今ともに同じ、木式は末廣を一本包み、其包形を二つを一組として伸蛇包をそへて臺につむなり、略には扇子を二本包み、其一包にてすますなり（このつみ方も其他の結納品つみかたならべ方こしらへ方とも婚禮千代鏡にあり）◎婚禮式當日の作法は勿論、前後の心得をも掲載なしおきつくはしくは同書を見るべし



第二百九十八圖

○するひろ包

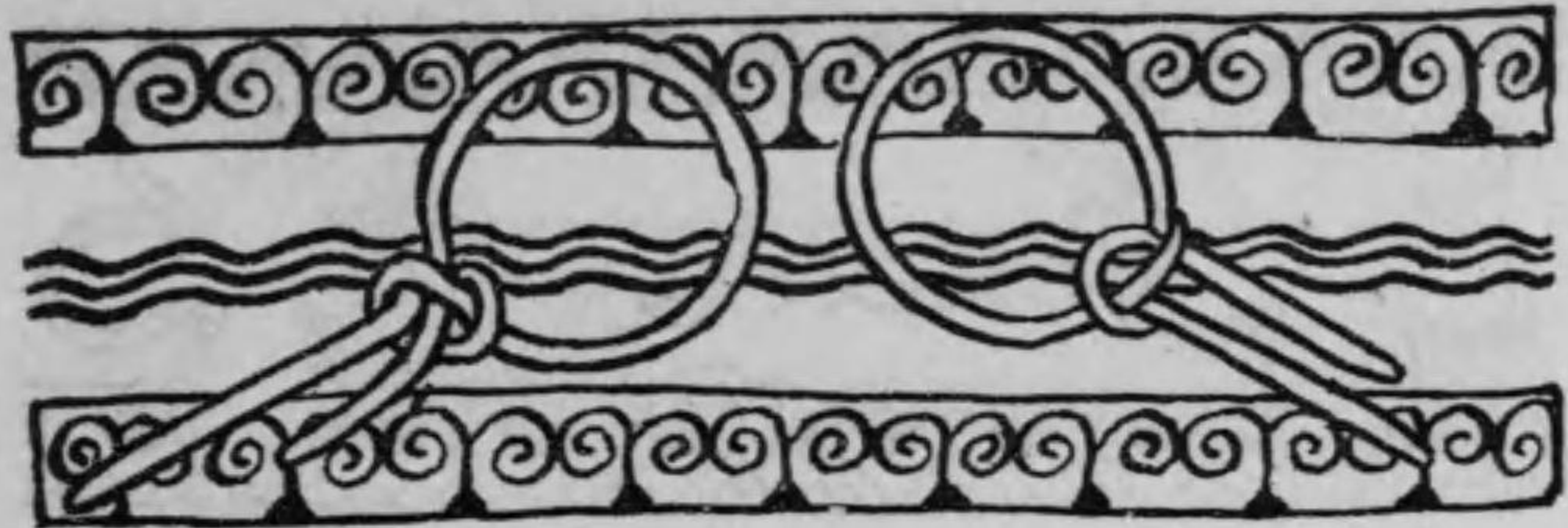
△折やう



大形 一尺五寸六分四方
 中形 一尺二寸、一尺一寸四方
 小形 八寸四方以下いろく

第十一卷 婚禮式折形圖解

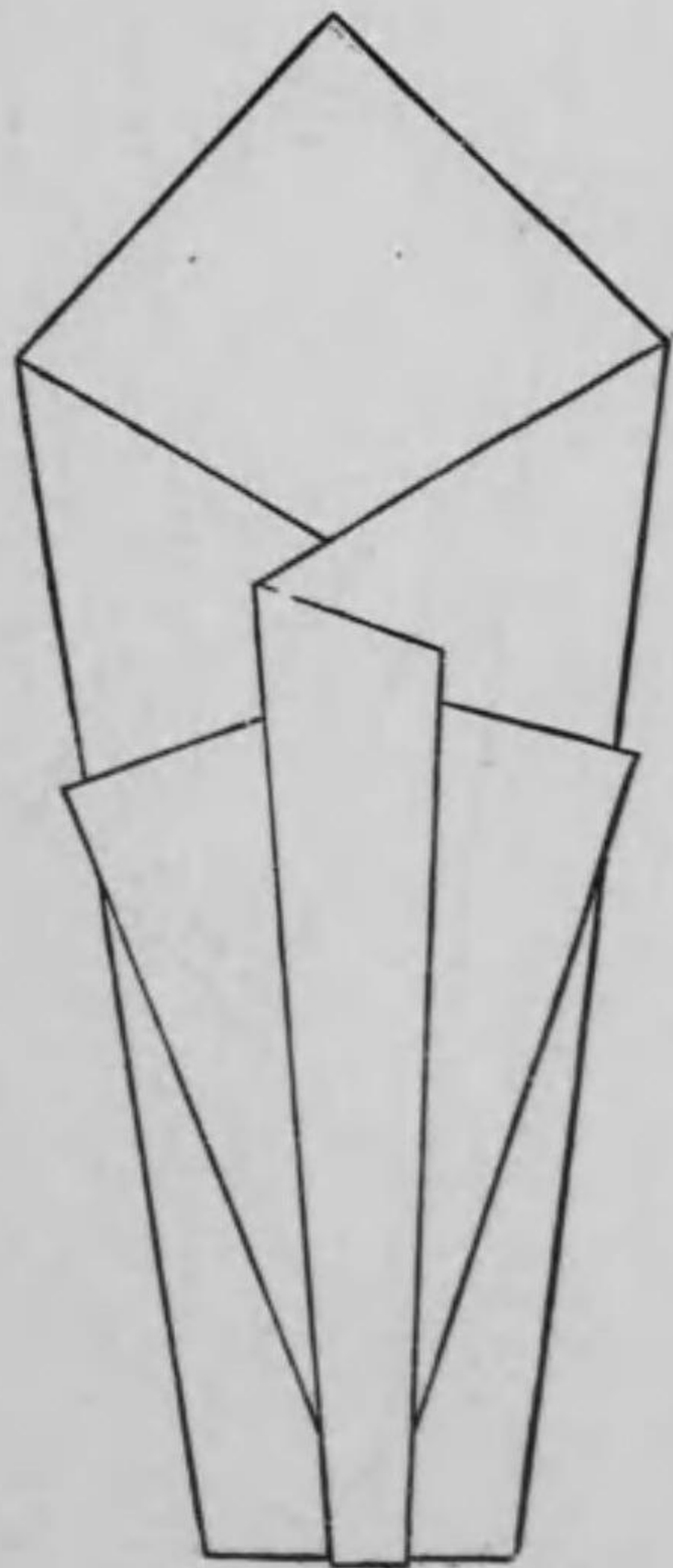
二六七



小笠原流折形

第二百九十九圖

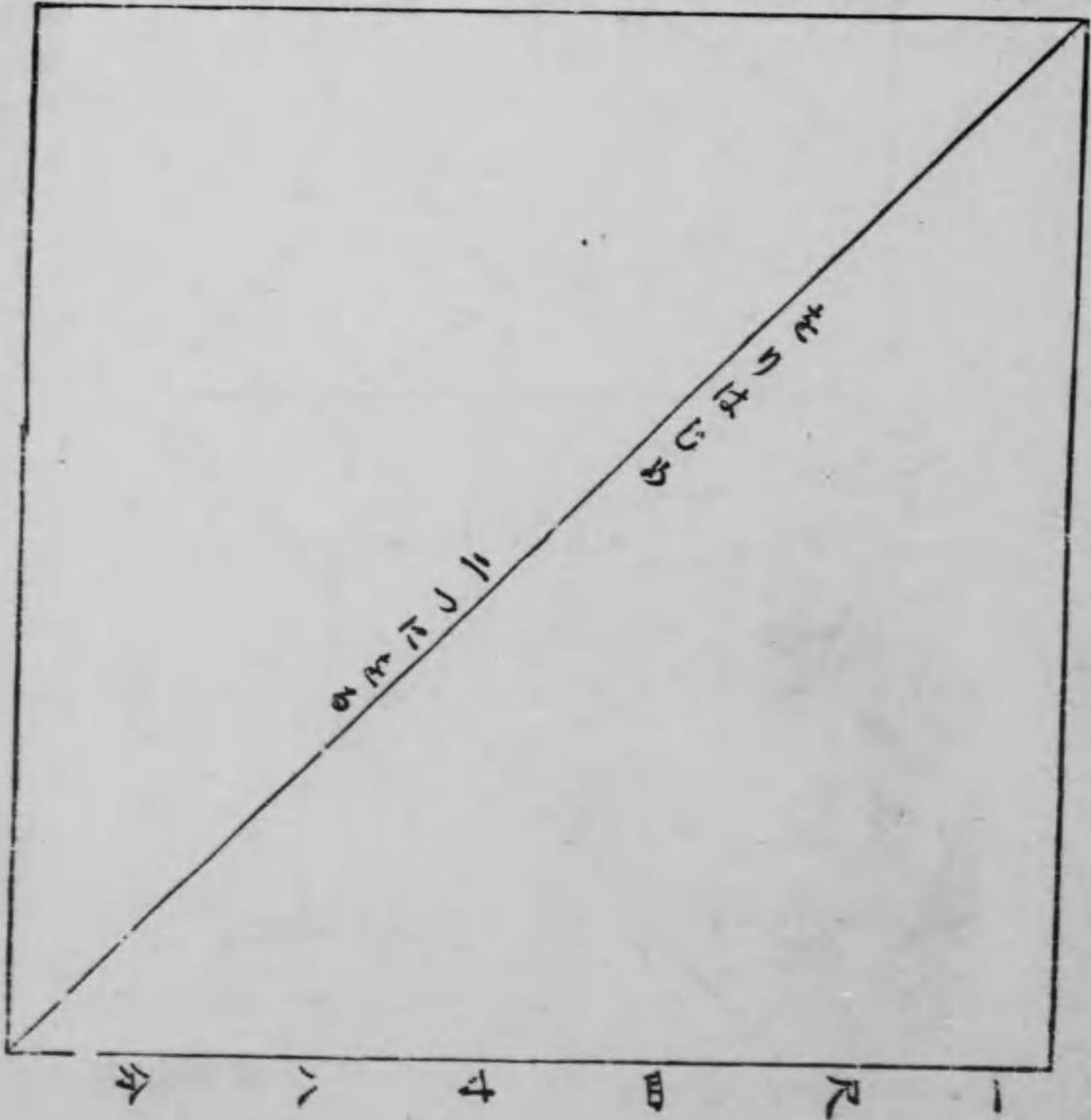
○するひろづゝみ
△をりあがり



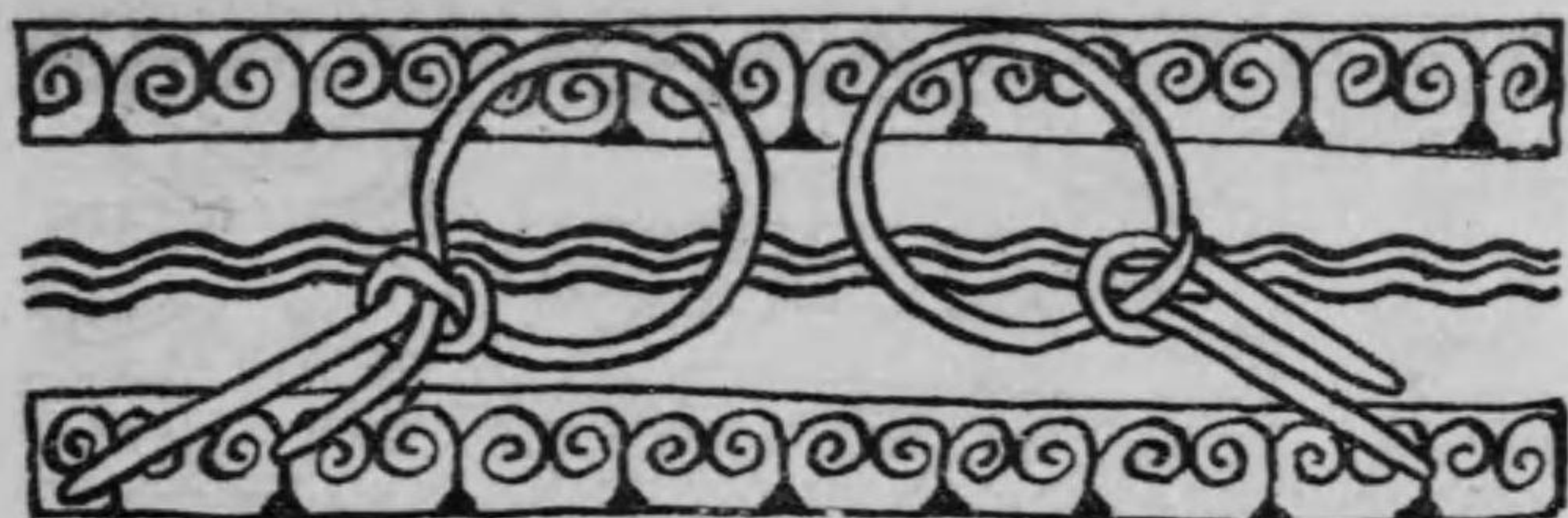
與、たるの口の蝶 やなぎだる口のせんの上方太き所を斜にそぎて、蝶の折形をつくる、めてふをてふ二樽を一荷としてつかふなり、二荷三荷もつかふなり、紙は白がさね、白べにうらもあり、水引は白元結にて結ぶ、つけかた瓶子の蝶に同じ、樽の方には口包なし（他傳には口包をつかふ、折形は瓶子の口包に同じ）蝶の羽の巻方も瓶子に同じ。

第三百圖

○柳樽の口の蝶
△紙取り寸法
○小形の樽の時
には一尺四方
の紙ごりにて
をるべし。

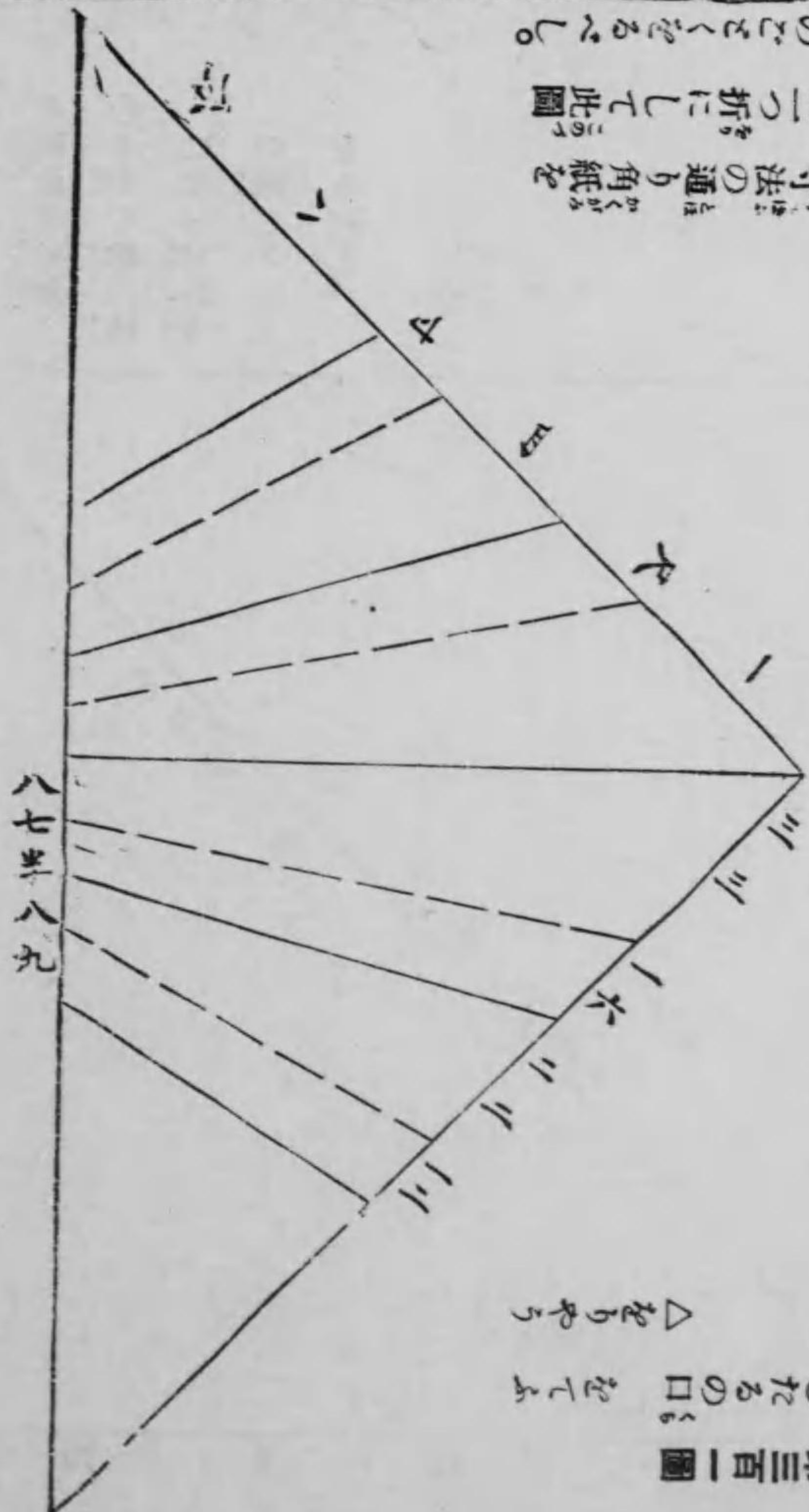


第十一卷 婚禮式折形圖解



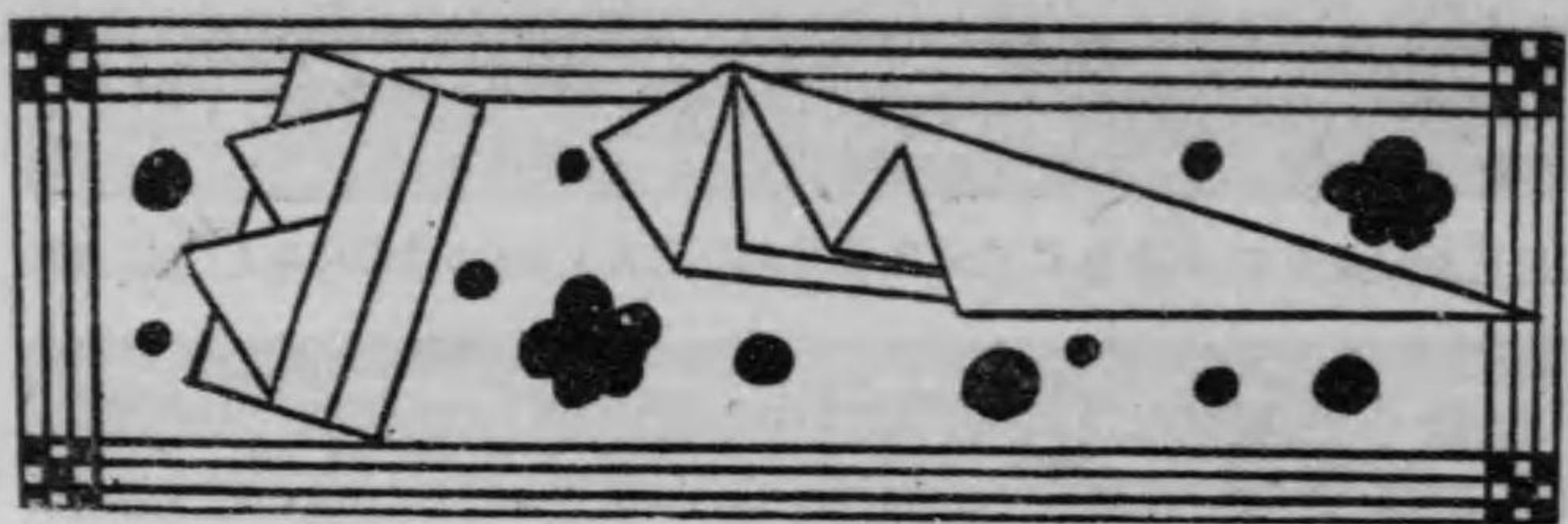
小笠原流折形

○寸法の通り角紙を
二折にして此圖
のたぐひをぬてし



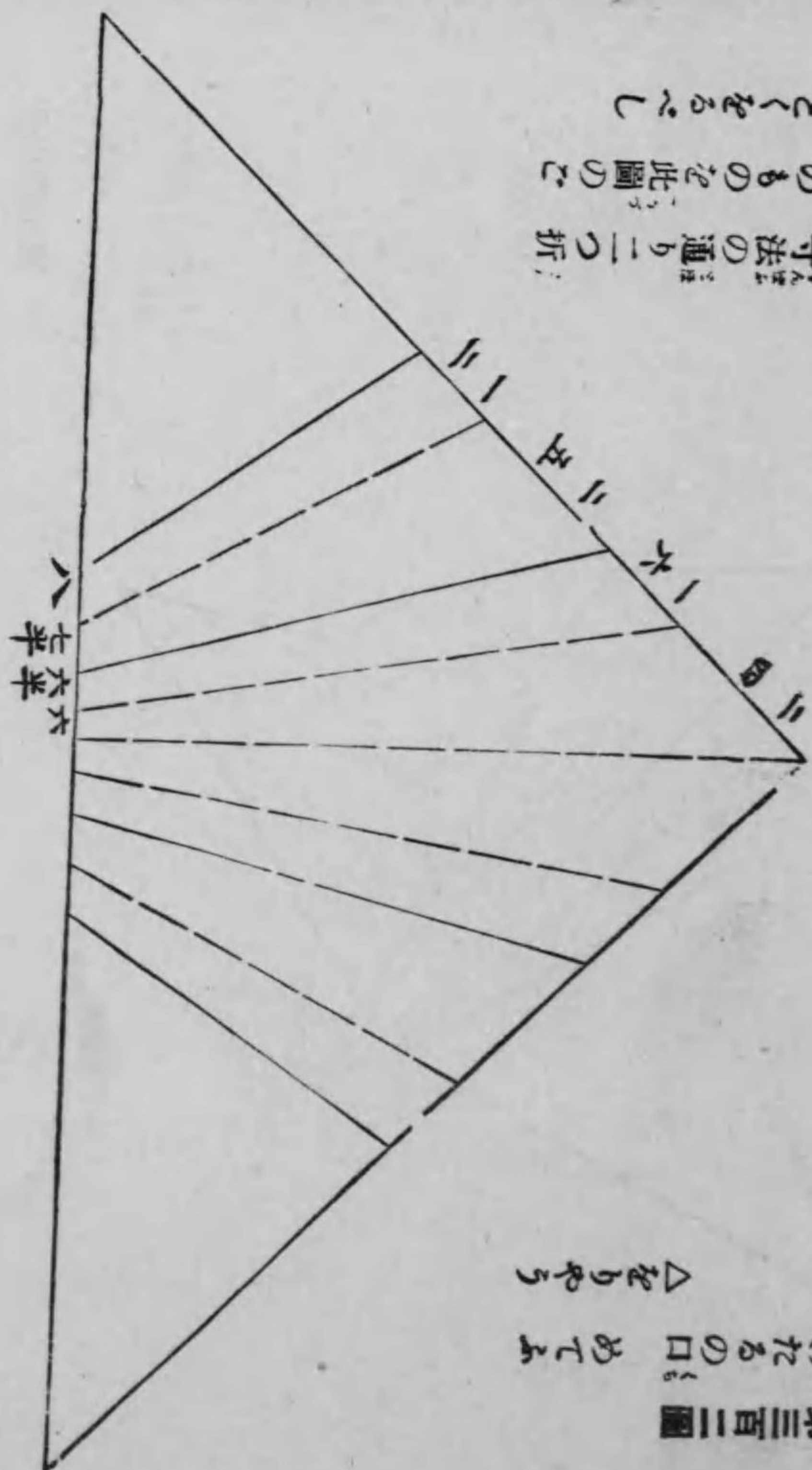
1140

第三五一圖
○たるの口をてよ
△をりあう



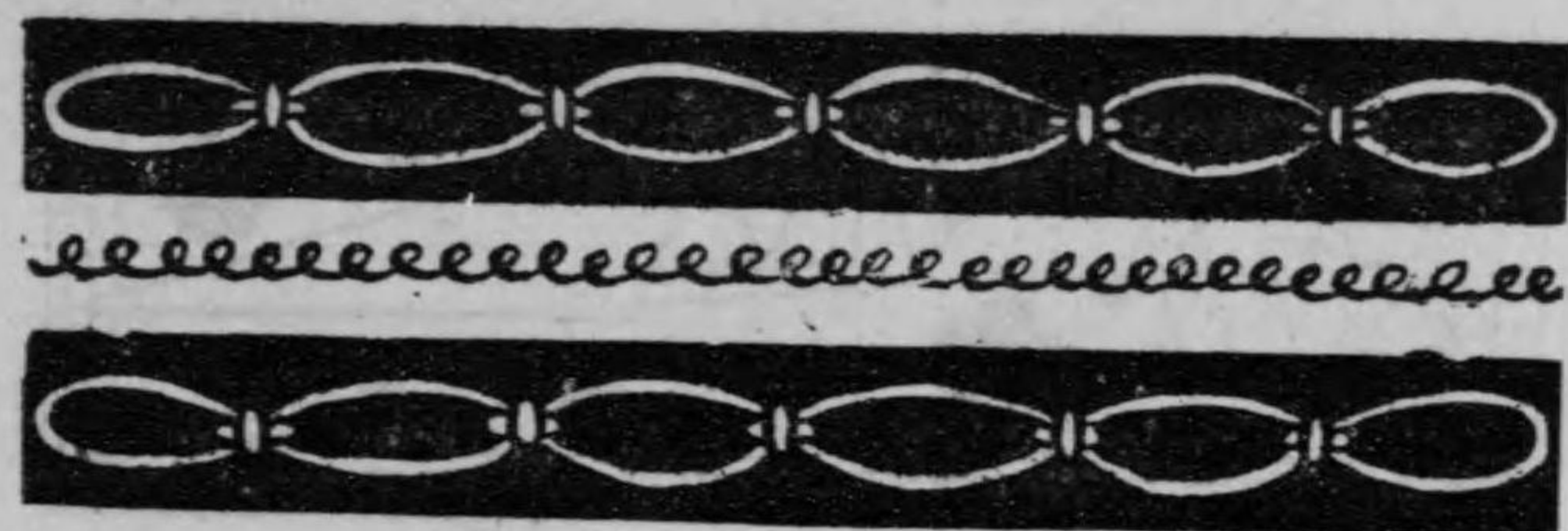
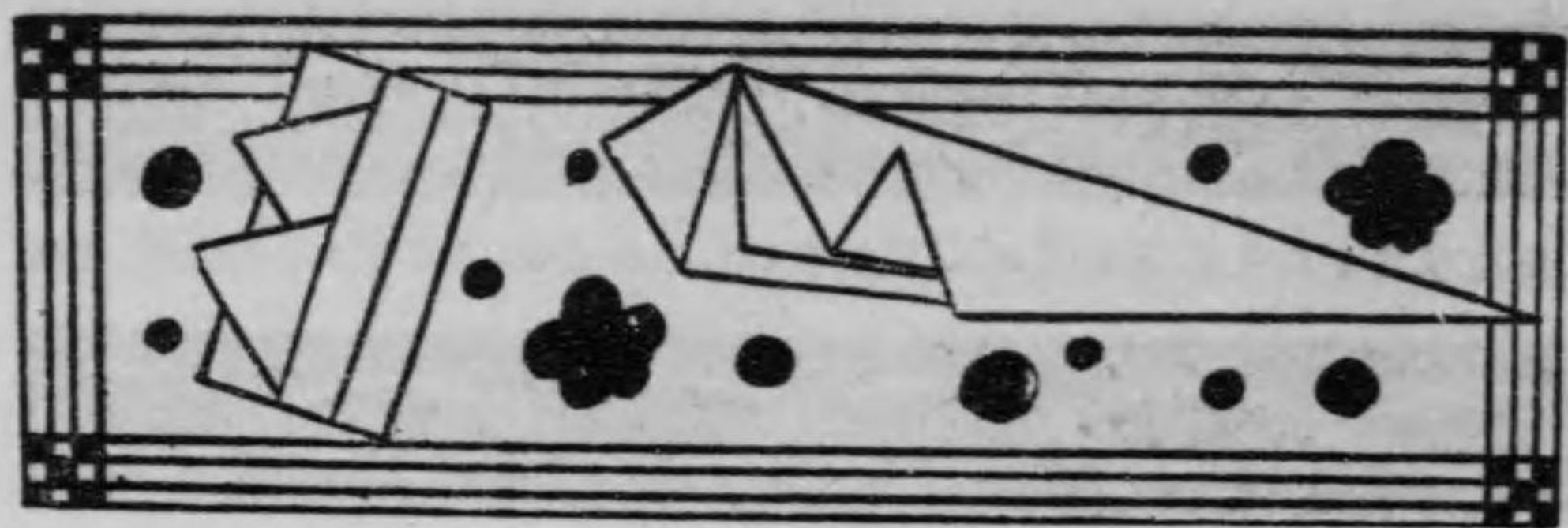
第十一卷 婚禮式折形圖解

○寸法の通り二折
のもの在此圖のた
とくをぬてし



1141

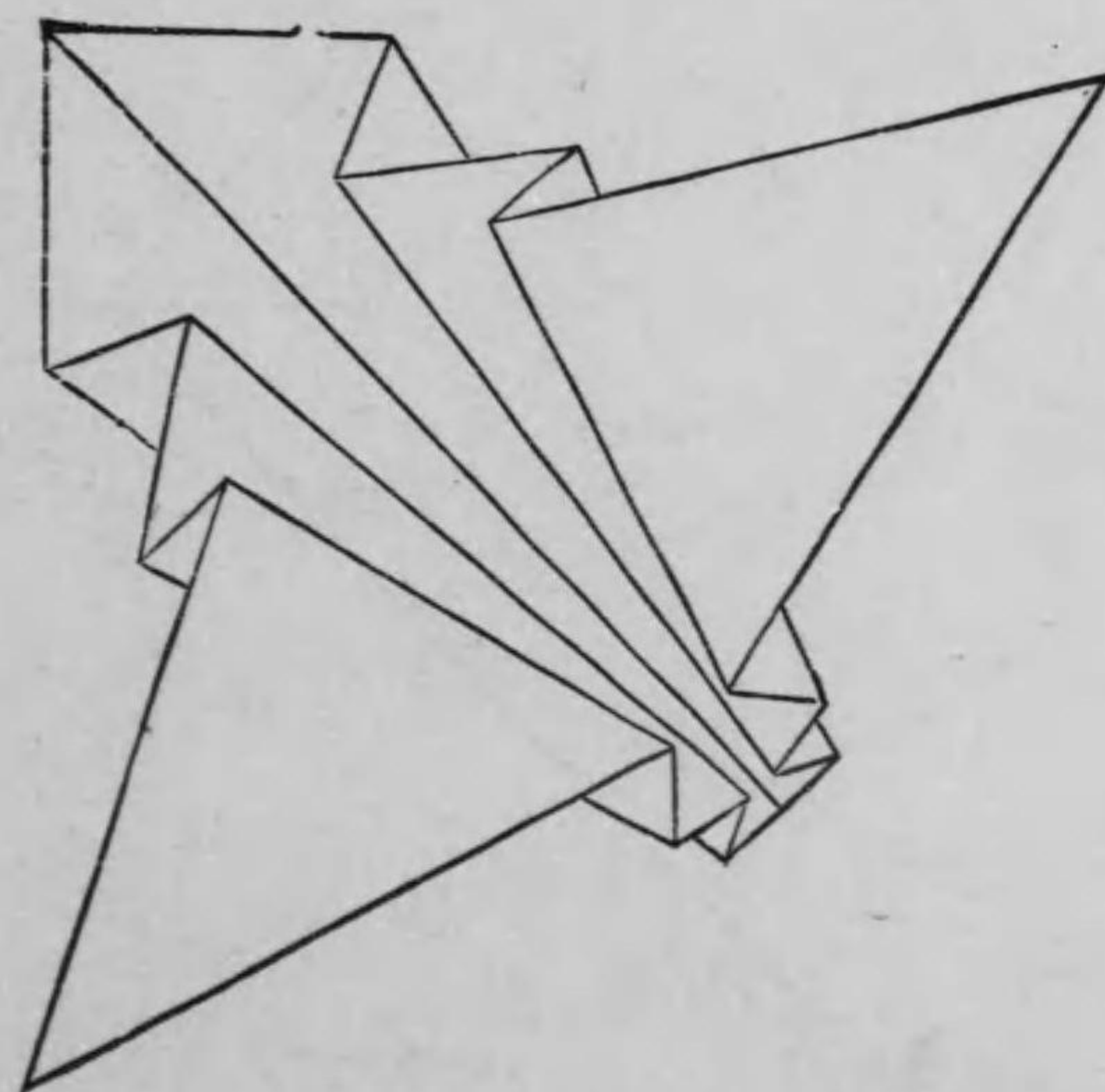
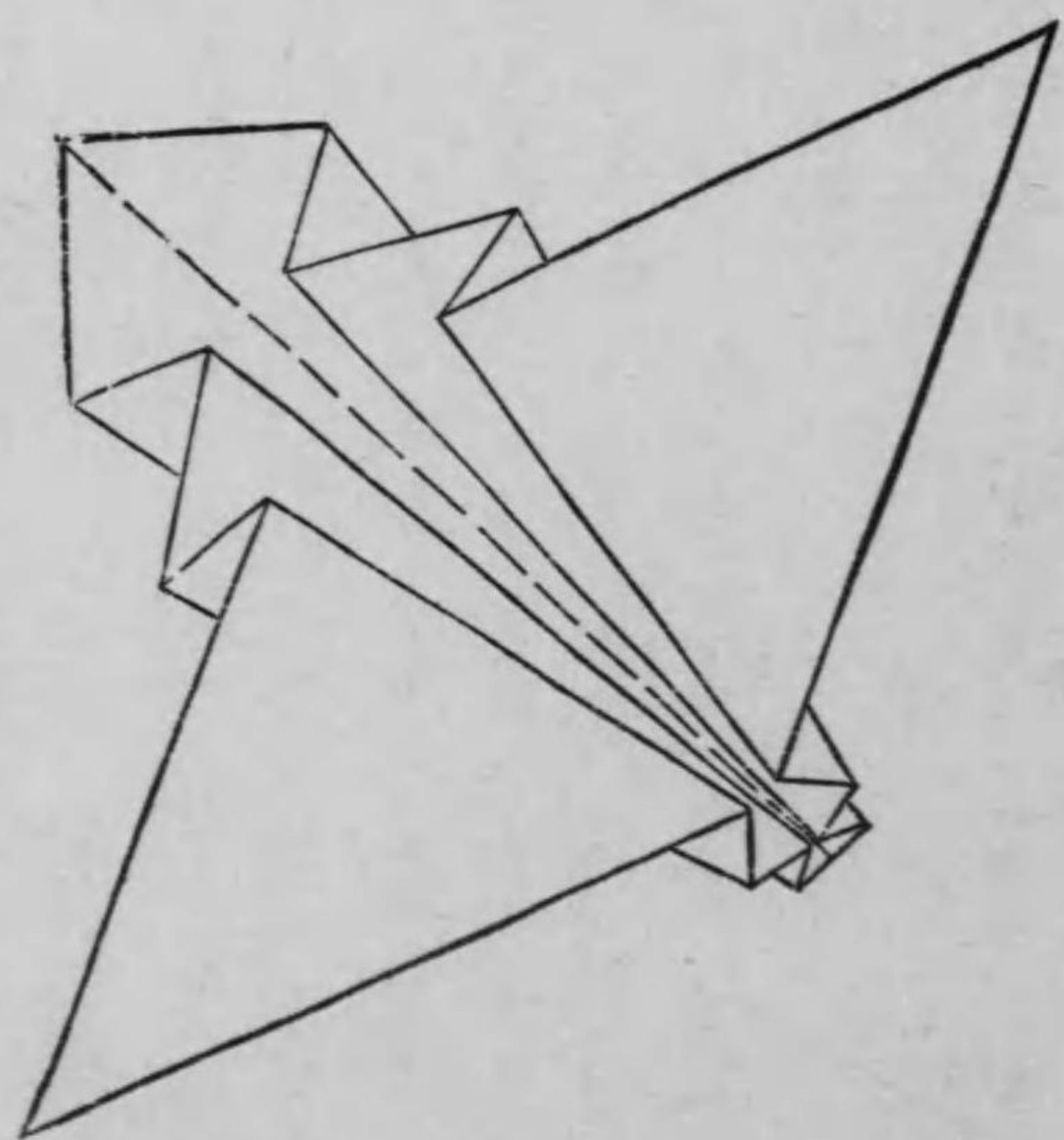
第三五二圖
○たるの口をてよ
△をりあう

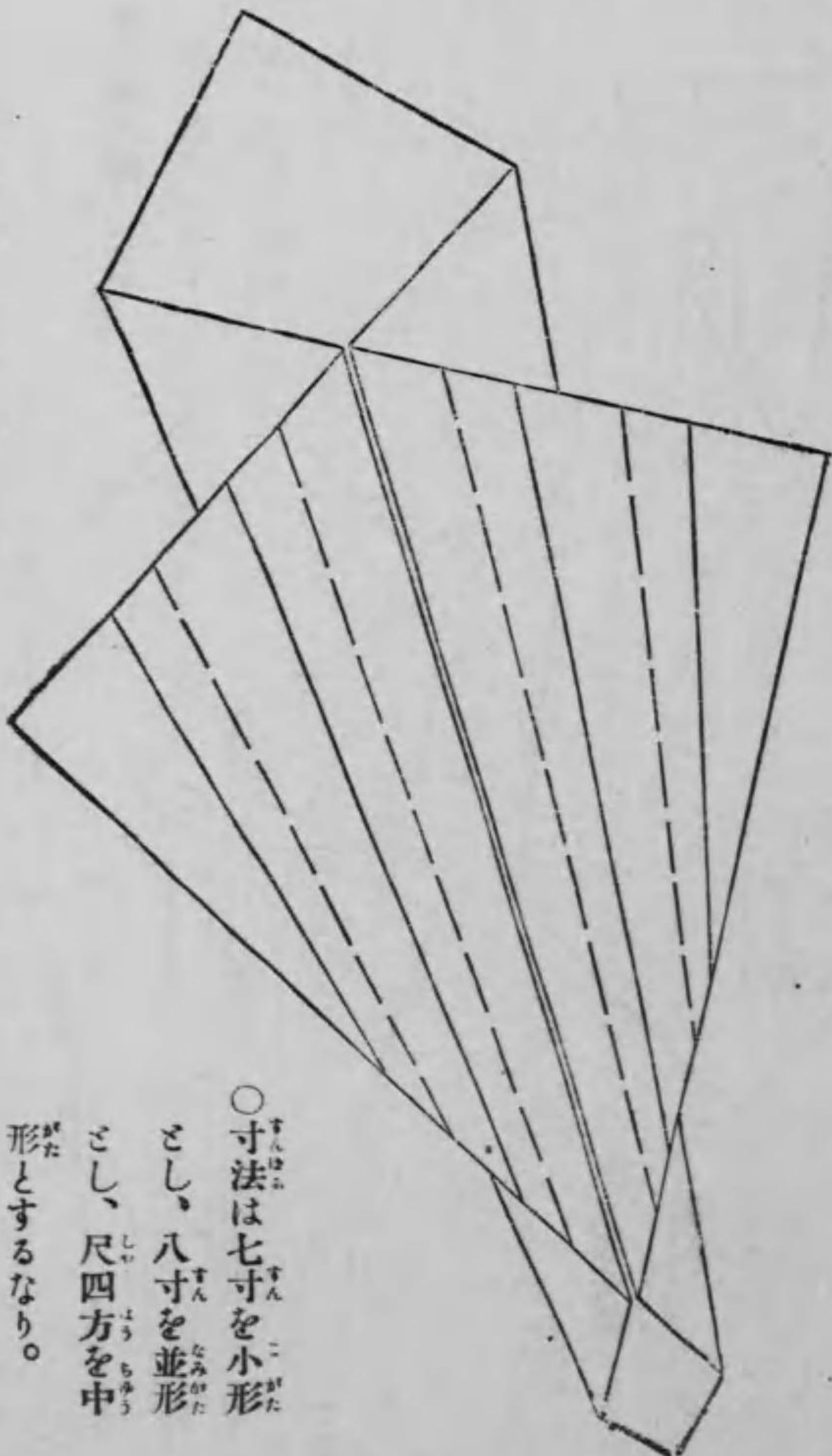
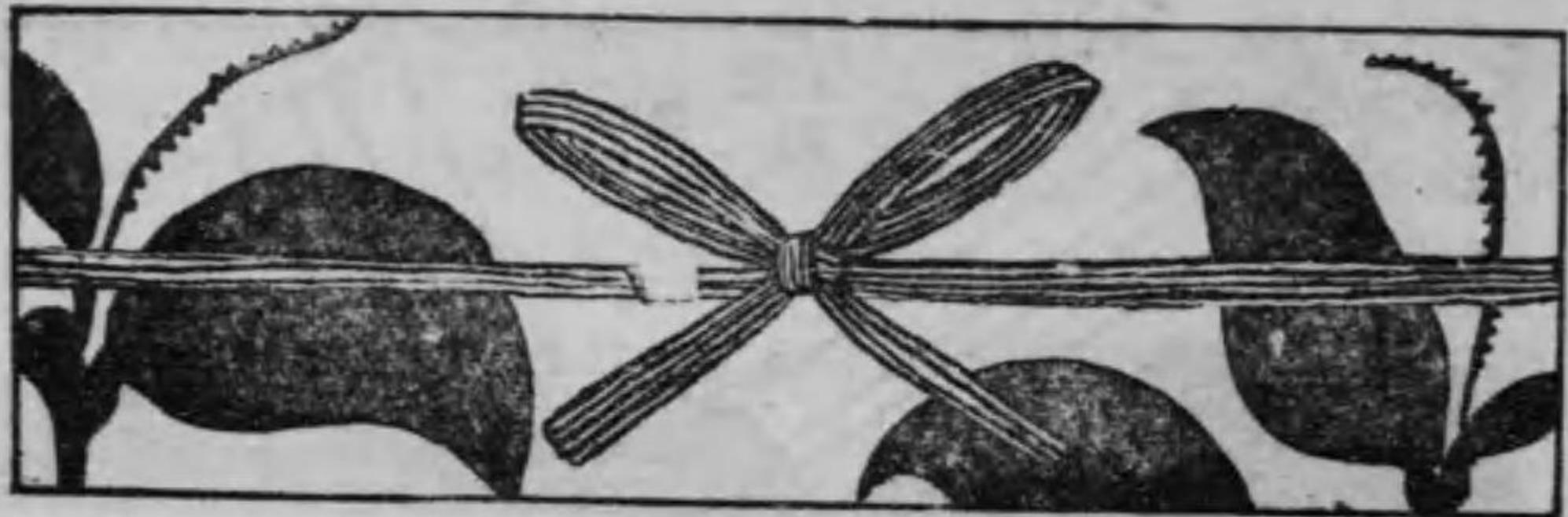


第三百四圖
 ○やなぎだる口の飾
 △雄蝶の折あがり

小笠原流折形
 第三百三圖
 ○やなぎだる口の飾
 △雄蝶の折上り

第十一卷 婚禮式折形圖解





第三百五圖 長伸匏包 △をりやう

○寸法は七寸を小形
とし、八寸を並形
とし、尺四方を中
形とするなり。



五、長伸匏包 これは膳に先立て進るならはしの物なり、新年にも、諸祝儀にもつかふ、折形なり、おもに婚禮式の、むこよめ盃結の席に入て着座の時に進むものどす、紙は、銀紙晴天色を本式とす、白重をも本式につかふ、其他白べにうらを普通につかふ、水引花結つくる時には梅結、寶珠結、匏結などにて飾る、伊勢のし匏百本、五十本も入るゝなれど、略しては十二本十本七本五本などの數に入るゝきはめての略には摸製鯛のしといふものを七枚五枚三枚も入るゝなり、のする臺は白木三方に奉書紙二枚がさね敷て、上によこにおく、のし匏の頭の方横上座にむくるゆるゑ、三方の穴のなき方（ふちのとちめなき方）を正面の上座にむけて包形横下座になるなり、委細千代鏡にあり。

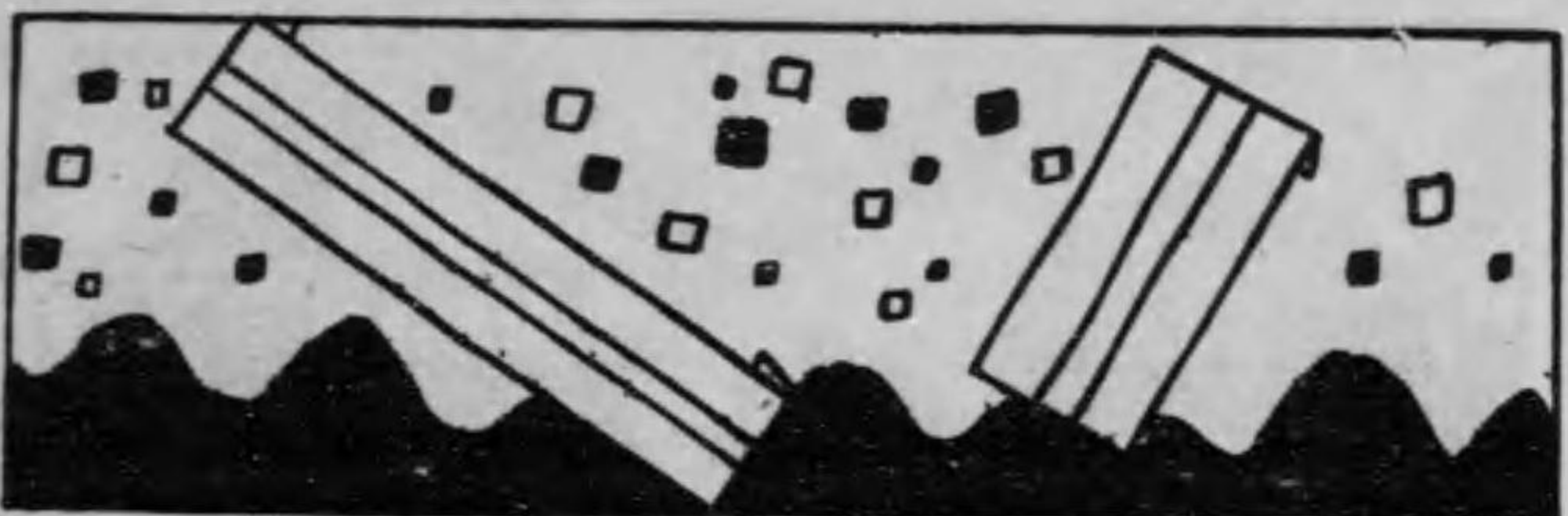
床

羽子母
羽上母

のしかしら
三方
つゝみかた

上のふちとちめあるかた

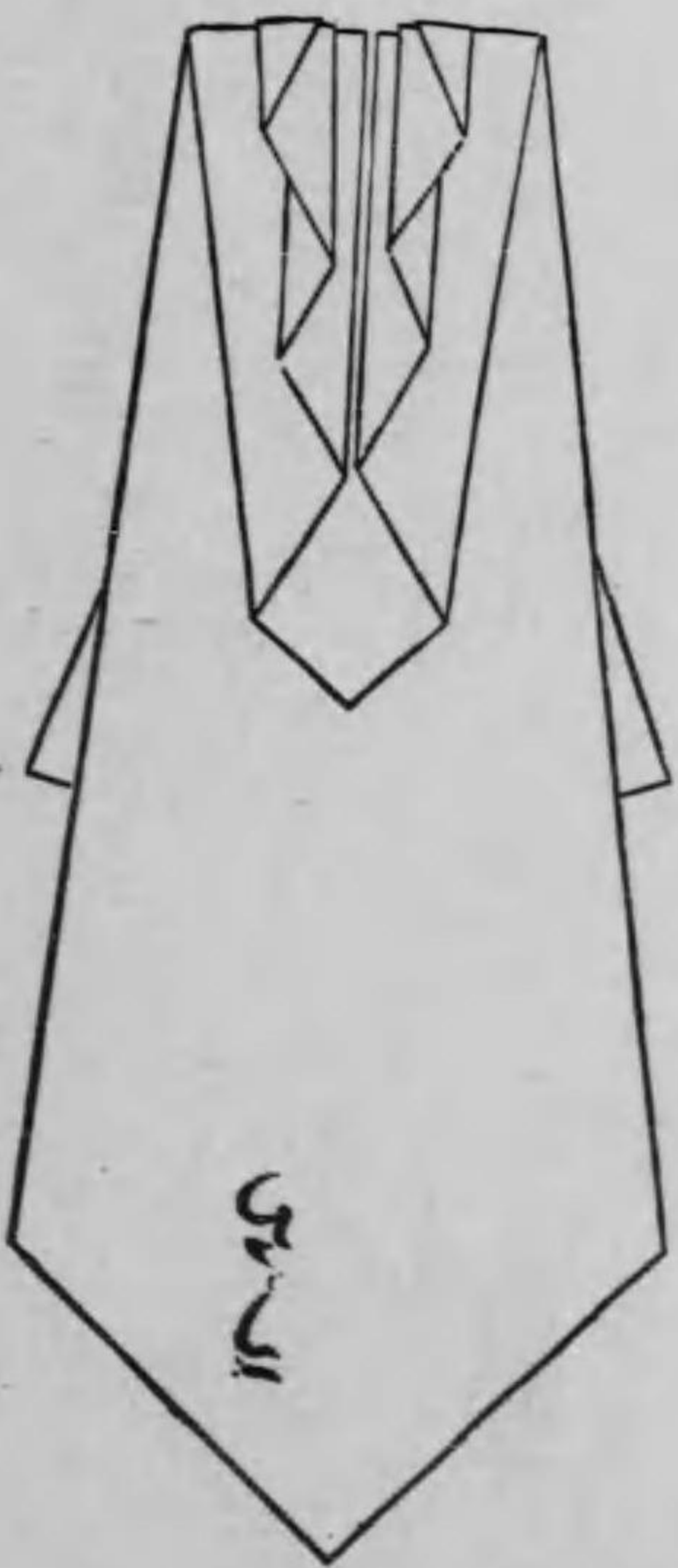
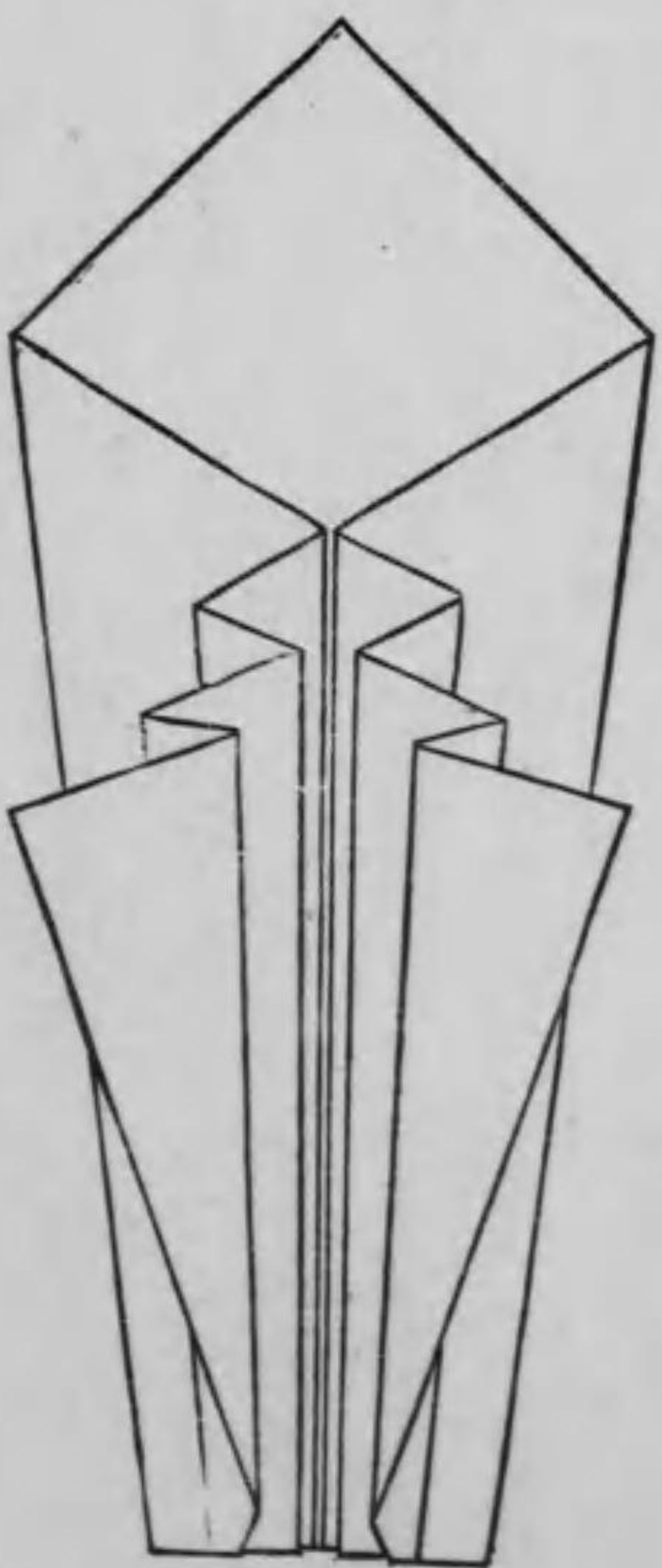
進るとき飾置く時も
同様なり。



小笠原流折形

第三百六圖

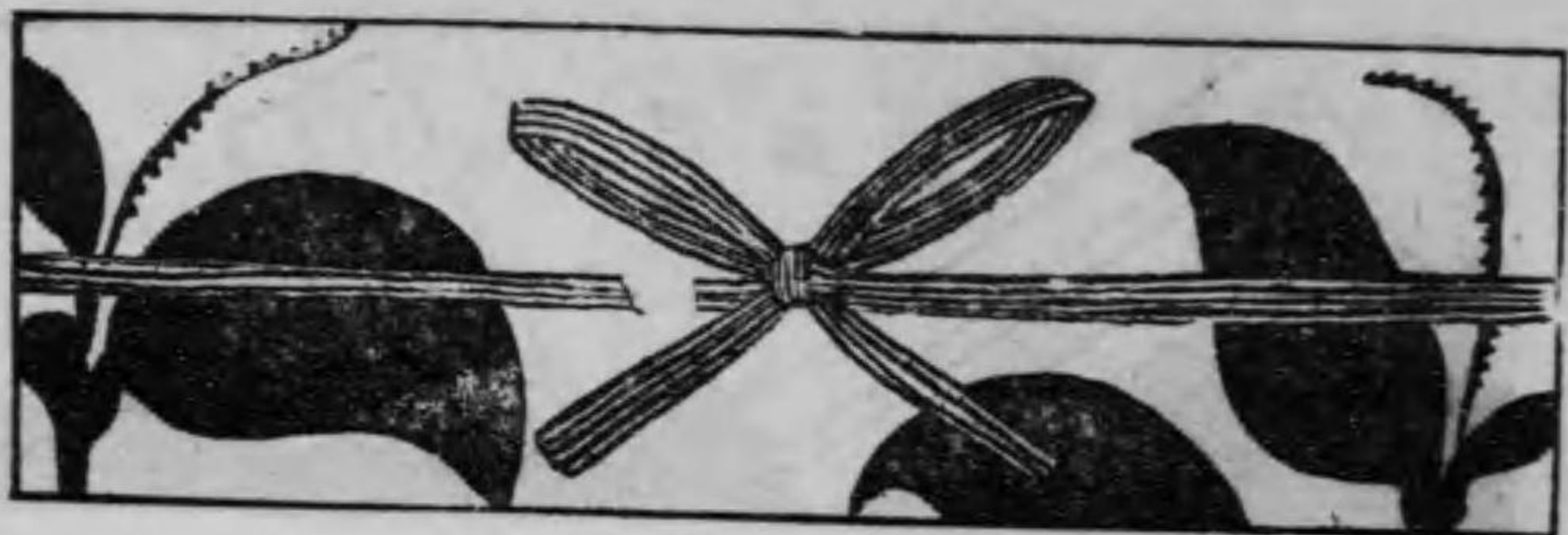
ながのしあはびづみ △をりあがり

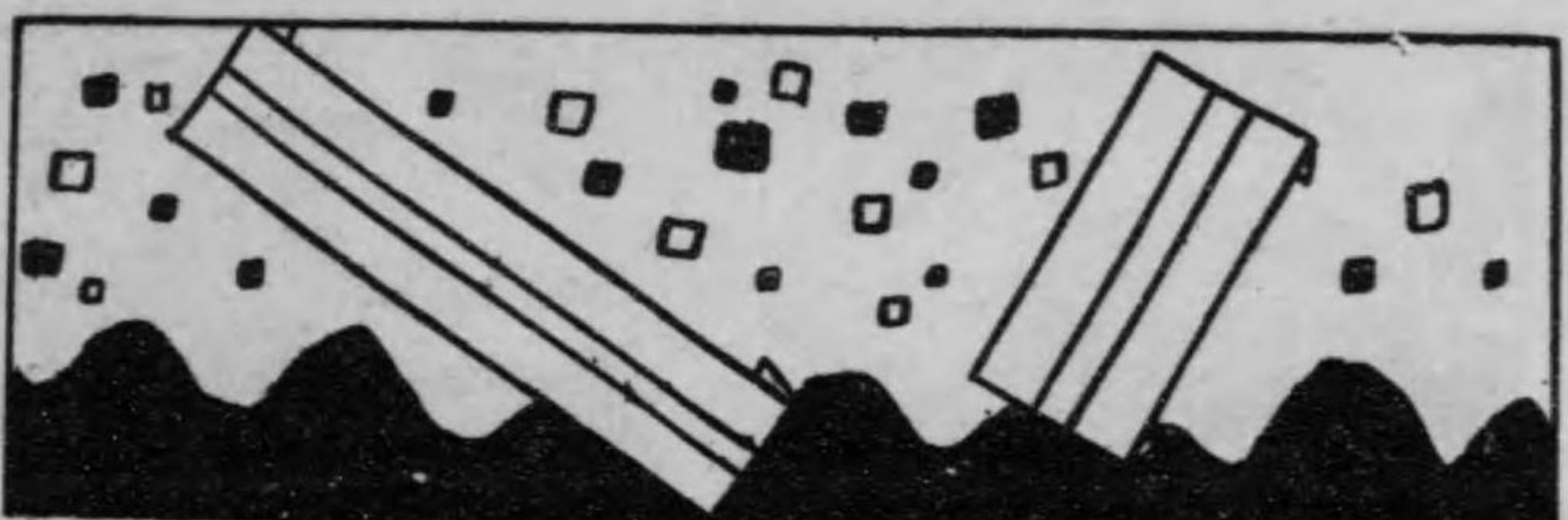


第三百七圖 同裏

六、銚子女蝶男蝶 紙は前に同じ、色直しの後（銀そら色の時）金紙べにうらの飾つけたる銚子を一組、ほかに備置つかふを本式とす、略には、色直し前の銚子を其ま、後までつかふなり、白重の本式の物、元結の細きものには蝶のひげ三本、足三本つけ、細き紙を巻いて眼をつけて、枕といふものに蝶をどちつけて、銚子のつるは太き元結にてかかり、蛇結、装束紙、富の尾などの紙水引をそへて飾るなり、こゝにはてふのこしらへ方のみをあぐ、手安くするには、つるを紙にてまき、水引にて七所五所むすびて、てふをつるの前の方によせて結びつけおきてもよし、口の上のつるの所に口花とて、造花の松竹梅、苦松数柑子を小形につくらせて結つくる、造花とくのへがたくば、生花をつかふなり、生花も生松も本式にもつかふ事あり。

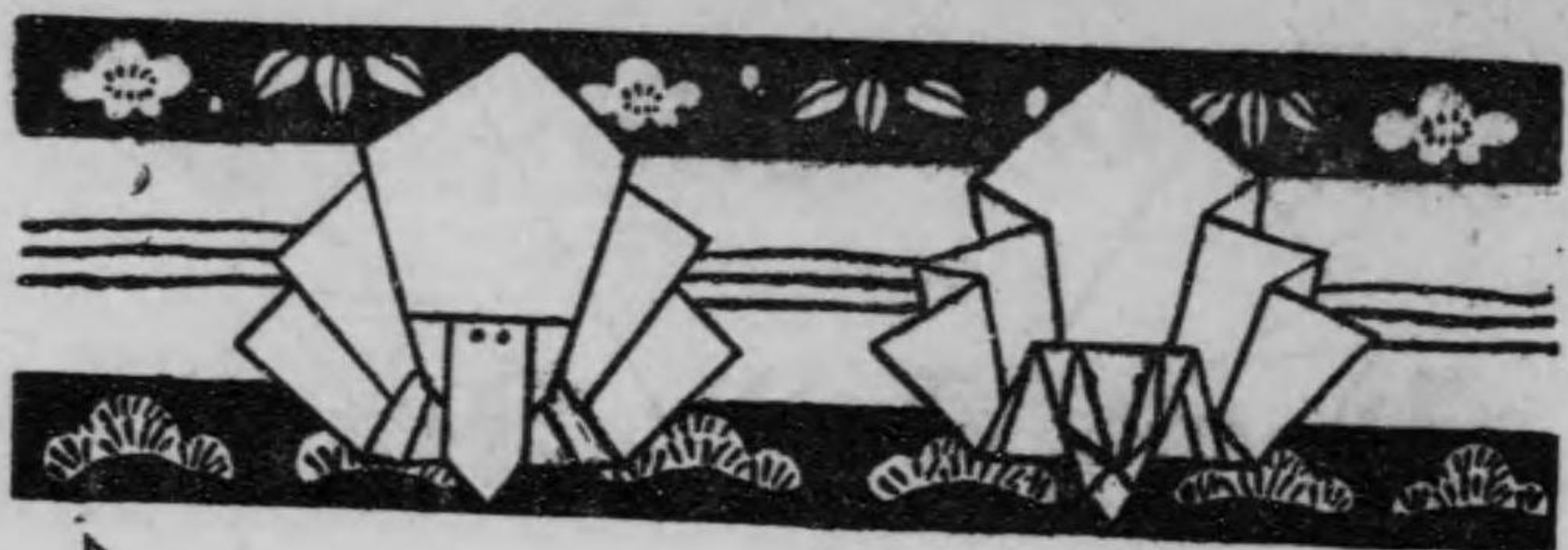
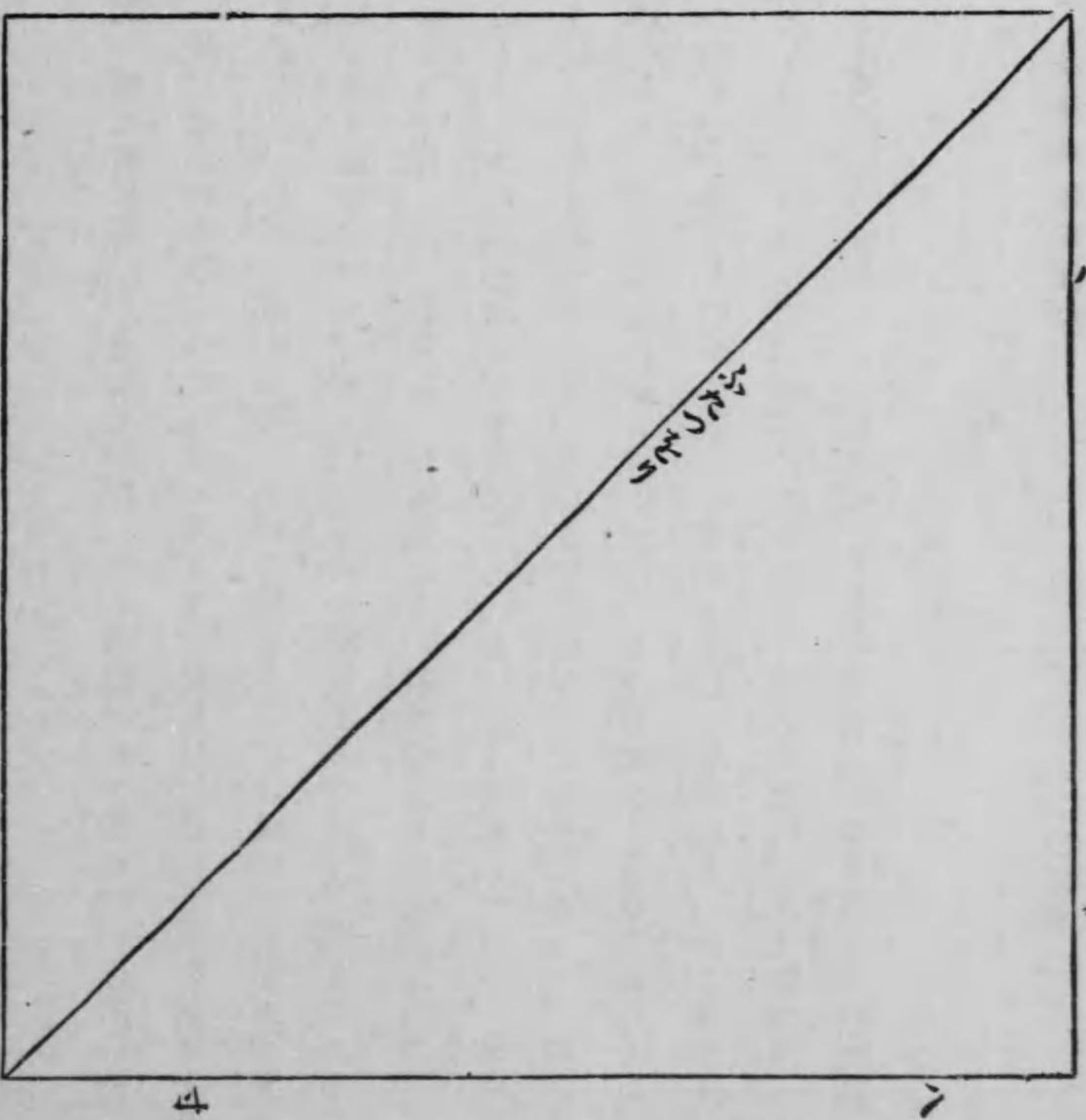
○此てふのとくのへ方のほかに、他傳にはいろくの折形あり、最もたやすくしてよく見ゆるは四條流の蝶形なり、其略のこしらへ方は「婚禮千代かみ」にのせおけり。



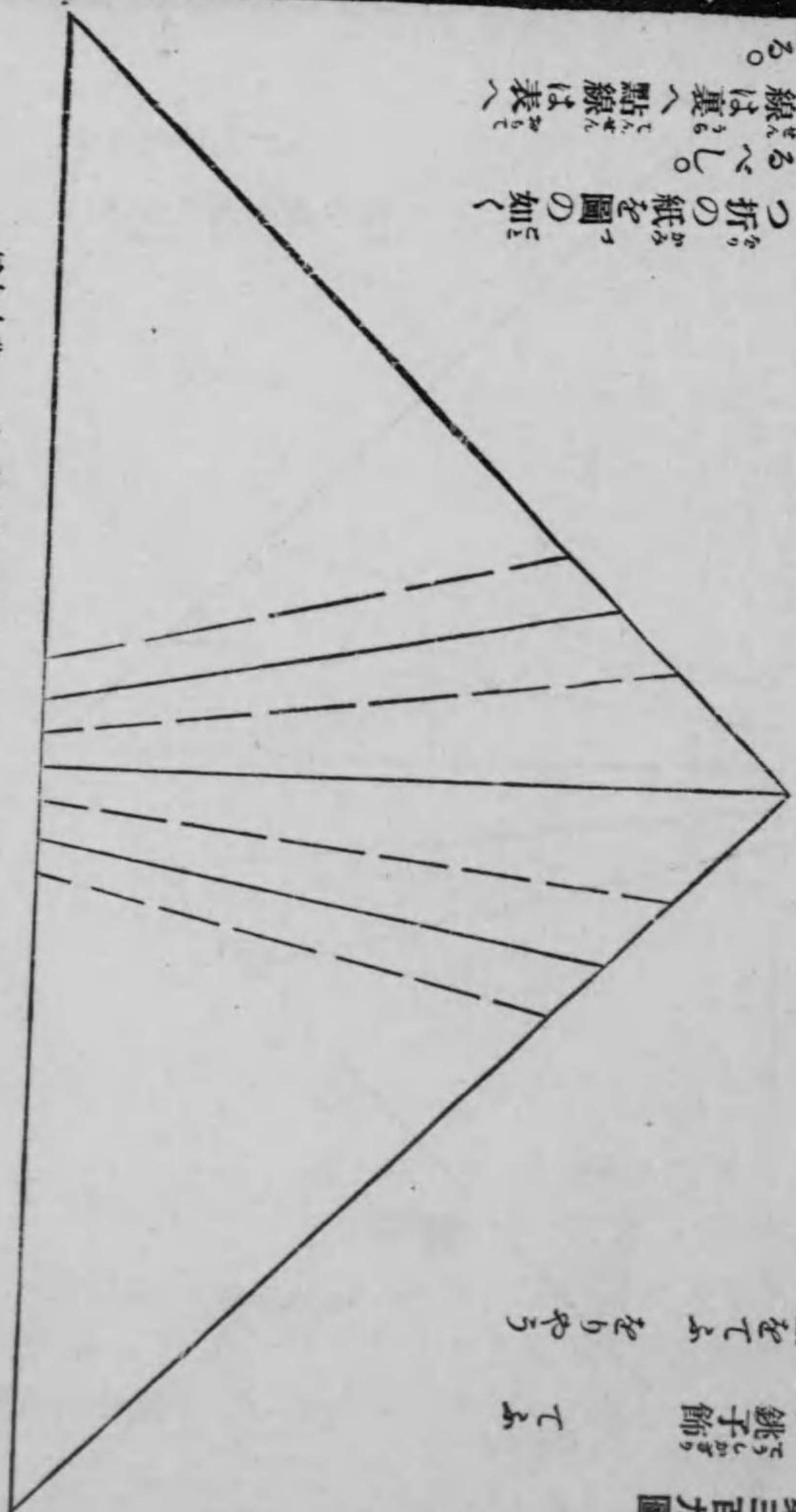


第三百八

- 銚子飾
- の蝶
- △ 折様
- (一)
- 二つに
- をる

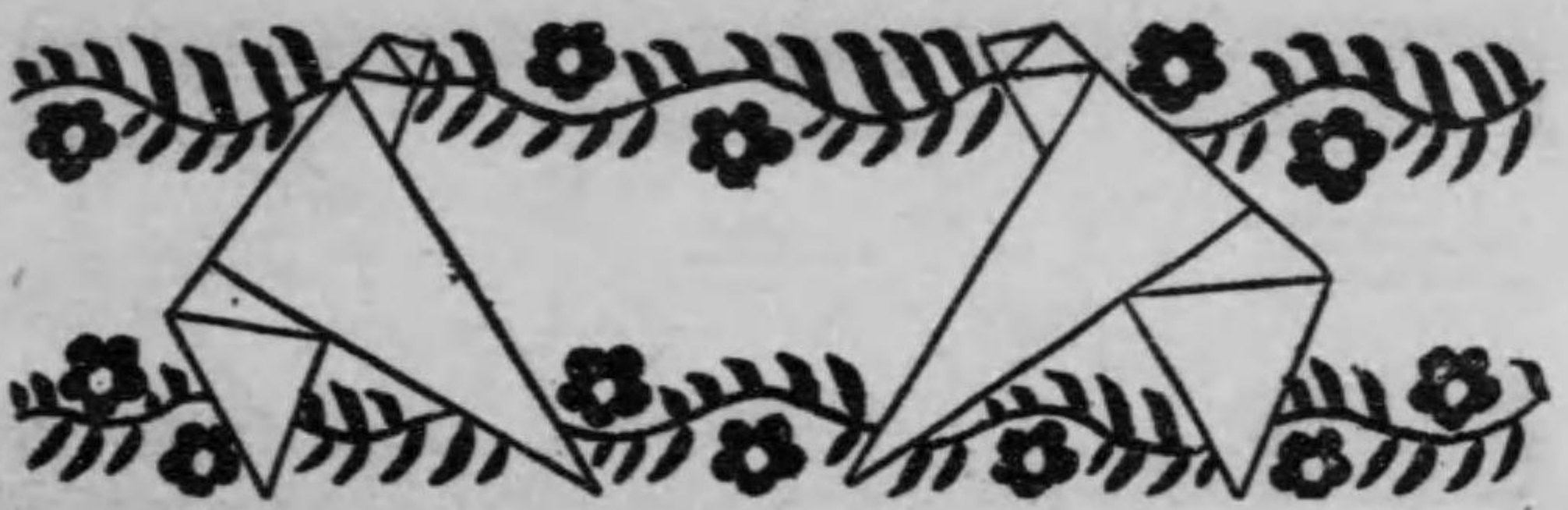


- 二つ折の紙を圖の如く
- をるべし。
- 黒線は裏、点線は表
- をる。



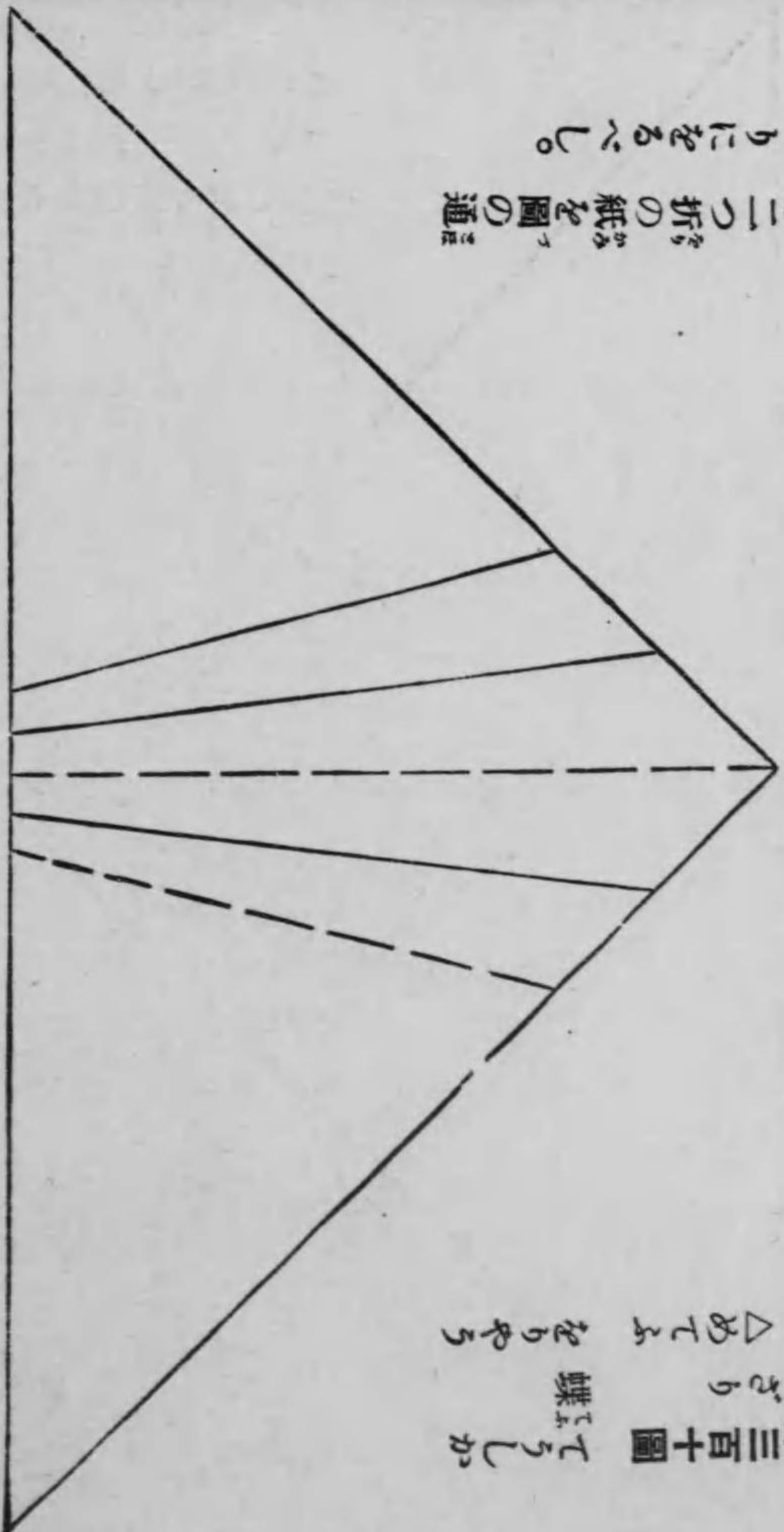
第三百九圖

- △をてふをりやう
- 銚子飾
- てふ



小笠原流折形

〇110折の紙を圖の通
かにするし。

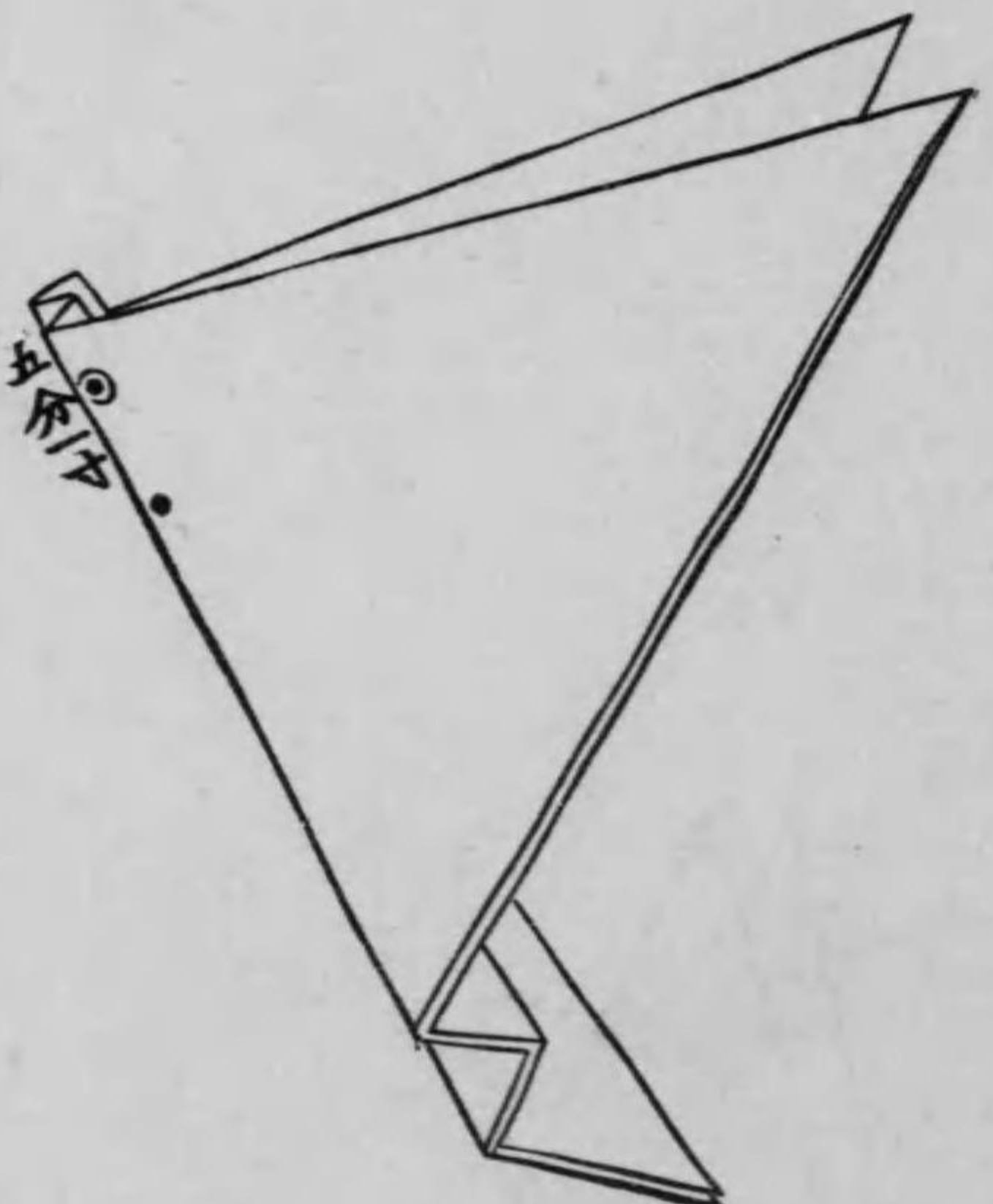


第三百十圖
ざり蝶
てうしか
△めてふ
をりやう

110

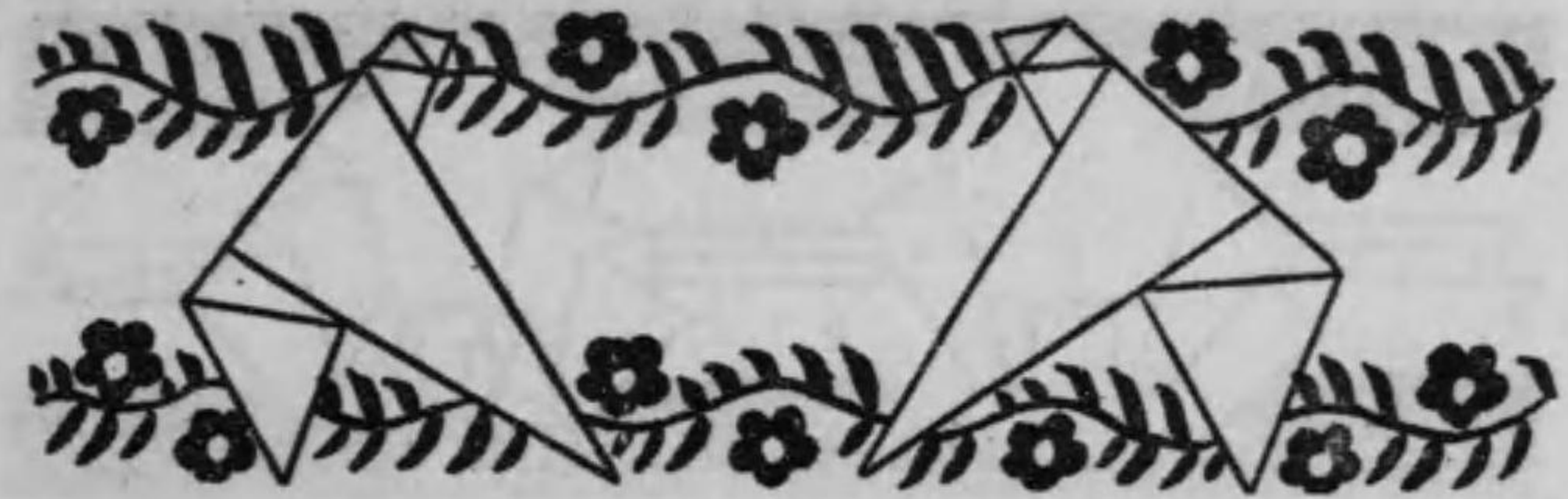
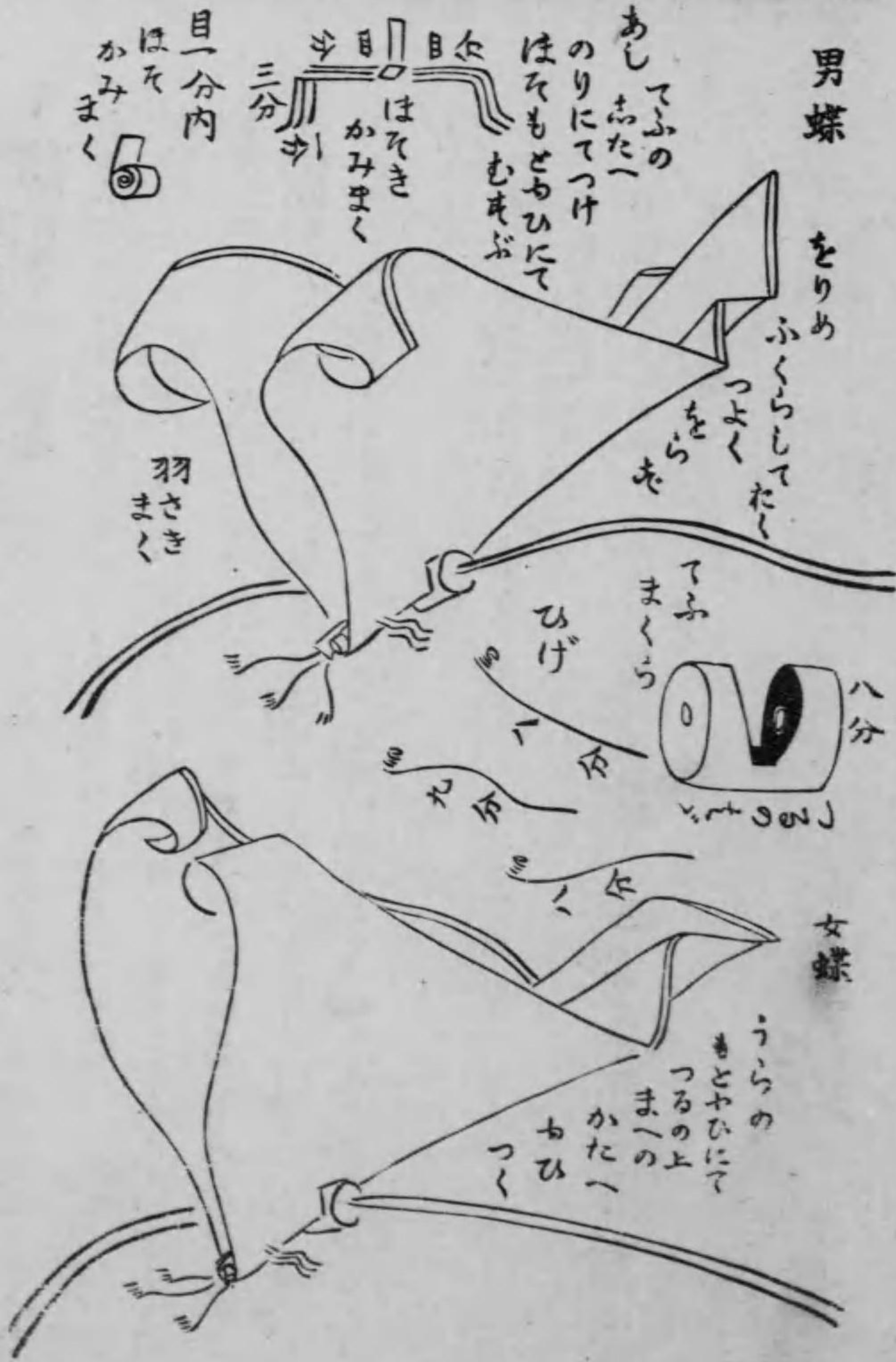


第十一卷 婚禮式折形圖解



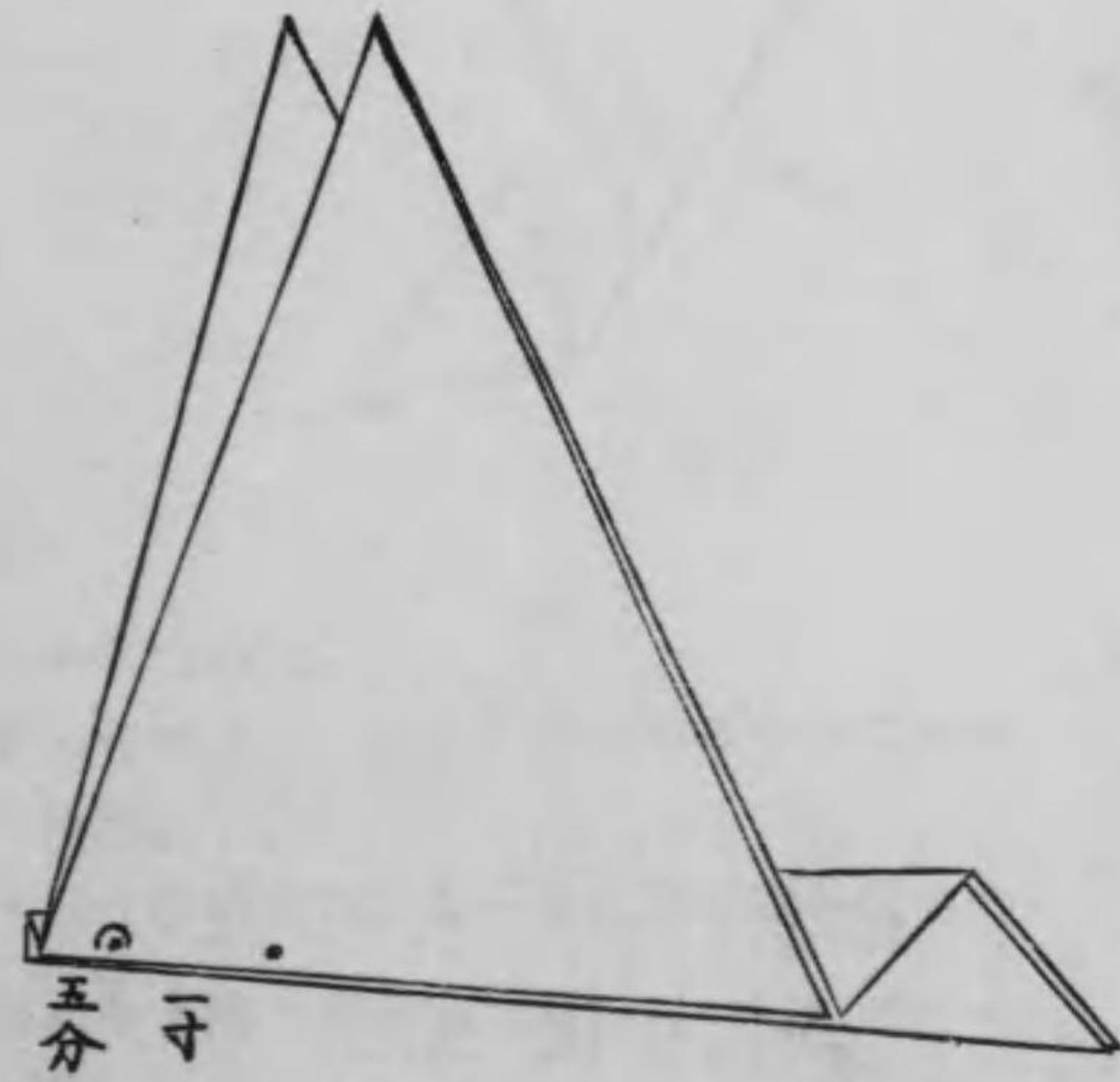
第三百十一圖 鏡子飾 雄てふ △折あがり
◎てふの足を結びつくる元ゆひ通す穴のし
るし。
●てふを枕にとおつくるもとゆひとはすあ
なのしるし。

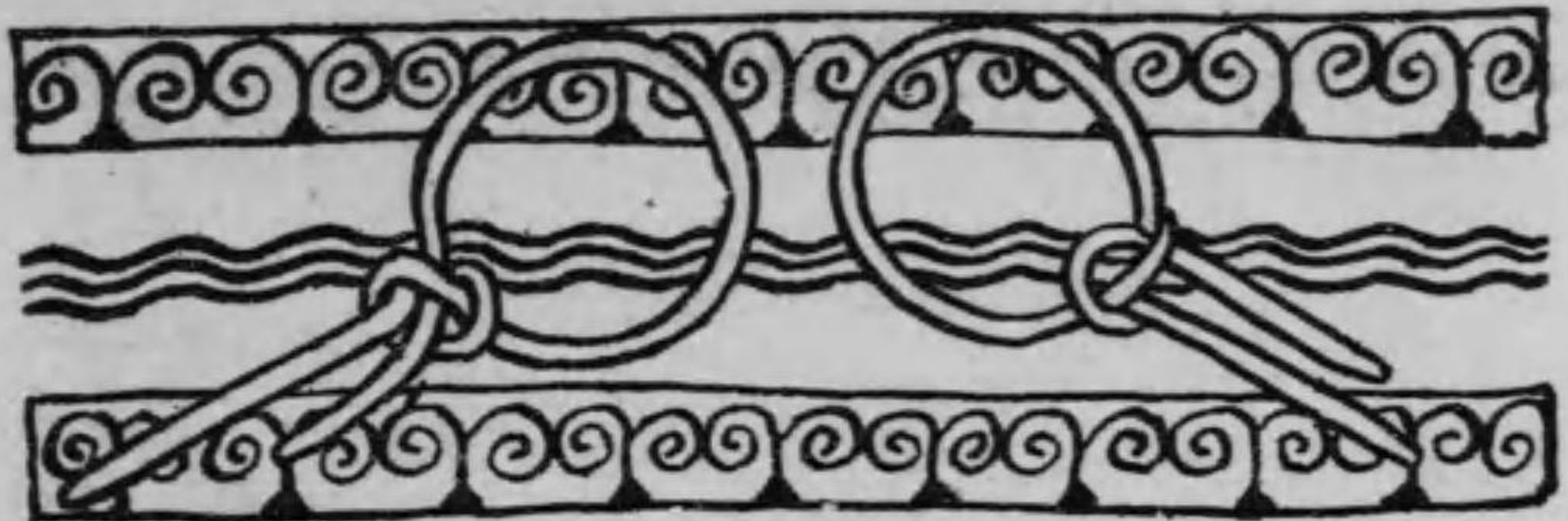
111



小笠原流折形
第三百十二圖 ○銚子飾
雌てふ △折あがり

第三百十三圖 をてふ。めてふ組あげの圖
○八寸蝶を普通とし、七寸六寸蝶を小形とし、燗鍋銚子に付る。



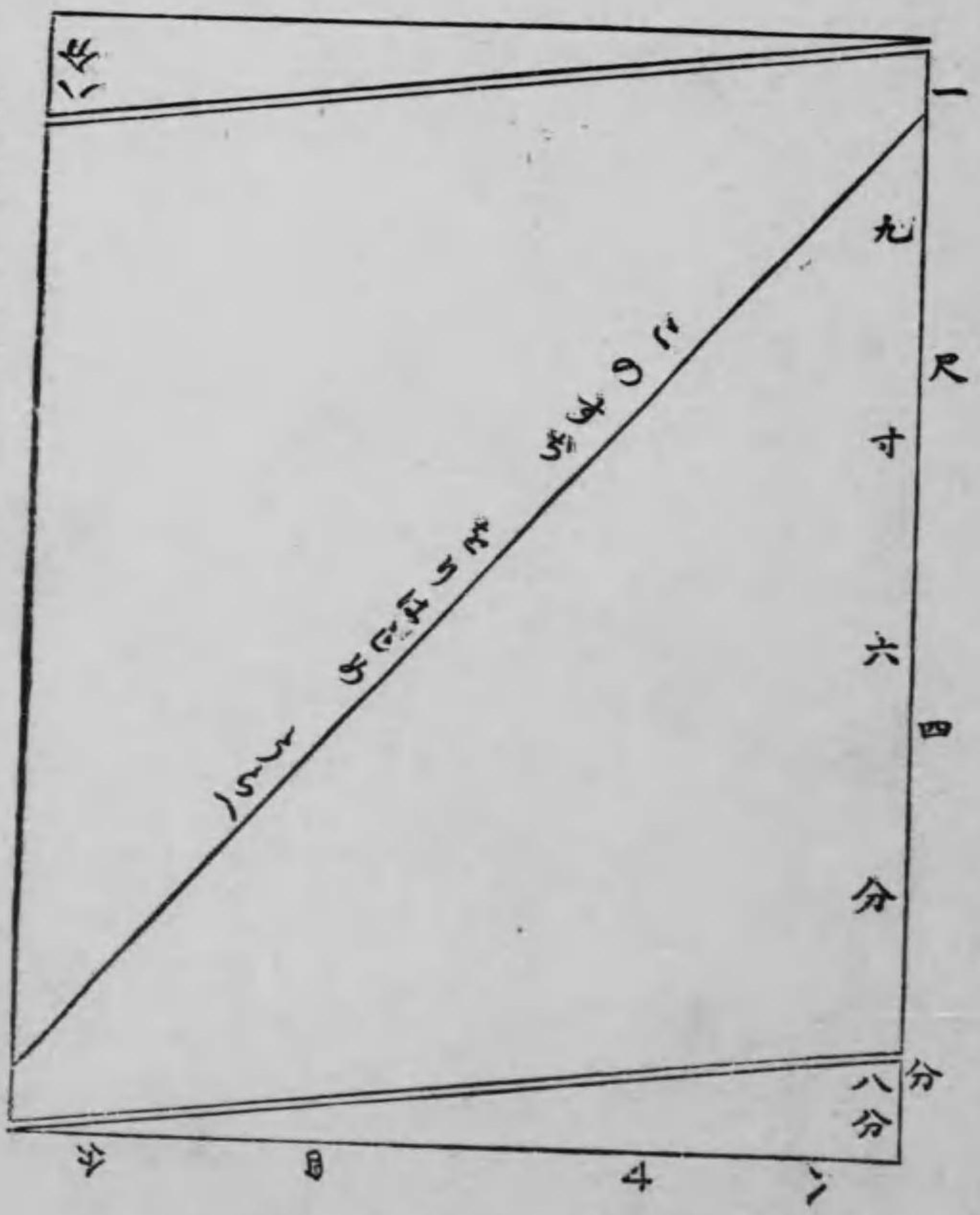
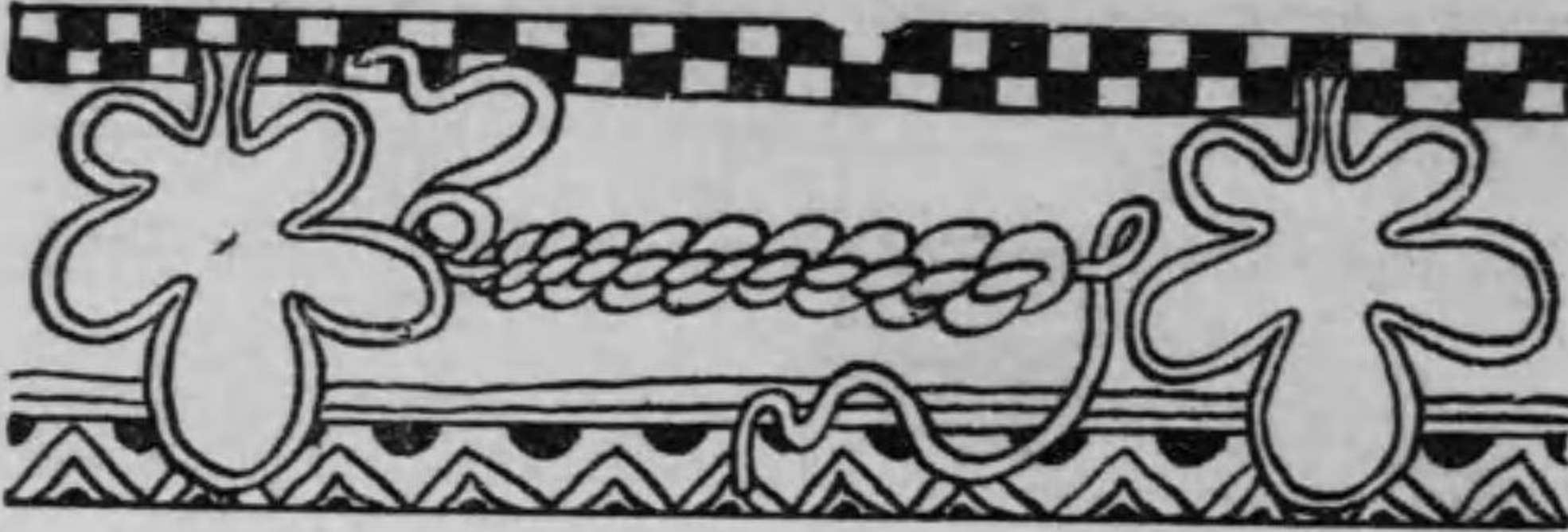


七、瓶子男蝶女蝶

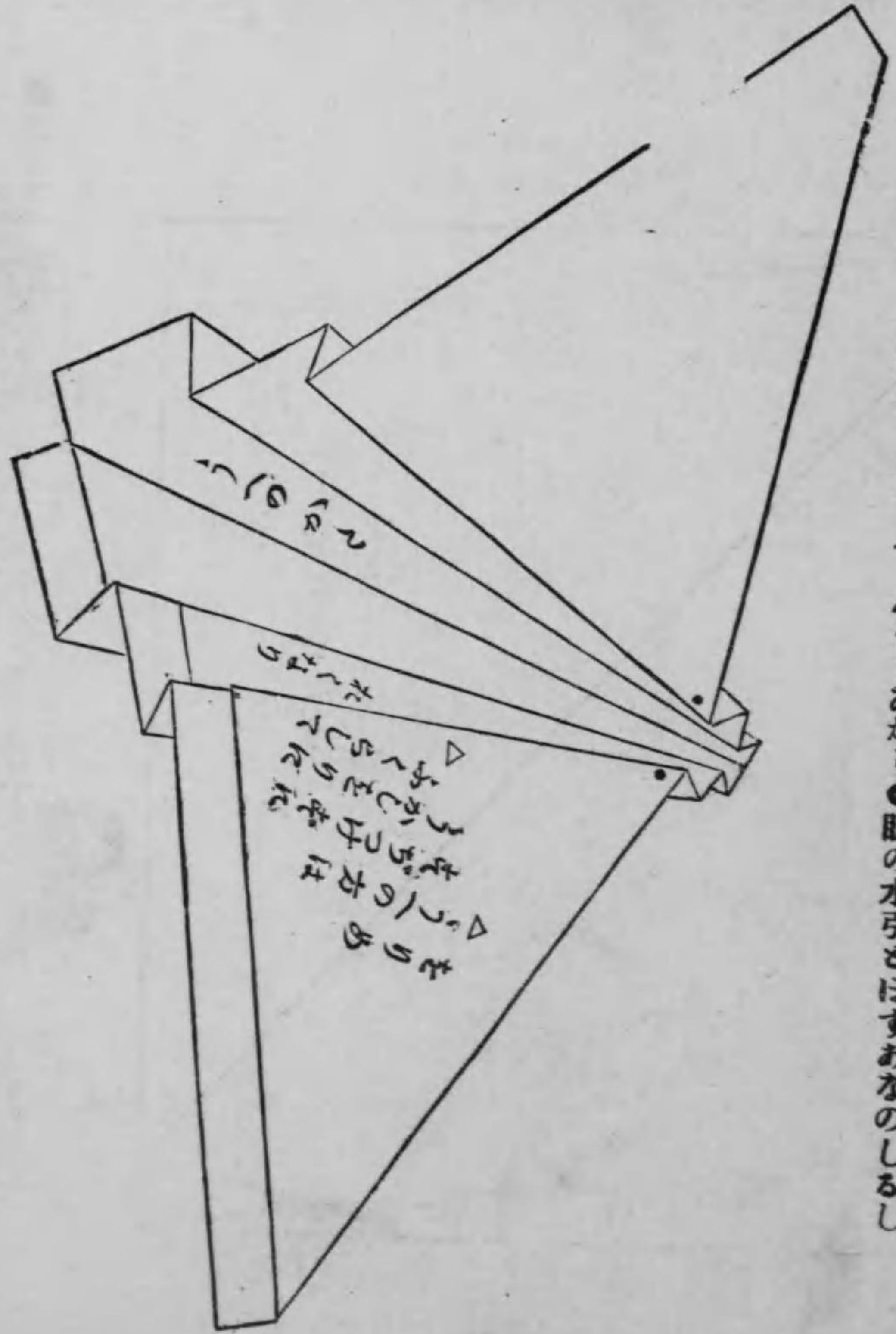
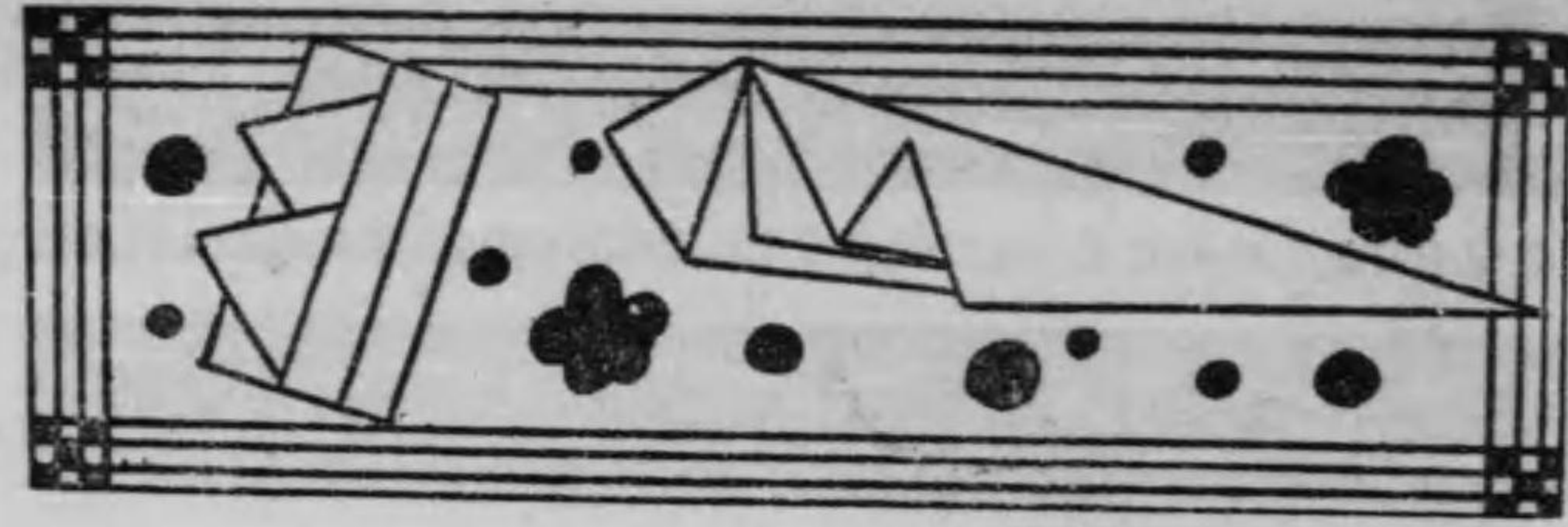
紙とりの仕方によりて形よく出来るなり、この蝶の女蝶のをりやうに二色あり、是はたやすく折るゝ方をあげつ、神供ならば白紙がさね、檀紙、奉書などにてするが本なれども、銀紙そら色紙がさねにてすることあり、つぎくは奉書べにうらをもつかふなり、へいじは、すやき、やきもの、錫をもつかひたり、まづ口包をなして其上に、蝶に通したる水引にてゆひつくるなり、羽さきのまき方、銚子のてふと同じ、男蝶はうらへまき、女蝶は表へまき、細き丸き物にてやわくとまくなり。

○此てふの折方もいろいろあり。此をりやうは小笠原流の内最もひろくおこなはれたる折形なり。

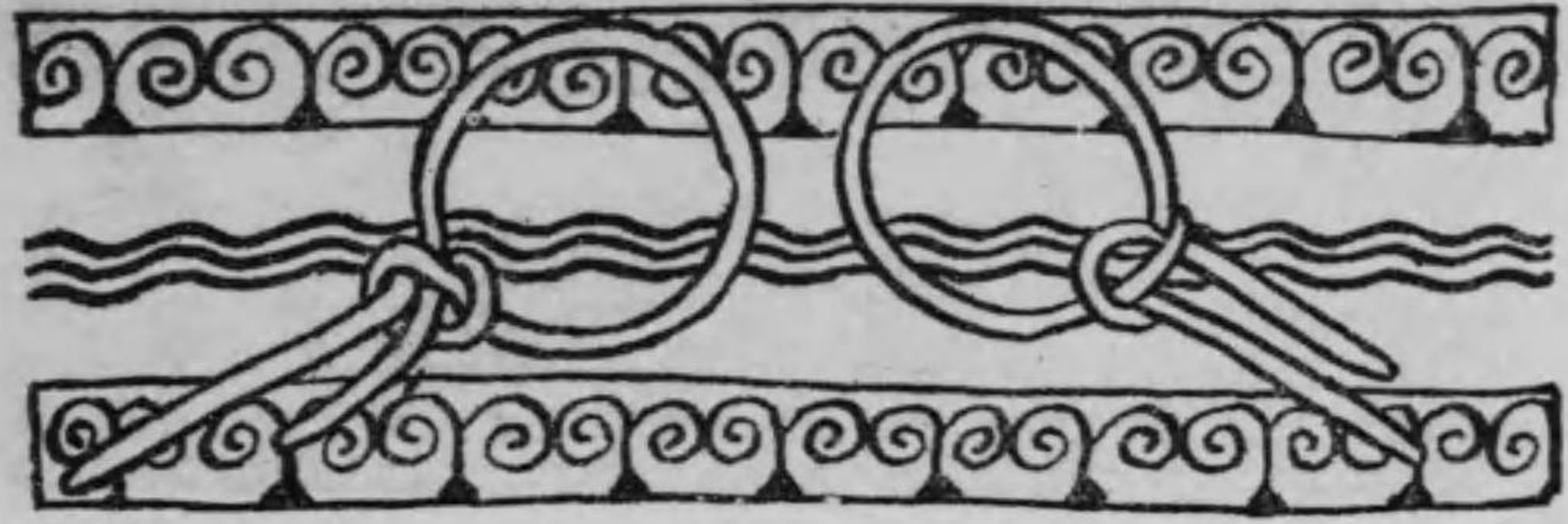
○また近來もはらつかふ折方は、四條流料理人のとゝのふる折形なり、それは銚子の蝶と同様「千代鏡」に有。



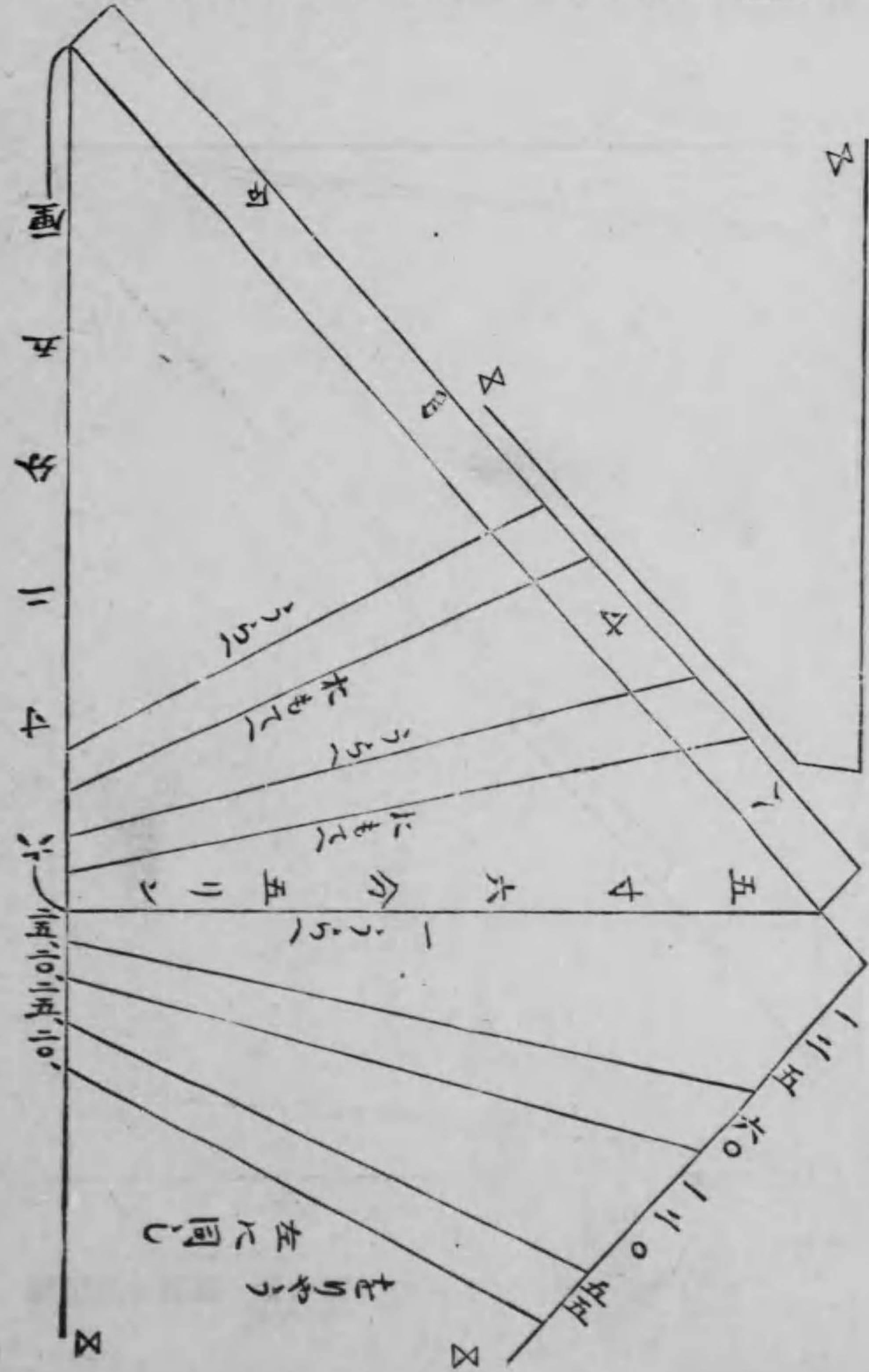
第三十四圖 瓶子飾 せてふ △をりやう紙との

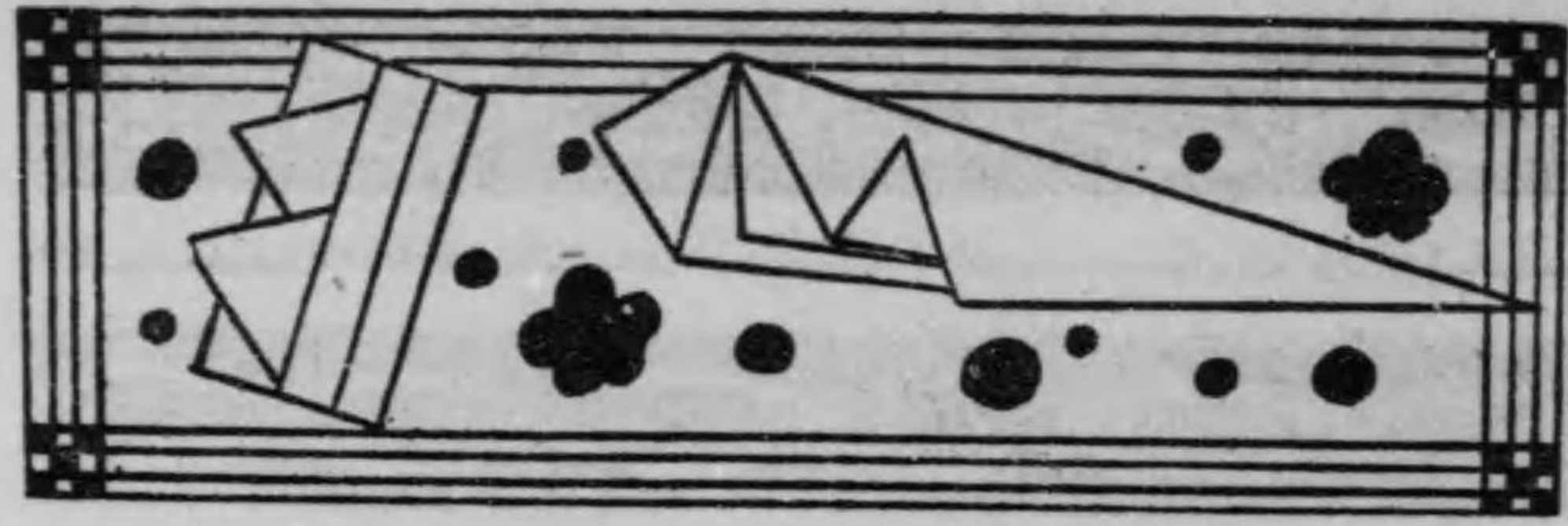


第三百十六圖 瓶子飾^{びしき} をてふ △をりあがり ●眼の水引とほすあなのしるし

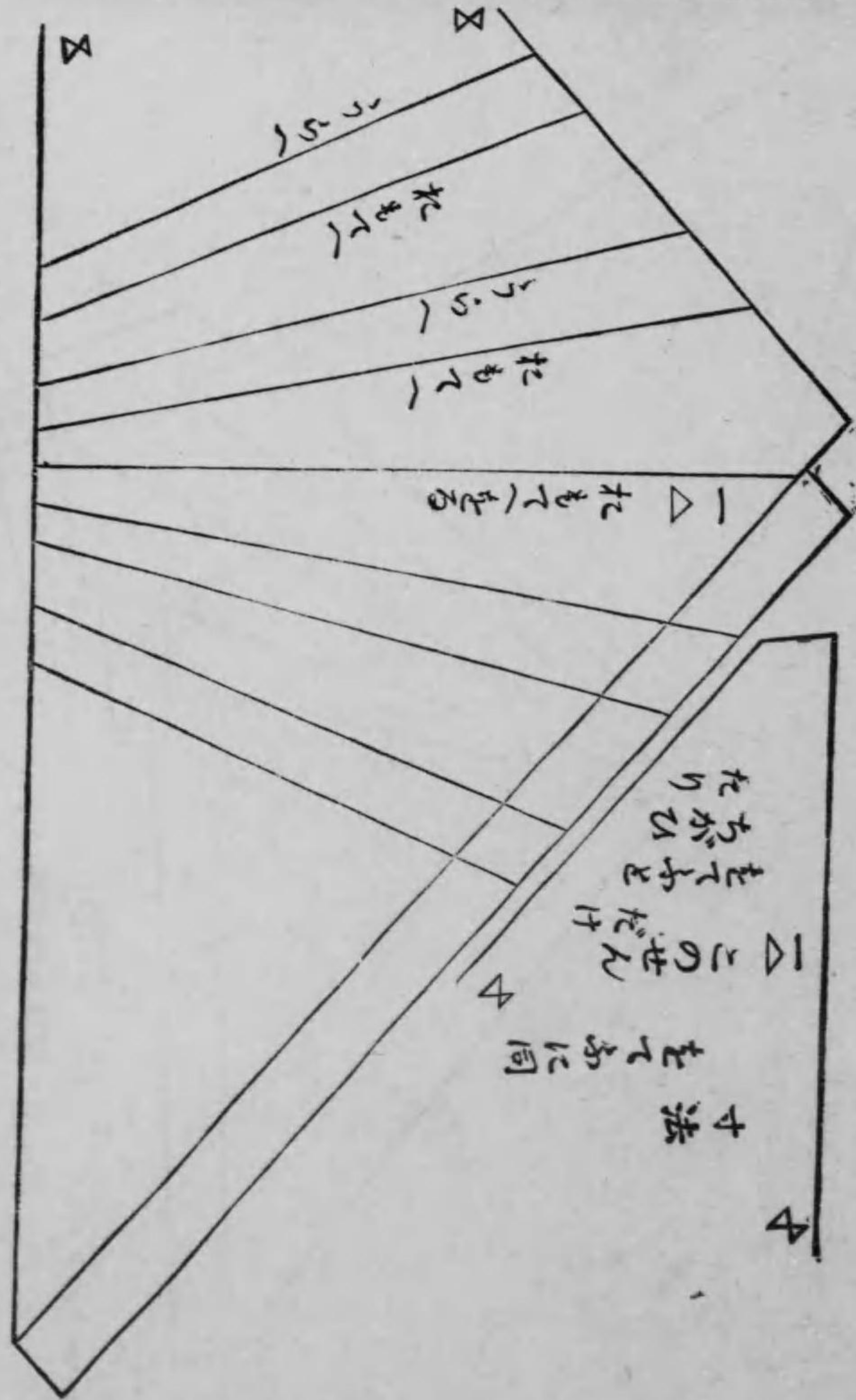


第三百十五圖 瓶子飾^{びしき} をてふ △をりやう寸法^{はたし}





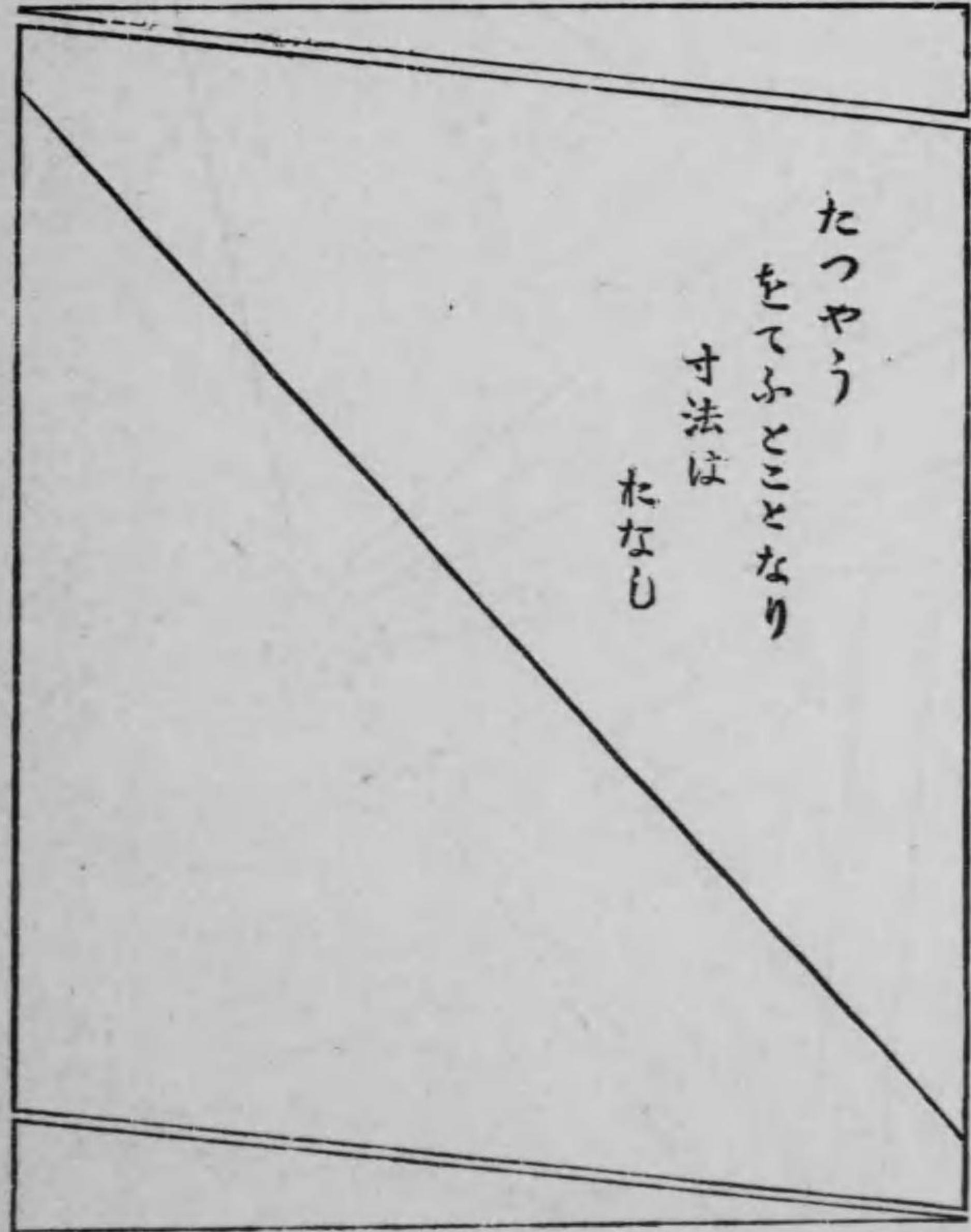
第十一卷 如禮式折形圖解

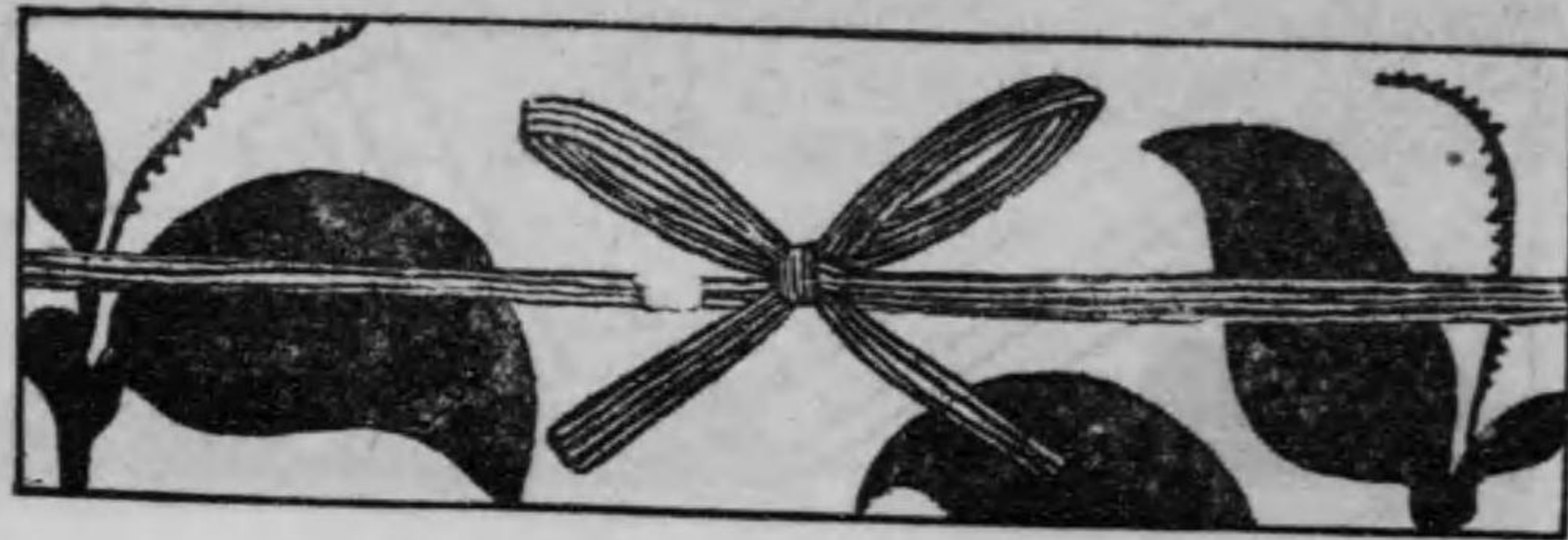


第三百十八圖 瓶子飾 (へいじき) めてふ (乙の形) △折様寸法

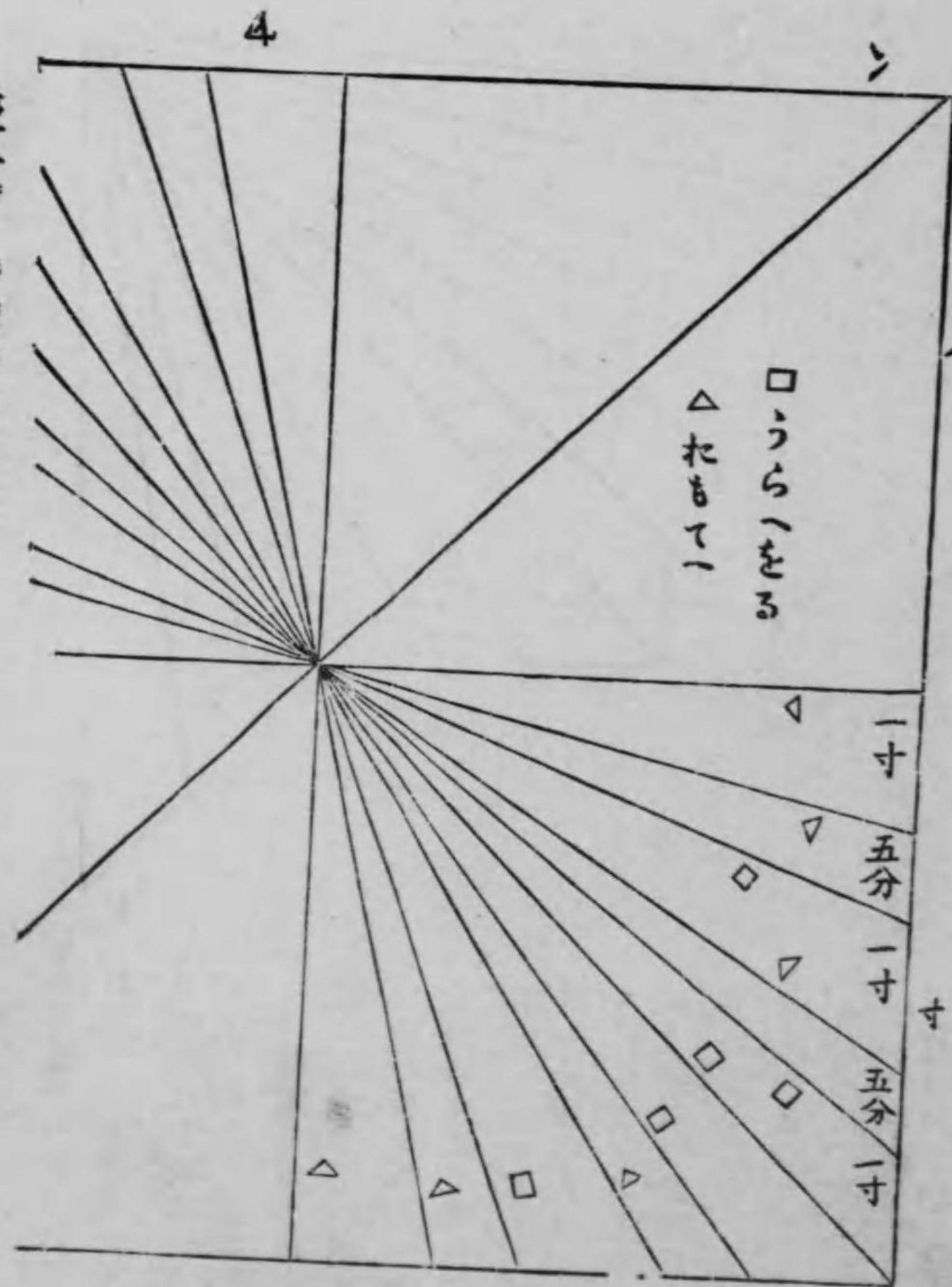


第三百十七圖 小笠原流折形 瓶子飾 (へいじき) めてふ △をりやう紙取り





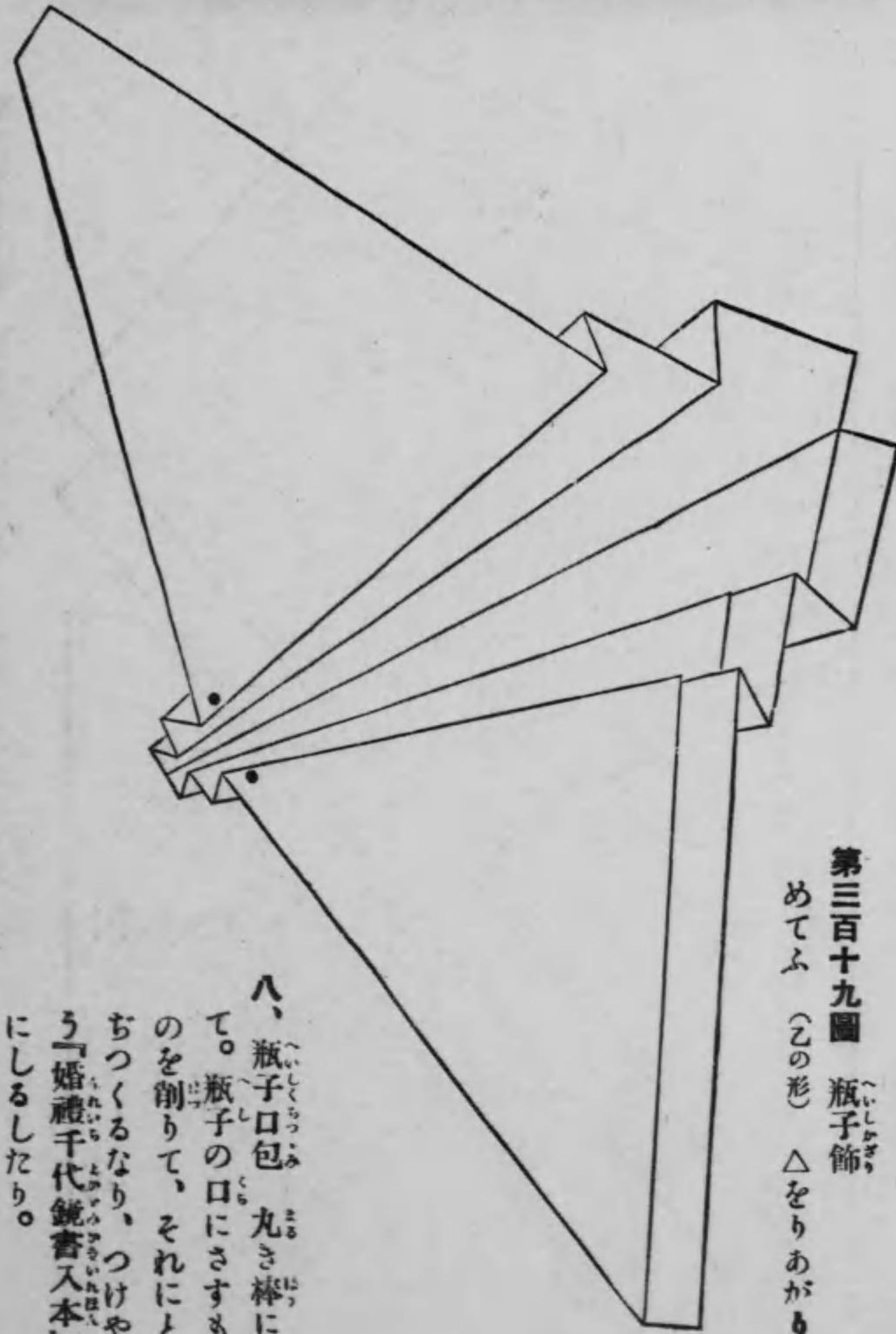
第十一卷 婚禮式折形圖解



第三百二十圖 瓶子口包 △をりやう寸法

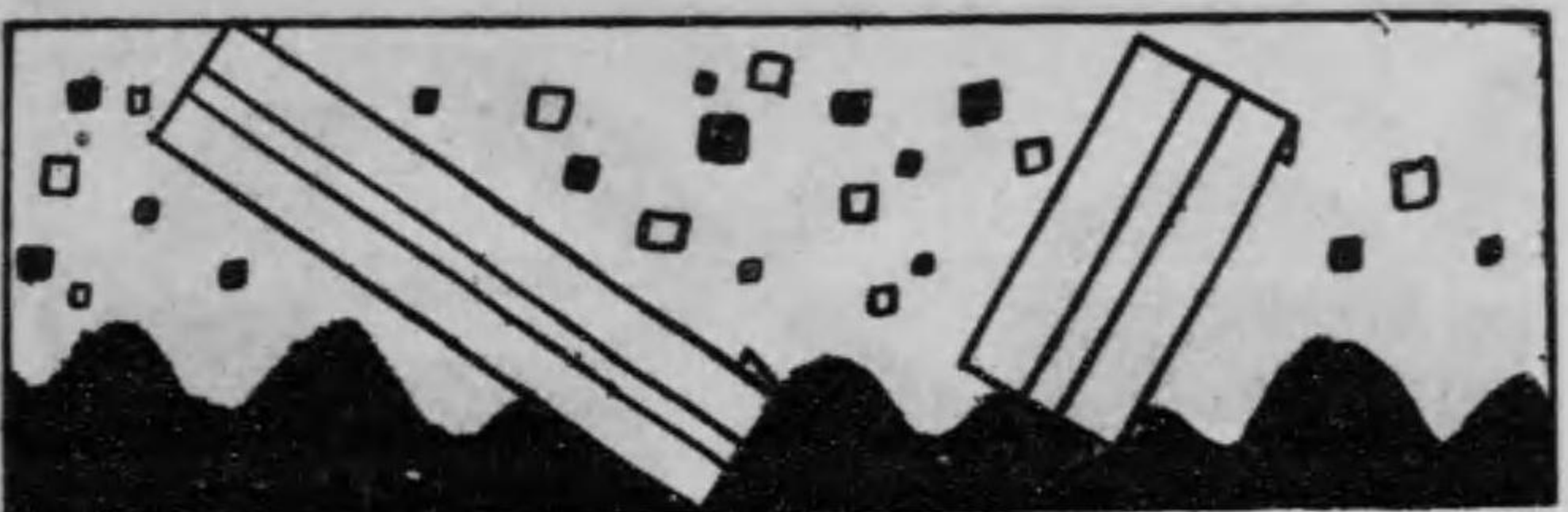


小笠原流折形

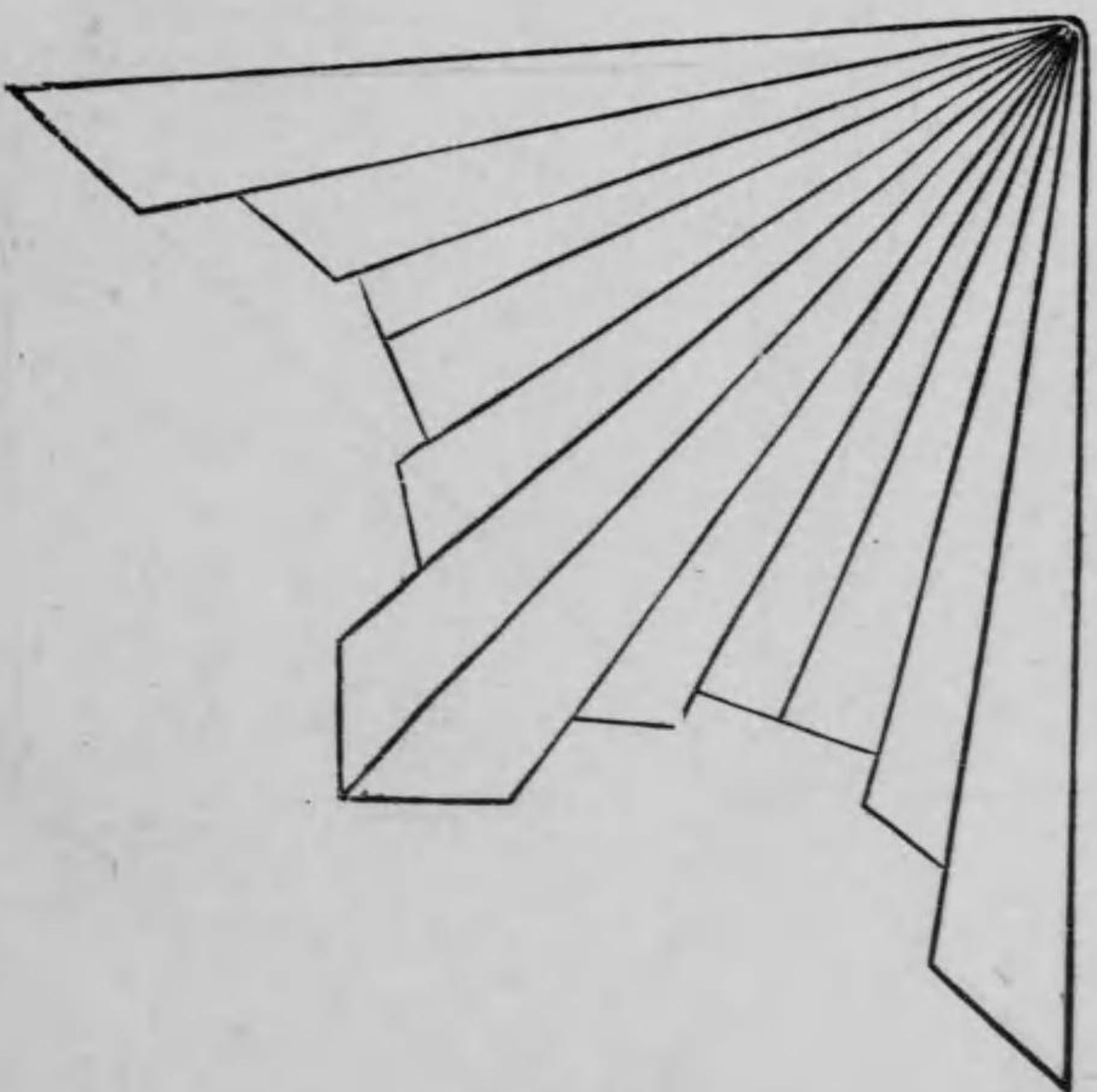


第三百十九圖 瓶子飾
めてふ (乙の形) △をりあがり

ハ、瓶子口包 丸き棒にて。瓶子の口にさすものを削りて、それにとちつくるなり、つけやう「婚禮千代鏡書入本」にしるしたり。



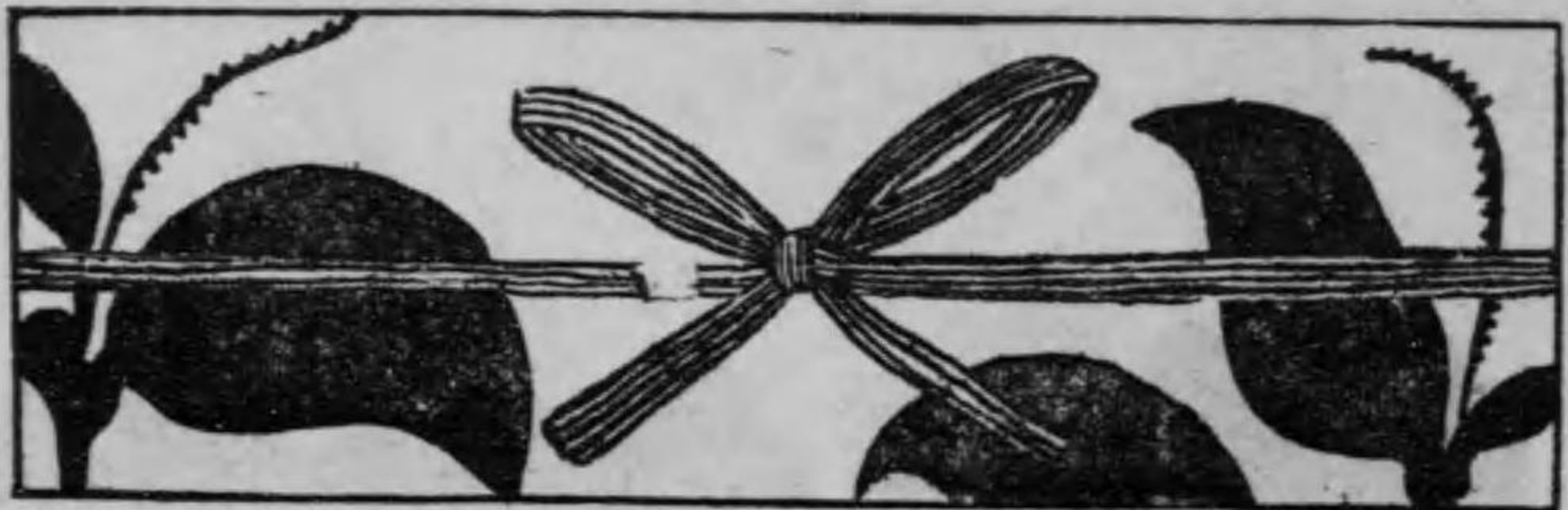
小笠原流折形



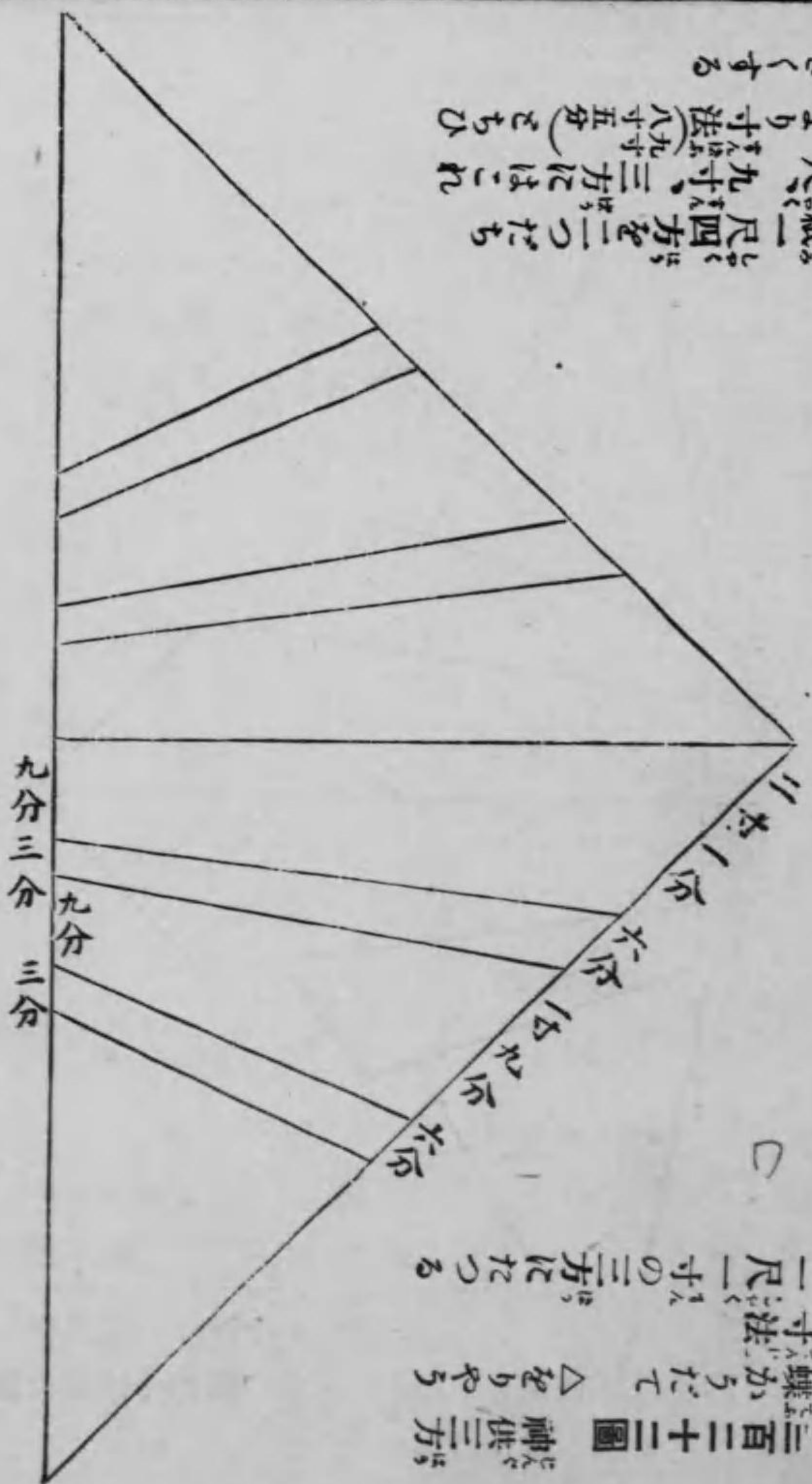
二九二

第三百二十一圖 瓶子口包

九、神供三方紙立四方三方のよすみに立る物なり、四方三方とも白木製にして、上の鏡に足づけの板を四方一分づつめてこしらへて、面のふち一ぱいに入れ、其一分宛のあきのごころに紙立をさしこむなり、折形の出来たるを下の方をたいのふらの寸法によつて形よくするために、たちおどすなり、それを左右のはし順に合ふ様にさし入る。



○紙一尺四方を二つだけより寸法(八寸五分)どちひさくする



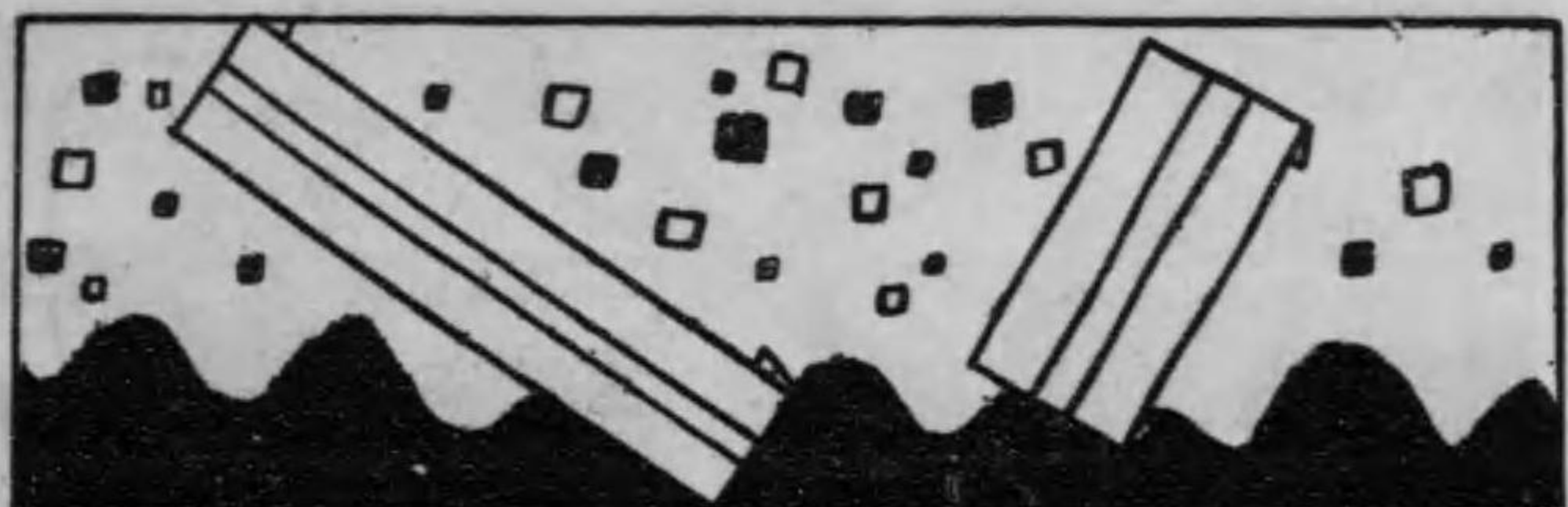
第十一卷 婚禮式折形圖解

二九三

第三百二十二圖 神供三方の寸法

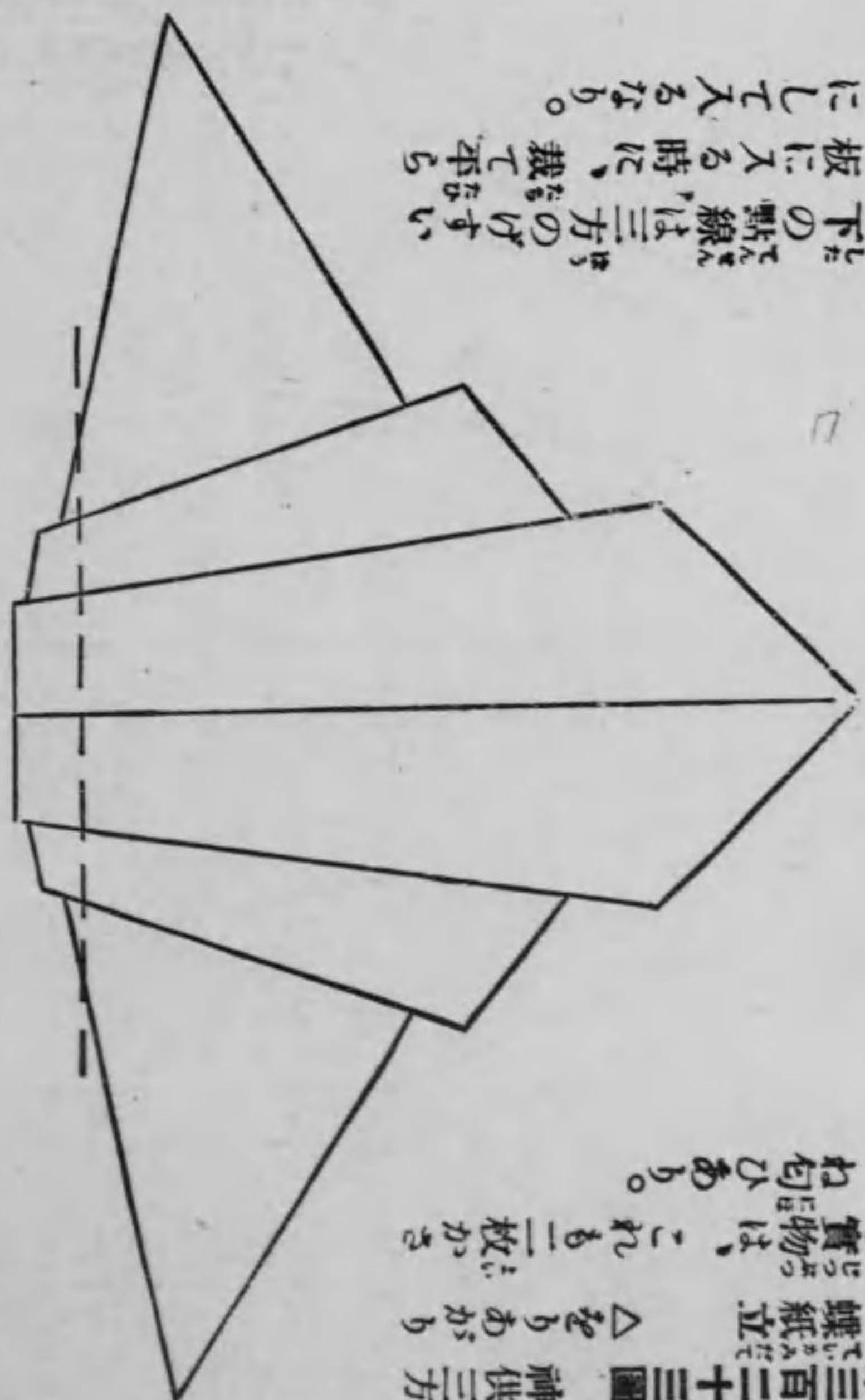
蝶かうだて △をりやう

一尺二寸の三方にたつる



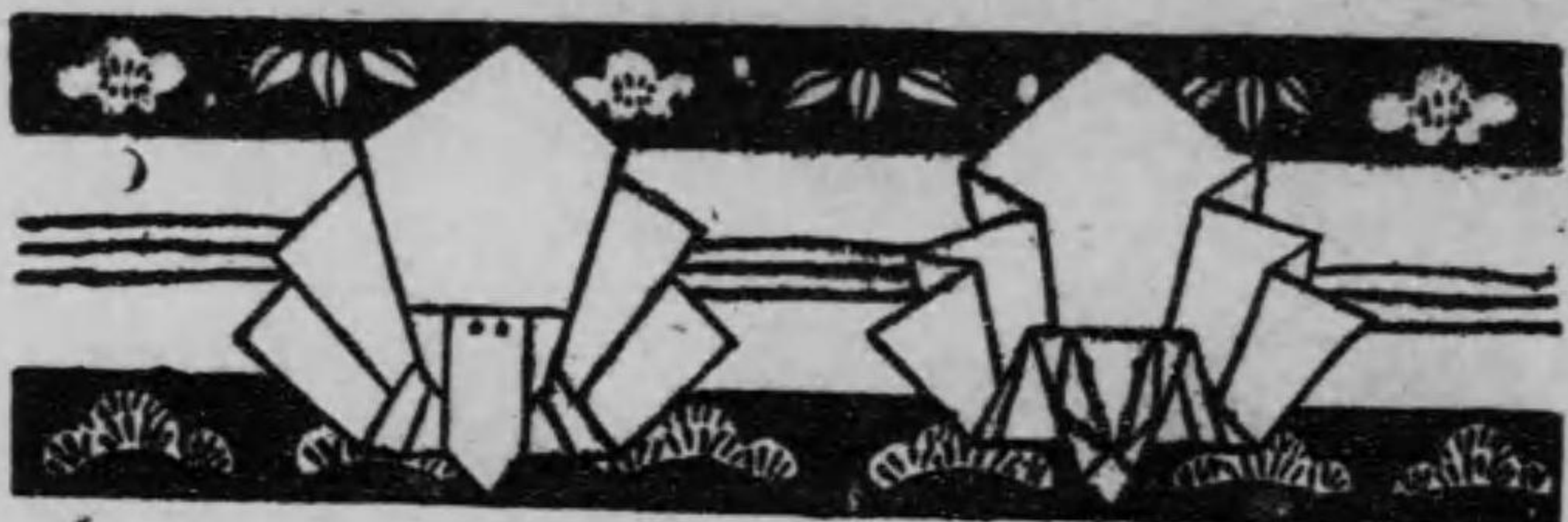
小笠原流折形

○下の点線は三方のげす
板に入る時に、裁て平ら
にして入るなり。



第三百二十三圖 神供三方
蝶紙立 △をりあがり
○實物は、これも二枚かさ
ね句ひあり。

二九四



○以上のほか、結納の折形に入るべきもの、板の物、巻物、帯、染小袖、わた包などの折形は、衣服の部に記載したるに同じ、土産物につかふべき折形は、花粧の部、其他にも記載したるをつかふべし、三日目皆子餅にそふる、赤粉、白粉包、赤飯にそふる胡麻鹽包などは、粉、薬味の部に記載したり、結納のほかのおくり物にそふるのし匏包、上中下を考へて、伸匏の部の折形をつかふ事。

このほか婚禮式につきての手續きのごとは「婚禮千代鏡」につまびらかに大方をしるしたり、なほ伸匏包其他のひながたとして「紐結包物標本」のいろくを、あらはしおけり、本書を見るにつけて、右のものを合せ見る時は、包形の實物をしらへ、其つかひ方を知るの便を得ること、いよくおほかるべし。

附録 水引の結び方

もろわな結

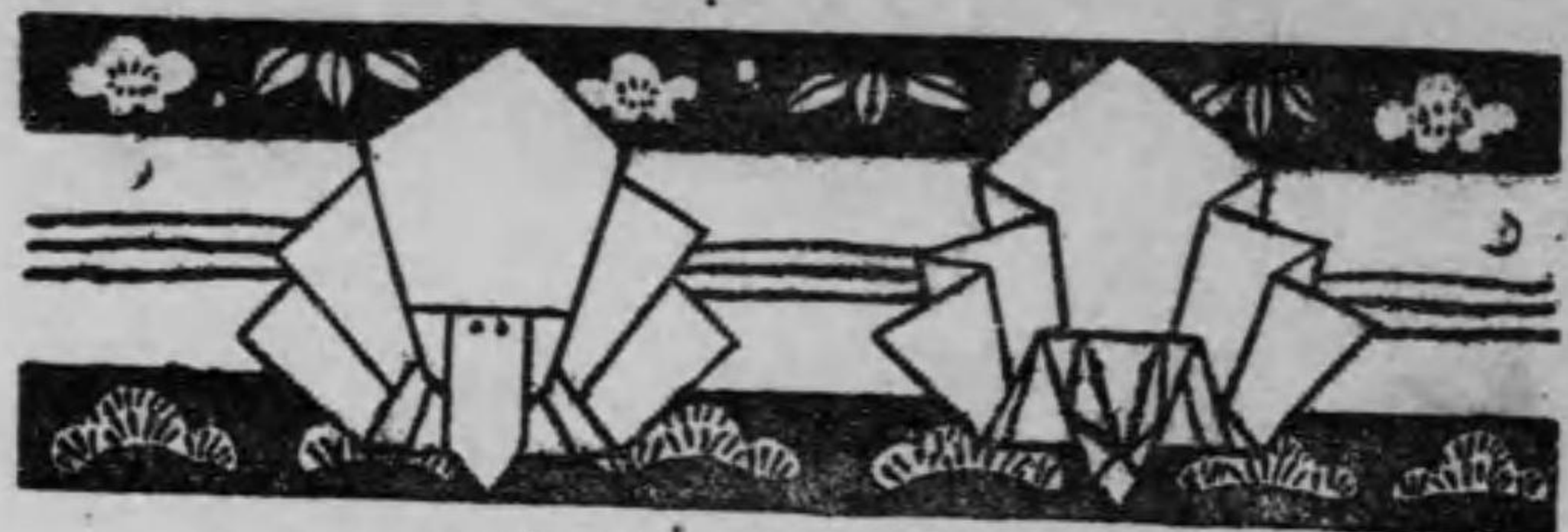
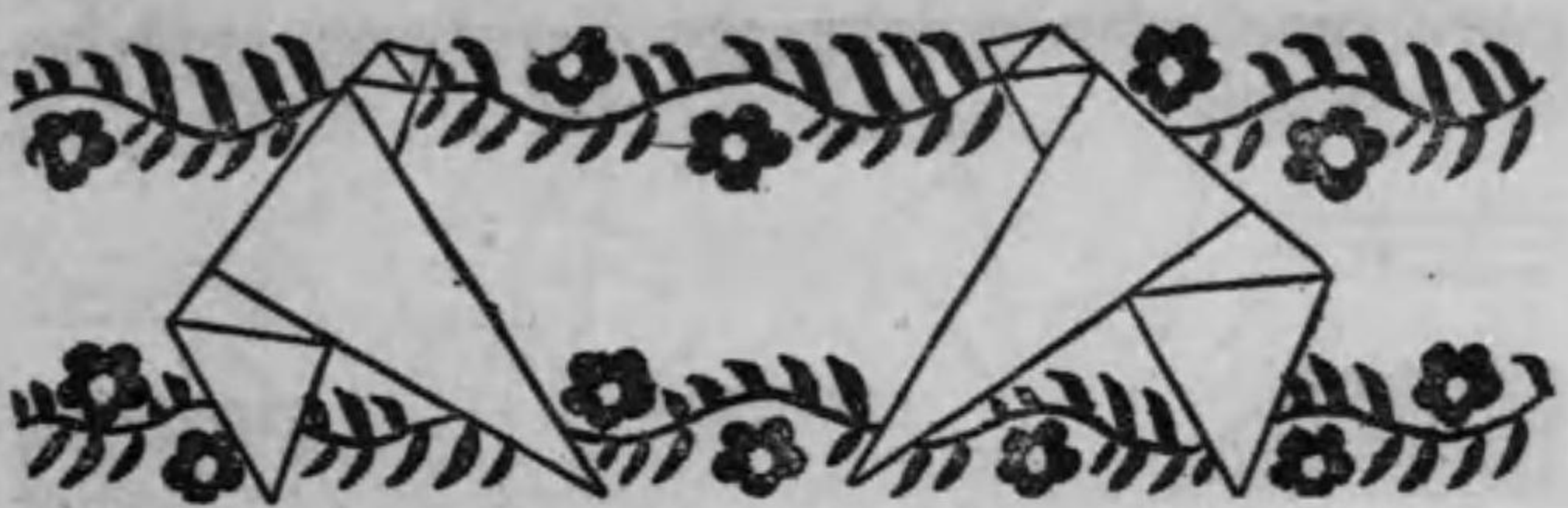
古名 もろかぎ (諸鉤) 異名 どんぼう結
通稱 もろわな (諸輪) 俗稱 ひざをり結

○もろわなと云は、兩方にわなをするを云也結の記 ○平たく包みたる物に水引かくる時、もろわなに結ぶなり、同記 ○中を細々見まじき物はもろわななり、三光院内府記

△ひざをり、膝折とかく、膝ををりたる形に似たり。

○結方は、水引を物にかけて左右取上げ、左を右の上へと打掛、其端を右へくわらせ左の方の水引を、右の方へ輪になし、それに右の方の水引の元の方を前より向へとかけながら、左の方へくわらせて輪を出し、ゆるまぬ様に、兩方より引しむるなり。

- △第一圖 したむすび 第二圖 第三圖 第四圖 第五圖 第六圖
- かたわな結 第七圖 第八圖 二ま結 第九圖 水引のはし巻まで 第一圖 下

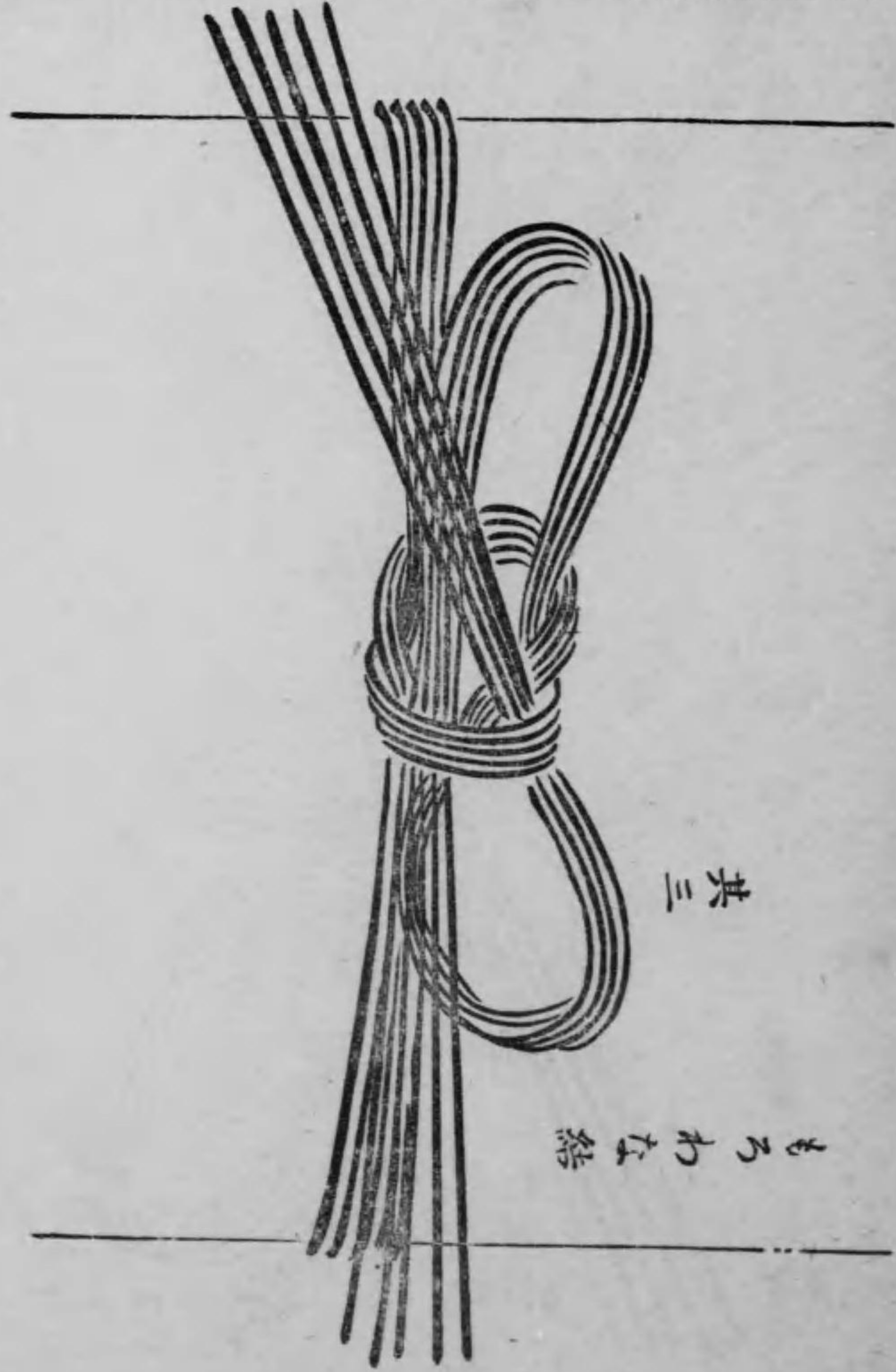


もろわな結

二九七



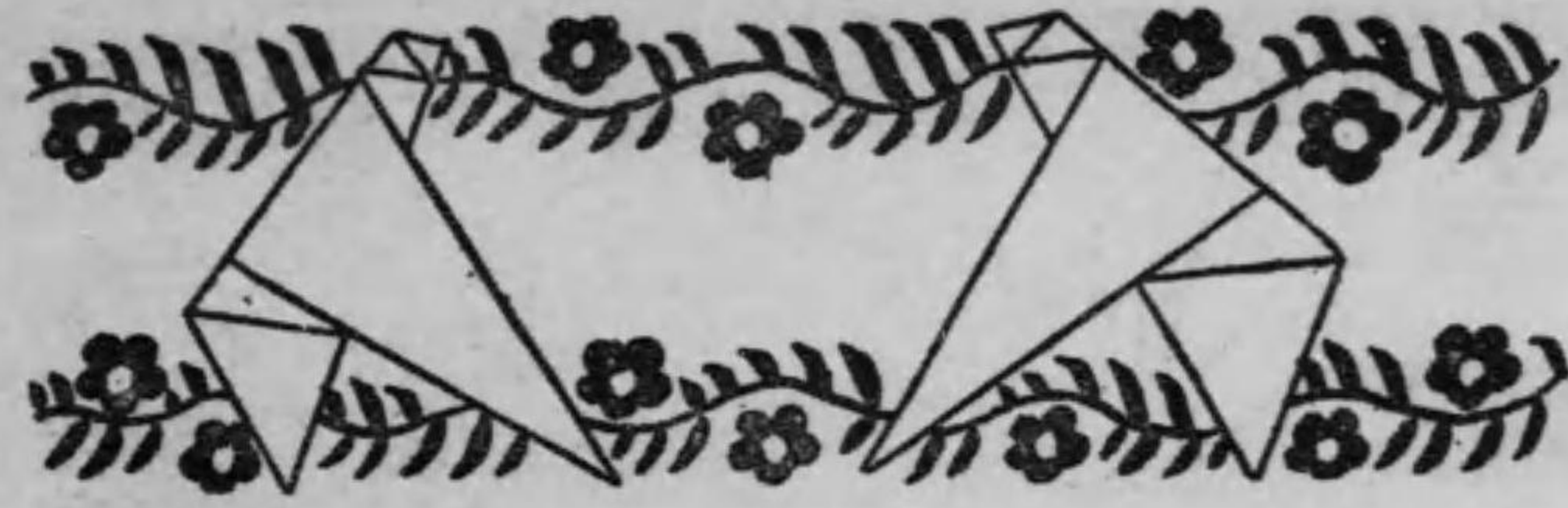
もろわな結



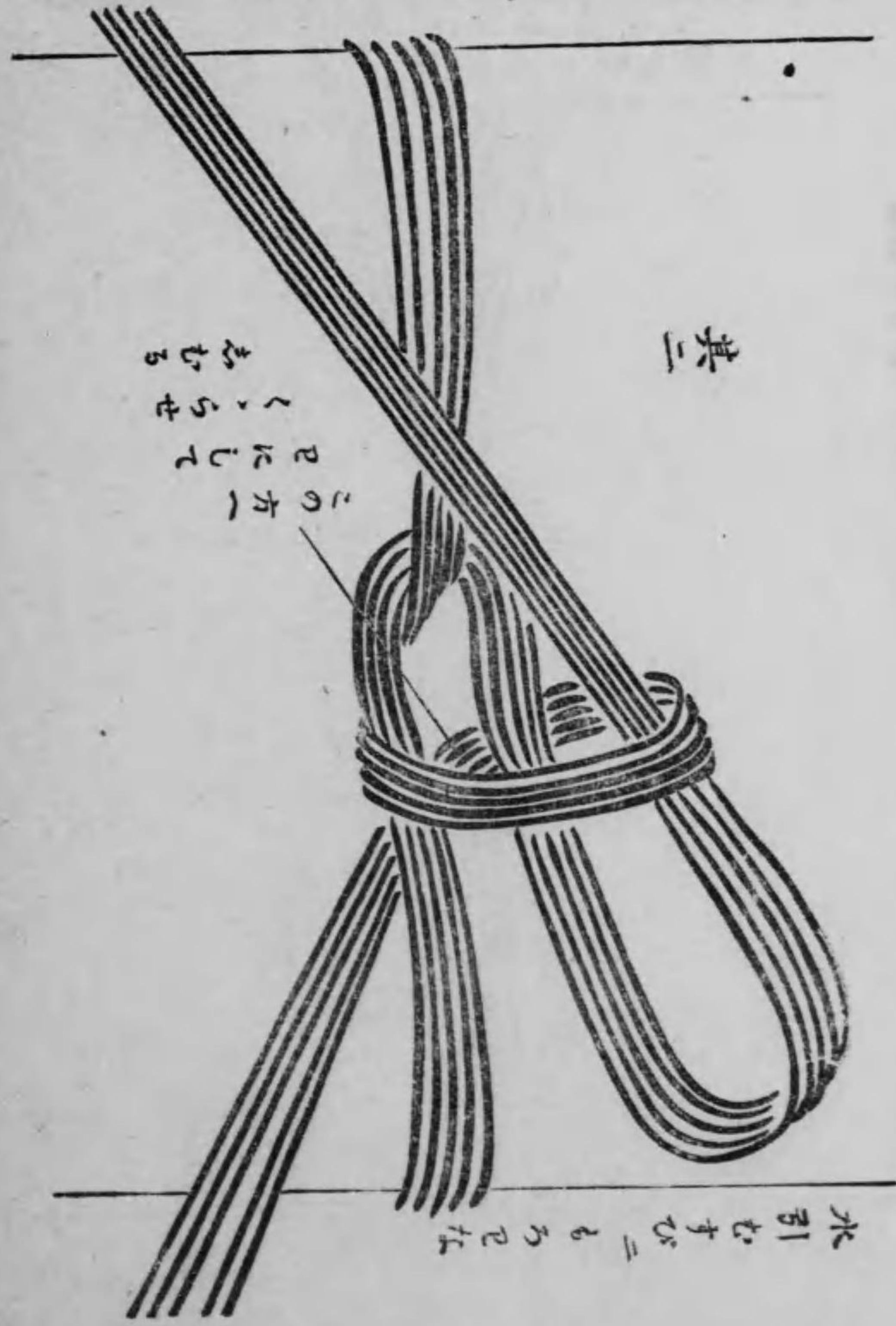
共三

もろわな結

二九九



附録 水引の結び方



共三

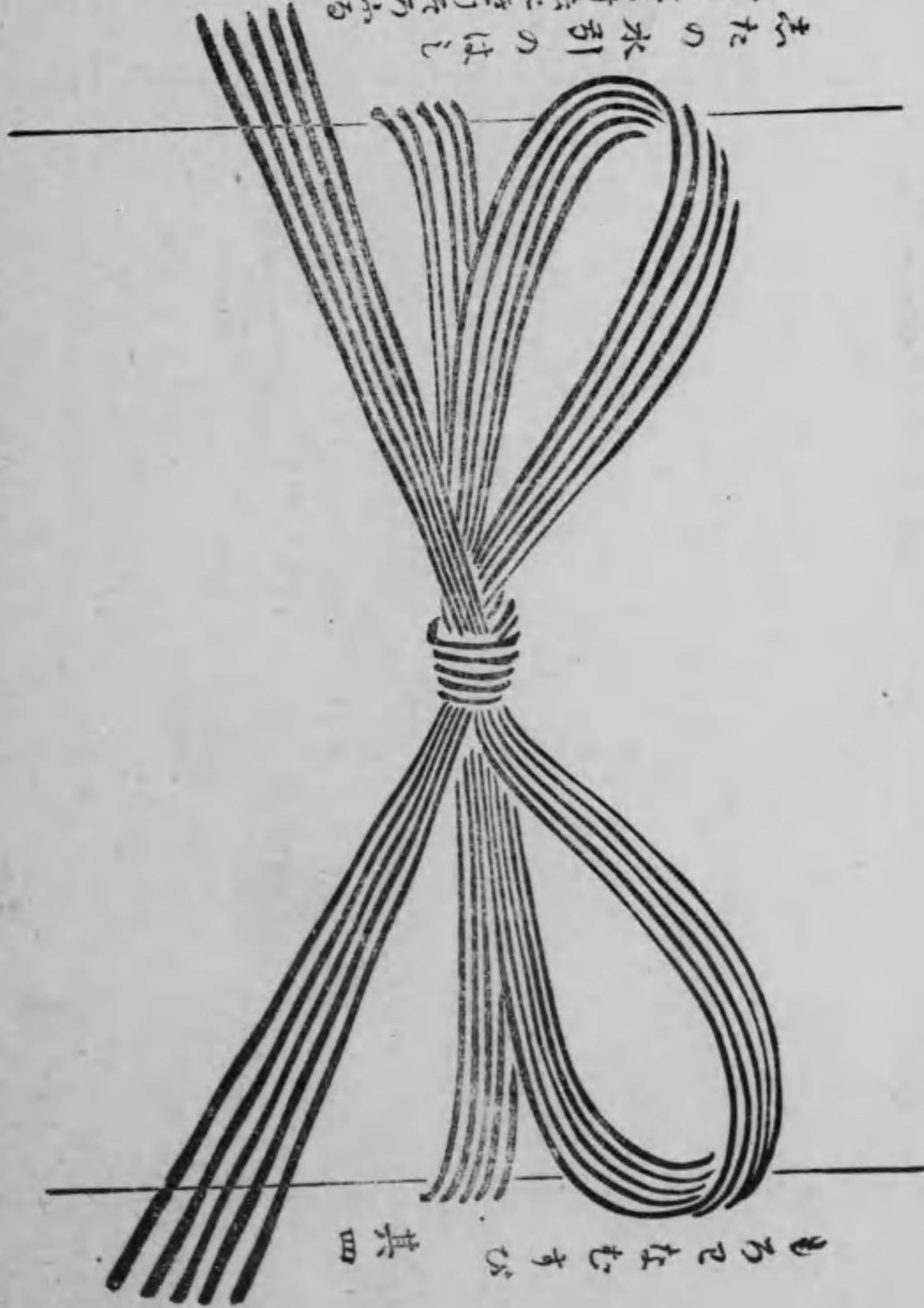
10方
2にして
くらす
むむる

水引むすび「もろわな結」

二九八



水引の結
上の寸法に準じたり



水引の結
其目

附録 水引の結び方



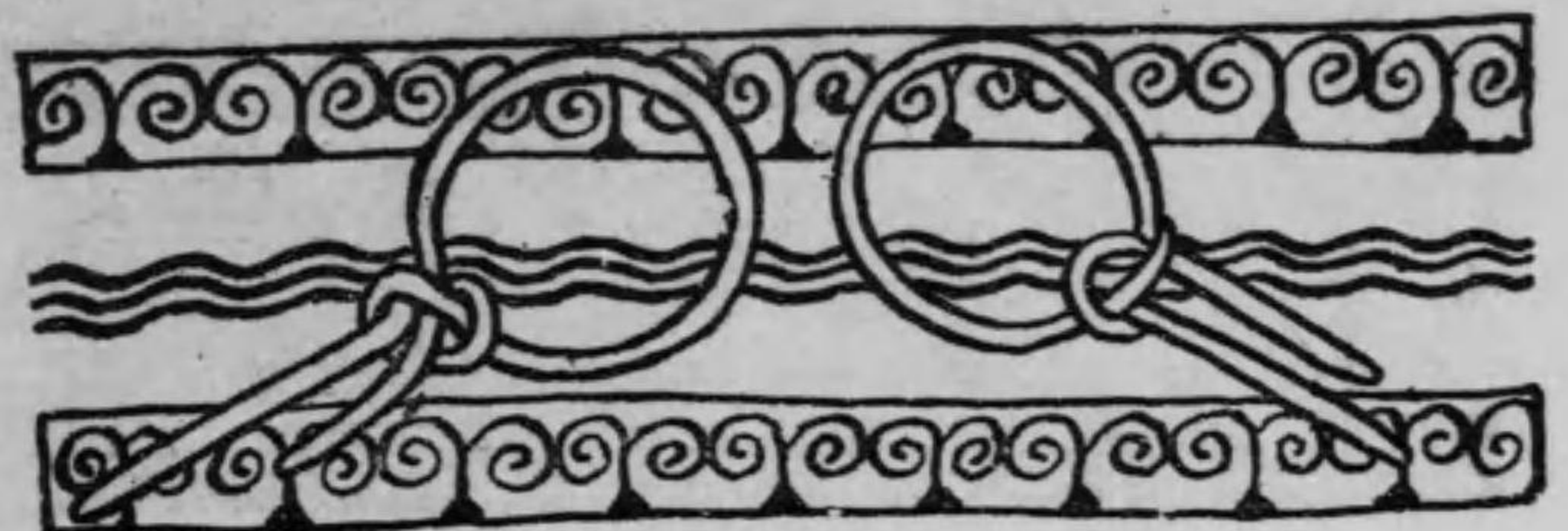
かたわな結

古名 かたかぎ (片鉤)
通稱 かたわな (片輪)

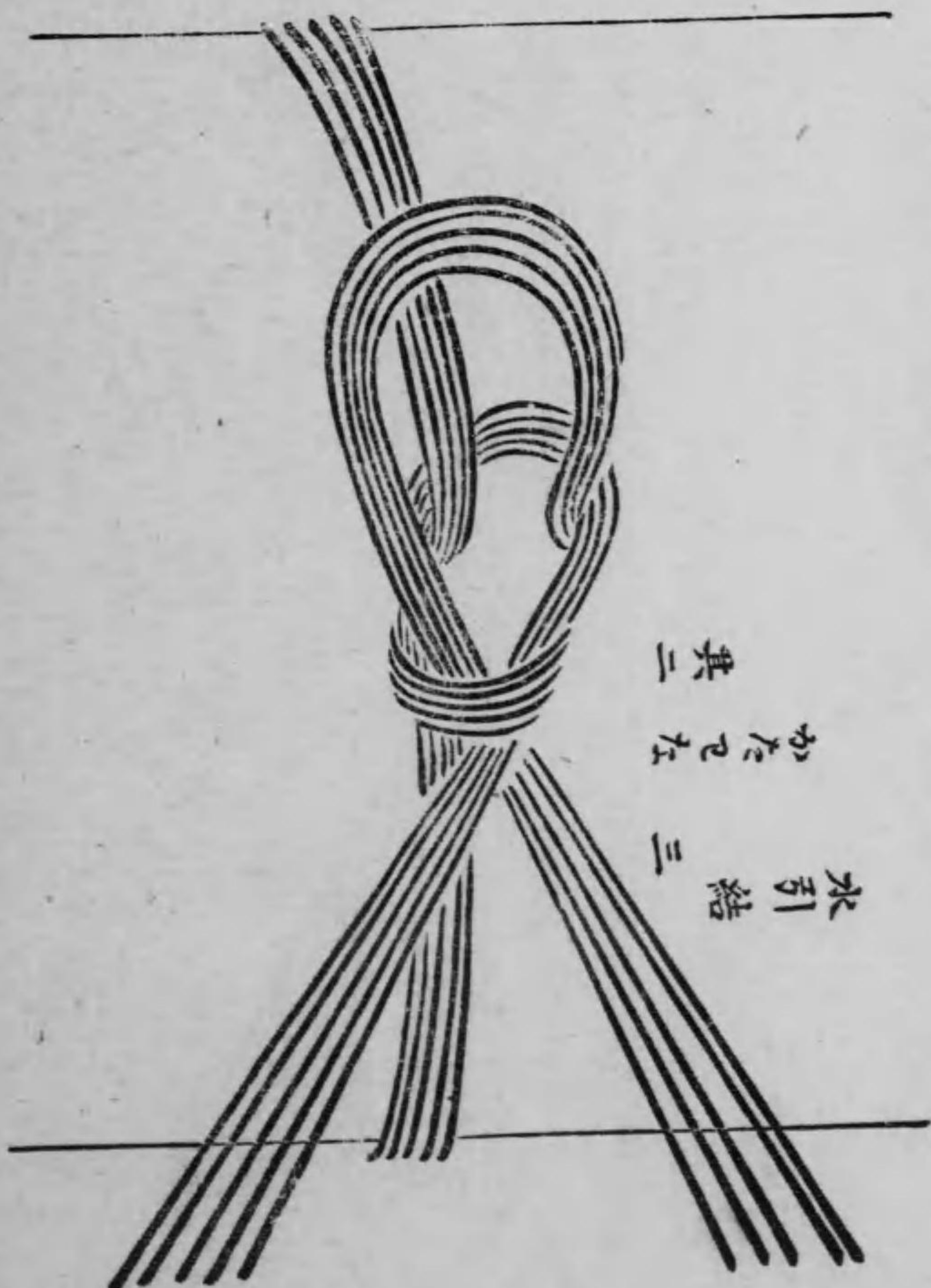
俗稱 ひつとき

○かたわなと云は、かた／＼にわなをするを云、わなは左になし端を右になすべし、ひつとき (引解) ともいふ、結記 ○丸く包みたる物に水引かくる時、かたわなに結ぶなり、結記 ○中に見るべき用のある物は片鉤なり 三光院内府記
○結方は、左を右の上へと打掛、右へ一つくゞらせて、左になりたる水引を右の方へまげて、右の方の水引の元の方を、手前より向へとかけながら左へと輪にして出し、引しむるなり、左の輪と、右の端と、同寸法にする、包物の左一ばいに輪なすれば、右の水引の端も一ばいに、切そろへてよし。

かたわな結

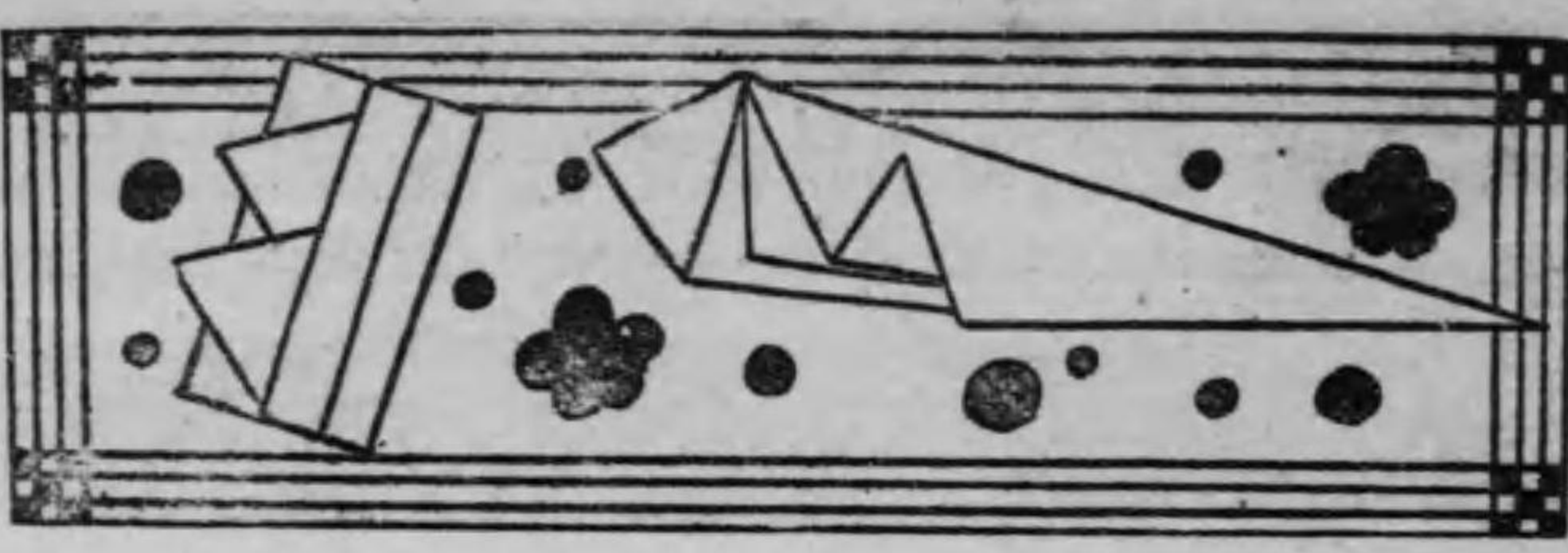


附録 水引の結び方

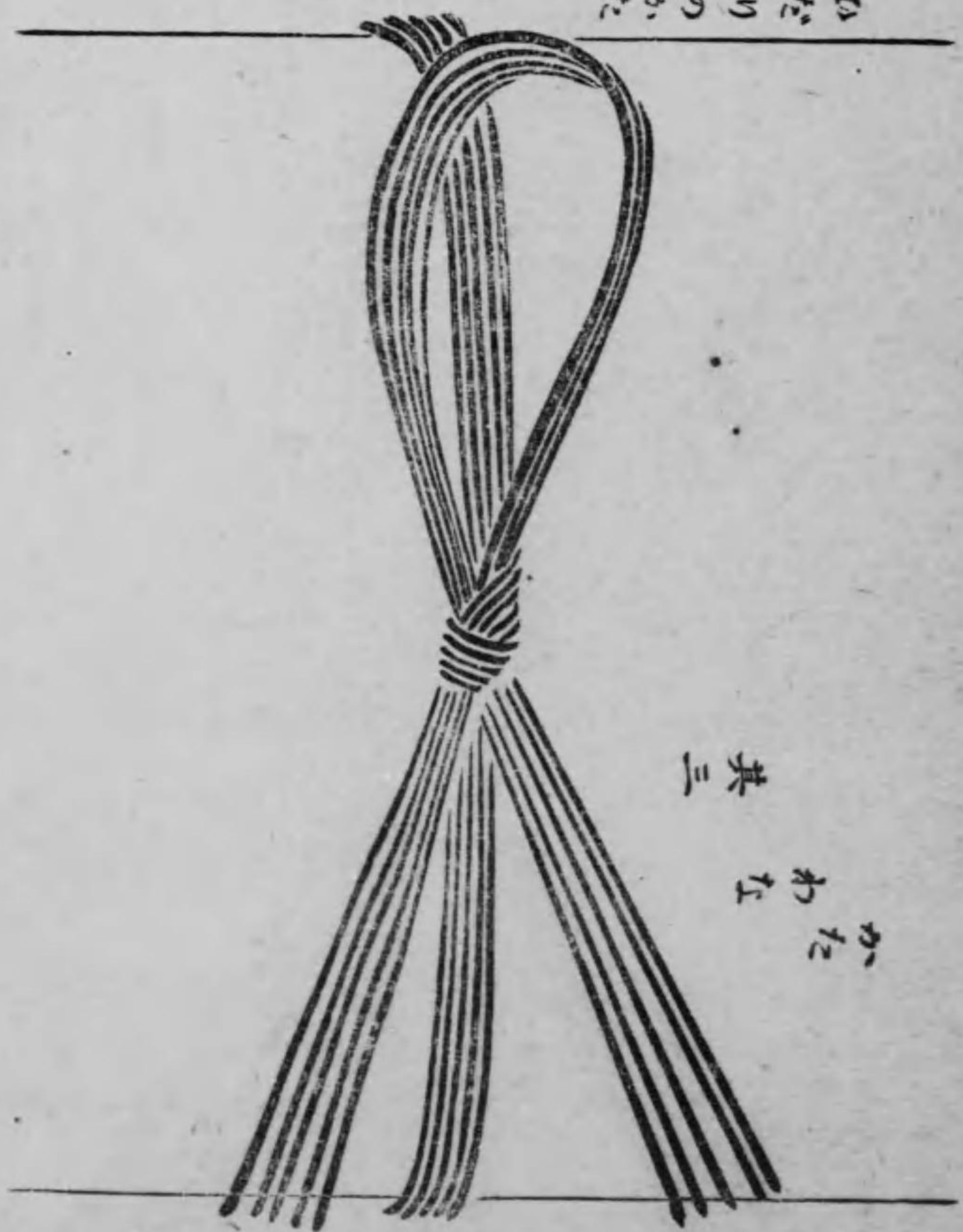


水引結 三
かたわな 三
共三

三〇二



かたわな結



ひだりのかた
をよする

かた
わな
共三

三〇三

水引のはしはな寸法にあわせ
きりそろふる



附録 水引の結び方

こまむすび

古名 こまか結(細結) 異名 玉むすび
通稱 まむすび(真結) 又 こまむすび

○紙捻にても、よりに縲目を一結する、又縫糸の端を一結する、又一結するごとく左
右よりかけたるをかたく結びしむるをも「まむすびといふ、いつれも細かき形なれ
ば、こまかむすびといふを、略して又こまむすびともいふ、まむすびといふも、こ
まむすびの略 稱なるべし、又形より見て玉結ともいふ、結の記には「はひがしら」
といふは、まむすびの事なり、とも見えたり、△この結方を水引にて結ぶに、左の
如き習慣あり、但用捨すべき事なり、しひてなづむべからず△普通は端を切揃へて
巻上るをよしとす。

同

婚禮用

凶禮用

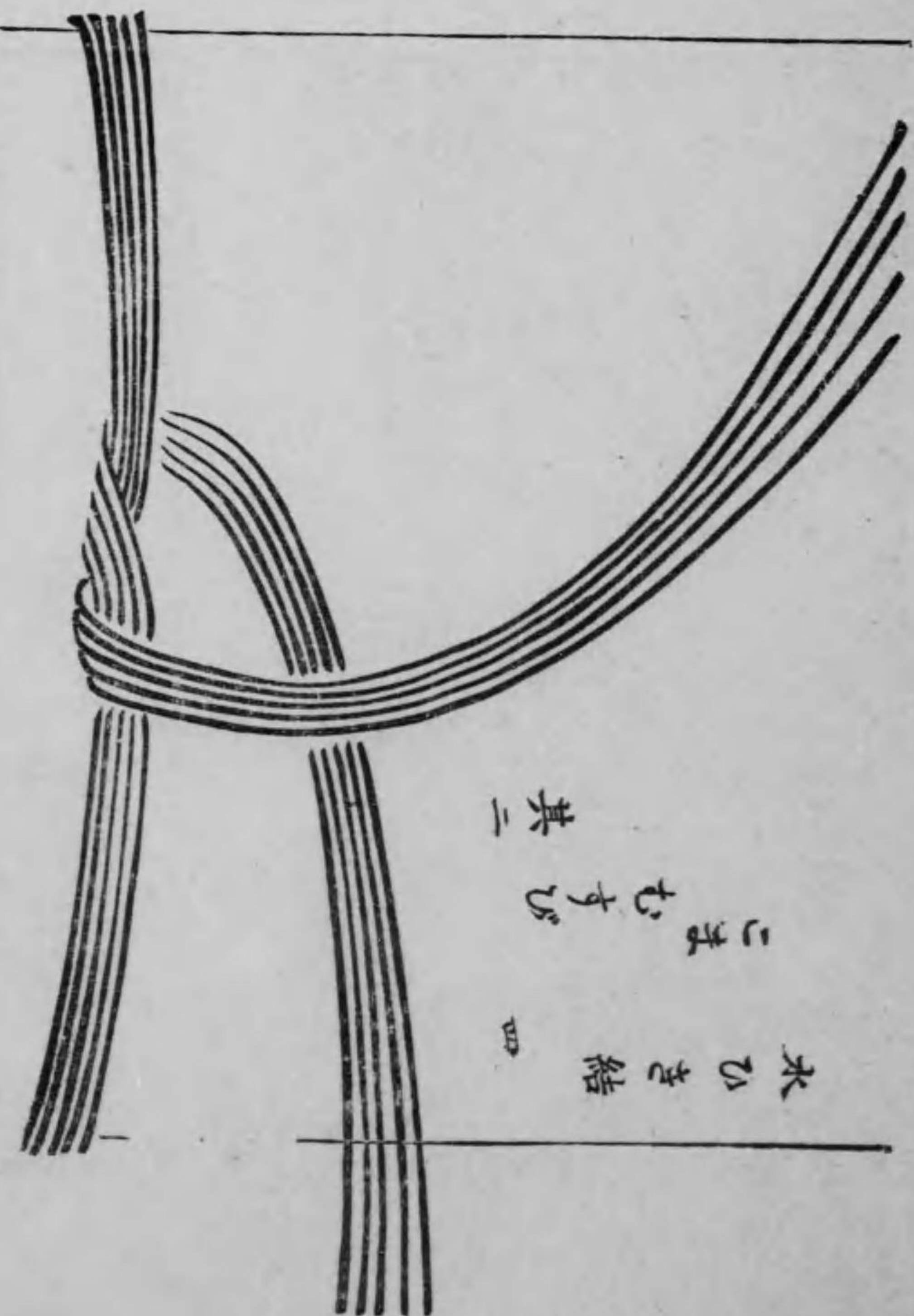
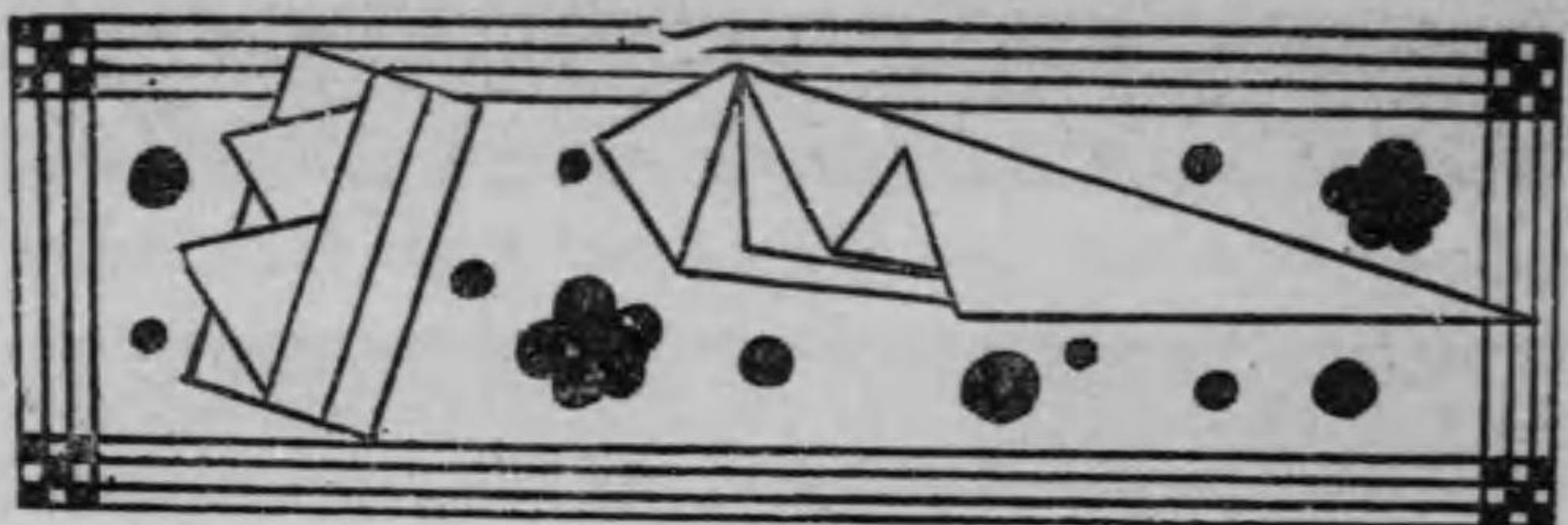
むすびどめ

むすびきり

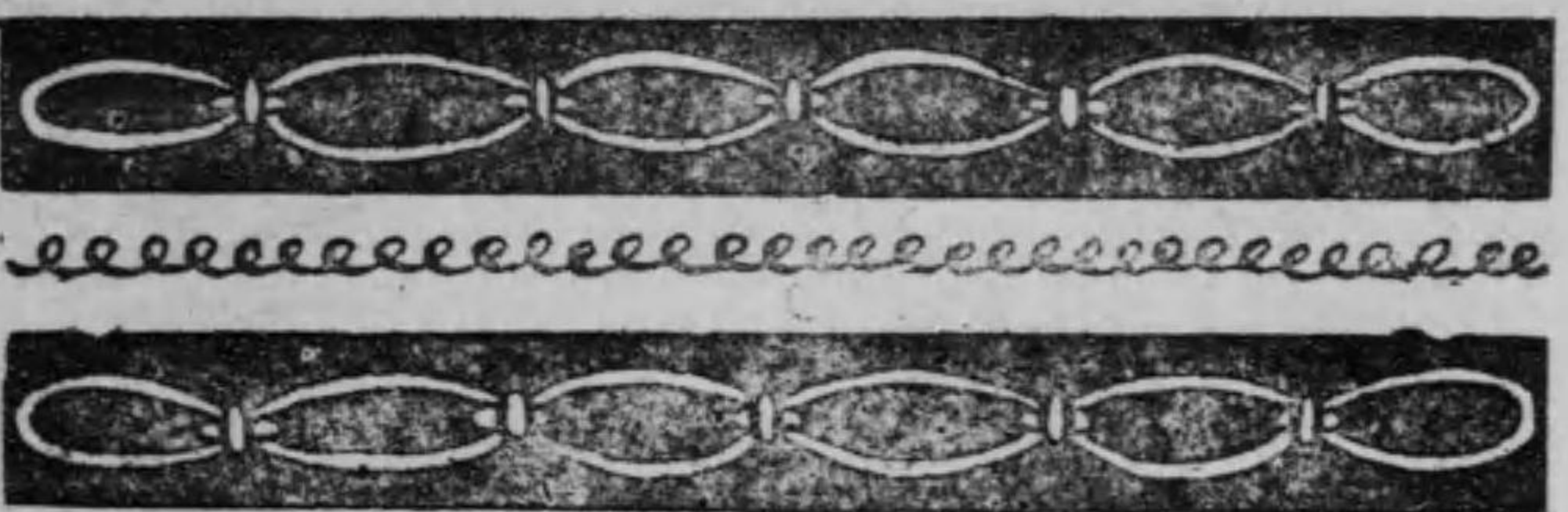
結留

結切

○いづれも、水引にてする、まむすびのことなり○いはひには結留といひて、結びて、
兩端其儘にのばしおき○凶事には、同じ結びにても締切といひて「兩端を切そろへ
おくなり△右掛にむすぶ(逆)」こともあり。



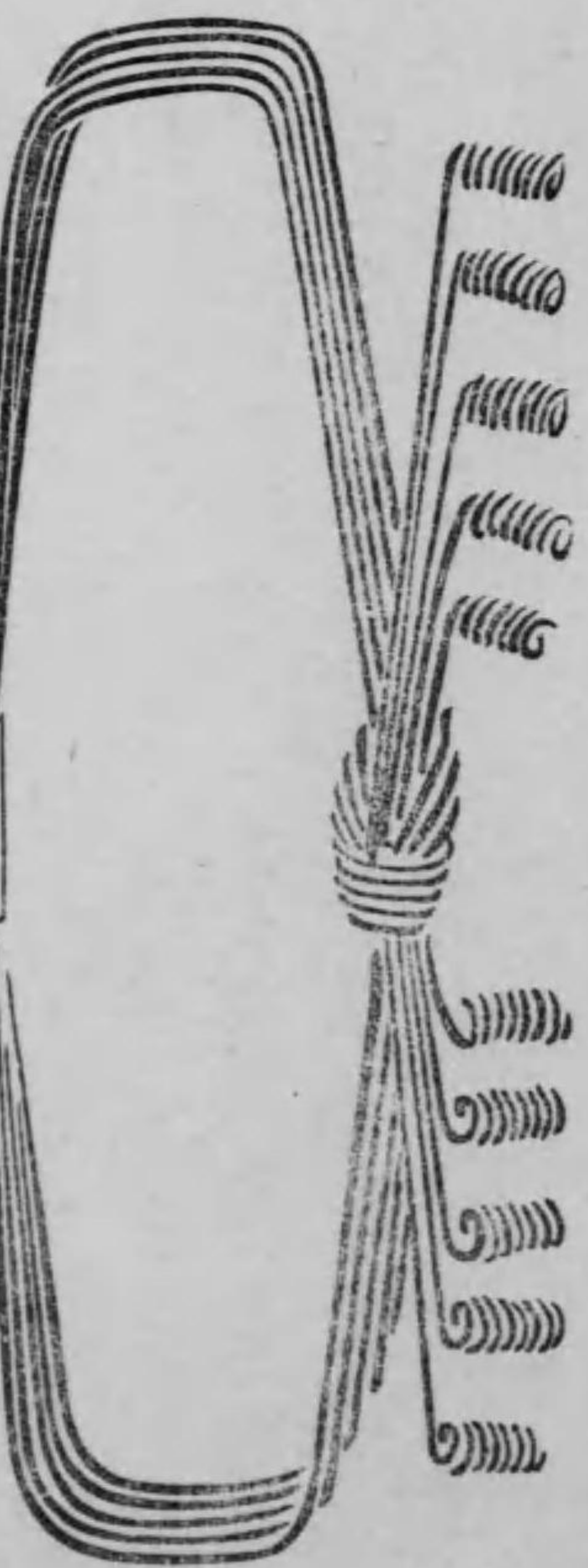
こまむすび



こまむすび 其三

近世
みづひきの
はしを
ゆるもの
きらぬもの
むすびどめ
むすひきり
なごり
せし
あれど
古式は
あらず

これは
4こ
より
見たる
なり



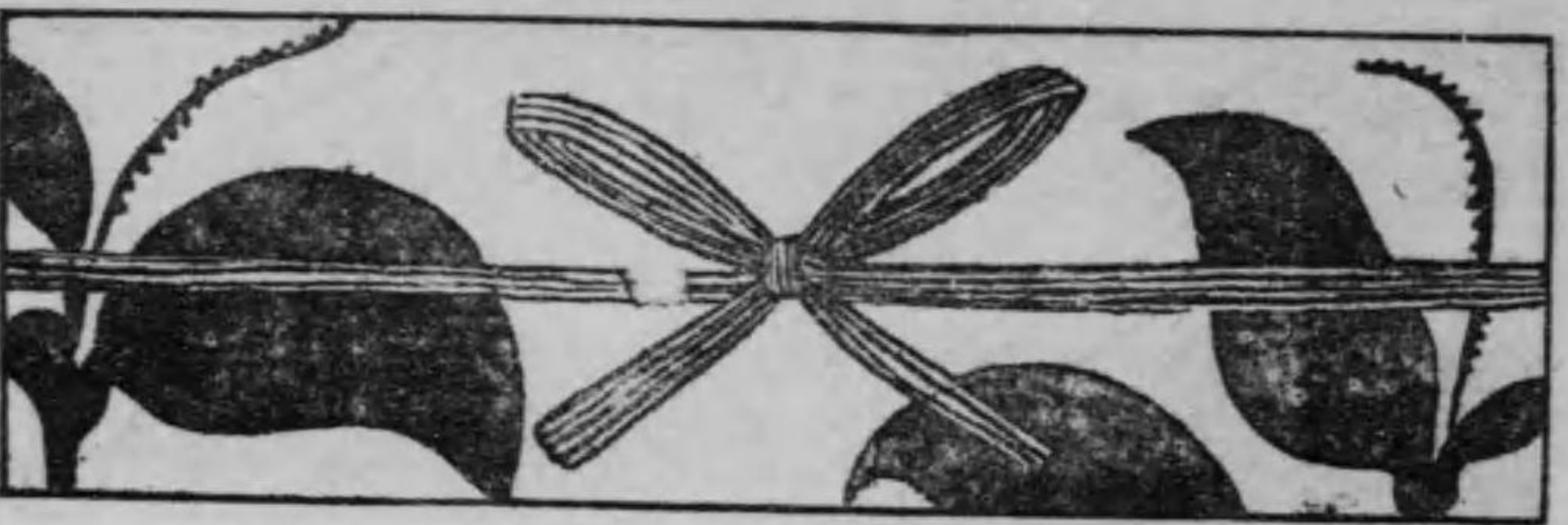
水引結 五

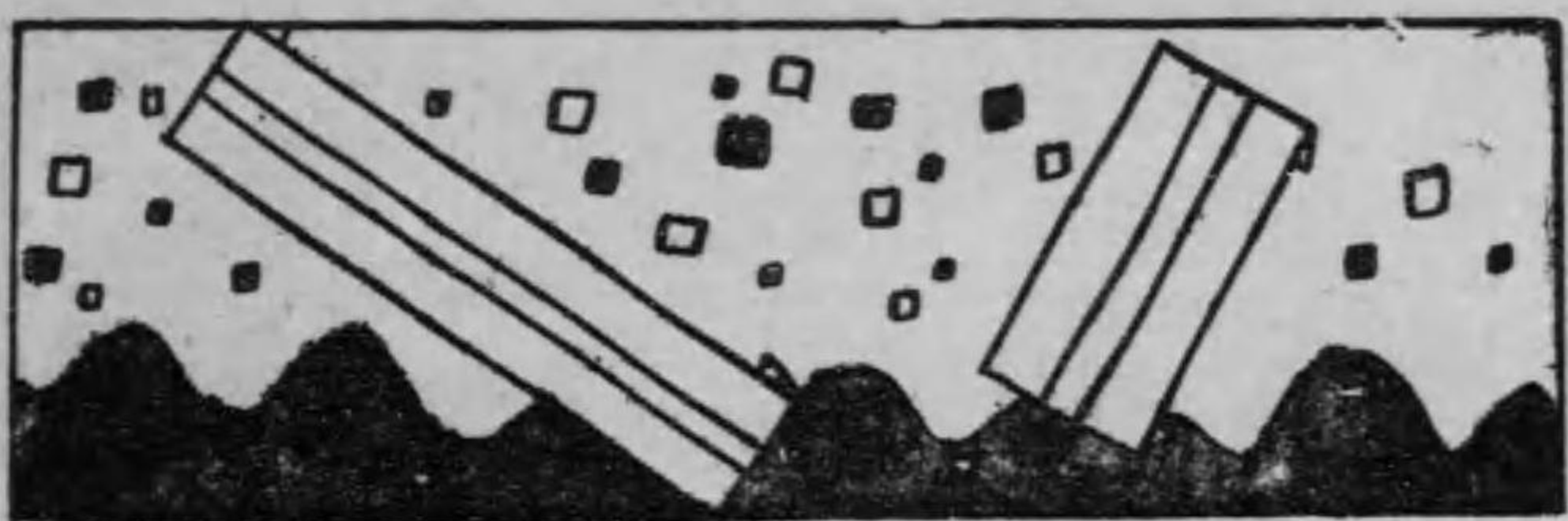
はしが物より

包物に水引のかずればよくかくるときは
はしのまきたるもの下の水引より
そとだんくながく出す

こまむすび

三〇七





附録 水引の結び方

水引巻様

- 老の浪
- 水玉
- 水走り

三〇八

○水引の端を、其儘にのばしたると、切そろへたると、巻あげたるとの三種あるうちに、装飾の方には、専ら巻あげをもて通用せり、其水引の端を巻く様に三種あり
 △老の浪は婚禮につかひ△水玉△水走りは移徒、其外の諸祝儀につかふなり。
 ○此三種の巻様は小笠原流一傳にして、折形と結形との傳授の内にていまだひろく世間に知られざるものなり。古傳なれども今まで上様の禮法の書籍には見えざる様なり、故に今後この名稱を附けて教授なしたまた出版の書籍に記載する者あらば「本書」によりたるものといふもよからん。また新たに教授する者は此三つの巻様によりて教授してよろしかるべし。



水引結

はしまきあげやう

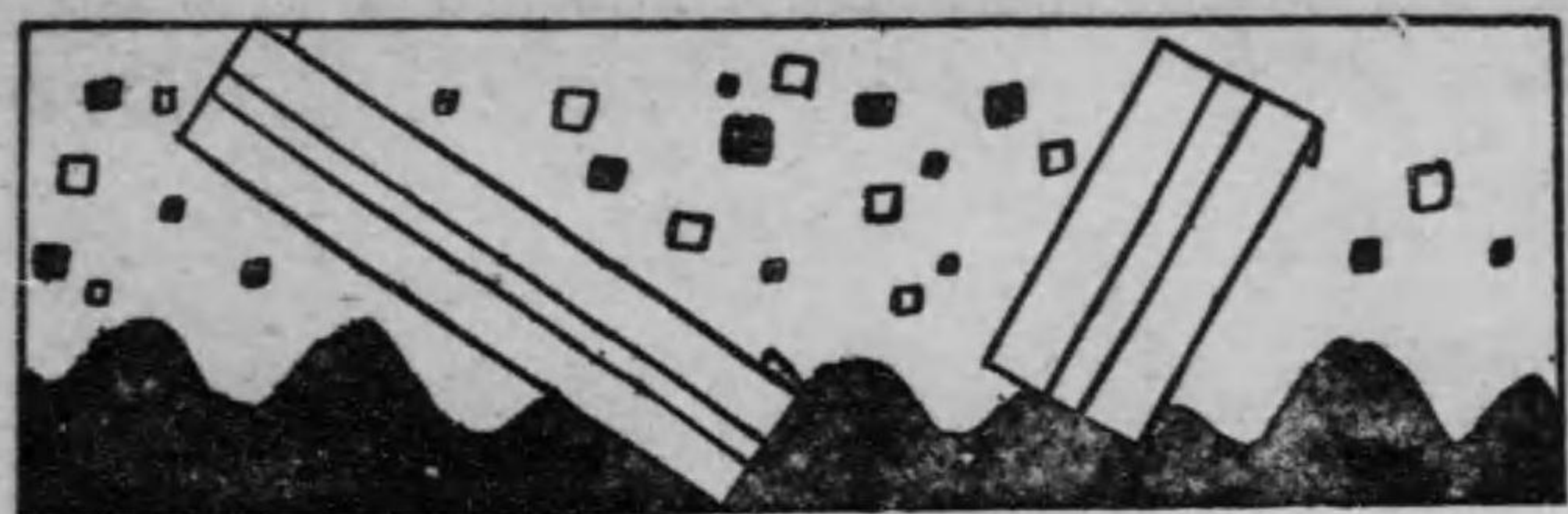
二 みづたま

一 老の波

三 みづせじり



三〇九

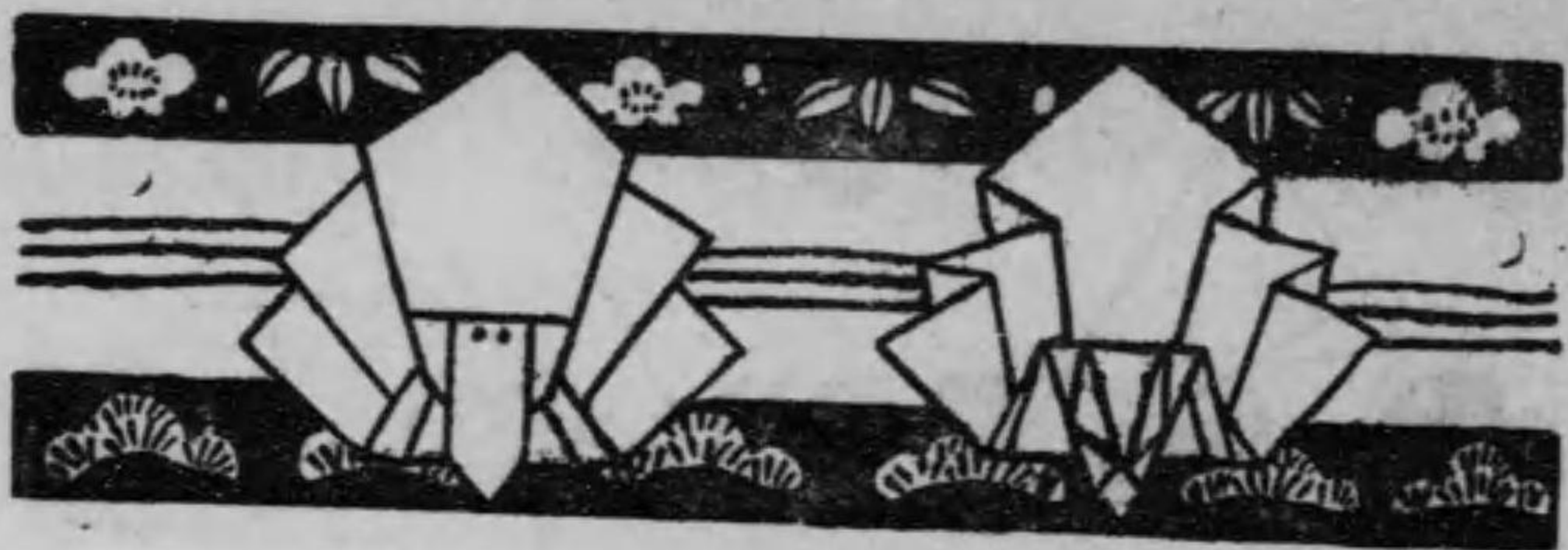


あはび結

古名 あはび結(鯪結) 異名 あふひ結
通稱 あはち結(淡路結) 異名 御多賀結

○組紐にて結ぶ、宮中式のあはび結の形は、實物の鯪貝の形に似たれば鯪結ともいふべし、臣民式の方につきたる、水引にても結ぶ、この結形はあはひ貝には似ざれども、古くよりいひならはしたればひろく傳はりて、知らぬ者なし、それに片思ひといふ諺を忘れて「あはちむすび」とも名づけて近き代より、をしへ傳へたれば、其名にて通用したり、結の記に「二葉の葵に似たり、あふひ結と云は此故なるべし」と見えたり、近江にて「おたがむすび」といふは、淡路の國にゆかりある、祭神をいつさまつれる故に、淡路結といふをばかりて、所の名をととりて、おたが結といふなるべし、淡路といふ名は、日本書紀神代紀に「二神合爲夫婦先以淡路洲淡洲爲胞生」大日本豊秋津洲「又」先生淡路洲「又」以磯取盧島爲胞生淡路洲「又」遂爲夫婦生淡路洲「この古傳によりて名づけたるにやと思へど詳ならず。

○結方は、先年著はしおける「婚禮千代鏡」に記載したり、こゝに略す。



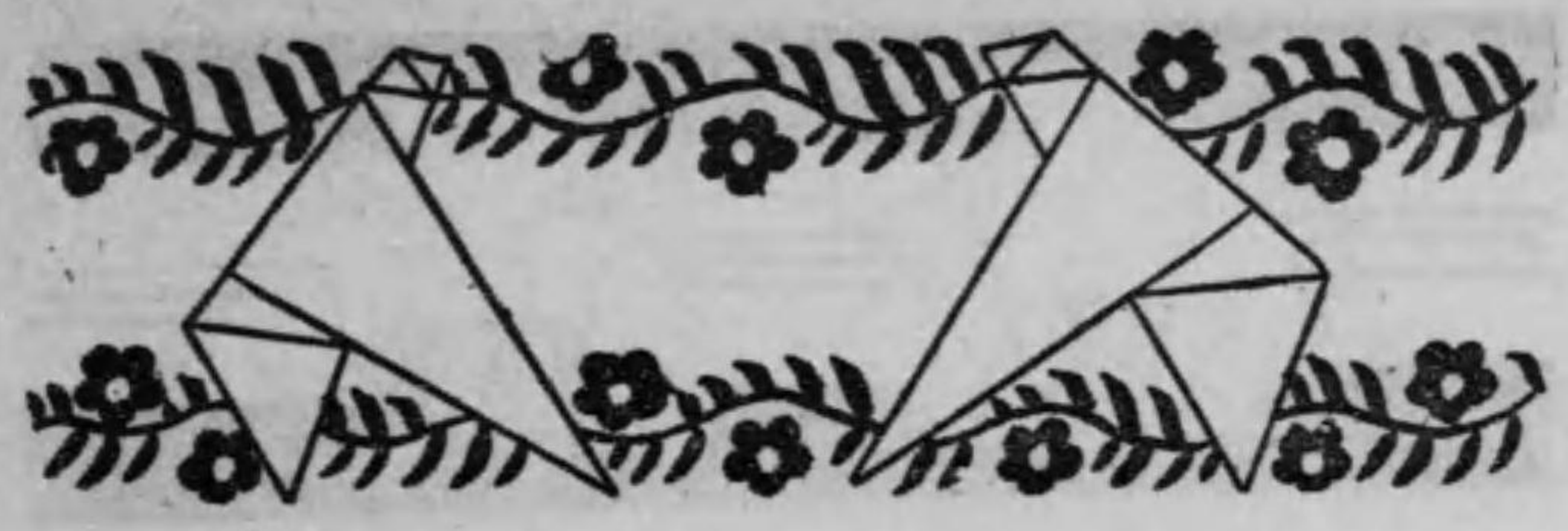
○つかひ方は、裝飾として何にも包形の上に、水引を結ぶに、まむすびにして、其端を左右とも上に一つにあけて、鯪結の中央の穴へと端を通して、結目の所にて、左右に端をひらきのばして、端を老の浪にも、水玉にも品によりて、巻くなり、銚子の蝶形、瓶子の蝶形につくる、其つけ様は「婚禮千代鏡」にのせたり。

ほうじゆ結

通稱 寶珠結 一名 玉むすび

○ほうじゆ結、○二段はうじゆ、結かたいろくにするなり、こゝに記したるは、やさしくして品よきものをあぐ、

○結方は、水引の寸法によりて、大中小のさだめ、珠の色どりなど、水引取合せを考へて、銀水引を一とし、次を金水引、又金銀水引、次を銀赤水引、次を金赤水引、次を紅白水引にむすぶなり、水引の數も、大中小によりて多少あり、五尺水引にする時は、十五本を一把として、それを四把にてくむ、或は十三本、十一本にて一把とする時もあり、いづれも組合せ(同色の時は其まゝなれど、半分金、半分銀、はうじゆ結



附録 水引の結び方

半分銀、半分赤などの時は、一本づつ、ほどきて組ちがへて敷を定め、一つに巻く。て後に、うらの方にて、餘分を三本づつ、一本づつとりて、包形にゆひつくる物として、のこしおき、あとを饅結にくみて、はしをまく、表の方は玉にくみてのち、紙にてとめ、水引のはしを水玉にまく、二だんの時は玉を組、其のこりにて小さく玉を組みて、はしをまくなり、其順序をつぎに記す。

○三尺の紅白水引にて、習はしめにする手づき、まづ三尺水引を一本づつにほど

き(中のたばねを小刀にてほどきて)三分はりの紙にて

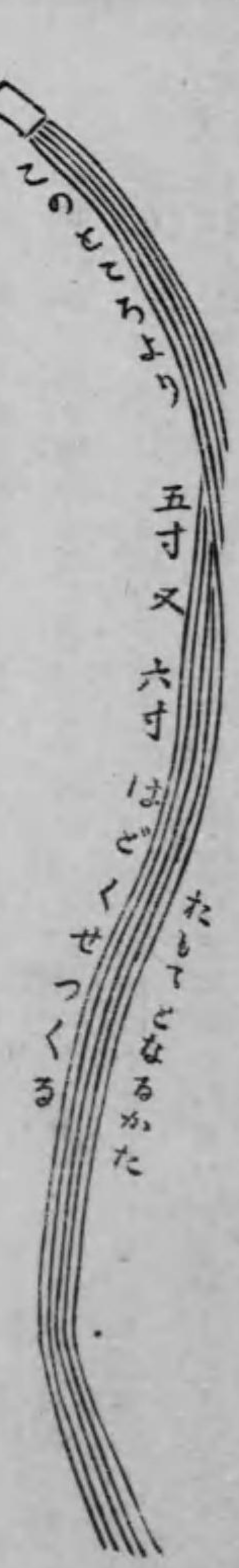
- (一) 「右 紅、白、紅、白、紅」 (此方表の方となる紅三本あり)

- 「左 白、紅、白、紅、白」 (此方裏の方となる白三本あり)

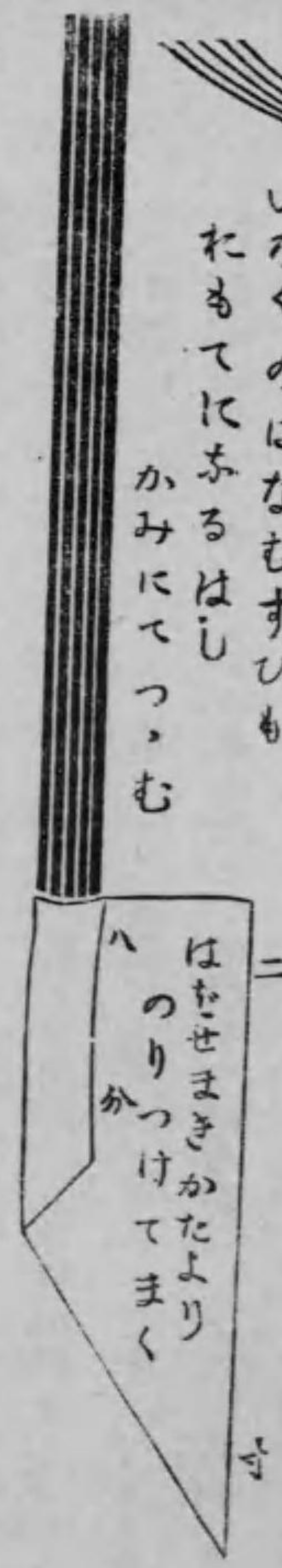
《中 央》



水引結 六はうおゆむすび いろどりたばぬる



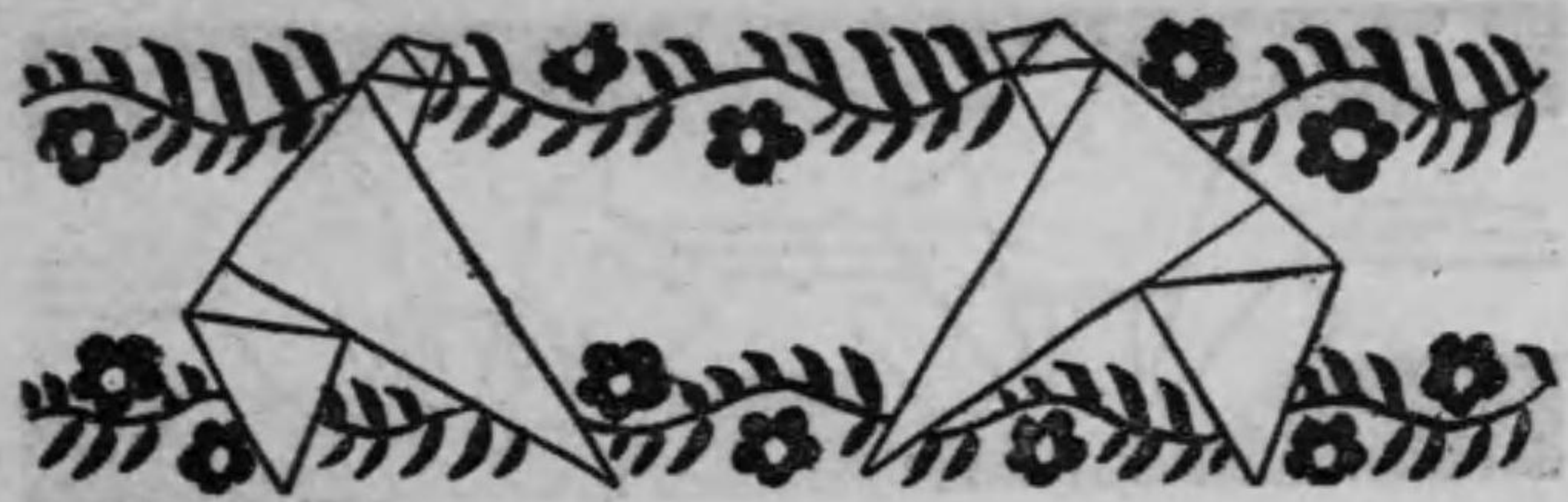
いろくのはなむすびも たもてにふるはし



かわかしてのち よりてたく



はうじゆ結



(二)

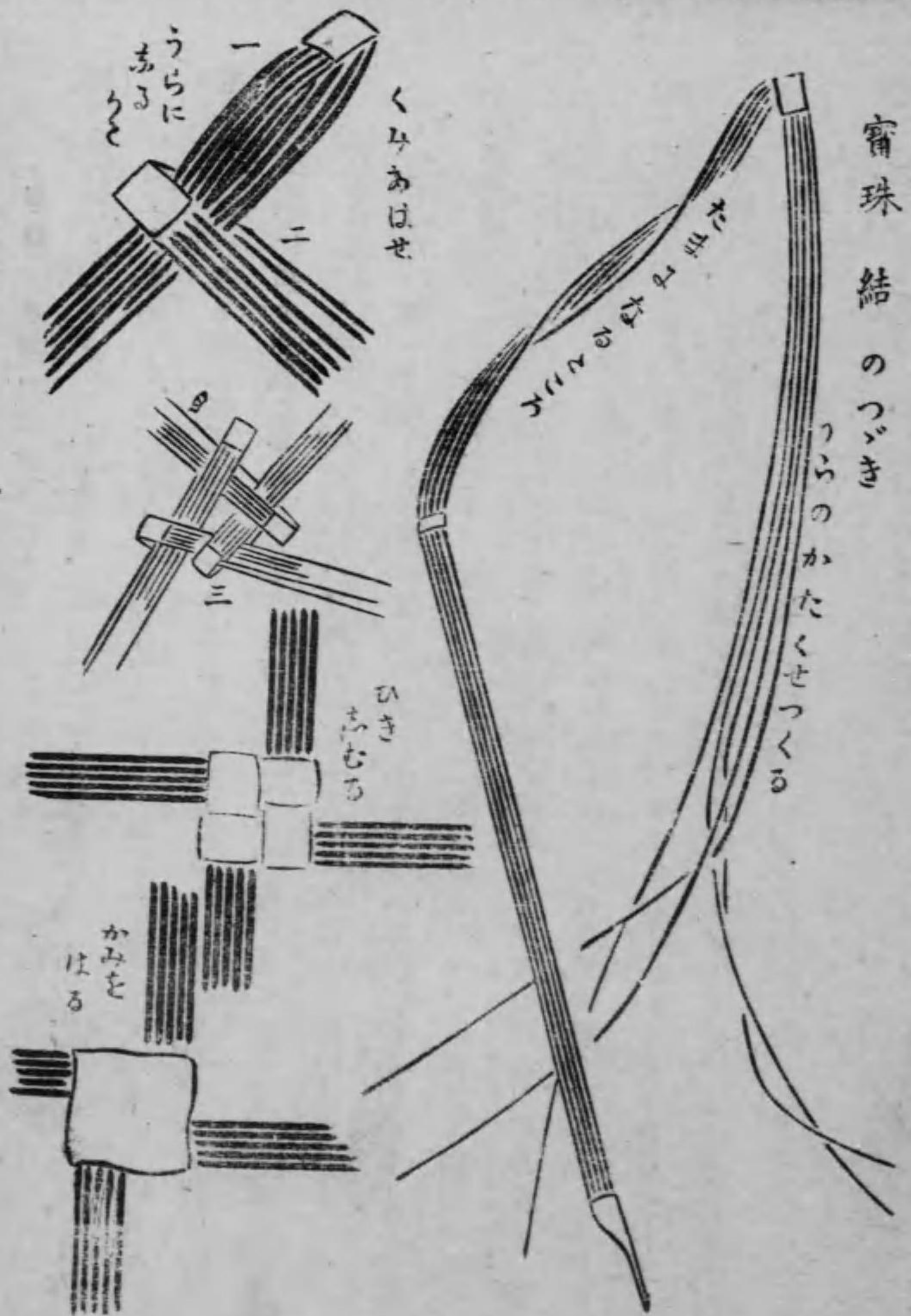
右のごとく一本ちがへに、平らに巻きて、つぎに、此紙のはしより、表の方にて五寸(かねざし)目の所を二分ほの紙にて、平らにまき(いづれも、おしの手「續飯」などにてよくつくやうに巻き)小刀の柄の平などにて軽くたきしめて乾かしておくべし、つぎに表の方の水引の端を紙にてまく事(圖に見えたり)これものりにて平らにまき、右三箇所同時にのりにつけて、かわかしておくなり。

(三)

次に表の方、まんなかの紙と、五寸目の紙との間を、五寸目の紙をしづかとして、一二の指にておさへもちて、右の一二の指にて五本をそろへながら、もちたる所より手前の方へ、まんなかの紙の所まで水引をやはらかにこきて(大指を上にてに、人さし指を横にうくる様にして、其間に入れたる水引を、前の方へ、上より下の方へ丸き物のふちをえがくやうに引、指を二三度すらし、次には直に前の上へすこし下にする様に二度なして、しなやかにくせをつくる(水引丸みつきてかどばりなきやうになるなり、尤水引は別仕立の品をつかふべし)



寶珠 結 の つぎ



はうじゆ結



(四)

附録 水引の結び方
裏になる方、まんなかの紙を、左の一二の指にてもち、右の一二の指にて、しなやかにくせをつくる、よくくしなやかにししておくべし。

(五)

次に表になる方(紅三本の方)まんなかの紙のはづれの所に小刀の刃を軽くあて、二つに折り、其紙のある裏となる方を上にして、左の手に持ち、水引の端を此方になし、次の一本を取上げて、右手にもちて左に持たる水引の上へさしこみ、

(六)

(左の方の輪一寸餘さきに出し置く)又一本取上げて(此時二の水引のさしこみたる所を左手にて持直してさて次の一本を)二本目の上へと、手前より向の方へとかぶせ、又左の手にてかぶせたる水引の元を持直して、次の四本目の水引を、第一の水引の輪に通しながら、三本目の水引へかぶらせて、通し終りて一本目の水引を引つめ、四本ともかたく引しめて、ゆるみなく、かさなりの亂れなくして、紙の上より、美濃紙を四角に切て其大きさに糊にてはりつけ、よくおしつけ、かわかしおくべし。



ほうぶゆむすび

うらのかと

五本の中央

一本つとりて

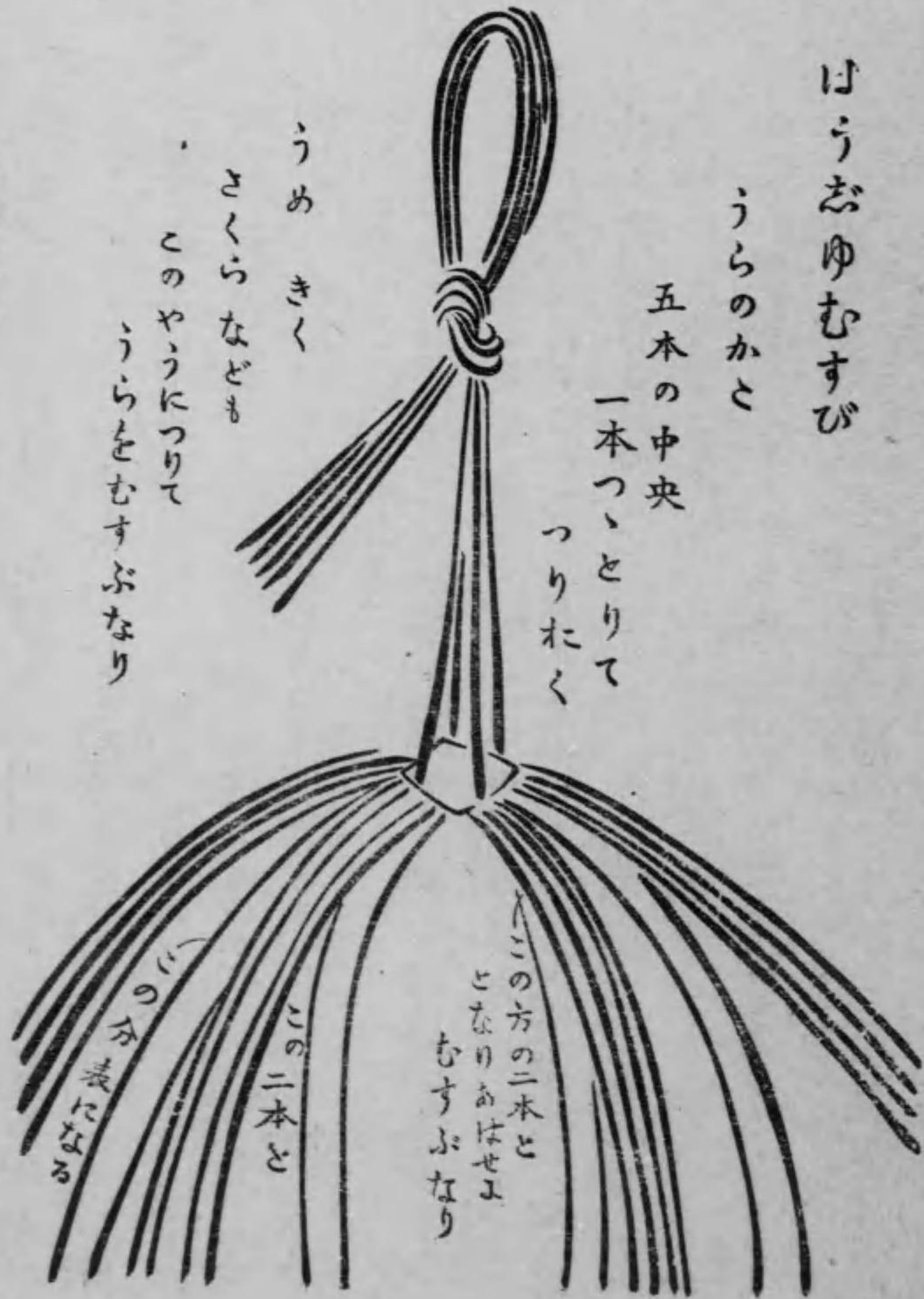
つりたぐ

うめ きく

さくらなども

このやうにつりて

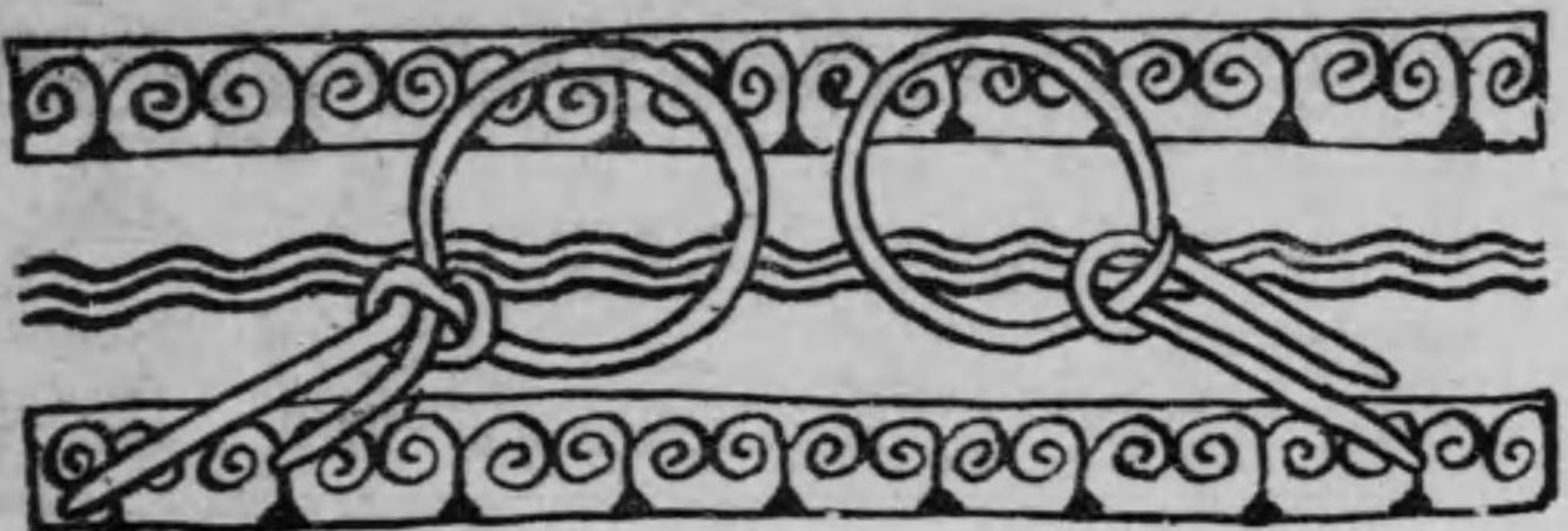
うらむすぶなり



この方の二本と
となりあはせよ
むすぶなり

二本と

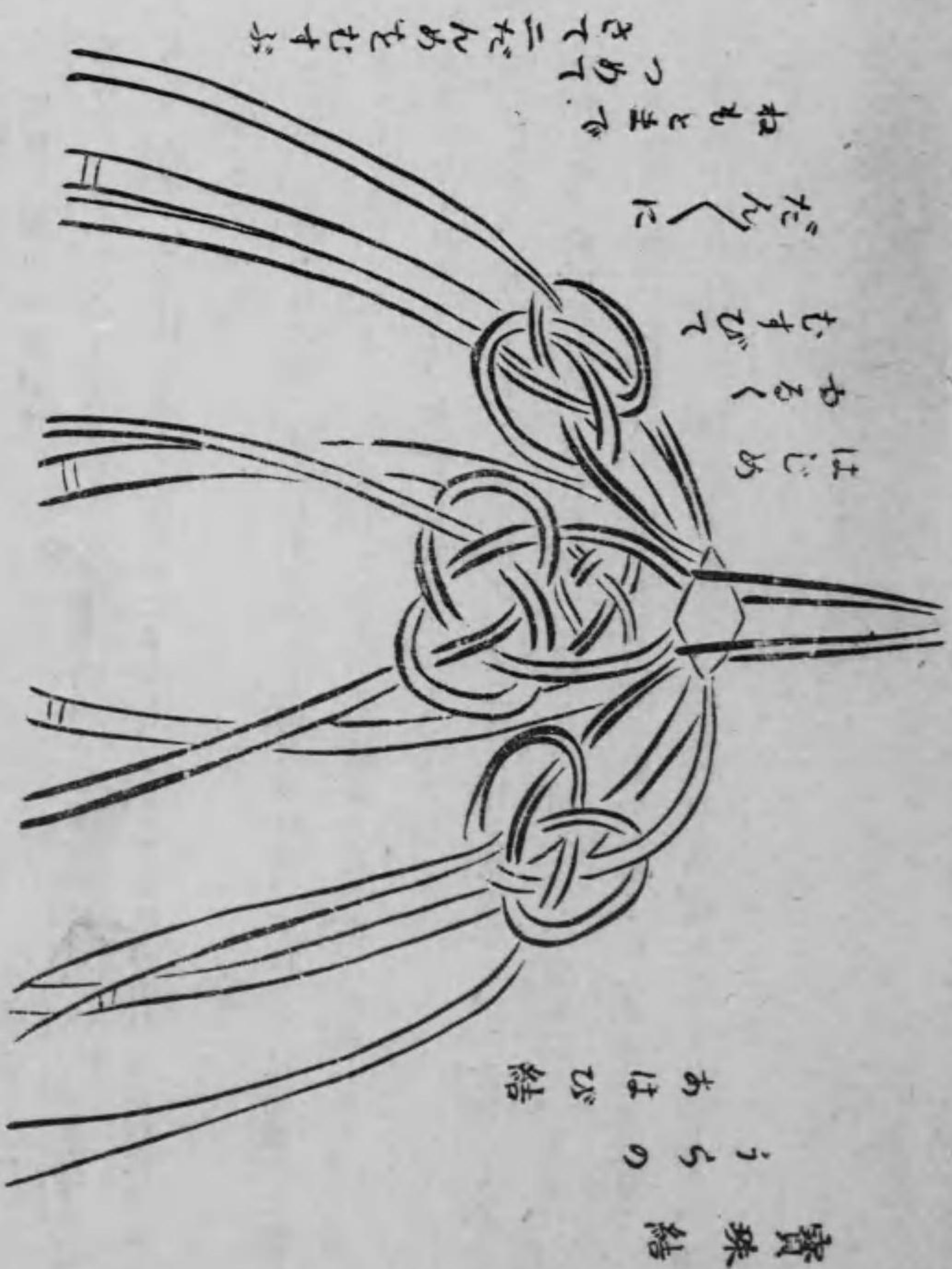
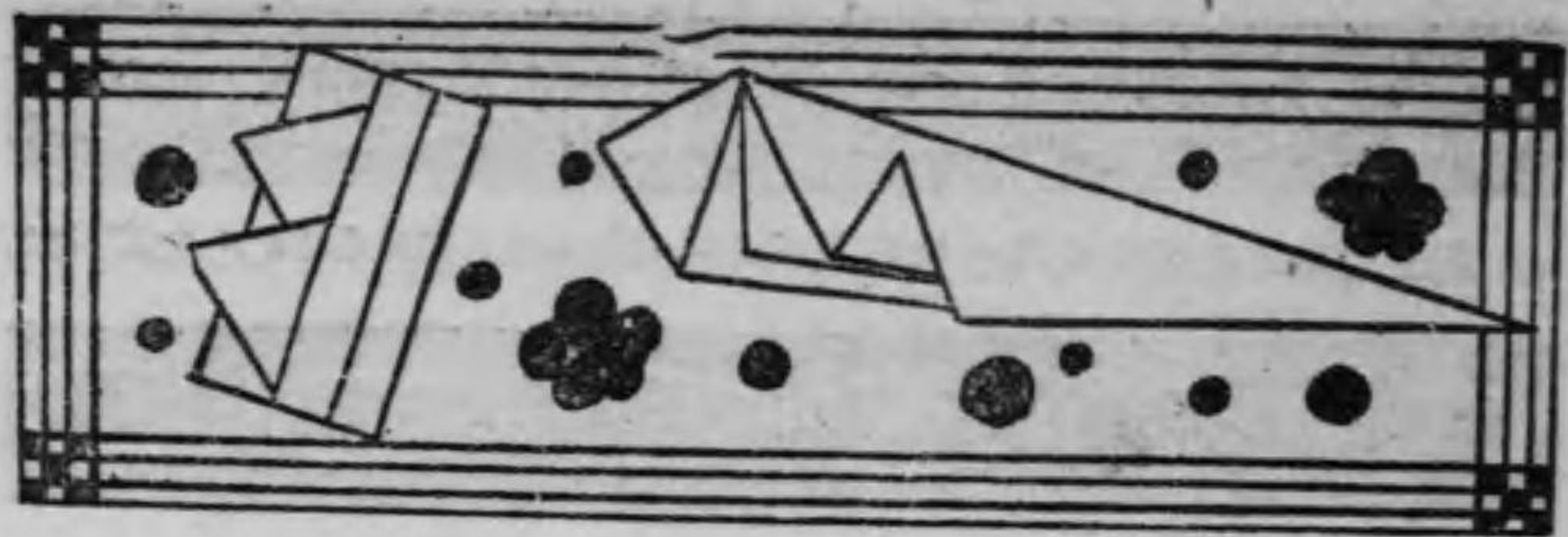
この方の
二つを
表になる



(七) (八)

紙をはりたる方の、五本づゝの中央の白を一本宛、四方よりとりあげて合せてかりに、かたむすびにして、ほかのいとにて天井などにつりて、となり合せに、右の方の二本、左の方の二本とをもつて、饅結にむすぶ（天井よりさぐる時は、胸の通り下りたる程にてよろし）この蛇結は、つねのかざりの結方とは、むすびあがりは同じしけれど、裏のかざりにして、中途にあるものなれば、略したる、やさしきでつゞきにて出来るなり。

○まづ左の方の二本を左手にすぐに持て、右の方の二本を、右の方より右手にて、左より右とめぐらす様に輪形にして、左の方の水引の上におき、これも左手にて持て、次に左方の先を（水引の端なり）右手にてもちて、右方の水引の端の上より、同方の元の下に通し、上の輪の上へかけ、左方の元の下を通し、輪形の上へと、下の方へ出し（此時左の手もつかひて持直し通しなごするなり）、さて水引の元の方よりみだれなきやうに軽く水引をおつかひて、ゆるませながらそへ、だん〜につめて、引しめ、其あはび結の寸法を定むべし。





附録 水引の結び方

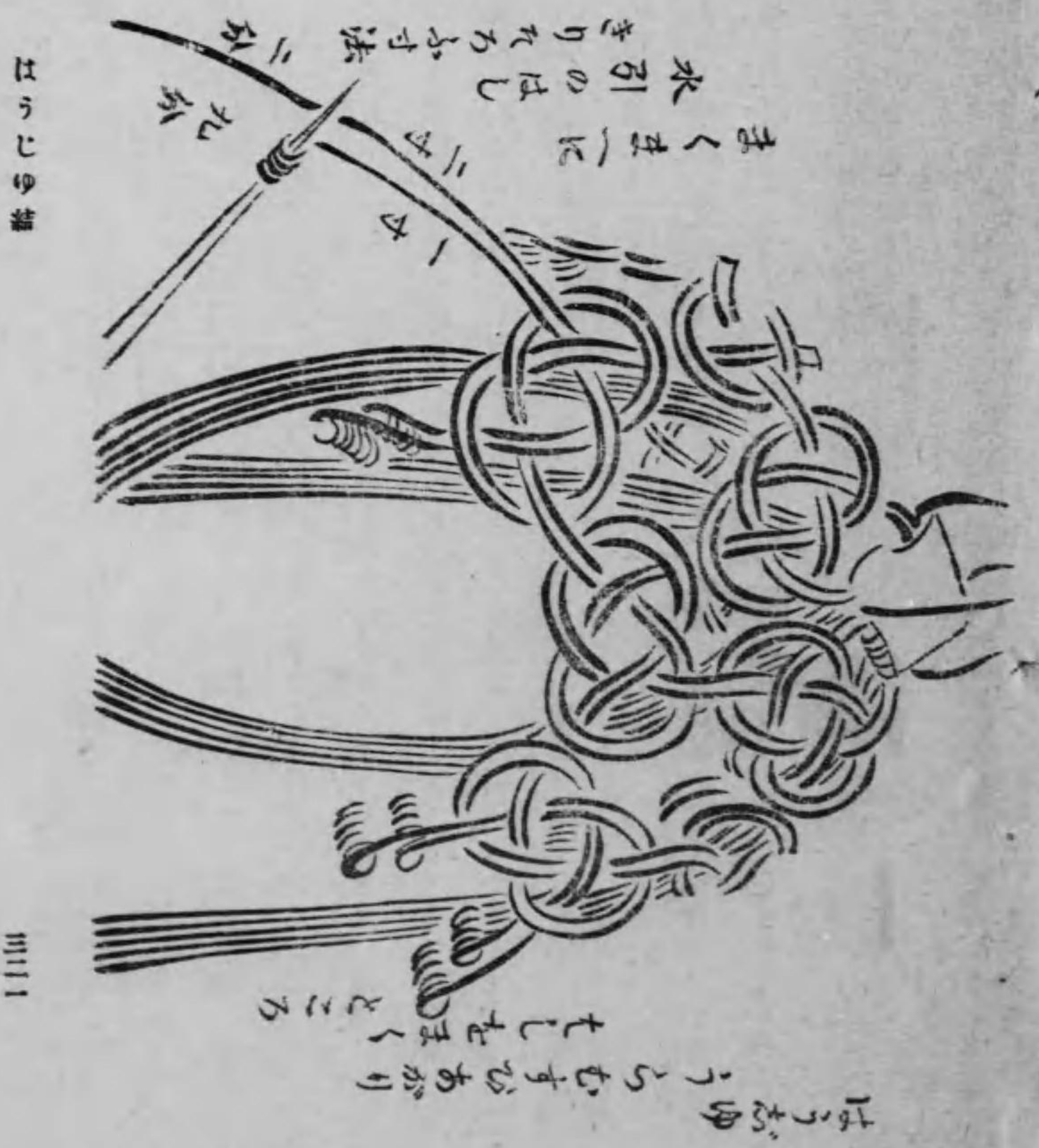
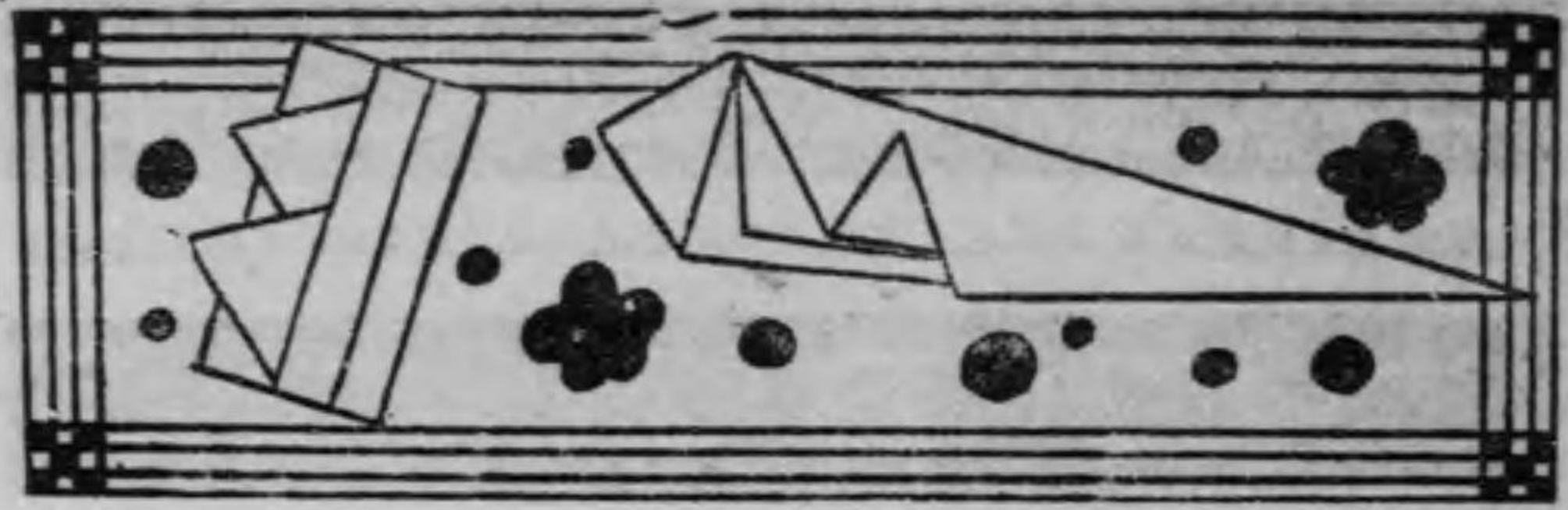
三三〇

○右のをりふし水引、しなやかならして自由にむすべぬ時は、元の方を左手にもちて、右手にてなほこきてしなやかにすべし、こくとき爪のあたらし様にやはらかに軽くこくべし。

○この結順はつねの鯁結のむすびやうと同じければ、くはしくは婚禮千代鏡にしろしたるにて習ふべし。水引こなしやうの繪圖もその本に記載したり。

○大方のむすびやうは、七圖を見合せてなしこゝろむべし。

(九) 右のごとく、ねもごまてしめて結び、又二だん目を結ぶなり、一段目の左右より取合して、前の結形のくづれぬ様に加減して、結ぶべし、皆結びて、しめて寸法そろへて、糊にて結形の先へ出る水引の所を動かぬやうに(串のさきに糊をつけてほかにつかぬ様に)糊にてつけ置き、乾きてのち、端をだんくに切て、巻くなり。



はらむすび

三三一



(十)

附録 水引の結び方

細き串の先(うなぎの焼串よろし、それなくば細きつよき竹串)を右の手にて上の方へ、真直にあて、左の手の人さし指にて、水引の先を横のまゝあて、人さし指と大指とを、水引の通りにかまへて、大指の腹にて、水引を串にまきつくる一つ巻では、大指をはなして(又のせて人さし指の方を向へとす、め、又巻けば、又大指をのせておさへて人さし指の方を先へす、めおきて、又まく、つまりゆるまぬ様に兩方の指にておさへたりはなしたりして、まくなり)巻目を見て、又大指のせて、人さし指を先へづらして、又まき、次第にかくして、下の方へ下の方へとゆるみなく巻き、よき所にて軽く左の指にてもちながら、竹串をぬき左の指をはなすなり。

○人さしゆびの先は、すこし下へむき、大指の先はすこし上へむく、竹串は下より先を上にしてまつすにもちて、水引は横のまゝにしたるをまくなり。



はうじゆ結

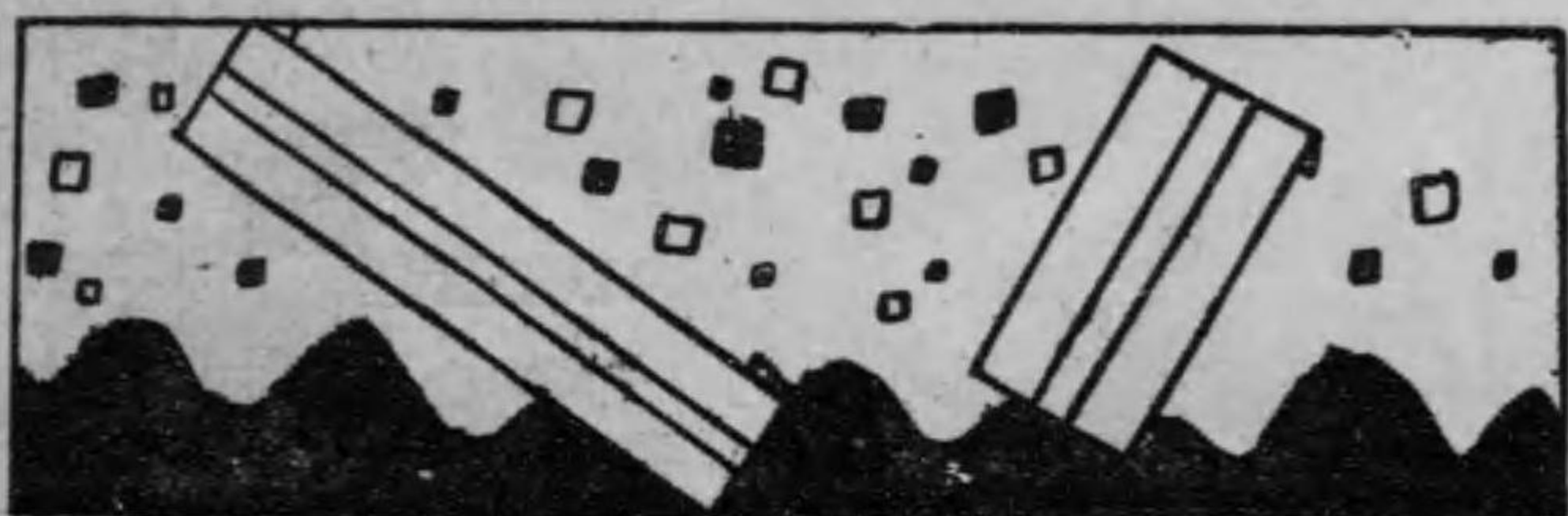


二寸五分
三分つ、ふがくまき
きりたあへの寸法

五分
一七分
まきあげの寸法

細きかみ
はうじゆ
へみして
角縁をは
つてとむる

はうじゆ
の結び方



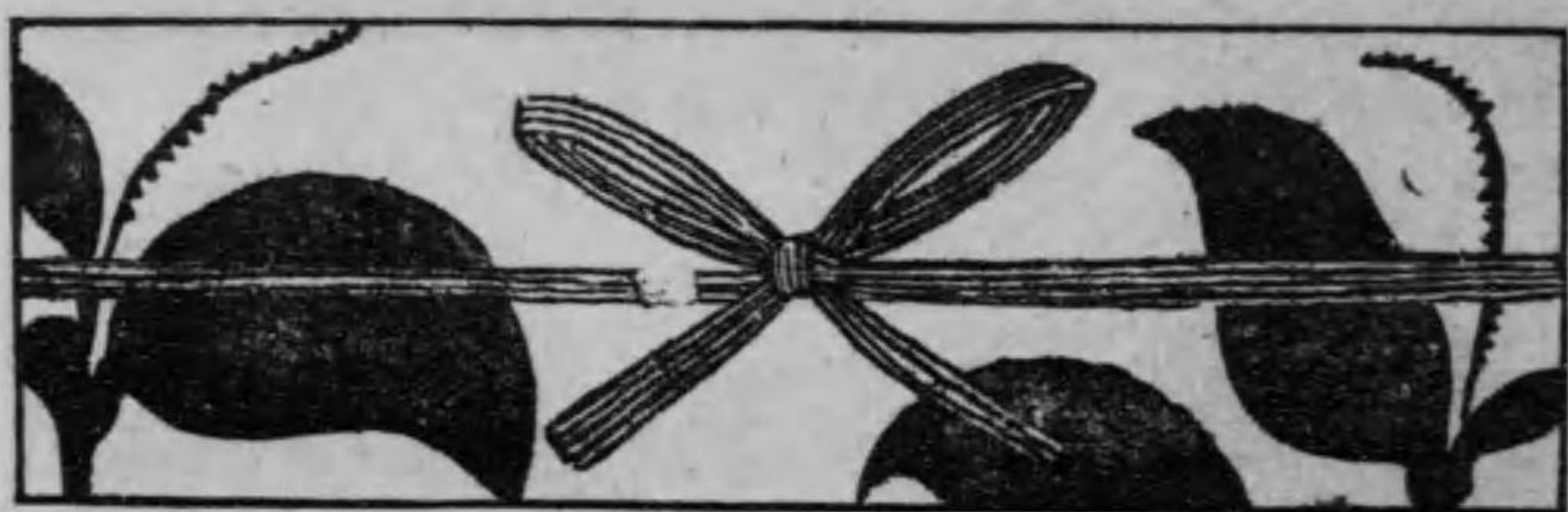
附録 水引の結び方

(十一) つるしたるを糸よりはなし、仰向にして、表の方を組む、張たる細き紙のきはより紙を下になるやうに折返し、それを右の手に一本持て、二本目を左の手にてさしこみ、二本目へまた三本目を手前より向へとかぶせていだし、四本目を、一本目の輪形より通して、三本目のもとへかぶせながら、端を上にて一本目の輪形へ通して、引しむる、組上たる裏の紙の上には紅紙をはりおくべし。

(十二) つぎに水引の端をだんぐりに切て、まきあぐるなり、巻あげ様は、鯨結の水引本製の巻方に同じ、其大方をいへば左のごとし。

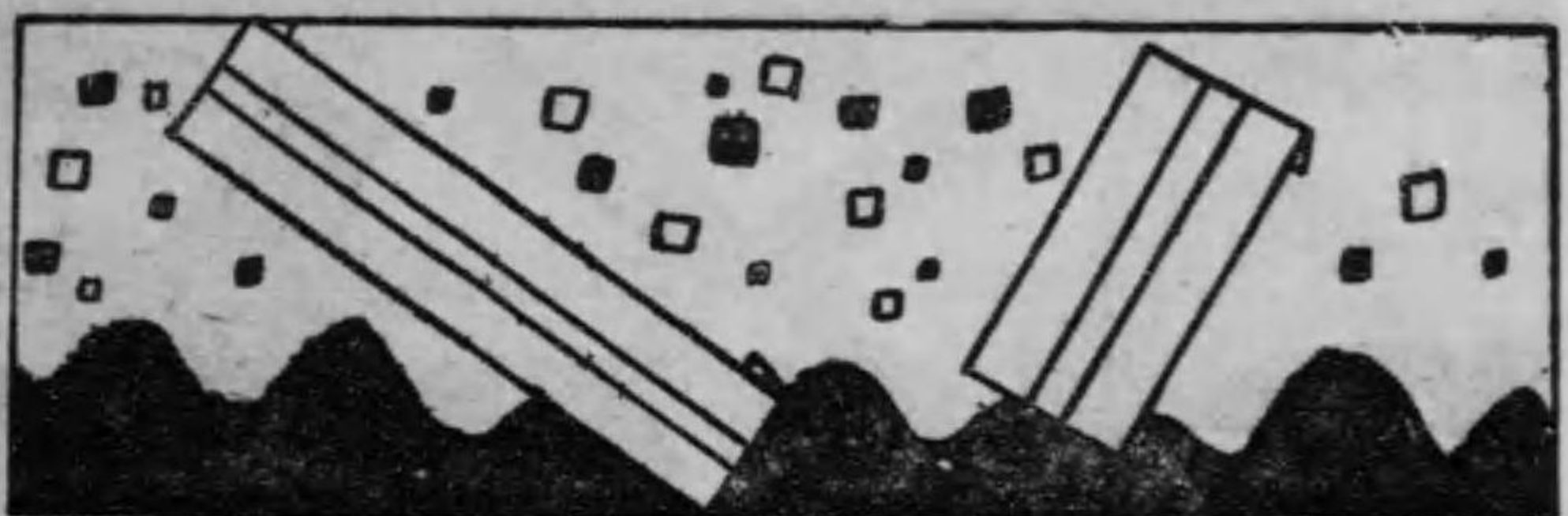
○人さし指の腹に、水引の端をのせ、細竹串にて（先の方極めてほそくけづりたる竹串のつよきものよし）串の先の方にて押へ、大指を上にかまへ（左の指の人さしと大指にてまくなり、右の手にては串のもとの方を軽くもちて、左手と共にめぐらしてよし、二本の指を動かして、大指の力にて端を右の方へ右の方へと巻

細竹串の圖

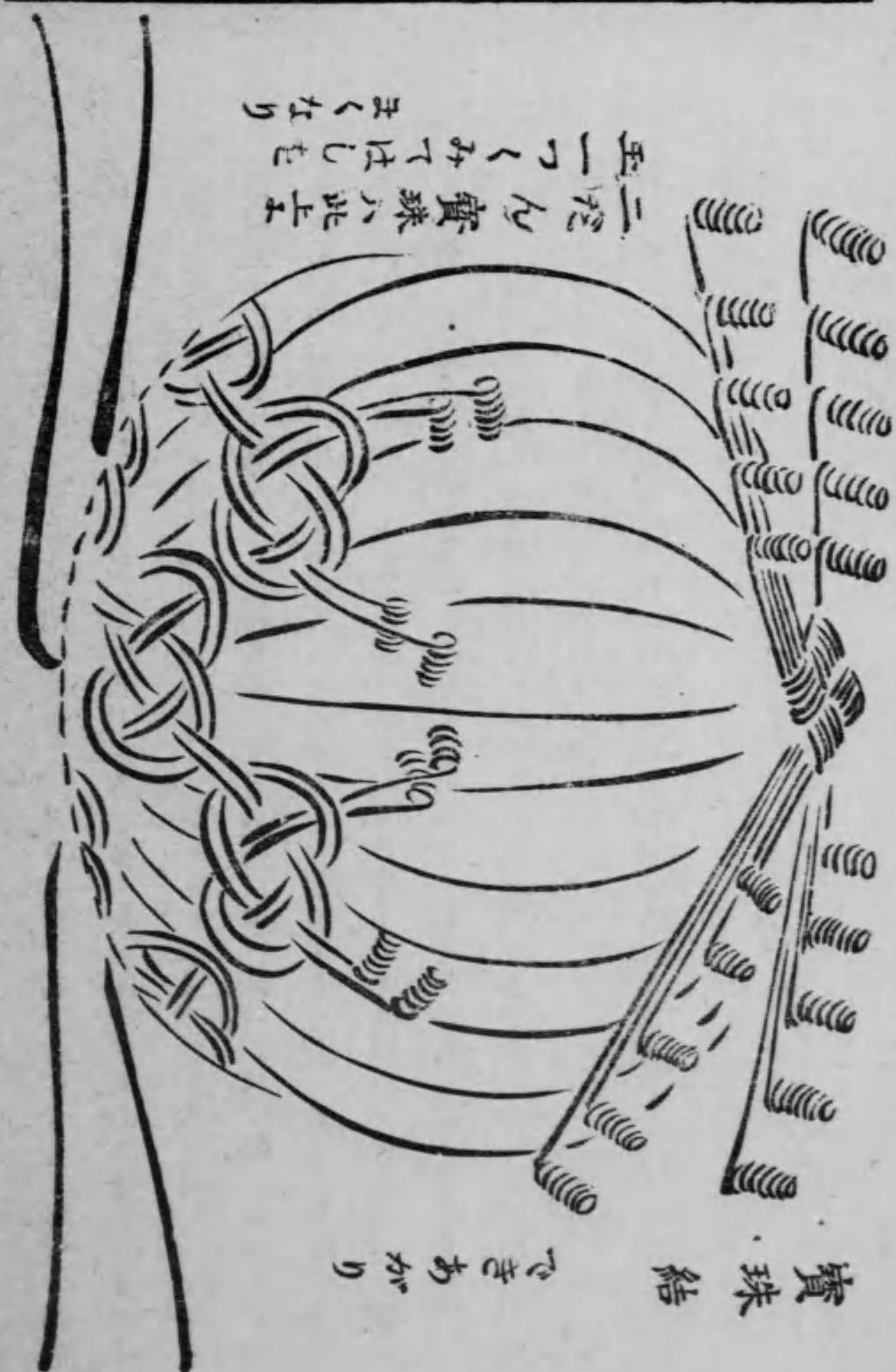


く（大指にて一度ぐるぐると向へまきて、人さし指を向の方へすらすす時、大指の方に巻たるを串ごとおしつけておき、人さし指の先を向へすらすして後に、またぐるぐると大指にておしてまくなり（くしの先の方にまくゆゑ、長くまくときには串の先中に隠れて巻くことを得ぬ様になるものなり。此時には、軽くおさへたるまゝ右の手にて、串を手前の方へとめぐらしながらすこし左へおし出せば、串のさき出るなり、さてあとを巻く）まきあがりに串をぬく時には、大指人さし指かゝるく押へたるまゝ、右の手にて串を手前へめぐらしながら右へぬきこるなり。このぬく時に上に巻たるを立る仕方は、おさへたるゆびとくしもつ手と同時になつて、さて上へくしをぬけば、巻目上へ立つなり。

○たてやう、まきやう、このほかに手かげんいろくあり、筆につくしがたし。



附録 水引の結び方

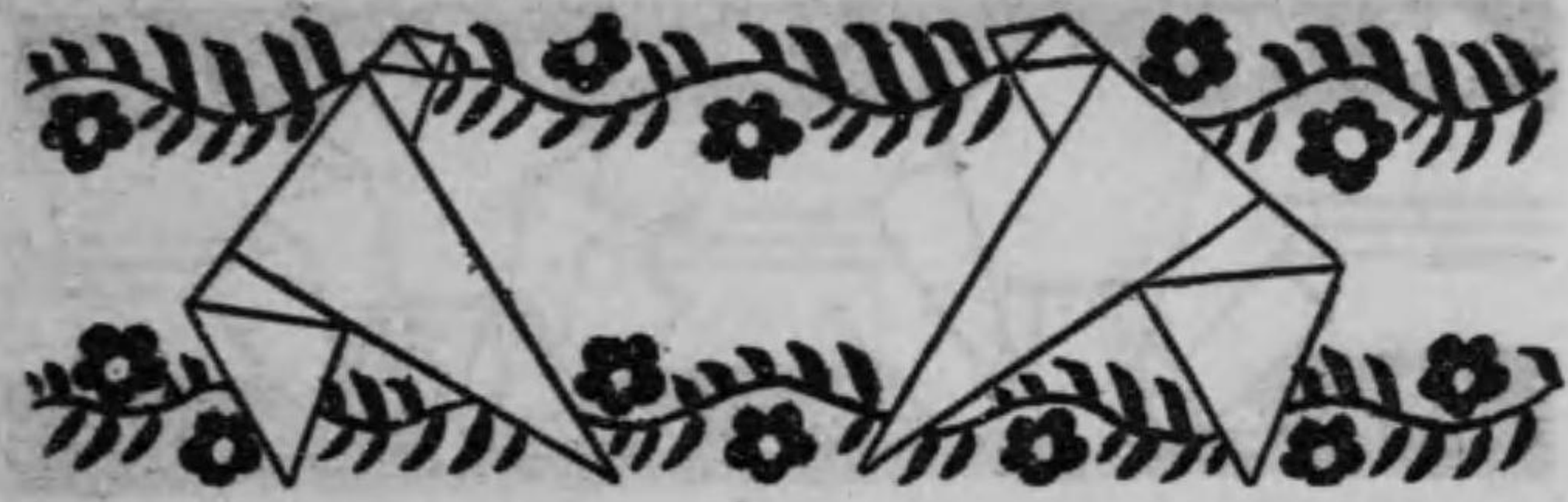


○金銅なにもても圖の如く拵へて先の方に切こみをたてにつけたるに、水引をはきみ(はしだけを)こみてくるくとまぐ、串かはりのものあり。太き水引の時、(四尺五尺以上のもの)にはそれをつかひてもよろし。但美麗にはまげぬものなり。水引細工する商人、紙細工する商人、など、今も専らつかひたり、昔時は正しき教へ受たりし者も是にて巻きたりしが、其後竹串にて巻く様になりては、是をつかはす。

水引まく 金具

(十三) 包物につくる(水引二本づつを)包物の上にもむすびにかけたる水引の上、又は包物にそふる伸あはび包の上につくる時は、同くのしあはび包のまむすびにかけたる水引の上に、結目の上を中心をのせて、此二本づつを左右にわけて、うらにてまむすびに結びおくなり。此ほか二本づつの水引の端を下に包形に穴をあけて引通してつくる事もあり、又大きなる結形の時には、同じ色の水引にてとむる事もあり。

はうじゆ結



梅花結

通稱

うめむすび

○銀水引にて結ぶを一とし、金うら銀おもてを二とし、金銀まぜを三とし紅うら白表をつぎとし紅表白うらを五とす。このほか、其花の種類によりて、水引をも、むすび方をも異にす、結數いろ／＼あり、こゝには初めて習ふ、最もやさしき仕方をあぐ。

○結方は、紅白水引五本にて、紅表、白裏の拵方を記す、三尺水引をつかふこと、す、紅白水引の特製の物（普通五本一把となれる水引）其まゝ五把を以て組合すべし。

(一) △三尺の紅白水引、紅の方を表とするゆゑ、其方の端を紙にて平たく巻き（おし

のりにてよくつくる）後に此先を紙捻になすべし。
花びらになす所だけを、くせをつくる（中央の紙の所を左に持て、右の一二の指にて軽くおして前へこき、しなやかにする、丸くして、それをちひさく丸くひき



水引結 七梅花むすび

まじり

くみかた 寶珠のごとし



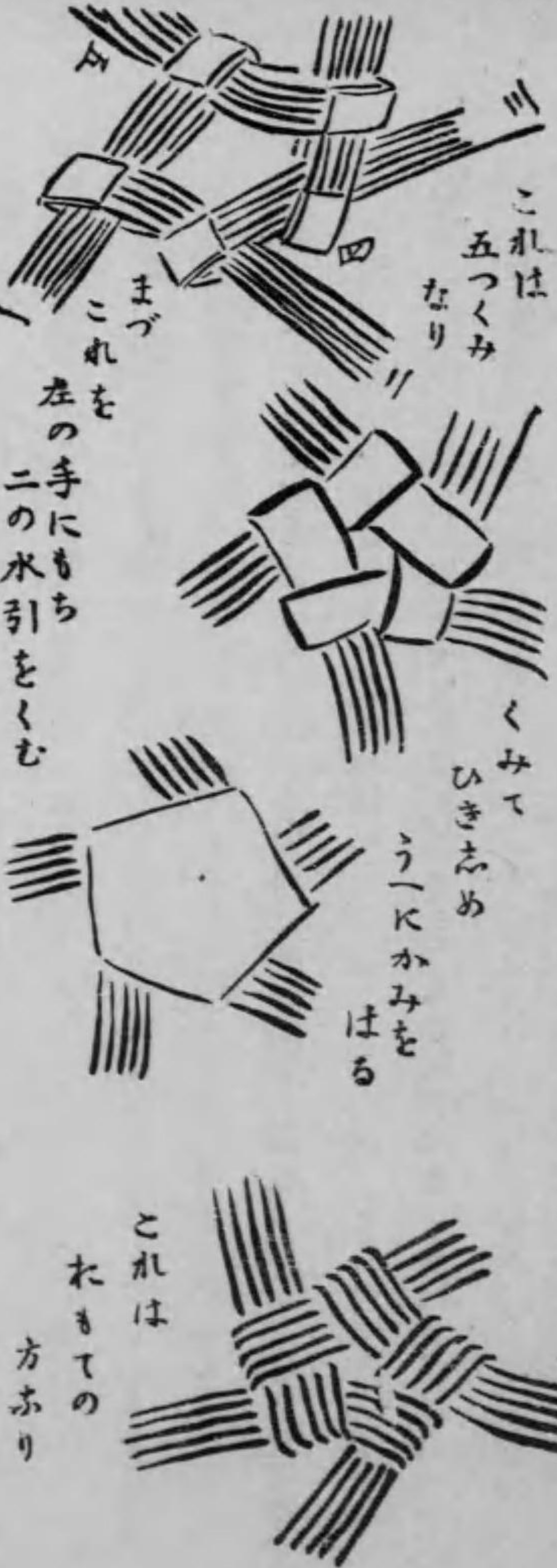
はなびらの分くせをつくる

あとほくせをつけ

これは五つくまなり

くみてひき止め

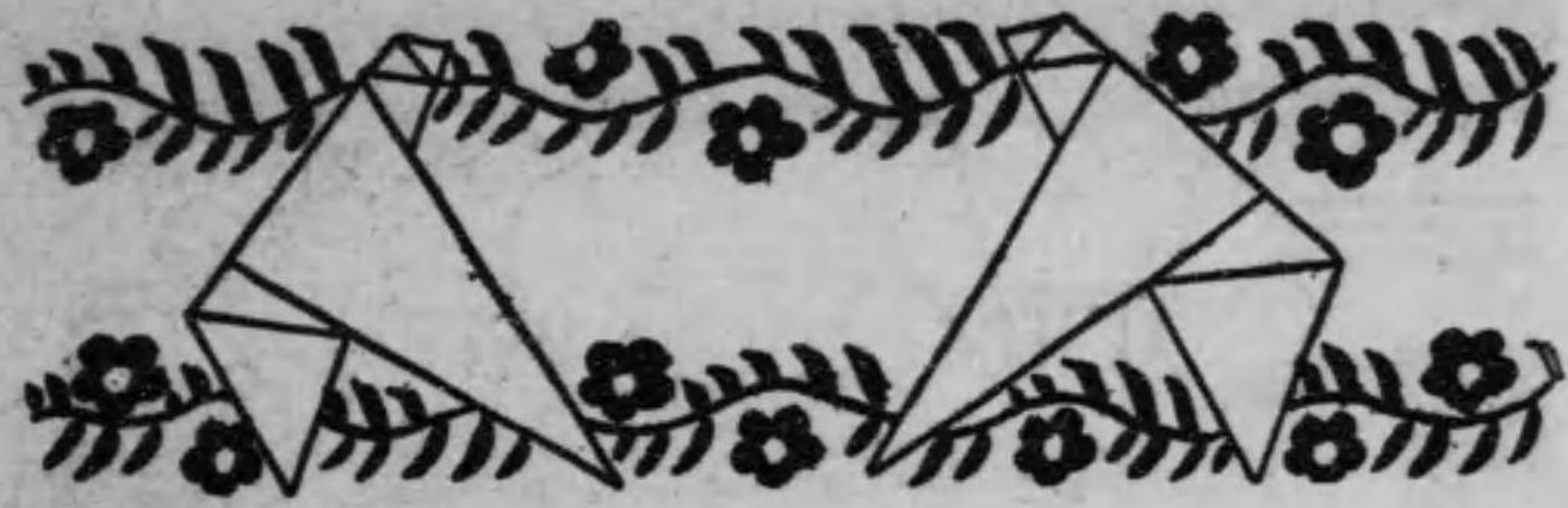
うにかみをほる



これはたもての方より

梅花結

これを左の手にもち、二の水引をくむ



附録 水引の結び方

て見るに、水引どこまでも角なく丸くなる程にこくなり、花びらより先の端の方までは、すこしもくせつけず、びんとするまゝにてよし。すこしにてもくせつけば、後に匂にする事かたし、心して花びらの寸法だけをこくべし（中の紙より六寸餘をこくなり。これにて花びらの外の水引八寸位に出来る時のこきかたの寸法とす、これにても花びらの内の水引四寸餘の輪形に出来るゆる、こきたる所二寸内、匂の方へ出るなり。この加減あれば、こき方もつよくこきすぎぬ様に手かげんして、しなやかにすなれば、最も手ならず肝要なり）手なるればいとやすき事なり。

(三)

白の方へ、中央の紙のつくやうに、紙きは紅の方にて小刀をあて、水引を二つに折り、組方にかゝる、寶珠結のくみ方と同じ、これは五本なれば、五本目の水引を、寶珠結の四本目の水引の通りにはじめの水引の輪形に兩端を通して、引しむれば、組合せ五角になる（組形うらにて見れば人形になる、表のあかの方にて見



(四)

れば入形になる、是を組ちがへて裏の白の方を入形に組めば表の人形になるゆる花びらつくりにくくなりてあし、こゝろしてちがふるこさなかれ）さて紙を當て寸法付て五角に切て、糊にてはりつけ、乾しおくべし。

(五)

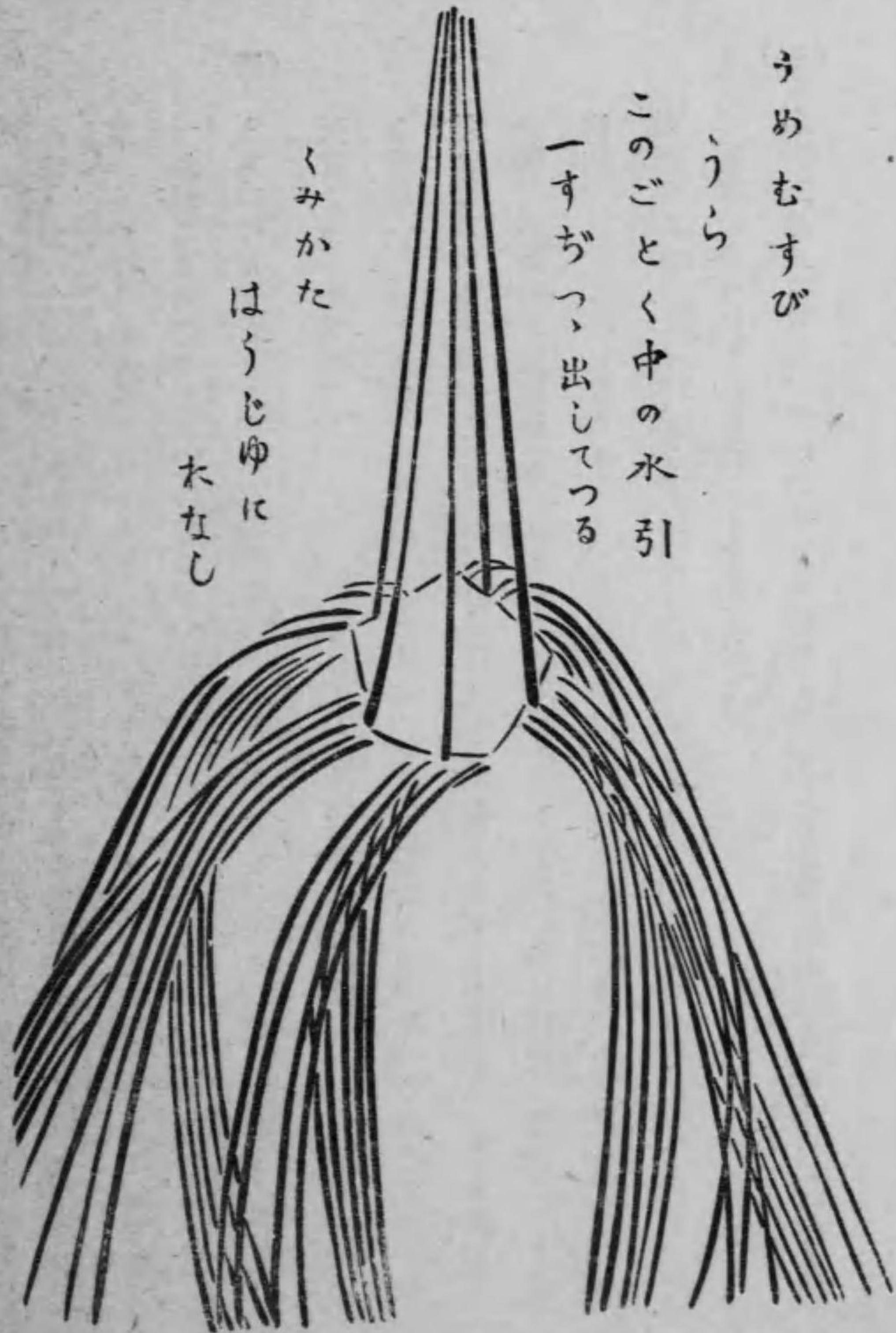
うら白の方五方より、五本の真中の一本宛をとりて、かりにかたむすびにして、天井よりつりさげ、うらの鰻結をむすぶ事は、寶珠結同様なり（一段とよろしきは鰻結三つも結びかさね、次はこのごとく二つがさね、今一つ略しては一つ結ぶだけのもあり、なほ略のものとしては裏に鰻結せぬものもあり、この裏なしの物、普通の小笠原流水引結の内うめ結なり、裏附の物は料理人の方にてする梅結なり、かくは分つもの、普通結のほかいろ／＼の物は、小笠原流にも、四條流の料理人のをしへ方にも、さまざまあるなり、但古くより有のみならず、近く著者の考へになれる物もまじれるなり）表の方を上になし、紙捻の先を（水引の端の）右の方へと通す（細串にて通す所



うめむすび

うら

このごとく中の水引
一すぢつ、出してつる



くみかた

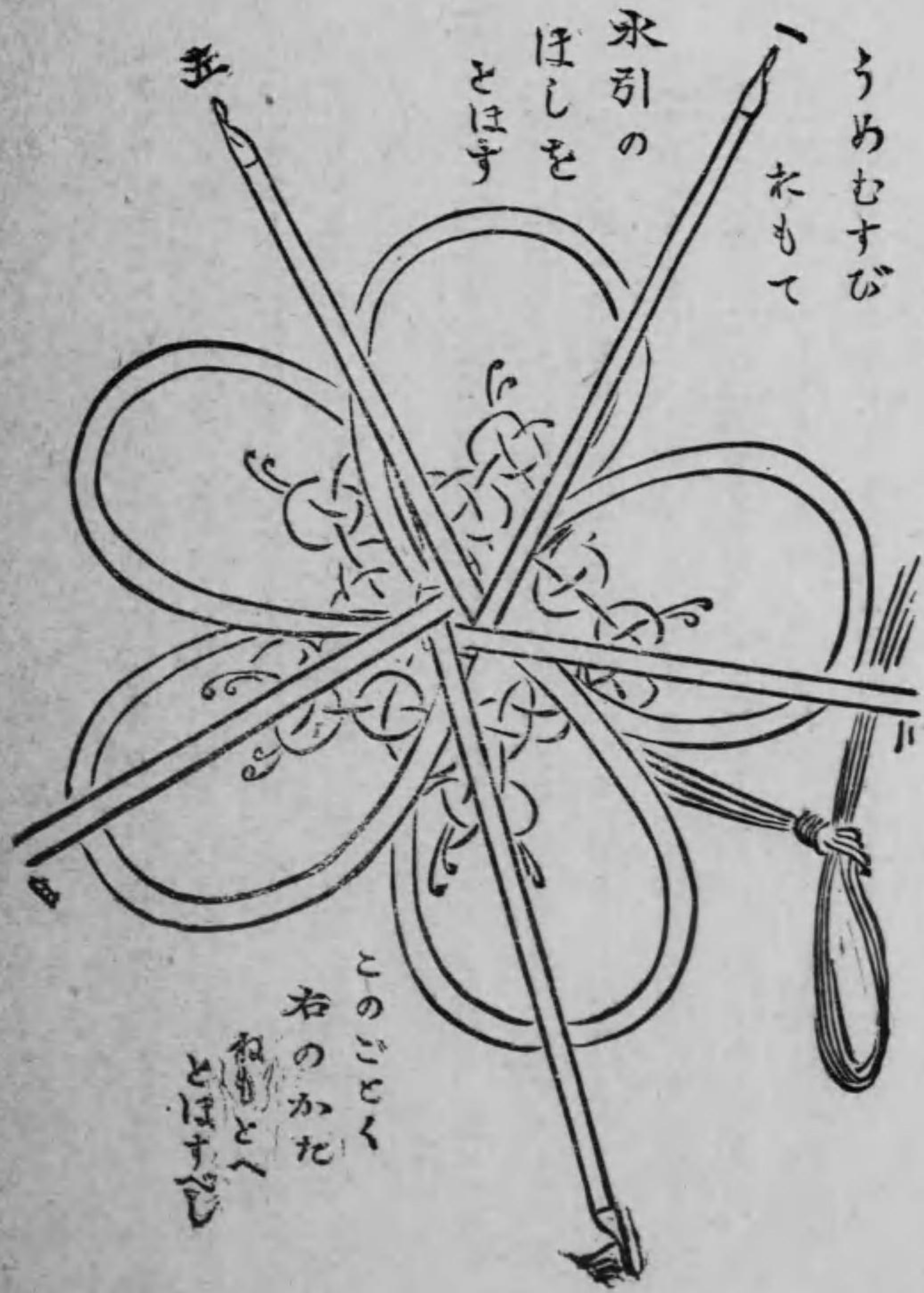
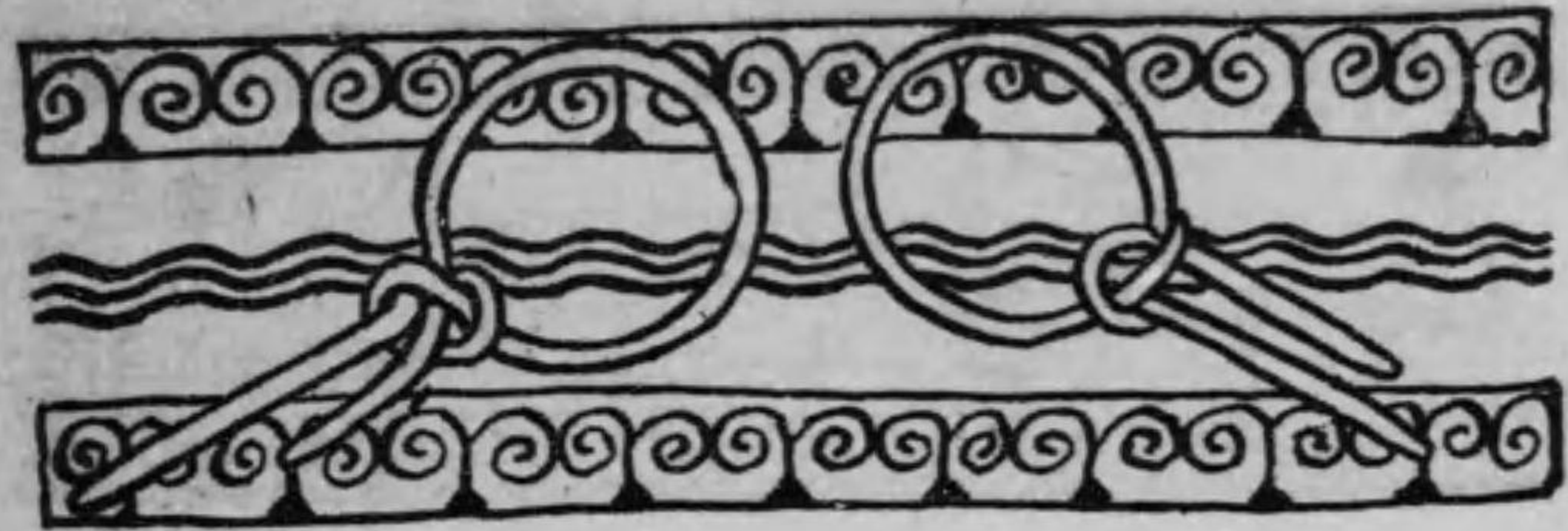
はうじゆに

木なし

(六)

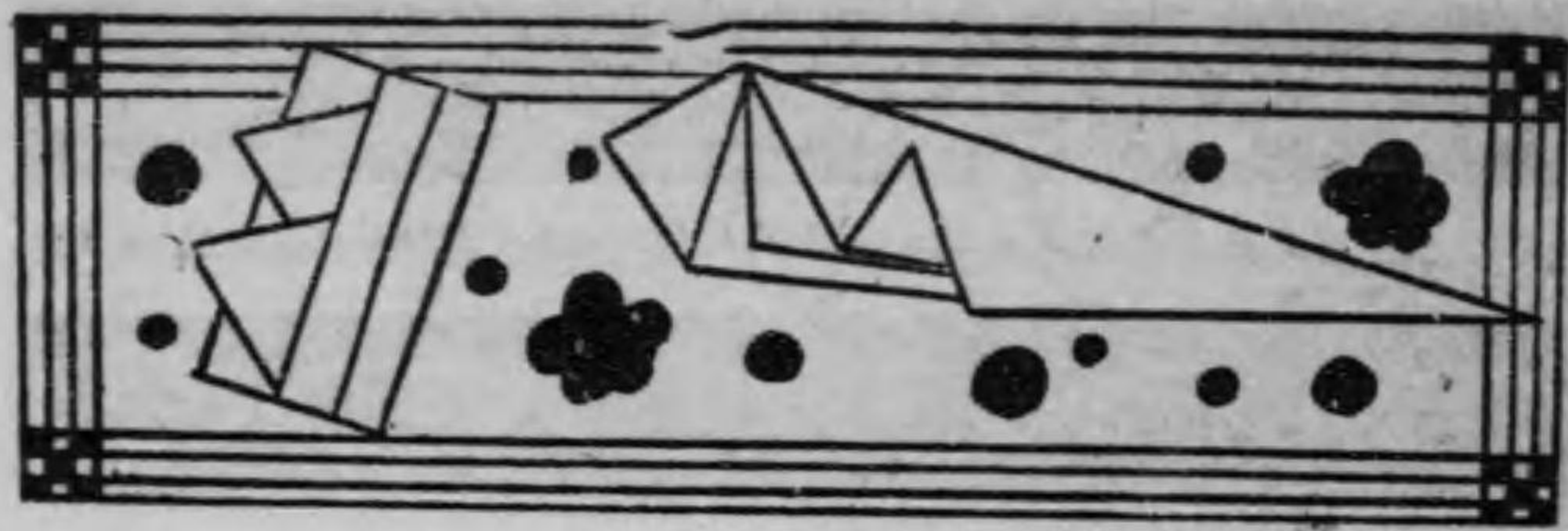
をもたげおきて、通す時、花びらの内になる方、外になる方の、ひねりかへることなく心づけて、平らかに通すべし、其順、はじめはどれにても、二には左となりを通し、三にはなほ其左となり、四にもなほ其左となり（かく通せば通しよきなり）さて五めにのこりの一つを通すべし、輪形の大きさ八寸程になしおくべし。

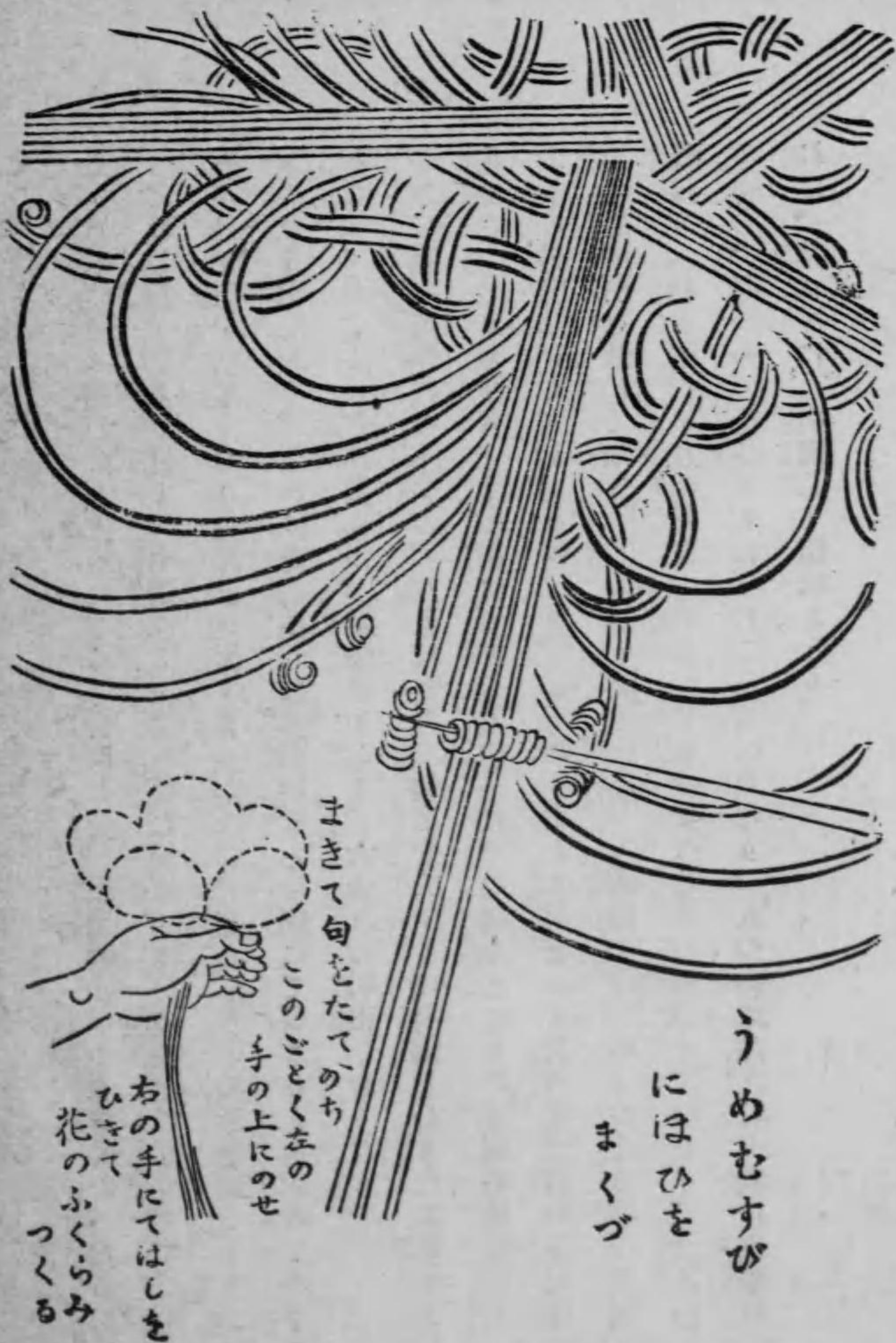
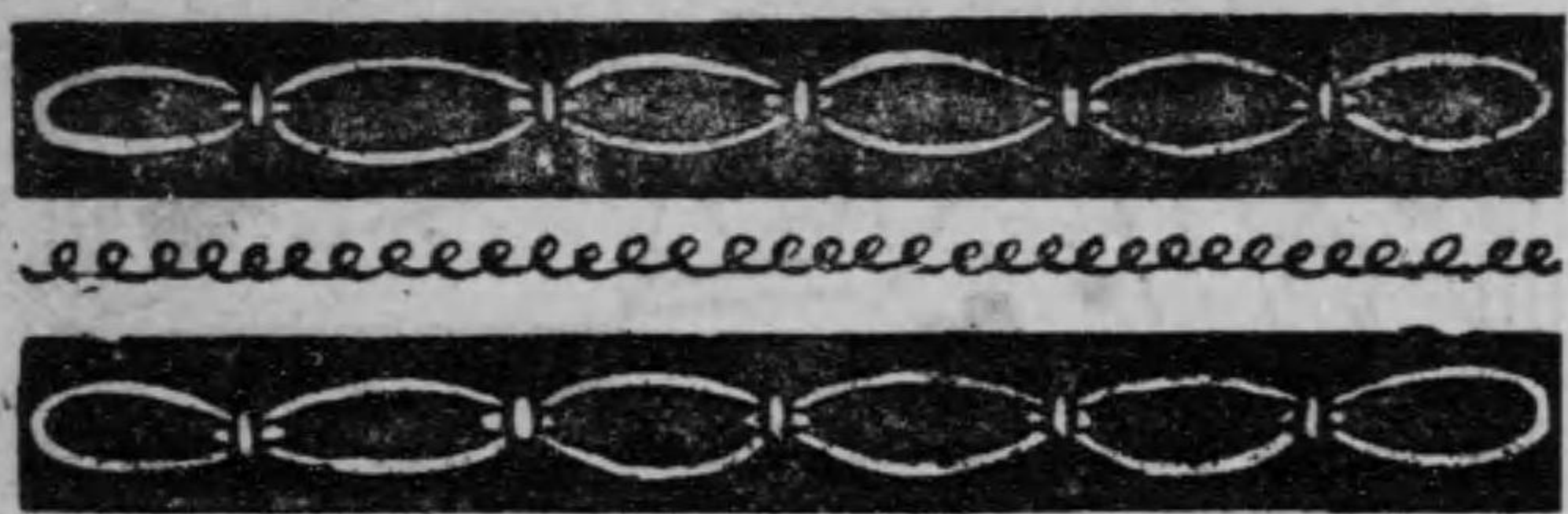
つぎにまづ一方の水引の輪形を亂れなきかを根元を見てしらべおき、端を手前に向けて、中の元より二三四の指を上に加え、大指を下からうくる様にもちて、右の手にて鉄にて、巻たる紙の所だけを切り、大指と人さし指とは其まゝに押へ（中指くすり指ははづしたりおさへたりしながら）五本の水引を、右のはし的一本から、引く（これは内の小花びらになる）つぎに一本、前より少し大きく、次に一本、前より少し大きく、次の一本、また少し大きく、五本目は八寸内の大きさに引て、五本を引をはりてのち、二三四の指を上より、大指を下よりかけたる



(七)

まゝ持あげて（端の方を上へたてる）竹串にて、根元の水引の五本のかさなる所へ、おしのをよく付て、中指にて上よりおしつけ（ほかの指をはなす）すこし押つけて指をはなすべし（此ひき出すまへかたに、左となりの輪形をすこし大ぶりにひき出しおく、これは今引出した水引のもとを糊にてつくる時、のりの下まできゝすぐるおそれあれば、其用心として、大ぶりに引出しおくなり。つぎに前の出来たる水引の、左となりの、輪形を大ぶりに引出しおきたる水引の花びらをつくるなり、まづ指にて押へる前かた、なほ左となりの水引の輪形を大ぶりに引出しおくべし、それより、二三四の指と大指とにて押へて、右の手にて端の紙の所を鉄にて切り。右のはしより一本づゝ引出して、のりつくる事、前同様なり（初もちたる左の指は、のりつくるまではなさぬものとすべし）三つめの花びら、四つめの花びらもおなじこしらへ方なり、五つめは左となり既に出来たれば、其まゝにて引出して出来るなり。





うめむすび
にはひを
まくづ

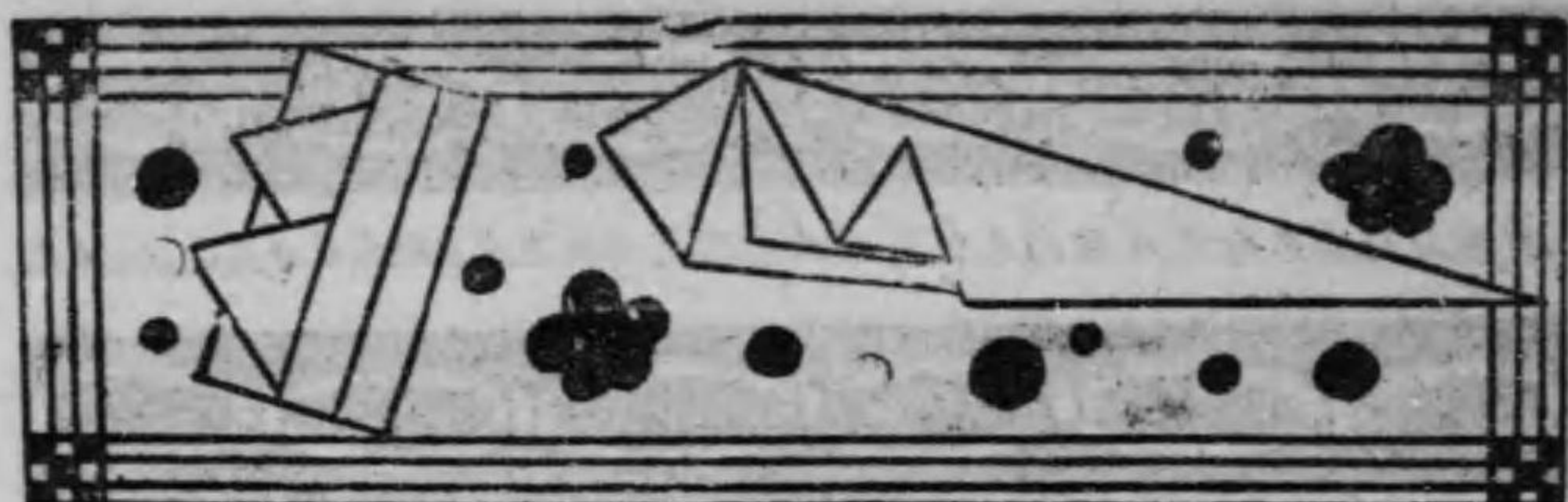
まきて句をたてめち
このごとく左の
手の上のせ
右の手にてはしを
ひきて
花のふくらみ
つくる

(八)

のりの乾きたる後に、水引の端を巻く（巻き方手なるれば、小刀にて糊付たる所の外を押へて五本一度に上におこしたて、これを引ばらぬ様に巻くを常とすれども）手習ふはじめには、端を引出したるを、鉄揃へて、ねかしたる儘にて、中央に鎮石をおいて、巻く（仰向巻に、巻方は寶珠結の上の巻方に同じ、但これは揃へておくなり、五所とも巻きて小刀にて元の方の糊付たる外ぎはを押へながら、片手にて一所五本づゝ起し（巻たる先内の方へ向合ふ様になる）梅花の句とするなり、これにても初は長短出来るものなり、度々手習ふべし。

○右二種の結方は手習ひにする仕方なり。手なるれば水引の數も多く、水引も金銀等にて拵へてよし△諸祝儀の進物包にも伸蛇包にも付る。

◎花結のいろくも、つるかめ、とりむしのくさくの水引結も、おほかた、うめむすびの結方よりいでたるものあまたあり、それに鰻結の結方、寶珠結の盛あげ方など、平らかにも、たけ高くもつくりなす手加減は、何も一つにして、水引の取あつかひ、組方の順にかはりなきものなり。





『水引結のてわざ』は今の世間にはめづらしからぬ様に思ひなされるなり、それは明治の中頃よりみだりに手あそびめく水引細工のいろ／＼を造りなし、大正の初よりは水引あみ物ともいふべき最も賤しげなる鰻魚鳥のたぐひ出来にけるによれるなり。この書にのせらる物は百年あまりの昔よりつき／＼につたはりこし結方にして、近くは

宮中への御献上物、の重き御裝飾にも調進し奉りひろく禮節ならふ全國の人々にも教へまた料理法習ふ人たちにも傳へたる結方の内なれば、他の商店の寶品飾の水引細工の類にあらざるなり

奥儀 水引の終
圖解 小笠原流折形と結び方

大正十年十一月廿九日印刷
大正十年十二月二日發行

奥儀小笠原流折形と水引の結び方圖解

著作
所
有

著者 石井泰次郎
發行者 中村時之助
印刷者 根本三郎
印刷所 就文社

定價二圓十二錢

發行所

東京市神田區表神保町十番地 中文館内

和風會出版部

振替東京三八四二七番

大妻技藝學校長
大妻一惠先生著

お細工のの新書

本書は数多き女子技藝學校中に於て個人教授に獨特の手腕を發揮せる名高き大妻技藝學校長が多年の研究と経験に基き一般女子に必要なる袋物、摺細工、摺細工、編物、折紙、等の最も有用なる種類を特種の方法を以て實地教室に於て教授せらるゝと同様に何人にも解り易く獨習の出来るやうに圖解で詳細に説明せられたる他に類例なき最も斬新なる著書なり。

東京府立第三高等女學校教諭
中澤美代子先生著

簡易洋食の拵方

本書は先生が歐米に於て十年間研究習得せられたる西洋料理法を主體として我國一般家庭の實際に適する様其献立、器具、原料、料理法、料理法の注意、餐應に關し主婦の心得、客の心得、給仕の心得、食料品の保存、食物の防腐等を八十節に分ち壹百有餘の挿畫を以て簡明に説明せられたる現今西洋料理法中の白眉であります。各女學校に於ける割烹教師及生徒諸姉の良參考書たるは勿論一般家庭に是非備ふべき良書であると信じます。

共立女子職業學校 東京裁縫女學校講師
瀧浦潭先生著

家庭に於ける洗濯と染色

本書は平易なる文章多くの挿畫を加へ、家庭に於ける洗濯と染色に關する實際を説述したるものであります。本書の内容は、一總論、二洗濯用薬品及材料、三洗濯法、四西洋洗濯法、五垢點拔法、六染色及色揚げ、七練及織物、以上の各編を五十章九十一節に分ち誰でも實際直ぐ出来る様編説、講述したるものであります。高等女學校生徒諸姉は勿論一般家庭に是非缺くべからざる良書であります。

全一冊菊判和綴紙數約四百頁
口繪彩色石版畫寫真版四葉
定價 金 貳 圓 貳 拾 錢
送料 金 拾 八 錢

全一冊菊判和綴紙數約四百頁
口繪原色版六葉插畫約六十圖
定價 金 貳 圓 貳 拾 錢
送料 金 拾 八 錢

全一冊菊判和綴紙數約四百頁
口繪彩色石版原色版寫真版
定價 金 貳 圓 貳 拾 錢
送料 金 拾 八 錢

宮中式 禮節講師 石井泰次郎著 (嵩山房發行)

婚禮千代かゝみ 附 仲人の心得

◎口繪◎前田侯爵家婚禮飾◎小笠原家同式場◎序文◎禮節家の傳統◎本文◎結納次第十九條◎里出次第十三條◎嫁入次第九十六條◎婿入次第十五條◎里開次第十六條◎當日用品飾十三條◎嫁入心得二十條◎附録◎前田侯爵家御婚禮式順書◎龜井伯爵家御婚禮式順書

○書中掲載の折形かたかみ添附一組として篤志者に分つ

費用 普通一組金參圓五拾錢◎特製 壹組金五圓△包送料金壹圓也

東京市京橋區鈴木町十一番地

大日本禮節學會

(前金申込所)

8x7

奥儀圖の標本

小笠原流折形の（色紙水引）雛形發賣

この雛がたは、御婚禮の御祝ひもの、諸祝儀の御祝ひもの、御家庭に御備置の御包物の御手本にて、女學校作法科技術料の御参考用にも相成候につき、本書を御覽の御方は美麗に掛候ひなごをも御註文被下度候。

- 一號、文書類 十四種 一包 金五圓七拾錢 金包送料 五十錢
- 二號、衣服類 二十種 一包 金七圓七拾錢 右包送料 同
- 三號、歳事類 八種 一包 金四圓 右包送料 同
- 四號、花粧類 卅二種 一包 金拾貳圓 金包送料 八十錢
- 五號、粉樂味類 十二種 一包 金五圓 金包送料 五十錢
- 六號、音樂類 四種 一包 金貳圓貳拾錢 右包送料 同
- 七號、香茶花類 八種 一包 金參圓五拾錢 右包送料 同
- 八號、雜用類 十五種 一包 金六圓 右包送料 同
- 九號、伸咆類 十種 一包 金四圓七拾錢 右包送料 同
- 十號、婚禮類 十二種 一包 金拾壹圓 圓送料 金壹拾錢
- 水引結類 壹組 金五圓貳拾錢 右送料 同

(右のほか原料紙類水引類とも取揃へ之有候)

東京市日本橋區通堂丁目壹番地

株式會社 棧原商店

電話本局四千八百番。外二ツ
振替口座東京千三百六十三番

終

